

1. 婚約者

サイファは足早に階段を駆け下りていく。清潔感のある金色の短髪がさらりと揺れ、天窓からの光を受けてきらりと煌めいた。まだ小さな彼には高すぎる手すりに手を掛けると、くるりと方向転換をしてリビングルームに向かう。

「アリス、いらっしゃい」

サイファは扉を開けるなりそう言うと、幼いながらも綺麗に整った顔で、にっこりと微笑んだ

「こんにちは、サイファ」

アリスはソファに身を預けたまま、澄んだ高い声で挨拶を返した。少しだけ体を起こし、愛らしい笑顔を浮かべる。あどけなさの残る顔立ちが、16歳という実年齢よりも彼女を幼く見せていた。

アリスの斜め向かいに座っていたシンシアは、小さな息子に振り返って尋ねる。

「サイファ、勉強は済んだの?」

「済んだよ」

サイファは軽く答えると、アリスの方へ駆けていき、その隣にちょこんと座った。彼女を大きく見上げ、嬉しそうに笑顔を弾けさせる。

シンシアは呆れたように肩をすくめて笑った。息子のサイファは、執着といってもいいくらいにアリスに懐いている。彼女が家に遊びに来たときは、ほとんど離れることなく付いてまわる。彼女の隣はサイファの指定席といってもいい。一時のはしかのようなものだろうが、多少、心配に思う部分もあった。

「アリス、来ていたんだね」

再び扉が開き、今度は大人の男性が姿を現した。柔らかい物腰に、和やかな笑みといった、いかにも優しそうな風貌である。彼がこの家の主人——つまり、シンシアの夫であり、サイファの父親だ。

「お邪魔しています。おじさま、今日はお休みですか?」

「ああ、このところ休日出勤が続いていたからね。久々の休暇だよ」

「アルフォンスにこき使われているのね」

アリスは少し申し訳なさそうに肩をすくめた。アルフォンスというのは彼の上司であり、彼女の夫でもある。彼女より20も年上で、ここにいる誰よりも年長だ。

「忙しいのはアルフォンスのせいじゃないよ」

彼は笑いながら弁護した。

アリスは安堵したように小さく笑う。

「良かった。おじさまには恨まれたくないもの」

「誰も恨みはしないよ。みんなちゃんと理解しているから」

「リカルド、座ったら?」

立ったまま話を続ける夫に、シンシアは軽く促した。

「ああ、そうだね」

リカルドは素直に頷き、シンシアの隣に座る。

「随分、大きくなったね。動きまわって大丈夫なのかい?」

「無理はしていないから心配なさらないで。うちに独りでいるより、ここにいる方が安心だから居させてもらっているの」

アリスは大きく膨らんだおなかに手を置いて微笑んだ。

その言葉どおり、彼女は毎日のようにこの家に来ていた。彼女の家からは歩いて来られる距離 であるため、いつも散歩がてらにやってきて、日が沈む頃まで入り浸っている。

「アリスは本当に甘えるのが上手いのよね」

シンシアは笑いながら言った。図々しいと思えることでも、アリスは無邪気に頼んでくる。そして、自分はそれを嫌だと思わずに引き受けてしまう。自分以外にもそういう人は多いようだ。 それは、彼女の生まれ持った才能の成せる業といってもいいだろう。その才能の中には、外見や 声の愛らしさも含まれている。真似しようと思って出来るものではない。

彼女に甘いのはリカルドも同じだった。いや、シンシア以上かもしれない。

「まあ、ここの方が安心なのは確かだね。行き帰りだけは気をつけて。帰りは送ってあげよ うか?」

「おじさま、お気遣いは嬉しいけれど、近いからひとりで大丈夫よ」 アリスは優しい口調で辞退した。

「そうはいっても、そろそろ予定日じゃないのか?」

「まだ一ヶ月あるわ」

「ねぇ、名前は考えているの?」

シンシアは声を弾ませてふたりの会話に割り込んだ。あと一ヶ月なら、そろそろ具体的に考えている頃だろうと思ったのだ。

アリスはにっこりと微笑んだ。

「男の子ならレオナルド、女の子ならレイチェルにするつもり」

「……女の子がいいな」

リカルドは真面目な顔でぽつりとつぶやいた。

シンシアも急に表情を険しくした。腕を組み、ため息をつく。

「サイファの婚約者ね。頭の痛い問題だわ」

リカルドは魔導の名門ラグランジェ家の本家当主である。そして、息子のサイファが次期当主であることはほぼ決定している。当主を継ぐ者は10歳までに婚約者を定めなければならないというのが、ラグランジェ本家の掟なのだ。

ラグランジェ家は、本家の他にいくつもの分家を抱える大規模な一族である。もちろん規模だけではなく、その政治的影響力も計り知れない。それは、ラグランジェ家の人間が持つ魔導の力に裏打ちされたものである。魔導の能力は遺伝によるところが大きいとされている。そのため、

彼らは純血を守ることでそれを維持してきた。つまり、ラグランジェ家の者どうしで婚姻をし、 子孫を残すのだ。次期当主の婚約者を早期に定めるのは、少しでも安全に家系を存続させるため の策のひとつなのだろう。

サイファは現在6歳である。期限まではあと4年もない。

「アリスの子が女の子なら、その子で決まりなんだが」

リカルドは祈るように手を組み合わせて言う。

婚約者の決定は、単純にはいかない問題である。分家間の力関係や、種々のバランスも考慮しなくてはならない。そして、なるべく遺恨の残らないような決定が求められるのだ。

アリスもラグランジェ家の人間である。もちろん、彼女の夫のアルフォンスもそうだ。彼は勤めている研究所の次期所長と目されており、他の分家を黙らせるだけの実績と地位と人脈を持っている。また、サイファはアリスにとても懐いており、すでに家族に近い間柄といえる。この夫婦の子を婚約者にすれば、すべてが丸く収まるだろう。それゆえ、リカルドたちの間では、その方向で話が進められていた。ただし、当然ながら、女の子であればという条件つきだ。

シンシアはソファに手をついた。隣の夫に顔を向けて尋ねる。

「アルフォンスの許可はもうとったの?」

「ああ、一応な」

「一応ってどういうこと?」

「娘を手放すことが許せなくなるかもしれないってさ」

リカルドは可笑しそうに笑った。

それを聞いて、シンシアも吹き出した。

「今からそんなことを言っていたら、この先が思いやられるわね」

「大丈夫よ。私がついているんだもの」

アリスは胸元に手を置いて言った。

シンシアとリカルドは目を合わせて笑った。これだけの自信がどこからくるのかはわからないが、彼女を見ていると本当に大丈夫だと思えてくる。華奢で小柄な少女が、なぜかとても頼もしく感じられた。

「ねぇ、サイファ」

隣でおとなしく座っていた彼に、アリスは無邪気な笑顔を向けた。自分の大きなおなかに両手を当てて尋ねる。

「この子が女の子だったら、サイファのお嫁さんにしてくれる?」

本来は、本人の許可を得る必要などない。双方の親の合意のみで決定することだ。だが、事前に了承をとっておきたいというのがアリスの考えだった。

シンシアもそれには同意していた。ただ、彼女は、もう少し見通しを明確にしてから話すつもりでいた。突然アリスが話を振ったので驚いたが、考えてみれば、今でも問題はないだろうと思う。もともと隠すつもりは微塵もなく、今日のように目の前で話題にすることも多かったのだ

サイファは利発な子である。話の断片から、おおよその状況は理解していたに違いない。それでも特に反発するような態度は見られなかったので、素直に受け入れてくれるものと予想した。 だが、サイファの返答は、予想もつかないものだった。

「僕はアリスがいいよ」

落ち着いた声でさらりと言う。表情もいたって普通で、笑っているわけでもない。冗談ではなさそうだ、とシンシアは思う。しばらく様子を見ようと考え、無言でソファにもたれかかった。 アリスは人差し指を立て、笑顔で優しく諭す。

「私はアルフォンスと結婚しているの。だから、サイファとは結婚できないわ」

「離婚すれば問題ないんじゃない?」

サイファは涼しい顔で切り返した。子供とは思えない発言だった。いや、子供だからかもしれない。その重みを認識していないからこそ、簡単に言えるのだろう。

「ダメ」

アリスは動じることなく平然と却下した。立てた人差し指を左右に動かす。

「10年も粘ってようやく結婚してもらったんだから、離婚なんて絶対にしないわ」 サイファは不満そうに口をとがらせた。眉をひそめて尋ねる。

「アルフォンスと僕と、どっちが大事なの?」

「アルフォンス」

アリスは少しの迷いもなく即答した。当然と言わんばかりの口調だった。

ふたりの会話を聞きながら、リカルドは肩をすくめて苦笑した。

「容赦ないね、サイファもアリスも」

「はっきり言うのは悪いことじゃないわ」

シンシアはアリスの態度を評価した。相手が子供だからといって、口当たりの良いことを言ってごまかしてはいけない——アリスは自らの経験により、そう考えるようになっていた。そして、しっかりとそれを実践している。可愛らしい顔に似合わず、芯の強いところがあるのだ。

「もちろんサイファのことも好きよ。だから、この子をお嫁さんにしてってお願いしているの。 ねぇ、どうかしら?」

「生まれてからじゃないとわからないよ」

サイファは素っ気なく答えた。まだ不機嫌が治まっていないらしい。だが、彼の言うことももっともではある。どんな子かもわからないうちに結婚相手として認めるなど、普通ではありえないことだ。

アリスは安心させるように明るく言う。

「心配しなくても、きっと私に似て良い子になるわ」

「アルフォンスに似るかもしれないよ」

サイファはふてくされながら淡々と反論する。

アリスはくすりと笑った。

「そうしたら私よりも優しい子になるわね」

「性格はともかく、外見はあんなの困るよ」

サイファは眉根を寄せた。

「もしかして、あんなに大きく厳つくなるって思っているの?」

「なるかもしれないよ?」

「ならないわよ、絶対に!」

アリスはくすくす笑いながら言った。サイファの鼻先に人差し指を立てる。

「私が保証するから、ね?」

「……わかったよ。アリスがそこまで言うなら」

気の乗らない様子ながら、サイファは一応の了承をした。いくら言い返しても勝てないと諦め たのかもしれない。アリスが意外と強情だということは、彼もよく知っている。

アリスはにっこりと微笑む。

「それじゃあ約束。女の子だったらお嫁さんね」

サイファはじっと考え込んだ。やがてゆっくりと顔を上げて尋ねる。

「男の子だったらお婿さんにすればいいの?」

「.....え?」

ぷつりと音が途切れた。あたりがしんと静まり返る。

「あははははは!」

一拍の間ののち、大人たちは一斉に声を立てて笑った。リカルドの声が最も大きかった。大き く肩を揺らしながら、苦しそうに横腹を押さえている。アリスは口元に手を添え、鈴を転がすよ うな声で笑っている。

サイファだけが状況をつかめず、きょとんとしていた。アリスと両親を交互に見る。

「どうして笑うの?」

「男どうしでは結婚できないのよ」

シンシアは笑いを噛み殺しながら説明した。サイファは妙に大人びたところがあるが、やはり まだ子供なのだと少し安心した。

「男の子だったら、友達になってあげてね」

アリスはサイファの頭に優しく手を置いた。まっすぐな金色の髪がさらりと小さく揺れた。

リカルドはひとしきり笑うと、急に表情を曇らせた。

「しかし笑っている場合でもないな。許されるものなら婿にでもしたい気分だよ」

「しっかりしなさい、リカルド」

シンシアは頼りなく丸まった背中をぽんと叩いた。

「ああ、現実から逃れられないことはわかっているよ」

リカルドはソファにもたれかかりながら腕を組んだ。小さくため息をつく。

気が重いのはシンシアも同じだった。

「次の候補はやはりユリア?」

「そうなるかな。だが、あの子はサイファとそりが合わないようだし、それに年上だろう」 「あら、年齢は関係ないわ」

アリスが会話に割り込んだ。彼女は年齢のことでは何かと苦労してきた。年齢差を理由に結婚 を反対されたことも少なくない。そのため、黙ってはいられなかったのだろう。

リカルドは申し訳なさそうな微笑みを浮かべた。

「断る理由には使えるよ」

「私はユリア本人より、父親の方が問題だと思うわ」

シンシアは腕を組んで言った。リカルドもそれに同意して頷く。

「確かに熱心すぎるな」

「本家との繋がりを強くして力を手に入れようとしている。そのこと自体は悪いとは思わないけれど、態度があからさますぎるのよ。がっついていて下品だわ」

「わかりにくいよりは対処しやすくて安心できるがな」

「そう? どうせなら完全に騙し通してくれるくらいの方がいいけれど」

シンシアは利用されることは構わなかった。ただ、その意図が中途半端に垣間見えると、いかにも浅はかに思えて苛立つのだ。堂々と宣言するか、もしくは完全に意図を隠すか、どちらかであってほしいと考えていた。

リカルドは大きくため息をついた。

「アリスの子供が女の子であることを祈るしかないな」

「そうね。男の子だったら、そのときまた考えましょう」

「ねぇ、おじさま」

アリスは僅かに首を傾げて呼びかけた。

「もし男の子でも、あまりがっかりした顔をなさらないでくださいね」

「あ、ああ、そうだな。気をつけるよ」

リカルドは少し焦りつつ返事をした。彼女の指摘があまりにも的確だったせいだろう。彼なら そんな顔をしかねない、とシンシアも思う。良くいえば素直であり、悪くいえば配慮が足りない のだ。

「男か女か、産まれるまでわからないの?」

サイファはアリスを見上げて尋ねた。

「そう、産まれるまでのお楽しみ。アルフォンスは女の子じゃないかって言ってるけど」

「どうやってわかるの?」

「さあ、おなかを触ったり、耳を当てたりしているけど、たぶん根拠は何もないわよ」

「科学者とは思えない非科学的な言動だな」

リカルドは笑いながら言った。アルフォンスは研究職ではなく管理職だが、それでも一応は科 学者の端くれである、というのが、リカルドの認識だった。

「サイファも触ってみる?男か女かはわからないと思うけれど」

アリスは片目を瞑って言った。

サイファはぱちくりと大きく瞬きをした。

「いいの?」

「いいわよ、どうぞ」

アリスはおなかに両手を当てて微笑んだ。

サイファはゆっくりと手を伸ばした。膨らんだおなかにそっと触れる。

「この中に赤ちゃんがいるんだ……」

何かとても不思議そうにつぶやいた。手を置いたまま身を屈め、顔を近づけていく。寄りかかるようにして片耳を当てて目蓋を閉じた。音に集中しているらしい。

「どう?」

「うーん、聞こえるような、聞こえないような」

微妙に眉をひそめる。それでも、まだあきらめてはいないようだ。聞こえる場所を探るように 、耳の位置を少しずらした。

そのとき、アリスは急に顔をしかめた。唇をきゅっと結ぶ。

「どうしたの? アリス」

シンシアは身を乗り出して尋ねた。

サイファはその声に反応して体を起こした。そして、アリスの表情を見てうろたえた。

「ごめん、痛かった?」

「そうじゃないの、大丈夫、サイファのせいじゃないわ」

アリスは笑顔を作った。かなり無理をしているようだ。うっすらと汗が滲んでいる。大きく息を吸って、ゆっくりと吐いた。痛みと気持ちを落ち着けようとしているのだろう。

シンシアは軽く握った手を口元に当て、難しい顔で考え込んだ。

「アリス、さっきここへ来たときも、何か顔をしかめてなかった?」

「少し痛みを感じたけれど、すぐに治まったから、心配しなくても大丈夫よ」

「もしかして、けっこう前から何度も痛みが来てない?」

「え? ええ、でもすぐに治まっているから……」

「痛みが規則的に来てる?間隔が短くなってきていない?」

「言われてみれば……」

アリスの瞳が揺れた。表情に浮かぶ不安の色が、次第に濃くなっていく。

「それ、たぶん陣痛だわ」

シンシアはあっさりと言った。

アリスは先ほどのやりとりで見当がついていたのか、それほど驚いた様子は見せなかった。 ただ、困惑したようにシンシアを見つめていた。

驚いたのはリカルドの方だった。

「ちょっと待て、予定までまだ一ヶ月あるんだろう?」

「予定はあくまで予定よ」

シンシアは平然と言って立ち上がった。夫に振り向き、歯切れよく指示を出す。

「リカルド、先生を呼んできて。アルフォンスにも連絡を」

「わ、わかった」

リカルドはあからさまな動揺を見せながら返事をした。ソファから弾かれるように立ち上がると、走って部屋を出て行く。

サイファは呆然とその様子を見ていた。会話の意味はわからなかっただろうが、まわりの緊迫 した空気を感じ取り、不安そうに表情を曇らせていた。小さく口を開いて、母親に尋ねる。

「どういうこと?」

「そろそろ産まれるってこと」

シンシアは口元を上げた。

「アリス、歩ける?」

彼女に歩み寄りながら気遣わしげに尋ねると、身を屈めて覗き込んだ。

「ええ」

アリスは困惑した表情のまま、素直に小さく頷いた。シンシアの手を取り立ち上がる。 隣のサイファもつられて立ち上がった。

「母上、僕は?」

「無事に産まれるよう祈ってなさい。あと、アルフォンスが来たら対応をよろしく」 シンシアは幼い息子にも端的な指示を出した。

「わかった」

サイファは顔を引き締めて、こくりと頷いた。

「アリス!!」

深みのある太い声が、高い天井に反響した。

アルフォンスは息を荒くしながら屋敷に飛び込み、焦った様子であたりを見まわしていた。屋 敷は非常識なほどに広く、どちらへ行けばいいのかわからない。奥歯をぎり、と噛みしめる。

「おじさん、こっち」

廊下の奥からサイファが顔を覗かせた。小さな手で手招きをしている。

アルフォンスは大きな体で俊敏に駆けていった。

「ここか?!」

「そうだけど、部屋の外で待つようにって」

その言葉の後半は、彼の耳には届いていなかった。突進する勢いでドアに手を伸ばす。だが、 ノブに届く前に弾かれてしまった。バチリと静電気のような音が響く。

「落ち着いてよ。結界が張ってあることに気がつかないの?」

サイファは呆れたように言った。結界には無色透明なものもあるが、これはわかりやすいように薄い青色をつけてある。そうでなくても、魔導を扱う者であれば当然わかってしかるべきだ。 アルフォンスはそれに気がつかないほどに混乱していた。

「くそっ、こんな結界」

かなり複雑で強力な結界ではあったが、アルフォンスに解除できないものではない。一歩下がって、呪文を唱え始める。

「おじさん、落ち着いて」

サイファはそう言うと、小さな声で素早く呪文を唱え、アルフォンスのまわりに結界を張った。ぼんやりとした光が、彼ひとりだけを包む。

「サイファ、おまえ……」

「母上に頼まれているんだ。アリスは大丈夫だよ。頭を冷やしてよ」

その結界は内側からは解除できないものだった。手練の魔導師でもこの結界を扱えない者は多くいる。それを、まだ幼い少年が難なく張ったことに驚いた。とはいえ、それほどの強度はない。このくらいなら強引に破ることは可能である。だが、この場でそれを行えば、周囲の壁や窓も壊すことになりかねない。この状況で、そのような騒ぎを起こすべきではないだろう。

「わかった、落ち着いた」

アルフォンスは手を下ろし、観念したかのように低い声で言った。

サイファはアルフォンスの結界を解いた。壁を背にして座り込む。

「アルフォンスも座ったら? まだ時間がかかるかもしれないよ」

「そうだな」

アルフォンスもサイファの隣にどっしりと腰を下ろした。疲れたように額を押さえ、小さく息をつく。

「おまえ、随分と落ち着いているな」

「僕たちに出来ることは何もないんだ。せめて邪魔しないようにしなくちゃ」

サイファの言うことはもっともだった。だが、ときおり聞こえるアリスの苦しそうなうめき声を耳にすると、胸が掻きむしられ、我を忘れそうになる。アルフォンスは理性を総動員し、必死に堪えていた。

「父上は? 一緒じゃなかったの?」

「仕事を代わってもらった。外せない作業があってな」

仕事のことに関しては、リカルドはとても頼りになる男だった。自分の代わりを務められるのは、リカルドの他にはいない。彼が代わってくれなければ、ここに駆けつけることも叶わなかっただろう。快く引き受けてくれた彼には、言いようもないくらいに感謝している。

不意に、中からアリスの悲鳴にも似た声が聞こえた。

アルフォンスは大きな背中を丸めて膝を抱えた。ズボンを無造作にぎゅっと掴む。ミシミシと音がして、今にも破れそうだった。

「耳を塞ぎたくなるな」

「ダメだよ。アリスが頑張ってるんだから」

そう言ったサイファの声も、少し強張っていた。だが、彼はしっかりと受け止めようとしている。自分も見習わなければ、とアルフォンスは思った。

そのとき——。

「ふぎゃぁ、ふぎゃあ、ふぎゃあ!」

元気のいい産声が耳に届いた。アルフォンスとサイファは顔を見合わせ、同時に飛び上がるように立ち上がった。

「アルフォンス、落ち着いてね」

「ああ、わかっている」

サイファが感情を抑えた声を掛け、アルフォンスも低い声で返事をする。ふたりは張りつめた 顔で身構えた。すぐにでも駆け込める体勢だ。しかし、扉は一向に開く気配がない。

アルフォンスは奥歯を噛みしめた。苛立ちが募る。だが、時間が経つにつれ、それは不安へと 変わっていった。産声もやがて聞こえなくなった。

まさか、何かあったのでは――。

突入したい衝動に駆られる。もう堪えられなかった。心配で、いても立ってもいられない。手 を下ろしたまま、サイファに悟られないように呪文を唱えようとする。

だが、その瞬間。

ふっ、と結界が消えた。がちゃりと中から鍵が外され、ゆっくりと扉が開く。

「お待たせ」

シンシアはにっこりと笑って言った。

アルフォンスは彼女の隣をすり抜け、一目散に部屋に滑り込んだ。そのすぐ後ろをサイファがついていく。

「アリス!!」

彼女は積み重ねた枕とクッションにもたれて、少しだけベッドから体を起こしていた。顔の汗は拭ったようだが、顔にかかる髪はまだ濡れていた。そうとう汗をかいたのだろう。しかし、疲れた様子ながら、その表情はとても柔らかかった。彼女の目線の先には、白い布でくるまれた赤ん坊がいる。担当医がアリスに手渡そうとしているようだ。

「来てくれたのね、アルフォンス」

アリスは手を止めて振り向いた。にっこりと笑顔を見せる。

「無事なのか?!」

アルフォンスは勢いよく詰め寄った。

「母子ともに健康よ。赤ちゃんは少しだけ小さめだけど、特に問題はないわ」

アリスの代わりに、横にいた担当医が答えた。

アルフォンスは大きく安堵の息をつき、膝に手をついて、力の抜けた体を支えた。

「ねえ、男の子? 女の子? どっち?」

大きな体の後ろから、サイファがひょいと飛び出して尋ねた。

アリスは自分の腕でぎこちなく赤ん坊を抱くと、その子の顔がサイファに見えるように体を僅かに傾けた。そして、にっこりと微笑みかけて言う。

「"レイチェル"よ」

サイファは息を吸いながら、目を大きく見開いた。ベッドに手を掛けて、つま先立ちで身を乗り出すと、アリスの腕の中の赤ん坊を覗き込む。小さな彼女——レイチェルを見ているうちに、彼の顔は次第にほころんでいった。

「こんにちは、レイチェル。僕のお嫁さん」

「ちょっと待て、気が早すぎるぞ。おまえの嫁じゃない、私の娘だ」

アルフォンスは慌ててそう言うと、後ろからサイファの襟を掴んで引き離した。

アリスも、シンシアも、そして担当医までもが笑った。

「気が早すぎるのはアルフォンスの方ね」

「まったくだわ。子供相手にむきになっちゃって」

「父親の私を差し置いて、勝手に娘に挨拶したのが許せなかっただけだ」

アルフォンスは苦しい言い訳をした。どちらにしろ、大人げないことには変わりない。照れ隠 しにコホンと咳払いをしてから、身を屈めてアリスに両手を伸ばす。

アリスは微笑みながら、小さな娘をアルフォンスに手渡した。

「首が据わっていないから気をつけてね」

「昔、姪をあやしていたから、アリスよりは上手いはずだ」

「あら本当、大きな図体に似合わず、意外と堂に入っているわね」

危なげなく赤ん坊を抱く彼の姿を見て、シンシアは横から茶々を入れた。からかい半分の口調だったが、実際のところは真面目に感心しているのだろう。それは、彼女の表情から見て取れた。

「おじさん、僕にももういちど見せてよ」

サイファは隣で背伸びをしながら、両手を上に伸ばして催促していた。背の高いアルフォンスが立っていては、サイファからはまったく赤ん坊の顔が見えない。

だが、アルフォンスは口元を緩めて娘を見つめたまま、彼には目も向けなかった。

「今日は諦めろ」

「何それ、嫉妬?独占欲?」

いい年をした大人の理不尽な態度に、サイファはむっとして口をとがらせた。

「相当な子煩悩になりそうね」

「ええ、本当に」

苦笑しながら言うシンシアに、アリスもくすくすと笑いながら同意した。

とても穏やかであたたかな空気が流れていた。

小さな命がもたらした、たくさんの喜び。

小さな命に注がれる、たくさんの愛情。

これから先も、この優しい幸せが続きますように――。

娘を取りまく光景を眺めながら、アリスは柔らかく微笑んだ。

ラウル=インバースは、300年ほど前にこの国にやってきた。

強力な結界を張り、外界との交流を絶っているこの国に、どのようにして入り込んだのかは謎である。そもそも、彼が外界からやってきたこと自体、表立って語ることは禁忌とされていた。 その事実は、この国の防衛に穴があると認めることになるからだ。だが、人の口に戸は立てられない。王宮内という狭い範囲でだが、密やかに語り継がれていた。

この国にやってきて以来、彼は王宮医師としてここに居着いていた。誰とどういう話し合いがなされそうなったのか、そのいきさつはごく一部の者にしか知らされていない。

王宮医師とは、国に雇われ王宮内に医務室を抱える医師のことだ。王宮内やその関連施設で働く人々を診察するのが主な仕事である。ラウルの他にも数人の医師が、それぞれ医務室を持ち常駐していた。

初めのうちは、彼の医務室を訪れる人間が後を絶たなかった。診察など不必要にもかかわらず、何かと理由をつけて訪問し、様々な話を持ちかけるのだ。彼の持つ強大な魔導力を利用するため、自分の側へ引き込もうとしていたのである。

だが、徐々にその数は減少していった。彼は決して誰にもなびくことはない、ということが知れ渡ったからである。いくら金や地位をちらつかせても、関心を示すことはまるでないのだ。また、情熱や使命感に訴えても無駄であった。そういう類の感情を、彼は持ち合わせていないようだった。

そしてもうひとつ。

年月が過ぎるにしたがって、彼のことを気味悪がる者が増えていったのだ。彼の外見は、この国に来たときのまま、まったく変わることがなかった。幾星霜を経ても衰えることなく、青年の姿を維持していたのである。人間ではなく化け物だ——そう思うものも少なくなかった。

今では、彼の医務室には、ほとんど誰も寄りつかなくなっていた。いつも閑散としている。彼の冷たい目と無愛想な態度も、それに拍車をかけていた。好きこのんでここに来る者は滅多にいない。他の医師が手一杯のときなどに、ちらほらとやってくるくらいである。その数少ない患者を、彼はただ淡々と診察していた。

その日も、ラウルはいつものように医務室にいた。広くはない机に向かい、発表されたばかりの論文を読んでいる。患者がいないときは、医学関係の書物や論文を読んで過ごすことが多かった。だが、勉強になることはほとんどない。すでに彼が知っていることばかりである。

―コンコン。

扉をノックする音が聞こえた。

「入れ」

ラウルは論文を片付けながら、短く声を張った。

すぐにガラガラと扉が開き、紺色の制服を身に着けた男性がひとり入ってきた。人なつこい柔和な笑みを浮かべながら、軽く右手を上げる。

「やあ、ラウル。久しぶり。ここはいつも空いていていいな」

「何をしに来た」

ラウルは睨みつけるような鋭い視線を流し、冷たく突き放すように言った。

だが、彼は少しも動じた様子を見せず、笑顔を保ったまま答える。

「診察してもらいに来たんだよ」

「座れ」

ラウルは顎をしゃくって、隣の丸椅子を示した。

男性は上着を脱いで籠に入れると、示された椅子に素直に座った。

彼の名前はリカルド=キース=ラグランジェ。王家と同等、いや、実質はそれ以上の権力を握っていると云われるラグランジェ家の当主である。先代から当主の座を引き継ぎ、そろそろ5年になる。だが、とてもそうは見えなかった。良くいえば優しく気さくであり、悪くいえば威厳がないということになる。

彼は、好きこのんでこの医務室に来る、数少ない人間のひとりだった。

他のところでは、医師に特別扱いされたり、他の患者に順番を譲られたりして、居心地が悪いということが理由のようだった。その点、ここならいつも閑散としているので、他の患者に遠慮する必要がない。そして、ラウルは相手が誰であれ特別扱いすることはない。そのため、ここがいちばん気が楽なのだ、とリカルドは言っていた。

「どんな症状だ」

ラウルはまっすぐに彼を見て問いかける。

「少し喉が痛くて熱っぽいな」

リカルドは喉に手を添え、僅かに首を傾げながら答えた。声におかしなところはないが、違和 感を感じているのだろう。顔は少し火照っているようだった。

ラウルは体温計を渡して熱を測らせた。その数値を一瞥すると、口の中を覗き込んだり、胸と 背中に聴診器を当てたりしながら、淡々と診察をしていく。

「風邪だな」

聴診器を外して首に掛けると、そう診断を下した。立ち上がって棚からいくつか薬を取り出し、袋に入れて机に置く。そして、再び椅子に座って机に向かうと、カルテにさらさらとペンを走らせた。

「ラウルは風邪をひいたことはあるのか?」

リカルドは上着の袖に腕を通しながら尋ねた。

「なぜそんなことを訊く」

ラウルはカルテに向かったまま聞き返した。

リカルドはにっこりと微笑んだ。

「単なる好奇心だよ」

「ある。最近はひいていない」

ラウルは手を止めず、ぶっきらぼうに答えた。

「へぇ、ラウルでも病気になることがあるんだな」

「おまえも私を化け物だと思っているのか」

リカルドは動きを止め、目を大きくしてラウルを見た。そして、ふっと表情を緩めると、ゆっくりとした口調でなだめるように言う。

「変わっているのは確かだが、そんなふうには思っていないよ」

ラウルはムッとして横目で睨みつけたが、リカルドは意に介さず、軽い笑顔で続ける。

「だいいち化け物だと思っていたら、わざわざここを選んで来たりはしないさ。ラウルのことは 好きだよ」

「おまえがどう思おうと、私には関係ない」

ラウルはペンを置き、無表情でリカルドに振り向いた。机の上の袋を手に取り、押しつけるようにして渡す。

「三日分の薬だ。毎食後に忘れず飲め」

「ありがとう」

リカルドはにっこりと笑って受け取った。そして、まだ開いたままだった上着の前を留めながら、急に思い出したように言う。

「あ、そうだ。おまえに頼みたいことがあるんだけど、いいかな?」

「内容を言わずに了承を取ろうとするのは卑怯だ」

「ああ、そうだね」

リカルドは軽く笑った。

「今度、改めて頼みに来るよ。話くらいは聞いてくれるよな?」

ラウルは睨みつけるように、じっと彼を見つめた。そして、ゆっくりと腕を組むと、小さく息をついて言う。

「いいだろう。受けるかどうかは、内容を聞いてから決める」

「わかった」

リカルドは真面目な顔で頷いた。鮮やかな金色の前髪がさらりと揺れた。

――コンコン。

医務室の扉がノックされた。立て続けに人が来ることなど、ここではめずらしいことだ。だが、ラウルは眉ひとつ動かさず、普段と変わらない調子で言う。

「入れ」

その声に促されるように、扉が遠慮がちにそろそろと開いた。遠慮がちというよりは、おそる おそるといった方が近いかもしれない。

「あれ? どうしたんだ、フランシス」

扉の向こうから姿を現した男性を見ると、リカルドは驚いたような声を上げた。

「リカルドさん」

フランシスと呼ばれた男性は、緊張の糸が切れたように、大きく安堵の息をついて言った。ここへ来るのがよほど怖かったと見える。そんなときに知った顔を見つけて安心したのだろう。彼はリカルドと同じ紺色の制服を身に着けていた。つまり、同じ研究所に勤務しているというこ

とだ。

「風邪をひいたみたいなんですけどね。ずいぶん流行っているらしくて、他の医務室はどこも人があふれてるんですよ」

「ああ、それで仕方なくここへ?」

リカルドは納得したようにさらりと言った。

「あ、いや、そういうわけじゃ……」

フランシスはラウルの方をちらちらと気にしながら、困ったように苦笑いを浮かべている。図 星を指されたことは明白だ。

「もうすぐお昼だから、診察が終わったら一緒に食べに行こうか」

リカルドは薬を持って立ち上がり、フランシスに席を譲りながら言う。

「はい、ぜひ」

フランシスは爽やかな笑顔で答えた。空いた丸椅子にはまだ座ろうとせず、立ったままリカルドの方を向いている。

「フランシス、おまえはここへ座れ。リカルド、おまえは出て行け」

ラウルは睨むような視線をふたりに送り、端的に命令した。

「あ、リカルドさん、いてくれていいです。ていうか、むしろいてください」

フランシスは慌ててリカルドに頼み込んだ。縋りつくような目を向けている。ラウルとふたり きりになることを怖がっているのだろう。取って食われるとでも思っているのかもしれない。

「って言ってるけど、いていいのかな?」

「勝手にしろ」

フランシスを指さしながら尋ねるリカルドに、ラウルは仏頂面で答えた。

先ほどまでリカルドが座っていた丸椅子に、今度はフランシスが座った。緊張した面持ちを見せている。体にも無駄に力が入っているようだ。

「どんな症状だ」

ラウルは正面から彼に向かい合って尋ねる。

「えっと、風邪みたいなんです」

「診断しろとは言っていない。症状を訊いている」

フランシスは眉尻を下げ、引きつった苦笑を浮かべた。ここへ来たことを思いきり後悔したよ うな顔だった。

ラウルはフランシスにも風邪という診断を下し、薬を渡した。

フランシスはここへ来たときほど怯えてはいなかった。診察が意外と普通だったことに拍子抜けしているようにも見えた。手早く上着を身に着けると、ラウルに小さく一礼する。

「じゃあ、行こうか」

後ろで待っていたリカルドは、フランシスの背中にポンと手を置いた。それから、ラウルに目 を向けて言う。

「ラウルもどうだ? 一緒にお昼、行かないか?」

その言葉に、フランシスはぎくりとして振り返った。しかし、文句を言うことなどできるはず もなく、微妙に顔をしかめるだけだった。なぜラウルなんかを誘うのか、という気持ちが、その 表情からありありと見て取れた。

だが、肝心のリカルドは気づいていないようだった。意図的なものではないだろう。彼はどこか鈍いところがあるのだ。ラウルの方を向いたまま、にこにこして返事を待っている。

「私は自分の部屋で食べる」

ラウルは素っ気なく答えた。フランシスに遠慮したわけではない。誰かとともに外食をしたい と思わなかっただけである。むしろ煩わしいというのが、彼の率直な心情だった。

リカルドは両手を腰に当て、軽くため息をついた。

「おまえ、閉じこもってばかりなのも良くないぞ。たまには外で食べるのも気分転換になっていいんじゃないか?」

「気分転換など必要ない」

ラウルはにべもなく拒絶した。

「そうか……じゃあ今日はあきらめるよ。また今度、いつか付き合ってくれ」

リカルドは軽く右手を上げてそう言うと、医務室を後にした。フランシスはほっとしたように 息をつき、リカルドとともに出て行った。

ラウルは無言で、ふたりの背中に冷たい視線を送った。

リカルドに言われたとおりだった。

ラウルはここに閉じこもっている。本人にその意識はなかったが、少なくとも客観的に見れば、そういって差し支えのない状況である。

彼の自室は医務室の奥にあった。そこで寝起きし、食事を作って食べ、生活をしている。昔も 今も、常にひとりきりだった。修理や配達の者を除いては、誰も招き入れたことはない。

たいていの時間は、その自室か医務室のどちらかにいた。外出するのは、どうしても外せない 用件があるときだけである。月に数回あるかどうかだ。

外に出ることが怖いわけではない。その必要性を感じないだけである。他人と関わりたい、話をしたいという欲求がなかった。そして、年月を経るにしたがって、その傾向は強まっていた。 今では、窓の外を見ることすら、ほとんどなくなっていた。

ラウルはため息をつき立ち上がった。窓際へと足を進める。レースのカーテンとガラス窓を開け、窓枠にもたれかかると、腕を組みながら顔を上げた。沁みるほどの鮮やかな青が、視界に飛び込んできた。高い位置にある太陽が、地上に強い光を降り注いでいる。空の下方に掛かる薄い筋状の雲は、緩やかに形を変えながら流れていた。その光景の眩しさに思わず目を細める。窓から風が滑り込み、焦茶色の長髪を撫でるように揺らした。

こうやって空を眺めるのも、ずいぶん久方ぶりだった。なぜ急にそんな気分になったのかはわからない。リカルドに言われたことがきっかけであることは確かだ。だが、それがすべてではないだろう。言いようのない閉塞感が募っていたせいかもしれない、とラウルは思った。

300年前もそうだった。変えられない世界、終わりのない贖罪、断ち切れない未練、無意味に繰り返される毎日——何もかもが嫌になった。だから、すべてを捨ててここへ来た。逃げてきたのだ。だが、根本的な部分では、何も変わりはしなかった。環境を変えたところで、自分自身が変わらなければ無意味だ、ということを悟っただけである。

そう、空を見上げたところで、何が変わるわけでもない。一時の逃避にすぎないのだ。ラウル は自分の行為の無意味さを自覚し、目を閉じ、鼻から小さく息を漏らした。

「レイチェル、そろそろ行くよ」

「はい、お父さま」

不意に、外からそんな会話が聞こえてきた。医務室の窓側は、通路にはなっておらず、あまり人が通ることはない。声が聞こえるのはめずらしいことだった。何とはなしに、その方を見下ろしてみる。並木の下に体格のいい男性が立ち、少し離れたところに3歳くらいの少女がしゃがんでいた。先ほどの会話から察するに、このふたりは親子なのだろう。

男の方には見覚えがあった。一度、リカルドとともにここへ来たことがあり、そのときに紹介されたのだ。ラグランジェ家の人間で、確か、アルフォンスという名前だったはずだ。リカルドの上司だと聞いている。

少女は立ち上がり、柔らかい金の髪をなびかせながら、父親のもとへ駆けていった。その隣に並び、一緒に歩き始める。しゃがんでいたときに摘んだと思われる、小さなピンク色の花が一輪、小さな手に握られていた。

視線を感じたためだろうか。医務室の真下を通りかかったところで、少女はふいに足を止め、 顔を上げた。

大きな蒼の瞳が、三階の窓際に佇むラウルを捉える。

きょとんと不思議そうに見つめる。

大きくぱちくりと瞬きをする。

やがて、ふわりと花が咲いたように笑顔を浮かべた。

「レイチェル? どうした」

「ううん、なんでもない」

娘の足が止まったことに気づき、アルフォンスは怪訝に尋ねたが、少女は笑顔で首を横に振った。とたとたと小さな駆け足で父親を追う。

---似ている。

ラウルは眉根を寄せ、心の中でつぶやいた。

先ほどのレイチェルと呼ばれていた幼い少女に、別の少女の懐かしい面影が重なった。それは、自分が守るべき役目を負いながら、守ってやれなかった少女――自分にとって、この上なく大切で、決して忘れることのできない存在だ。

瓜二つというほどそっくりではない。確かに顔立ちは似ているが、顔だけならもっと似た女は

他にいた。だが、この少女には顔立ちだけではない何かがあった。抽象的な表現だが、雰囲気が似ているというのだろうか。強いて具体的にいうならば、笑い方が似ているのかもしれない。無防備に屈託なく笑うその表情が、まわりの人間までも幸せにするようなその笑顔が、懐かしい少女を彷彿とさせた。

生まれ変わりなど信じていない。ただ似ているだけだ。そんなことは誰に言われずとも理解している。だが、名付けようのない些細で特別な感情は、胸の奥で小さくくすぶり続けていた。

ラウルは窓枠に肩を寄せたまま、遠ざかる小さな後ろ姿を、ずっと、見えなくなるまで目で追った。

「やあ、ラウル。今日も暇そうだね」

リカルドは軽く右手を上げ、にこやかな笑みを浮かべながら医務室に入ってきた。そこにいたのはラウルひとりきりである。今日も患者はひとりも来ていない。リカルドが何日かぶりの訪問者だ。

「何の用だ」

ラウルは本をめくる手を止めると、冷たく一瞥して言った。開け放たれた窓から流れ込む新鮮な空気が、焦茶色の長髪を微かに揺らした。

「めずらしいね。どういう心境の変化?」

リカルドはにっこり笑いながら尋ねた。

めずらしいというのは、ラウルが窓際に椅子を置いて座っていたことだろう。おまけにガラス窓まで全開にしている。ラウルにしてはずいぶん開放的だと思ったに違いない。リカルドの表情から察するに、自分の忠告が効いたなどと勘違いしているのかもしれない。

ラウルはその態度が癪に障った。眉をひそめて睨みつける。

「何の用だと聞いている」

「覚えているか?頼みたいことがあるって言ったこと」

リカルドは急に真面目な表情になった。

「ああ、今まで忘れていたがな」

ラウルは低い声で素っ気なく答えた。一ヶ月前、リカルドが診察を受けに来たときに聞いた話だった。それきりになっていたので、話自体がもうなくなったものと思っていた。

「改めて頼みに来たよ。聞いてくれるな?」

リカルドは近くのパイプベッドにゆっくりと腰掛けた。真新しい白のシーツに、いくつかの皺が緩やかに走った。患者用のベッドであるが、肝心の患者が来ないため、本来の目的で使用されることは滅多にない。ほとんどリカルドの椅子代わりとなっていた。

「話せ」

ラウルはため息まじりに言った。面倒だと思ったが、そういう約束をしたことを覚えている。 話だけでも聞かなければならない。

リカルドは膝の上で両手を組み合わせた。小さく呼吸をしてから切り出す。

「おまえに頼みたいことというのはな、家庭教師なんだ」

ラウルは怪訝に眉をひそめた。

「……家庭教師、だと?」

「そう、家庭教師」

リカルドはにっこりとして頷いた。

ラウルは無言で彼を見つめた。肩透かしを食らった気分だった。一ヶ月も前からもったいつけていたので、よほど重大なこと、つまり政治的な類ではないかと想像したのだ。相手が名門ラグランジェ家の当主となればなおのことである。それが、まさか家庭教師などという極めて個人的

なこととは、まったくの想定外だった。しかし、どちらにしろ引き受けるつもりはない。

「いいだろう?家庭教師くらい」

リカルドは人なつこい笑顔のまま、軽い調子で畳み掛けた。

ラウルは冷たく鋭利な眼差しで睨みつける。

「ふざけるな。おまえに教えることなどない」

だが、リカルドにはまったく効き目はなかった。少しも怯むことなく、穏やかに応じる。

「私じゃないよ、息子のサイファだ。もうすぐ10歳になる」

「息子でも同じだ。私は医師だ。家庭教師などやるつもりはない」

ラウルは低い声で明瞭に一蹴した。

「こんなことを言うと親バカだと思われるだろうけど……」

リカルドはそう前置きをして続ける。

「サイファはとても頭が良い子でね。魔導に関してもかなりの力を持っている。もう並の家庭教師では、まともに教えられないんだよ。おまけにちょっと生意気なところがあって、すぐに先生を辞めさせてしまうんだ」

そう言うと、肩をすくめて苦笑する。

「その点、おまえなら安心だ。魔導については言うまでもなく、科学や医学などの学問にも造詣 が深いし、何よりサイファにやりこめられるとも思えない」

「断る」

ラウルは間髪入れず、端的すぎる言葉を返した。少しの迷いもなかった。リカルドの丁寧な説明は、まったくの徒労に終わった。

しかし、それでも彼は引き下がらなかった。

「許可はすでに取ってあるよ。家庭教師をやっている時間は、休診しても構わないとね」

「おまえ、人の話を聞いているのか」

ラウルは白い目を向け、半ば呆れぎみに言った。

もともとラウルの医務室には患者はほとんど来ない。休診しようがしまいが、何ら影響がないことは明白である。ラグランジェ家の当主ならば、許可を取ることは極めて容易だろう。だからといって、あらかじめそこまでの手回しをするとは思わなかった。甘い人間に見えるが、意外と抜け目がない。

「もうおまえしか頼む相手がいないんだ」

リカルドは顔の前で両手を合わせ、片目を瞑ってみせる。愛嬌の中にも必死さが窺える表情だ。だが、ラウルはこんな泣き落としにはびくともしない。

「それほど頭がいいのなら、自習でもさせておけ」

「出来るだけ才能を伸ばしてやりたいんだよ。親心ってやつかな」

「私は教え方など知らん」

「子供相手だと思わなくて大丈夫だよ。逆に子供だと思っていると、痛い目を見るかもしれない

リカルドはなぜか嬉しそうに声を弾ませた。その内容もどこか微妙にずれている。

「出て行け」

ラウルは鋭く睨みつけ、凄みのある低音で命令した。

「引き受けてくれたらね」

リカルドは動じることなく涼やかに言葉を返した。ラウルが承諾するまでは、どうあっても帰るつもりはないらしい。普段の物腰は柔らかいが、ここぞというときには頑固である。

ラウルは手にしていた本を後ろの棚に置き、椅子から立ち上がった。焦茶色の長髪をなびかせながら、パイプベッドに座るリカルドの前に歩み出る。冷たく射抜くように睨み下ろすと、彼の首に右手を掛けた。そのまま、上から覗き込んで顔を近づける。肩から落ちた長い髪が、カーテンのように二人を外界から遮断した。

「これ以上しつこくすると命の保証はない」

「なぜ、そんなにむきになる」

リカルドは目をそらさず、静かに尋ねる。

ラウルは首に掛けた手に力を込めた。

それでも、リカルドの表情は動かなかった。

ラウルはさらに力を込めた。指が白い首筋に沈む。

一瞬、リカルドの顔が歪んだ。だが、その目はラウルを捉えたままだった。

ラウルは深い濃色の瞳で睨み返した。

青い瞳は逃げずにそれを受け止めた。

視線が交錯したまま、無言の時間が流れる。

やがて、ラウルはため息をついた。

「むきになっているのはおまえも同じだろう」

そう言って、体を起こしながら手を引いた。眉をしかめて腕を組む。

「教える価値がないと判断したら、いつでも辞める」

それは、一応の承諾を意味する言葉だった。リカルドは何があっても引きそうもない。これ 以上、言い合っても泥沼にはまるだけである。そんな面倒なことは願い下げだった。ここはとり あえず収めた方が良いとラウルは判断した。こう言っておけば、何かしら理由をつけて辞めるこ とは可能である。

「ありがとう」

リカルドはにっこりと笑った。

「それじゃあ、あしたからさっそく来てもらおうかな。最初のうちは、昼すぎから3時間くらいで I

「何を教えればいい」

「すべて任せるよ。サイファはアカデミー修了程度と想定してくれ」

「わかった」

ラウルは面倒くさそうに返事をした。前髪を掻き上げながら、疲れたように小さく息を吐く。

そんな彼を横目で見ながら、リカルドはパイプベッドから立ち上がった。両手を腰にあて、背筋を反らせるくらいに伸ばすと、目を細めて表情を緩めた。

「これから昼食なんだが、一緒にどうかな?」

「断る。これ以上、おまえと顔を突き合わせたくはない」

ラウルは目も向けずに答えた。

「残念だな。いつか奢らせてくれ」

リカルドは笑いながらそう言うと、軽く右手を上げて医務室を出て行った。家庭教師の一件と 比べると、随分あきらめが早い。本気ではないのだろうとラウルは思った。

医務室は再び静寂を取り戻した。遠くの微かな声や足音、そして木々のざわめきが聞こえるだけである。

ラウルは窓際の椅子に戻った。無表情で腰を下ろす。棚に置いた読みかけの本を一瞥したが、 今は手に取る気にもなれなかった。鼻から小さく息を漏らすと、窓枠に右肘をついて空を見上 げた。意味もなく、流れゆく雲を目で追う。

そのとき、ふと下方から声が聞こえた。

「お父さま、この花はなあに?」

「ん? ああ、これはバラだな」

「きれいね」

「触るんじゃないぞ、棘があるからな」

「とげ?」

「刺さると血が出るんだ」

ラウルは視線を落とした。目にしなくてもわかっていたが、そこにいたのはアルフォンスとレイチェルの親子だった。日だまりの中で、野生のバラを眺めながら会話をしている。微笑ましいといえる光景だ。

やがて、アルフォンスは幼いレイチェルの手を引いて歩き始めた。彼女の長い金色の髪と、淡い水色のワンピースが、ふわりと柔らかく風をはらんだ。

医務室の下を通りかかる。

レイチェルは大きく顔を上げた。

ラウルと目が合った。

迷うことなく、にっこりと華やかに笑った。

幸せそうな笑顔だった。

あどけない無防備な笑顔だった。

それは、とても大切だった少女を想起させた。

だが、別人だ。何の関わりもないのだ。

そんなことはわかっている。なのに、なぜいつまでも――。

ラウルは眉を寄せた。

レイチェルを初めて見かけた日から、窓際で過ごすことが増えていた。言い訳はしない。間違いなく彼女を待っているのだ。

彼女は父親とともに、週に数回ほど、ここを通っているようだった。そして、通るたびに顔を上げ、無邪気に笑いかけてきた。ラウルは何の反応を返すわけでもなく、無表情で見下ろすだけだったが、彼女はそれでもやめることはなかった。

彼女の笑顔に惹かれていた。それ以上に、自分に笑顔を向ける理由が気になった。そのためなのだろうか、姿を見るたびごとに、彼女から目が離せなくなっていった。

しかし、もうこれも最後になるだろう。明日からはリカルドの息子の家庭教師が始まる。ここで待つ時間はなくなるのだ。一抹の寂しさを感じたが、断ち切るにはちょうどいい機会だと思った。いつまでもこんなものに惑わされているわけにはいかないだろう。

そう、これが最後だ——。

ラウルは去りゆく少女の小さな後ろ姿を、いつまでも目で追った。強い日差しの当たる右側が 、焼けるように熱かった。

翌日、ラウルは約束どおり、リカルドの家、すなわちラグランジェ本家を訪れた。それは、王宮に隣接した場所に存在していた。いや、隣接というより、一部であるかのように敷地の一角を占めている。家自体も個人のものとは思えないほど非常識に大きい。まるで城のようだ。知らない人間が見れば、王宮の一部と誤解しても無理はないだろう。

「来てくれて嬉しいよ、ラウル」

リカルドは両腕を広げ、満面の笑顔で出迎えた。

ラウルは眉根を寄せて睨んだ。平日だが仕事は休みなのだろうか、と怪訝に思ったが、尋ねる ことはしなかった。

「紹介するよ、妻のシンシアだ」

「初めまして」

リカルドの後ろに控えていた女性が、一歩前に出て、軽くドレスを持ち上げ膝を曲げた。客観的に見て、間違いなく美人といえるだろう。ただ美人というだけではなく、その表情からは聡明さが見て取れる。青い瞳には理知的な光を宿していた。

「こちらは王宮医師のラウル」

リカルドは、次にラウルを示して妻に紹介した。だが、ラウルは彼女を冷たく見下ろしただけで、何も言わなかった。面倒くさそうにリカルドに振り向いて尋ねる。

「サイファとやらはどこにいる」

「二階だ。案内するよ」

リカルドは緩やかにカーブする幅広い階段を指差すと、ラウルを先導して上っていった。

「サイファ、先生が来たよ」

リカルドは二階に上がってすぐの部屋をノックして、声を掛けた。

「はい」

中から返事が聞こえた。子供にしてはしっかりとした声だった。

扉が開いた。

そこには少年が立っていた。これがリカルドの息子、サイファなのだろう。整ったきれいな顔に、鮮やかな金髪といった、とても人目を引く容姿をしていた。背格好はもうすぐ10歳という年相応のものだったが、表情は見るからに聡明そうで大人びている。彼の青い瞳には、シンシアと同じような理知的な輝きが宿っていた。

サイファは背の高いラウルをじっと仰ぎ見た。少し目を大きくして、僅かに驚いたような顔を 見せる。しかし、すぐに表情を緩め、にっこりと笑った。

「ようこそ、先生」

そう言うと、ラウルの手を取り、広い部屋の中へと引き入れた。

リカルドが軽い足取りで階段を下りていくと、シンシアが訝しげな表情で待ち構えていた。 「大丈夫なの? あの人。強い魔導力を持っているのはわかるけれど」

「悪い人じゃないよ。ああ見えて実直だしね。愛想はないけれど、信頼に足る人物だと思っている」

リカルドは自信を持って言った。

それでもシンシアの不信感は拭えなかった。腕を組み、眉をひそめる。

「問題は、リカルドに人を見る目があるかどうかね」

「少しは信用してほしいな」

リカルドは苦笑した。難しい顔をした妻の腰に手をまわすと、リビングルームへと促した。

「先生は何を教えてくれるの? 魔導?」

サイファは好奇心いっぱいに目を輝かせ、ラウルにまとわりついた。先ほどとは別人のような 、子供っぽい無邪気な表情だった。

「ラウルだ。"先生"は必要ない」

ラウルは小さな教え子を見下ろしながら、無表情で言った。

「じゃあラウル、座って」

サイファは急に大人びた口調になった。口調だけではない。表情も落ち着いたものに変わっていた。微笑を浮かべながら、用意してあった椅子を右手で示す。

ラウルは促されるまま、椅子に腰を下ろした。

サイファもその隣の椅子に座った。机に左手をのせて寄りかかりながら、ラウルの目をじっと 見つめる。出方を窺っているのだろう。

「これを読め」

ラウルは手にしていた3冊の本を机に投げ置き、突き放すように言った。その本はいずれも魔導に関する論文で、読者は専門の研究者を想定している。最高学府であるアカデミーの生徒でも、理解は難しいに違いない。

サイファは醒めた目でそれを一瞥すると、ラウルに向き直った。

「もう読んだよ。だいたい本を読ませるだけなんて、家庭教師としては手抜きじゃない?」

「おまえこそ、読んだなどと嘘を言っているのではないだろうな」

ラウルはムッとして言い返した。どれもつい二ヶ月ほど前に発表されたばかりのものだ。こんな子供がもう読み終わったなど、信じることが出来なかった。

サイファはフッと挑発的な笑みを浮かべた。机の上の本を一冊、手に取って掲げる。

「この本、第四章の結論が間違っているよね。むしろ逆じゃないのかな。第六章は導き方が強引すぎる。この実験だけでは、この結論は出せないよ。結論ありきで実験をして急ぎすぎたんだろうね」

それは、ラウルが考えたこととまったく同じだった。きちんと読まなければその指摘はできない。いや、読んでいたとしても、そこに気がつく人間はそうはいない。

「それはおまえの意見か?」

「そうだよ。前の家庭教師が、これを書いた人でさ。教本として読ませられたんだけど、今みたいに指摘したら辞めちゃったんだよね」

サイファはつまらなそうに言うと、手にしていた本を投げ出すように机に落とした。まるで、 読む価値がないと言わんばかりだった。

ラウルは眉をひそめた。

「指摘しただけではないのだろう」

「こんなところで小遣い稼ぎしてないで、研究に本腰入れた方がいいんじゃない? って言っただけだよ」

サイファは事も無げにしれっと言った。

ここまで言われて家庭教師を続けられる人間は皆無だろう。リカルドの言っていたことが、ラウルはようやく理解できた。「ちょっと生意気」どころではない。相当に生意気だ。

「ねえ、こんな本よりさ、魔導を教えてよ。実戦的なやつ」

サイファはパッと顔を輝かせてそう言うと、身を乗り出してラウルの手を取った。

「ラウルってすごく強くて深い魔導力を持っているよね。今まで僕が出会った中で圧倒的に一番だよ。医師って聞いてたから期待してなかったけれど、今はラウルが来てくれて嬉しく思ってるんだ!

その言葉は、彼の魔導使いとしての水準を証明していた。向かい合っただけで相手の魔導力を 測ることが可能なのは、上級以上の使い手のみだ。

もちろん、最上級の使い手であるラウルにも、それが可能である。彼はサイファの魔導力をかなりのものと評価した。王宮に勤める人間でも、敵うものはごく少数だろう。父親のリカルドよりも上である。ただし、それ相応に優秀な使い手であるかは、また別の話だ。いくら強い魔導力を持っていても、知識と技術がなければ、単なる宝の持ち腐れにしかならない。

「ねえ、教えてよ。家庭教師なんだから、教えるのが仕事じゃない?」

サイファは人なつこい笑顔で、催促するように大きな手を引いた。

ラウルは腕を取られたまま、険しい顔で睨みつけて言う。

「その前におまえの力を見せてみろ」

サイファはにっこりと笑った。

「わかった。じゃあ、地下へ行こう。稽古場があるんだ」

「ここでだ」

ラウルは低い声でそう言うと、サイファの手を払いのけ、椅子から立ち上がった。そして、短く呪文を唱えると、部屋の内壁に沿うように、青白く光る結界を張った。魔導も物体も遮断する 強力なものである。

「私をここから一歩でも動かしてみろ。手段は問わない」

サイファは肘掛けに右手を置き、ラウルの横顔をじっと見つめた。そのままゆっくりと顎を引くと、ニッと口の端を上げる。

「面白いよ、それ」

その静かな声には、挑みかけるような色が含まれていた。

だが、ラウルはピクリとも反応しなかった。無表情な横顔を見せたまま、腕を組み、まっすぐに立っている。一見、無防備そうに見えるが、攻撃を仕掛けにくい隙のない構えだ。そう、すでに「試験」は始まっているのだ。

サイファは口元をきゅっと引き締めた。椅子から軽く跳ねるようにして立ち上がると、足早に ラウルの正面に回り込み、少し距離を取って向かい合う。

小さく息を吸った。

ラウルを見据えたまま短い呪文を唱え、ふたりの間に透明な結界を張る。

間髪入れず、胸の前で両手を合わせ、次の呪文を紡ぐ。両手の間に白い光が生じた。かなり輝度の強いものだ。眩しくて正視できないくらいである。光の向こう側にあるラウルの姿を捉えることは不可能だろう。

サイファの額に汗が滲んだ。

「やぁっ!」

幼い掛け声とともに、ラウル目掛けて光球を放出した。それは、ふたりの間の結界を消滅させ 、それでも勢いを失うことなく目標に突き進む。

ラウルは開いた左手を突き出し、サイファの攻撃を受け止めた。その瞬間、ジュッと何かが焼けるような音がして、光球は激しい光を放ちながら霧散した。

サイファは身を低く前傾して地面を蹴った。素早く光の海をくぐり抜ける。地面に手をつき、体ごと遠心力をつけ、コンパスのように足先をくるりと回す。計画通りラウルの足首を薙ぎ払った、いや、払おうかという、そのとき——。

「うわっ!」

逆に細い足首を掴み上げられ、一瞬で逆さづりになった。何が起こったのか理解できない表情で、あたふたと周囲の状況を窺う。

「稚拙な手だ」

ラウルは冷淡にそう言うと、腕の力だけで、小さな体を勢いよく放り投げた。

サイファは受け身を取ろうとしたが、不完全なまま、部屋を覆う結界に打ちつけられた。僅か に弾むようにして床に落ちる。

「う.....っ....」

顔をしかめ、頭を押さえ、よろめきながら立ち上がった。眉根を寄せて前を見る。

ラウルは感情のない顔で、開いた右手を正面に突き出した。そこに、呪文の詠唱なしに、白い 光球を生じさせる。先ほどサイファが放ったものより何倍も攻撃力が強いものだ。あたりが強く 照らされ、ラウルの後ろに長い影を作る。

サイファははっとした。防御の呪文を口にのせる。

白い光がサイファに襲いかかる。

まだ詠唱は終わっていない。

もう間に合わない。

サイファは息を呑んだ。視界が白で覆われた。

だが----。

それは目の前で中央から分かれ、彼を避けるように両側を通り過ぎた。凄まじい速度だった。 背後の青白い結界に衝突し、部屋の壁ごと突き破る。それでも止まらず、屋敷の外壁にも穴を開 けた。粉塵が舞い、瓦礫が山となる。

――ガ、タン。

サイファは呆然としながら、その場に崩れるように両膝をついた。

白い頬には薄く傷が走っていた。

袖にはいくつもの切れ目が入っていた。

金の髪が幾本か舞い上がり、はらりはらりと落ちていく。

それでも、目は、粉塵で煙る向こう側の人影に釘付けになっていた。長髪をたなびかせながら腕を組み、二つの足でしっかりと直立している。いまだ一歩も動いていない。

上方から次第に靄が晴れていく。

凍てついた無感情な瞳が露わになった。ギロリ、と視線が動く。

サイファはびくりと体を竦ませた。そして、芯から痙攣するように震え出した。僅かに口を開いたが、そこから声は出てこなかった。彼のすべては、戦慄と畏怖に支配されていた。

ラウルが初めてラグランジェ家へ行った日から一週間が過ぎた。

まだ家庭教師は続けている。

サイファの部屋を壊し、外壁にまで穴を開けてしまい、辞めさせられるだろうとラウルは思った。彼としては、そうなっても一向に構わなかった。もともと、嫌々ながら引き受けたものである。狙ったわけではないが、そうなればいいという気持ちは、どこかにあったかもしれない。

だが、リカルドの反応は予想外のものだった。「家を壊したんだから、その分ちゃんと働けよ」などと、軽く笑いながら言う。サイファも、直後は呆然としていたものの、その後はなぜか妙にラウルに懐いてきた。

怒っていたのはシンシアー人だけである。どういうつもりだと眉を吊り上げ、ラウルに詰め寄ってきた。家を壊され、息子を危険な目に遭わせられたのだ。当然の反応だろう。この家でまともな感性を持っているのは、どうやら彼女だけのようだ。だが、その彼女もリカルドになだめられ、結局は渋々ながら引き下がった。

こうして、ラウルの家庭教師が続行されることになったのである。

「ねぇ、それ違うんじゃない?」

ノートに数式を書いていたラウルの横から、サイファは頬杖をついたまま口を挟んだ。自分の 鉛筆で、空きスペースにさらさらと数式を書いていく。

「ここで放射されるのは光粒子だよね?だったらその基本エネルギーはその定理を使ってこう...

…で、影響を受けるのは重力と空気抵抗だから……こうなるんじゃないの?」

トン、と最後に点を打ち、顔を上げて隣のラウルを窺う。

「相互干渉の補正分が抜けている」

ラウルはサイファの数式の斜め下に追記し、それを丸で囲んだ。

サイファはじっとそれを見つめ、怪訝に眉を寄せた。

「この魔導で相互干渉なんて聞いたことないけど?」

「相互干渉を起こさない魔導の方が少ない」

ラウルは淡々と言う。

「でも、今までは考慮してなかったよ」

「微量だからだろう。大雑把に求めるのなら、おまえのでも間違いではない」

「なんかその言い方、喧嘩を売られているみたい」

サイファは頬杖を付き直し、口をとがらせた。

ラウルは横目で冷ややかに睨んだ。おまえの方がよっぽど喧嘩を売っている、と思ったが、あ えて口には出さなかった。鉛筆を置き、教本を閉じる。

「今日はここまでだ」

「もう終わり?」

サイファは頬杖を外し、目を大きくした。

「3時間はとうに過ぎている」

ラウルは無表情で片付け始めた。教本を重ね、筆記具とともに帯で束ねる。

サイファはその様子を寂しげに見つめながら言う。

「少ないよね、3時間じゃ。もう少し延ばせないの?」

「おまえとこれ以上長くはいたくない」

「父上に頼んでみるよ」

ラウルは顔を上げ、サイファを鋭く睨みつけた。

「おまえ、人の話を聞いているのか」

「わかってる。今日はここまでだね」

サイファは少しも動じることなく、両手を広げ、にっこりと大きく微笑んだ。

「でも、あとひとつだけ質問してもいいかな?」

「何だ」

苛立ちを含んだ声で、ラウルは先を促した。

「最初に会った日のあれ、ラウルを一歩でも動かしてみろってやつだけどさ。ずっと考えていたけど、いい手が思い浮かばないんだ。ラウルならどういう手を使うの?」

「床を抜く」

「え?」

「二階なら床を抜くことは容易い」

ラウルは前を向いたまま、無表情で答えた。

「人の家だと思って、むちゃくちゃ言うよね」

サイファは半ば呆れたように、苦笑しながら言った。

「あ、でも、部屋の周囲には結界が張ってあったよね。あの結界を破らない限り、床を抜けない んじゃない?」

「破ればいい」

ラウルは事もなげに言った。

「僕には無理だよ」

「私ならどうするかという問いに答えただけだ。おまえのことは知らん。自分で考えろ」 サイファは恨めしそうに、じとりとラウルを睨む。

「じゃあさ、僕の戦い方で、直すべきところを教えてよ」

ラウルは教本の上に手をのせたまま、サイファを一瞥した。そして、面倒くさそうに溜息をつくと、腕を組みながら椅子にもたれかかる。ギィ、と濁った音を立て、背もたれのバネが軋んだ

「掛け声は不要だ。相手に有利になることはあっても、自分に有利に働くことはない」 「それは、そうだね……」

サイファは控えめな声で同意した。図星を指されたせいか、そのときのことを思い出したせいか、僅かに耳元が紅潮している。恥ずかしいという認識はあったようだ。

「呪文の詠唱もない方がいい」

ラウルは腕を組んだまま、淡々と畳み掛けた。

「そうだよ! それ、どうやってるわけ?」

サイファはぱっと顔を上げ、興味津々に身を乗り出した。青い瞳を輝かせながら、じっと返事を待つ。

ラウルは煩わしげに顔をしかめ、投げやりな説明をする。

「その場で式を組み立て、計算し、魔導を構築する。原始的な方法だ。おまえも知っているのではないのか」

「それは、魔導の原理としては知っているけど……呪文より素早くなんて無理なんじゃないの?だいたい、原始的な方法じゃ時間がかかりすぎるからってことで、実用化するために呪文が発明されたんだよね?」

「多くの人間にとってはそうだ。だが、おまえくらいの頭と魔導力があれば、訓練次第で呪文詠唱なしの魔導も可能になるだろう。呪文より損失が少ない分、効率がいいし、融通も利く」

サイファは小さく息を吸ってラウルを見つめた。

「へぇ、面白そう」

独り言のように呟くと、大きく瞬きをして尋ねる。

「ラウルが稽古をつけてくれるんだよね?」

「……そのうちな」

ラウルは低い声で答えると、束ねた教本を無造作に掴み、椅子から立ち上がった。長い焦茶色 の髪が、広い背中で大きく揺れた。

ふたりは連れ立って部屋を出た。

そこから三部屋向こうが、先日、ラウルが壊した部屋である。何もかもが、ほとんどそのとき のまま放置されていた。瓦礫さえも片付けられていない。まだ修復作業には取り掛かっていない ようだ。

外壁の方は、壊した翌日には修復されていた。こちらの対応は素早かった。さすがに、家に大きな穴を開けたままで、何日も放置しておくわけにはいかなかったのだろう。

「サイファ」

鈴を転がしたような、それでいてあどけない声。

それは、ラウルたちが階段に差し掛かったときに聞こえてきた。階下からである。声の方に視線を向けると、淡い水色のワンピースを着た幼い少女が、愛らしい笑顔で待ち構えているのが見えた。

「レイチェル、来てたの?」

サイファはぱっと顔を輝かせると、金色の髪をなびかせながら、緩やかにカーブする階段を駆け下りた。迷うことなく、その小さな体を抱え上げる。いくらレイチェルが小さいとはいえ、サイファ自身もまだ子供である。それなりに重いに違いない。だが、はたから見た限りでは、まったくそうは感じられなかった。抱き上げ方が手慣れているせいかもしれない。

彼はレイチェルと目線を合わせると、にっこりと微笑みかけた。レイチェルも小さな手を伸ば すと、幸せそうな笑顔をサイファに寄せた。

ラウルはその様子を上からじっと眺めていた。

レイチェルがラグランジェ家の人間であることは確信していた。本家であるここにいても、驚くべきことではない。だが、ようやく断ち切れたと思った途端の邂逅である。そこまで冷静ではいられなかった。何とも言いようのない気持ちが湧き上がる。小さく息をついて視線を離すと、広い階段を降り始めた。

「あ、紹介するよ」

サイファはレイチェルを下ろしながらそう言うと、通り過ぎようとするラウルの手首を掴んで引き留めた。そのまま少し身を屈め、反対側の手で彼を示すと、レイチェルに優しく語りかける

「レイチェル、この人は僕の新しい家庭教師のラウルだよ」

今度は、体を起こしてラウルに向き直った。少女の頭に手をのせて言う。

「ラウル、この子は僕の婚約者のレイチェル」

「婚約者?」

ラウルは思わず聞き返した。

「そう、僕の未来のお嫁さんだよ」

サイファは屈託なく言った。

ラウルは睨むように彼を見下ろした。ラグランジェ本家の後継者は、子供のうちから婚約者を 決めねばならない——いつだったか、そのような話を聞いたことを思い出す。サイファはラグラ ンジェ本家の一人息子だ。つまり、そういうことなのだろう。

「ラウル」

甘い声が、彼の思考を中断した。

ラウルが振り向くと、レイチェルは花が咲いたようにふわりと可憐に微笑んだ。それは、いつ も窓越しに見ていた笑顔そのものだった。近くで見たのは初めてである。ますます懐かしい面影 と重なり、夢と現実が溶け合ったような不思議な感覚に囚われる。

「ラウル、手」

サイファは小声で囁きながら、彼の袖を引っ張った。

ラウルは我にかえった。いつの間にか、レイチェルがこちらに手を伸ばしていることに気が つく。握手を求めているのだろう。それに誘われるように、右手を差し出した。小さな彼女に届 くように、少し腰を屈める。焦茶色の長髪が肩から滑り落ちた。

レイチェルはにっこりとして踵を上げると、小さな柔らかい手を、大きな手にそっと触れ合わせた。

その瞬間——。

ラウルはハッと目を見開いた。戦慄にも似た何かが、体中を駆け抜けた。それが何であるか、 彼は理解していた。だが、にわかには信じられず、何かの間違いではないかと思う。彼女の小さ な手を包み込むように握り、澄んだ蒼の瞳を探るように見つめ、神経を研ぎ澄ませた。 一一間違いでは、ないな……確かに存在する……しかし、なぜこんな……。

ラウルは彼女を見つめたまま眉を寄せた。

「はじめまして」

レイチェルは言った。

「.....ああ」

ラウルは低い声で答えた。握っていた彼女の手を放し、体を起こす。

「ラウルに愛想がないのはいつものことだからね」

サイファは両手を腰に当て、苦笑しながら補足説明する。レイチェルに対しての配慮だろう。 ラウルを知らない人間には、その無愛想な態度がとても恐ろしいものに映るようだ。幼い子であれば、なおのことそうだろう。

だが、レイチェルは少しも怯えた様子を見せなかった。愛らしい微笑みを絶やすことなく、あどけない声で続ける。

「やっと、おはなしができた」

Γ......

ラウルは口を固く結び、眉をひそめた。

「あれ? 知ってるの?」

サイファはふたりを交互に見て、どちらにともなく尋ねた。

「王宮で見かけたの」

レイチェルが答えた。

「そうか、ラウルは大きいから目立つよね」

サイファは軽く笑いながら応じた。

レイチェルもそれを肯定するかのように微笑んだ。

だが、本当はそうではない。ラウルが彼女を見つめていたから、彼女はラウルの存在に気がついたのだ。なぜそのことを説明しないのだろう。面倒だったのだろうか。取るに足りないことだったのだろうか。それとも——ラウルは様々に考えを巡らせた。

「じゃあ、僕はラウルを送ってくるから、またあとでね」

サイファは腰を屈め、レイチェルの柔らかな頬を右手で包み込むと、額と額を軽く合わせた。 レイチェルは無垢な笑顔でこくりと頷いた。

ラウルとサイファは並んで王宮内を歩いた。

家庭教師が終わると、ラウルは医務室に帰る。そのとき、なぜかいつもサイファがついてくるのだ。送っているつもりらしい。ラウルが頼んだわけではない。むしろ来るなと言った。だが、サイファは素直に聞くような子供ではなかった。

「ねぇ、ラウルは気がついたよね」

サイファは青い空を見上げて切り出した。緩やかな風が、鮮やかな金の髪を吹き流し、きらきらと煌めかせる。

「何のことだ」

ラウルは無表情で聞き返した。

サイファは空を見たまま答える。

「レイチェルのこと」

「.....ああ」

ラウルは表情を険しくした。サイファは具体的には言わなかったが、それが何なのかすぐに察 しがついた。思い当たることはひとつしかない。

「僕はさ、最近ようやく気がついたんだ。ずっと一緒にいたのに情けないよね」 サイファはラウルに振り向き、少し寂しげに微笑んだ。

「気がついただけでも十分だろう」

「へぇ、ラウルが慰めてくれるなんて思わなかった」

「そんなつもりで言ったのではない」

ラウルは前を向いたまま素っ気なく言う。

サイファはくすりと笑った。頭の後ろで手を組み合わせ、再び空を見上げる。長めの前髪がさらりと揺れた。

「でも、不思議なんだよね。普通に魔導を使っているのを見ると、そんな力があるようにはとて も思えないんだ」

「あいつは力の大部分を奥底の深いところに閉じこめている。無意識だろうと思うがな」 ラウルは淡々と言った。意識的な封印ならば知っている。だが、無意識に自らの力を閉じこめ るようなものは、これまで見たことも聞いたこともなかった。

「僕もそれは感じていたよ」

サイファは空を見たまま、目を細めた。

「そこってさ、すごく深くて、静かで、誰も踏み入ったことのない深い森の湖みたいでさ。なんだか心地いいんだよね」

そう言うと、頭の後ろの手をほどいてラウルに振り向いた。

「ラウルにも似たようなものを感じるよ。ラウルの場合は、湖じゃなくて底なし沼かな?」 悪戯っぽく笑うサイファを、ラウルは横目で睨みつける。

「あいつを、どうするつもりだ」

「うん……ちゃんと訓練すれば稀代の使い手になるかもしれないけど、僕はそんなことは望んでいない。危険な目には遭わせたくないよ。レイチェル自身もあまり魔導には関心がないみたいだし」

サイファはまるで保護者のような口ぶりで答えた。まだ子供の彼がこのようなことを言うのは 奇妙に映るが、彼自身はいたって真剣だった。

「でも、制御の方法だけは身につけさせた方がいいよね」

「.....ああ」

ラウルは腕を組んで答えた。

強い魔導力を持つ者は、制御の方法を学ぶ必要がある。そうでなければ、暴発を起こす恐れが

あるからだ。通常であれば、制御はそれほど難しいものではない。だが、レイチェルの場合は、 魔導力が桁外れなのだ。そのうえ、力の大部分を封印しているも同然の状態である。本来の力に 見合った制御を学ばせることは、かなり困難になるだろう。

「レイチェルの両親には僕から忠告しておくよ」

サイファはにっこりと笑って言った。

ラウルは僅かに眉を寄せた。

今のところは、力が封じられているため、暴発する危険性はほとんどないと思われる。切羽 詰まった状況ではない。だが、いつまでもこのままとは限らないのだ。早めに制御を身につける 必要があるだろう。

重い荷物を背負って生まれてきたレイチェルに、重い宿命を背負って生まれてきた少女の面 影が、またひとつ重なった。

「ラウル、こっち。見せたいものがあるんだ」

サイファは急にそう言うと、ラウルの手首を引っ張った。医務室とは逆方向の小径へ向かおうとしている。ラウルが一度も行ったことのない場所だ。この先に何があるのかは知らないが、知りたいとも思わない。

「断る」

冷たく端的に拒絶する。

「そんなこと言わずにさ」

サイファは軽い調子で受け流すと、大きな手をしっかりと握り、強引に小径を歩き出す。

ラウルは小さく溜息をつくと、仕方なくサイファに従って歩き出した。その小さな背中に向かって、ぶっきらぼうに尋ねる。

「何があるのか言え」

「バラ園だよ、ほら」

蔦の絡みついた煉瓦造りのアーチをくぐると、視界一面にバラ園が広がった。広大というほどではないが、種類ごとに整然と整備されており、遠目に見ても美しいものだった。近くで見ても、細かなところまで手入れが行き届いているのがわかる。ほんのりと甘い香りが鼻をくすぐった

「僕が好きなのはこれ、ピンクローズ」

サイファはピンク色が咲き誇る一角に駆けていき、そのひとつに手を添えた。顔を近づけ、目を閉じる。

「華やかだけど、可憐で、可愛らしくて、まるでレイチェルみたいじゃない?」

そう言って、薄紅色の花びらにそっと口づける。

「レイチェルの話をしてたら、急にここに来たくなったんだ」

ピンクローズから手を放さないまま、顔だけラウルに振り向けると、小さく肩をすくめて見せる。子供らしい仕草ではないが、不思議と違和感はなかった。

「ねぇ、ラウルはどれが好き?」

「興味はない」

ラウルは即答した。あからさまに無関心な態度だった。

サイファは不満げに口をとがらせる。

「ラウルって何に興味があるわけ? いつもそんな.....たっ!」

突然、短い叫び声を発すると同時に、顔をしかめて手を引いた。その指先に、赤い血がじわりと丸く盛り上がっていく。バラの棘が刺さったのだろう。

「不用意に触れるからだ」

ラウルは冷たく言った。

サイファはムッとして彼を睨んだ。ふてぶてしく口を開く。

「治療してくれる?」

「そのくらい水で洗うだけでいい」

ラウルは突き放した。

「うわ、王宮医師とは思えない言葉だね。それって職務怠慢じゃない?」

サイファは意図的に大袈裟な言い方をすると、僅かに口もとを上げた。

だが、ラウルは眉ひとつ動かさずに言い返す。

「医師として治療不要と判断した」

「傷を見もしないで、よくそんなことが言えるね」

サイファの口調はますます挑戦的になった。血の流れる指先を立て、ラウルに突き出す。

「せめて傷を見てからにしてよ」

ラウルは冷淡な瞳で見下ろした。

サイファは攻撃的に睨み返した。

ふたりは無言で視線をぶつけ合う。

どちらも引かない。

膠着状態が続く。

――ズッ。

微かな衣擦れの音。

先に動いたのはラウルだった。

差し出された細い指を、大きな手でガシッと掴んだ。

そして、僅かに身を屈めると、徐にそれを口に含む。

「なっ.....」

サイファの体がビクリと震えた。

「何をしているわけ?」

顔を赤らめながら、少し怒ったように、とまどったように、呆れたように、だが努めて冷静に 尋ねた。

ラウルは血の混じった唾を吐き捨て、平然と言い放つ。

「治療だ」

「化膿したらどう責任をとってくれるの?」

サイファは負けじと詰問する。

「だから水で洗えと言った」

ラウルは鬱陶しそうに言う。

「消毒してくれる? 医務室できちんと」

サイファは強気に追いつめる。感情的な口調ではない。だからこそ、そこに貫禄めいたものが 感じられた。

「……来い」

ラウルは観念したかのように低い声を落とした。いや、観念したわけではない。面倒になったので譲歩した——少なくとも彼の方はそういうつもりだった。サイファには目も向けず、早足で 医務室に向かって歩き出す。眉間には縦皺が刻まれていた。

「やっとラウルの医務室に入れてもらえた」

丸椅子に座ったサイファは、にこにこしながら声を弾ませた。いつも医務室の前までは来ていたが、中に入ったことはなかった。ラウルに拒否されていたのだ。

「そのためにわざと怪我をしたのではないだろうな」

ラウルは消毒液を棚から取り出しながら尋ねる。

「まさか」

サイファは軽く一笑に付した。

ラウルは眉をひそめて睨んだ。笑ってはいるが、サイファならこのくらいのことはやりかねない。嘘も平気でつくだろう。だが、今さらそれを追及しても仕方がない。

無愛想なまま椅子に腰を下ろすと、笑顔のサイファと向かい合った。怪我をした方の手をとり、人差し指を消毒して絆創膏を貼る。ごく簡単な処置である。わざわざ医務室にまで来ずとも、本来なら自宅で可能なものだ。

処置が終わると、サイファはきょろきょろと物珍しそうにあたりを見まわした。

「ねぇ、あの扉は何?」

ほとんど壁と同化した扉を、目ざとく見つけて尋ねる。

「私の部屋だ」

ラウルは素っ気なく答えた。

「その向こうの部屋に住んでるってこと?」

「そうだ」

「中を見せてよ」

「断る」

「散らかっていても僕は気にしないよ」

サイファは明るく言った。

ラウルは軽く睨みつけた。

「そういう問題ではない。誰も招き入れないことにしている」

そう言いながら立ち上がり、消毒液を棚に片付ける。ガラスの扉をゆっくりと閉めた。

「見られたくないものでもあるの?」

「私的な空間に踏み込まれたくないだけだ」

「じゃあ、いつか招待してね」

サイファは人なつこい笑顔を浮かべた。

「おまえ、少しは人の話を聞け」

ラウルは疲れたように溜息をついた。サイファのあまりにも自分勝手な物言いに、怒りを通り 越して呆れていた。抑揚のない低い声で言う。

「治療は終わった。もう帰れ」

「ラウルのことが少しわかってきたよ」

サイファは上目遣いでラウルを見ると、形の良い唇に、意味ありげな笑みをのせる。

「けっこう動物的だよね。言葉じゃなくて行動でわからせようとするあたりさ。最初に自分の力を誇示して、相手を服従させようとするのもそうだよね」

ラウルは氷のような瞳で睨めつけた。

「たった10年しか生きていない奴に何がわかる」

「そういうラウルは、何年、生きているの?300年は超えているよね」

サイファはにっこり微笑んで言った。

ラウルはじっと彼を見下ろした。ゆっくりと息をつく。

「知っていたのか」

「父上が話しているのを聞いたんだ」

サイファは極めて軽い口調で言う。

「怖くはないのか」

ラウルは尋ねる。

「どうして?」

サイファは首を傾げた。そして、当然のように言う。

「人間じゃないから危険ってことはないよ」

「私は人間だ」

ラウルは間髪入れず訂正した。

「え、そうなの?」

サイファは目を丸くした。どうやら本気で人間外の生物だと思っていたらしい。少し興奮した 様子で、身を乗り出して尋ねる。

「どうしてそんなに長く生きられるの?」

「さあな」

「僕もラウルみたいに長く生きられるかな?」

「さあな」

ラウルは答えをはぐらかした。

サイファは口をとがらせた。だが、すぐに気を取り直して質問を続ける。

「じゃあ、ラウルはどこから来たの? それくらいは教えてくれる?」

ラウルはしばらく考えたのち、無言で窓の外を指さした。

サイファは視線でそれを辿る。

「空?」

「その向こう側だ」

「空の、向こう側?」

ぽつりと疑問形で呟きながら、椅子から立ち上がった。引き寄せられるように窓へと足を進める。窓枠に手をのせると、ガラス越しに空を見上げた。広く、深く、どこまでも青が続く。その向こう側にあるものは、ここからは見えない。

ラウルは腕を組み、うつむいた。焦茶色の長髪がはらりと落ち、表情を覆い隠す。

「もう帰れ。レイチェルが待っているのだろう」

「うん、ありがとう」

サイファは絆創膏を貼った指を立てて見せた。そして、右手を振りながら、軽い駆け足で医務室をあとにした。

医務室にいつもの静寂が戻った。

ラウルはガラス窓を開けた。風が渦を巻くようにして医務室に滑り込む。焦茶色の長髪がうねりながら舞い上がった。

――おかしな奴だ。

リカルドも恐れることなく入り込んでくるが、サイファはそれ以上だった。遠慮なく踏み入ってきて、強引に自分のペースに巻き込む。それは、単なる子供のわがままとは違う。押すべきところと、引くべきところを、上手く使い分けているのだ。自然にやっているようにも、何もかも計算づくのようにも感じる。

一緒にいて、これほど頭にくる奴もそうはいない。一方で、彼という人間と、彼の持つ才能 には、多大な興味を引かれていた。

家庭教師をすぐに断らなかったのも、おそらくその興味ゆえだろう。だが、今後も続けていくと決めていたわけではない。しばらく様子を見てから結論を出すつもりでいた。それが、リカルドとの当初の約束でもあった。

ラウルは窓枠に両手をつき、緑が茂る静かな裏道を見下ろした。

誰もいないそこを見据え、眉根を寄せる。

もう、自分の中で結論は出ているのだろうと思う。

それには、サイファへの評価ではなく、明らかに別の存在が影響していた。

レイチェルだ。

外見や表情が似ているだけならまだ良かった。断ち切ることは可能だっただろう。だが、彼女の持つ魔導力の危うさは、目を離せなくさせるのに十分だった。

今日の話しぶりからすると、彼女が本家に遊びに来ることも度々あるのだろう。無関係の自分には何もできないが、せめて見守ることくらいは――そんな使命感にも近い思いが湧き上がった

――運命までは、似なくていい。

ラウルはゆっくりと顔を上げた。

空を仰ぎ見て、目を細める。

白い翼を持った鳥が、青い空を滑るように横切っていった。

「もういいだろう。とうに時間は過ぎている」

「ダメだよ」

立ち上がろうとしたラウルの手首を、サイファは指の痕がつくくらいに強く掴んで引き留めた 。半ば怒ったような真剣な顔で、ラウルの瞳をじっと見つめる。

サイファーヴァルデーラグランジェは18歳になっていた。

子供の頃から人目を引く容姿をしていたが、成長するにつれ、ますますそれに磨きがかかっていった。すっと通った鼻筋に、甘く涼やかな目もと、形の良い薄い唇、そして、聡明さを映し出したかのような、理知的な輝きを放つ青い瞳——いずれのパーツも、全体のバランスも、文句のつけようもないくらいに端整だった。特に、真剣な表情を見せるときなどは、一分の隙もないほどだ。だが、普段の彼には、まだ少年らしい雰囲気が多分に残っている。そのあたりの落差も、人目を引く一因なのだろう。

身長もかなり伸びていた。といっても、並外れて長身のラウルには遠く及ばない。成年男子の 平均くらいである。サイファ自身はそれで不満には思っていないようだった。ラウルを抜かせな いのが悔しいと言ったことはあったが、その軽い口調からいっても、あくまで冗談であり、本気 ではなかったのだろう。

そして、頭脳の方も成長し、さらに切れ味を増していた。

家庭教師を始めて最初の3年くらいは、辛うじて教えるという体裁をとっていたが、その後は対等に議論する形へと自然に変わっていった。一方的に教えることなど、少なくともラウルが受け持っている分野においては、何もなくなってしまったのだ。乾いたスポンジのように知識を吸収し、それを新たな発想で組み立てていく。ラウルが考えもしなかった思考の飛躍を見せる。そんなサイファとの時間は、ラウルにとっても刺激の多いものだった。

今日が、家庭教師としての最後の日である。

辞めさせられるわけでも、辞めるわけでもない。サイファの就職が決まったためである。明日から、この国の中央行政機関のひとつである魔導省に勤めるのだ。本来であれば、高倍率の試験と適性検査、面接などにより選抜されるのだが、サイファは例外的に無試験で入省が決定したらしい。ラグランジェ家の力を持ってすれば、このくらいの特別措置は極めて容易に実現できるのだろう。

だが、サイファの場合は、優遇されることなく競い合ったとしても、不採用になるとは考えられなかった。魔導、頭脳、いずれの面においても、彼に勝る者がいるとは思えない。問題があるとすれば性格だけだ。

サイファは、ラウルの手首を掴んだまま、じっと濃色の瞳を見据えて言う。 「ラウルにとってはたった8年だろうけど、僕にとっては人生の半分近くなんだ」 「それがどうした」 「名残を惜しむ僕に、少しくらい付き合えってことさ」

ラウルは煩わしげに溜息をついた。

「私は教師として雇われている。それ以外の理由で引き留められる道理はない」

正当な言い分を論理的に説明し、冷淡に突き放す。

だが、サイファはそれを聞いて何かを画策したらしく、思わせぶりに口の端を上げた。

「では、ラウル先生にひとつ質問だ」

人差し指を立て、緩やかに瞬きをすると、やや上目遣いにラウルを見つめた。形のよい唇が滑らかに開く。

「明日からの僕のために、社会人として留意すべきことを助言してほしい」

ラウルは眉をひそめた。サイファは時折、わざと「先生」と呼ぶ。ラウルが嫌がるのを知った上でのことだ。そうやって、揶揄したり、挑発したりするのだ。今回も、真面目な口調ではあるが、質問の内容からしても、からかっているとしか思えなかった。

「私にそれを訊こうというのか」

「社会性がないのは知っているが、物事を見通す目は持っているからな」

サイファはにっこりとして言う。

ラウルは勢いよく腕を引き、サイファの手を振りほどいた。彼をじっと睨み下ろす。

「おまえは能力のない人間を馬鹿にする傾向がある。そんなことでは軋轢を生み、孤立すること になるだろう」

「わかっているよ」

サイファはさらりと答えた。体を斜めに傾け、机に寄りかかるように頬杖をつく。

「能力がなくても権力を握っている人間は多いからね。人当たりよく近づいて、適当にご機嫌を とりつつ利用させてもらうつもりさ」

悪びれることもなく、至極当然のように言う。

ラウルは眉根を寄せた。

「そこまでは言っていない」

「でも、たいして違わないだろう?」

サイファは頬杖をついたまま、僅かに首を傾げて同意を求める。

「おまえには無理だ。感情をすぐ表に出すような奴にはな」

ラウルは冷たく言い放つ。

「ああ、それはラウルの前だけだよ」

サイファは軽くそう言うと、頬杖を外して体を起こした。

ラウルは怪訝に眉をひそめる。

「なぜだ」

「さあね。自分で考えたら? 何でも知ってるラウル先生」

サイファは上目遣いで視線を送り、僅かに口もとを上げた。

ラウルはムッとして言い返す。

「おまえは本当のことを言っていない」

「さあ、どうかな」

サイファは膝の上でゆっくりと手を組み合わせた。

「僕はね、自分をコントロールできる人間だよ。感情とは裏腹の態度を装うことだって可能なんだ。ラグランジェ本家の人間であれば、子供といえども、そういうことを求められる場面は 多い。昔から鍛えられているんだよ」

落ち着いた口調だった。表情も急に大人びたものに変わった。鮮やかな青の瞳が、真正面から ラウルを捉えている。

「まあ、持って生まれた資質もあるんだろうけどね。父上よりは世渡りが上手い自信はあるよ」 小さく肩をすくめ、悪戯っぽさを覗かせながら付言する。

ラウルにはサイファの本心が掴めなかった。表情をくるくると変え、意味ありげな言葉を重ね つつ、核心だけはかわして相手を翻弄する。サイファのよく使う手だ。いったい何のためにこん なことをするのかわからない。だが、そんなことは今さらどうでもよかった。

「質問には答えた。もう帰ってもいいだろう」

「まだだよ」

サイファは再び手首を掴んで引き留めた。先ほどよりも力が込められていた。

「いい加減にしろ」

ラウルは語調を強めて言った。

それでもサイファは引き下がらなかった。手を緩めようとしない。それどころか、はしゃいだ様子で話し掛けてくる。

「そうだ、ラウルに何かお礼をするよ」

「礼など不要だ。報酬はもらっている」

ラウルは冷ややかに言う。

「そうじゃなくて、8年間の僕の感謝の気持ち」

サイファは自分の胸もとに左手を当てて微笑む。

「おまえの感謝など受ける気はない」

「何か欲しいものはあるか?」

身勝手に話を進めるサイファを、ラウルは思いきり睨んだ。眉間に深い縦皺が刻まれる。

「少しは人の話を聞け」

「聞いているよ」

サイファはにっこりと屈託なく笑った。

ラウルは口を固く結び、再び力任せにサイファの手を振りほどいた。捲れた袖を下ろしながら 、疲れたように溜息をつく。

「おまえは、なぜいつも無駄なことばかりに労力を使う」

「無駄なことほど楽しいんだよ。ラウルにはそういう潤いが足りないね」

サイファは澄ました口調で言った。

ふいに扉が叩かれた。会話中ならば聞き逃してしまいそうな小さな音だ。

「はい、開いているよ?」

サイファはそちらに目をやりながら、不思議そうに返事をした。

カチャリと音がして、遠慮がちに扉が開く。そこから、レイチェルがそろりと斜めに顔を覗かせた。後頭部に留めてある淡い水色の大きなリボンが、動きに合わせて微かに揺れる。

「ごめんなさい、まだお勉強中だったのね。遅いから心配になって来てみたの」 サイファは満面の笑みを浮かべる。

「心配かけてごめんね。今日で家庭教師が終わりだから、ラウルと名残を惜しんでいたんだ」 「私は惜しんでなどいない」

ラウルは横からつっけんどんに否定する。

レイチェルはくすっと小さく笑った。

「じゃあ、下で待っているわね」

「いいよ、おいで」

サイファは自分の膝を軽く叩いて呼んだ。

レイチェルは部屋に入って扉を閉めると、軽い足どりでサイファのもとへ向かった。そして、 示された場所、すなわち彼の膝の上に、素直に躊躇いなく腰掛けた。今日が初めてというわけで はないのだろう。随分、慣れているように見えた。

ふたりは近い距離で見つめ合い、互いににっこりと微笑んだ。

「考えてみれば、レイチェルとだって、今までみたいに頻繁には会えなくなるね」 サイファは寂しげに言うと、小柄な体を包み込むように抱きしめた。

レイチェル=エアリ=ラグランジェは12歳になっていた。

誰の期待も裏切ることなく、彼女は愛らしいままに美しく成長しつつあった。白く透きとおった肌、大きな引力を秘めた蒼の瞳、形のよい小さな薄紅色の唇、柔らかく輝く金の髪——一目するだけではっと息を呑むほどだった。まるでお人形のようだ、と王宮内でも評判になっていた。彼女の強大な魔導力は、いまだ顕在化していない。

8年間、サイファのところへ遊びに来る彼女をそっと見守ってきたが、危険な兆候は見られなかった。変化自体がまったくないのだ。それが良いことなのか悪いことなのか、現時点では判断はつかない。

制御の方は上手くいっていないようだ。やはり、かなり困難であるらしい。前例がないため、 その教育も手探りである。そのうえ、最近はレイチェルが魔導に関することを嫌がっていると いう。実際、魔導関係の教育は、今現在すべて停止していると聞いた。

もし、このままずっと魔導力の大部分が封じられた状態ならば、確かに制御を学ぶ必要はないだろう。だが、その保証はどこにもない。それにもかかわらず、レイチェルの両親やサイファは、随分と楽観しているように見受けられた。

しかしラウルも、楽観まではしていないが、危機感は薄れつつあった。頭では気をつけなければならないと思っていても、何事も起こらない日々が続けば、無意識のうちに油断が生じてし

まう。人間とはそういうやっかいな生き物だ。

「そうだ」

サイファは何かを思いついたようにそう言うと、レイチェルを抱き上げて椅子から立った。いわゆるお姫様だっこの状態だ。重そうにはしていない。ゆっくりと身を屈めると、彼女をラウルの膝に横向きに下ろして座らせる。

「何だ」

ラウルはサイファに振り向いて睨んだ。

「レイチェルを見ていてくれ。着替えてくる」

サイファはそそくさと部屋の隅へ向かった。大きめのクローゼットから、ハンガーに掛かった 濃青色の服を取り出し、ベッドの上にさっと投げ置いた。そして、本当に服を脱いで着替え始 めた。

ラウルは溜息をつき、前に向き直った。

レイチェルは片手でラウルの服を無造作に掴み、宙に浮いた足を前後に揺らしながら、幼い子供のようなあどけない表情で、虚空に視線をさまよわせていた。サイファの着替えている方には目を向けていない。たとえ振り返ったとしても、その位置からではラウルの体に遮られてしまい、不自然に身を乗り出さない限りは見られないだろう。サイファはそこまで計算して彼女をここに置いたのだろうか、とラウルはじっと考える。

自分に向けられた視線に気がついたのか、レイチェルは瞬きをして振り向いた。柔らかい金の髪がさらりと揺れ、頭のリボンが跳ねるように弾む。そして、大きな瞳をラウルに向けると、ふわりと花が咲くように可憐な微笑みを浮かべた。その無防備で愛らしい笑顔は、これまで幾度となく目にしてきたが、この至近距離で見たのは初めてだった。

ラウルは眉根を寄せた。

ほとんど無意識に手が動いた。

薄い色の前髪をゆっくりと払う。

無垢で穢れのない蒼の双眸。

その奥を探るように見つめる。

何を探っているのだろう。

何を求めているのだろう。

何を――。

ラウルは僅かに顔をしかめた。いくら面影が重なったとしても、別の存在であることは最初から理解していた。それでも、あの笑顔を見せられると、論理的な思考が一瞬で砕け散ってしまう。どうしても何かを期待してしまうのだ。

レイチェルはきょとんとしていた。小さく首を傾げ、不思議そうにラウルを見つめる。

「すまなかった」

ラウルは彼女の額から手を引いた。

しかし、強い引力に捉えられたかのように、彼女の瞳から目を逸らすことは出来なかった。

「ちょっとお二人さん、なに見つめ合っているのさ」

サイファは軽く咎めるようにそう言うと、腰に両手を当てて覗き込んだ。もう着替え終わったようだ。先ほどクローゼットから出していた濃青色の上下を身につけている。詰襟のホックまできっちりと締められていた。

ラウルは彼を一瞥すると、無表情のまま口を開く。

「おまえが見てろと言った」

「うわ、ラウルも冗談を言うんだ」

サイファは大袈裟に驚いて見せると、愉快そうに軽く声を立てて笑った。

「サイファ、それって魔導省の制服でしょう?」

レイチェルがにっこりと微笑んで問いかけた。彼女は昔からよく王宮に遊びに来ている。魔導 省の制服も見慣れているに違いない。

「そう、レイチェルに見せたくてね。どうかな?」

サイファは両腕を広げて見せた。微かに真新しい服の匂いがした。

「ええ、とても似合っているわ」

レイチェルは彼を見上げて言う。

「本当?良かった、レイチェルにそう言ってもらえて」

サイファは嬉しそうに顔を綻ばせた。

「ラウルは? どうこれ? 感想を聞かせてよ」

調子に乗ってラウルにも尋ねる。答えを急かすように、体を屈めて覗き込んだ。

だが、ラウルは目も向けずに素っ気なく言う。

「レイチェルに見せたくて着替えたのだろう」

「おまえ、拗ねているのか?」

サイファは真顔で尋ねた。

ラウルは無言のまま、氷のような眼差しで睨めつけた。

「冗談だよ」

サイファはあっけらかんと言った。ラウルの視線など、まるで意に介していないようだった。 たいていの人間は軽く睨むだけでも震え上がるのだが、サイファはどれほどきつく睨みつけても 、いつも平然としているのだ。

「似合ってるか?」

懲りもせず、再びにっこりとして尋ねる。

ラウルは眉根を寄せた。じっと彼を見つめ、低い声で静かに答える。

「.....ああ」

「えっ、うそ、本当? もう一度はっきり言ってよ」

サイファは目を大きく見開き、少しうろたえながらも嬉しそうに聞き返す。

「断る」

ラウルは今度はきっぱりと拒否した。

それでもサイファは上機嫌だった。

「ラウルに似合ってるって言ってもらえるなんて思ってもみなかったな」 ラウルは溜息をついた。

「これをどうにかしろ。いつまで乗せておくつもりだ」

膝の上に座るレイチェルを指さして言う。

「乗せていると帰れないだろう?」

サイファは片目を細め、悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「.....」

突然、ラウルはレイチェルを抱え、勢いよく立ち上がった。そのまま、大きな足どりで扉の方へ向かう。

「ちょっと、レイチェルをどうするつもり?」

サイファはラウルの後ろ髪を掴んで引き留め、焦ったように言う。

ラウルは僅かに振り返り、視線を流してひと睨みする。

「おまえがつまらないことをするからだ」

「悪かったよ」

サイファはむくれながらも素直に詫びた。掴んだ髪を放す。長い焦茶色が大きな背中で揺れた

ラウルは前に向き直ると、レイチェルを足からそっと下ろして立たせた。ワンピースの後ろのリボンをまっすぐに直し、彼女の顔にかかった髪を軽く払う。そして、彼女にだけ届くくらいの声で「すまなかった」と言い、屈めた体を起こした。

レイチェルは不思議そうにラウルを見上げ、瞬きをした。

「私は帰る」

ラウルはぶっきらぼうに声を張ると、振り返りもせずに部屋を出た。

「僕らも行こう」

サイファはレイチェルの手を引いてラウルのあとを追った。

階段を降りたところで、ラウルは足を止めて振り返った。サイファに冷たい視線を投げて尋ねる。

「おまえ、その格好で外を歩くのか」

サイファは魔導省の制服を着たままだった。明日から勤務することになっているが、今日はま だ魔導省の人間ではない。家の中ならともかく、外を歩くのは問題があるだろうと思った。

だが、サイファはそう思っていないようだった。平然とした顔でしれっと答える。

「心配ないよ。何か言われたとしても謝ればすむ話だ」

確かにそうだ。ラグランジェ本家の人間であるサイファなら、このくらいで問題になることもないのだろう。彼は、自分の立場というものを、嫌味なほど正確に把握しているのだ。ラウルはもう何も言わなかった。

外は、風が冷たかった。

すでに空の半分近くが紺色に塗り替えられている。沈みゆく太陽は、最後の役目を果たすかのように、地平付近を朱く鮮やかに染め上げていた。

ラウルは医務室に戻るため、いつもの道を進んでいく。

そのすぐ後ろを、サイファとレイチェルがついて歩いた。何度となく顔を見合わせながら、楽しそうに言葉を交わしている。主にサイファが話しかけ、レイチェルは相槌を打つといった感じだ。会話は途切れることなく続いていた。

この状況に、ラウルは何か腑に落ちないものを感じていた。

家庭教師が終わると、サイファは医務室に戻るラウルについてくる。それは、8年前から変わらず続いている日常だった。だが、いつもはサイファひとりだけである。レイチェルと一緒に来たことは一度もなかったのだ。それが、よりによって最終日の今日という日に、今までなかったことが起こっている。たまたま居合わせたから一緒に来た、それだけなのだろうか。それとも――

「ラウル」

「何だ」

サイファの不意の呼びかけに、ラウルは足を止めて振り返った。焦茶色の長髪がさらりと風に 揺れる。

「今日はここでお別れだ。医務室まで送れなくて悪いな」

サイファはにこやかに言った。声も少し浮かれているようだ。悪いと思っている雰囲気ではない。

「そうか」

ラウルは無表情でふたりを見下ろし、感情のない声で応じた。

サイファは何か意味ありげに、何か言いたげに、じっと彼を見つめる。

「理由はきかないのか」

「私には関係のないことだ」

ラウルはきっぱりと言い切った。

「そう……じゃあな」

サイファは軽く右手を上げた。レイチェルは挨拶代わりに軽い微笑みを見せた。ふたりは互い に手を取り合い、医務室とは逆方面の道を歩いていく。その後ろにはふたつの長い影が伸びて いた。

あれほどしつこく引き留めていたのが嘘のように、サイファはあっさりと去っていった。やはり最後の日は婚約者とともに過ごしたい、そう心変わりしたのだろう。おそらく、彼女を連れてきたのもそのためだ。これから彼女とともにどこかへ出かけるに違いない。

ようやく合点がいった。

最後の最後まで自分勝手な奴だ、とラウルは嘆息した。

「こんにちは」

サイファは明るい声で挨拶をすると、レイチェルの手を引きながら、慣れた様子でリビングルームに入っていった。そこはレイチェルの家だったが、普段からほとんど自分の家のように当たり前に出入りしていた。

「いらっしゃい、サイファ」

白い革張りのソファに座っていたアリスは、優しい笑顔で迎えた。まだ十分に若く美しいが、 昔と比べて落ち着きは増していた。母親らしくなった、といえるかもしれない。

「お父さま、お母さま、ただいま」

レイチェルは澄んだ綺麗な声で挨拶をした。

「おいで、レイチェル」

アリスの隣に座っていたアルフォンスは、両手を広げてレイチェルを呼んだ。

レイチェルは小走りで駆けていくと、彼の膝に横から飛び乗るように座り、目を閉じて広い胸にもたれかかった。満たされたような表情を見せる。

「お父さまに甘えるの、久しぶりだわ」

「最近は忙しかったからな」

アルフォンスは優しく目を細めながら、大きな手で柔らかな頬を包み込む。

アリスも、サイファも、その光景を微笑ましく眺めていた。

「まあ、君も座れ」

立ったままのサイファに気がつくと、アルフォンスは右手で向かい側を示した。

サイファは促されるまま白いソファに腰を下ろす。ギュッと革の擦れる音がした。

サイファとアルフォンスは、年齢はだいぶ離れているが、互いのことを認め合い、尊重し合うような関係だった。サイファはアルフォンスの仕事上の手腕に一目置いていたし、アルフォンスはサイファの頭脳と魔導の資質を正確に評価していた。

「今日は休暇ですか?」

「ああ、あしたからまた忙しくなるよ」

アルフォンスはゆったりとした口調で答える。

「いよいよ所長就任ですね。おめでとうございます」

サイファは笑顔で祝福した。

アルフォンスは、娘の肩を抱いたまま、背もたれに体重を預けた。複雑な表情で、軽く溜息を つく。

「もう少し早く就けると思っていたんだがな。前任者がしつこく居座ったせいで、随分と時間が 掛かってしまったよ」

アルフォンスは勤めている研究所の所長に就任することになっていた。明日からである。奇しくもサイファの就職と同じ日だった。

「サイファ、それ、魔導省の制服でしょう?」

アリスが身を乗り出して、興味津々に尋ねる。

サイファは両腕を広げた。

「そう、アリスとアルフォンスに見せに来たんだ。どうかな?」

「よく似合うわ。すっかり立派に見えるわね」

アリスは胸もとで両手を組み合わせ、嬉しそうに言う。

「リカルドよりサマになっているな」

アルフォンスは全体を眺めながら、満足げに言った。

リカルドは数年前に、研究所から魔導省へ異動になっていた。ラグランジェ家の本家当主が研究所勤めでは格好がつかない、という前当主の判断に基づくものだった。リカルド自身は研究所の方が良かったようだが、前当主である彼の父親には逆らえなかったらしい。おかげで、随分と苦労しているようだ。制服もいまだに馴染んでいるようには見えない。

「しかし、おまえが就職とはな。月日が流れるのは早いものだ」

「もう、アルフォンスってば年寄りくさいことを言わないで」

アリスは苦笑しながら窘めた。

「実際にもういい年なんだ。仕方ないだろう」

アルフォンスは肩をすくめた。少し寂しげな、どこか諦めたような笑みを浮かべている。まだ20代のアリスと違い、彼はもうすぐ50に手が届こうかという年齢だ。

「いい年だなんて言っている場合ではないですよ」

サイファはにっこり微笑んで言った。明瞭な口調で続ける。

「これから所長として研究所を牽引していかなければならないわけですし、老け込むにはまだ早 すぎます」

「ああ、そうだな。まったくそのとおりだ」

アルフォンスは気を取り直して、表情をを引き締めた。力強く頷く。

「そうだ、これから家族だけでパーティをやるんだが、おまえも一緒にどうだ」

「何のパーティですか?」

サイファは不思議そうに尋ねた。

「アルフォンスの所長就任祝いよ。二度目だけどね」

アリスが横から答えた。指を二本立てて肩をすくめている。

一度目は、一週間ほど前に開催されたものだ。サイファも家族ぐるみで招待されて出席した。 研究所の同僚や、親しい友人などを呼び、大規模ではないがそれなりに華やかなパーティだった

今度は、落ち着いて自分たち家族だけでもう一度、ということなのだろう。サイファは家族ではなかったが、すでに家族も同然の間柄である。今さら遠慮する理由はない。だが——。

「すみません、今日はちょっと……そろそろ行かなければならないので」

「あら、何か用事でもあるの?」

アリスは瞬きをして尋ねる。

「ええ、はい」

サイファは膝の上で軽く両手を組み合わせた。

「どうしても外せない、とても大切な用事なんです」

ゆったりとした口調でそう言うと、穏やかに柔らかく微笑んだ。

医務室に戻ったラウルは、不必要なまでに明るい蛍光灯の下で、古めかしい本を読んでいた。 今日も患者はひとりも来ていない。それでも律儀に待機していた。それが仕事である。

「やあ、ラウル」

何の前触れもなく扉が開き、サイファが愛敬を振りまきながら入ってきた。いまだに魔導省の 制服を着たままである。

「さっきは悪かったな。寂しかったか?」

「ノックくらいしろ。何をしに来た」

ラウルは視線だけを流し、眉をひそめて睨みつけた。まさか来るとは思っていなかったので驚いたが、声にも表情にもそれは出さなかった。

「感謝の気持ちを届けにね」

サイファはにっこり微笑んでそう言うと、右手に持った一輪のピンクローズを差し出した。まだ咲き始めで開ききっていない状態のものだ。透明フィルムと白いリボンでラッピングされている。

ラウルは読んでいた分厚い本を閉じた。

「不要だといったはずだ」

「ラウルの好きな花がわからなかったから、僕の好きな花にしたんだ」

サイファは無邪気に声を弾ませた。

「花瓶はあるか?」

「そんなものはない」

「だと思ったよ」

サイファは口もとに笑みを浮かべ、もう片方の手に持った細長い箱を差し出した。こちらにも 白いリボンが掛けられている。

「開けて」

「自分で開ければいいだろう」

「開けてほしいんだよ」

ラウルは面倒くさそうにそれを受け取ると、無造作にリボンをほどき、包装紙を乱雑に破いて箱を開けた。中に入っていたのはガラス製の一輪挿しだった。細身で飾り気がなくシンプルだが、安っぽくは見えない。

「気に入ったか?」

「不要だと言った」

ラウルの答えは、相変わらず愛想の欠片もないものだった。

だが、否定はしなかった。

サイファはにっこりと微笑んだ。その一輪挿しを箱から取り出すと、洗面台で水を入れてピンクローズを挿した。それを、ラウルの机の上に置き、腰に両手を当てて満足げに言う。

「少しは机の上が潤っただろう?」

「面倒が増えた」

ラウルは少しも表情を動かさずに言い返す。

サイファは小さく笑った。

「時間を作って水を替えに来るよ」

「水替えよりおまえの方が面倒だ」

「来るなと言われても来るよ」

「もう帰れ」

ラウルの声には苛立ちが滲んでいた。

「わかったよ」

サイファは肩をすくめ、諦めたような笑みを漏らした。

「最後にひとつだけ願いを聞いてくれないか」

「何だ」

ラウルは顔を上げた。

サイファは急に真剣な表情になった。怜悧な光を放つ青い瞳が、まっすぐに濃色の瞳を捉える

「ラウルの部屋を見せてほしい」

「断る」

ラウルは即座に拒否し、溜息をつきながら腕を組んだ。このやりとりは今回が初めてではなかった。これまでにもサイファが幾度となく望み、ラウルはそのたびに断っていたのだ。いい加減、うんざりしているくらいである。

サイファはぱっと人なつこい笑顔を見せた。軽い口調で畳み掛ける。

「ほんの少しだけでいいからさ」

「断る」

「どうしても?」

「ああ」

「卒業祝いってことで頼むよ」

「駄目だ」

ラウルの答えは少しも揺らがなかった。

サイファは腰に手をあて、寂しげに目を細めた。曖昧な笑みを浮かべる。

「最後まで、心を開いてくれなかったな」

「明日も来るつもりなのだろう」

ラウルは感情を見せずに言った。

サイファは大きく瞬きをした。それからふっと表情を緩めると、視線を落として言う。

「そうだった、最後というわけではないな」

「今日はもう帰れ」

ラウルは腕を組んだまま素っ気なく命じる。

「ああ、そうするよ。じゃあな……また、あした」

サイファは軽く右手を上げ、名残惜しそうにしながらも、素直に医務室を出た。引き戸がゆっ

くりと閉められる。磨りガラスの向こうの人影は、すぐに見えなくなった。一定のリズムを刻む 靴音も、次第に小さくなり、やがて聞こえなくなった。

医務室は静けさを取り戻した。耳に届くのは木々の微かなざわめきだけだ。

――愚かな奴だ。

ラウルは机に向き直り、眉根を寄せて頬杖をついた。

読みかけの本を片手で開き、ゆっくりパラパラと捲っていく。

ふいに、ほのかな甘い匂いが鼻を掠めた。

本を捲る手が止まった。

一輪挿しのピンクローズに視線を向ける。

触れると壊してしまいそうな、淡く優しい色の花びら。

そこから小さな水滴が滑り落ちる。

机の上で音もなく弾けて散った。

ラウルは手にしていた本を閉じ、その古めかしい表紙に手を置いた。

「歓迎会、ですか?」

サイファは顔を上げて尋ね返した。ロッカーの扉を静かに閉める。

「そ、ウチの班でな。おまえさんが入って二週間になるだろう。ちぃと遅くなっちまったが、こ こいらでガツンと親睦を深めようじゃないか」

マックスは握った両手を腰に当てて陽気に言った。ニッと白い歯を見せる。体格のいい彼が狭い更衣室で肘を張っていると、通路はほとんど塞がれてしまう。まるで通せんぼをされているかのようだ。

サイファはロッカーの鍵を掛けながら尋ねる。

「何をするんですか?」

「平たく言えば、飲みに行くってことさ」

「どこへですか?」

「それは行ってからのお楽しみってヤツだ」

マックスの声は、微かに笑いを含んでいた。

「......わかりました、いいですよ」

サイファは少し考えてから返事をした。マックスの答えが曖昧なのが気にかかったが、彼が悪い人間ではないことは、この二週間で十分に理解している。自分を陥れようという意図はないものと判断した。

「よし! 決まりだ!」

マックスは太い腕をサイファの肩にまわし、大きな声を立てて笑った。

サイファが魔導省で勤務するようになって三週間が過ぎていた。

最初の一週間は、他の新人とともに、魔導省で行われている様々な仕事を見学してまわった。 その後、マックスを班長とする公安局一番隊第二班に配属されたのだ。魔導不正使用の捜査・逮捕が主な仕事である。

サイファは幹部候補生として採用された。つまり、上級官僚になるべき人材だ。だが、最初の一年は、内局ではなく公安局の実務部隊に配属されることになっている。それは、サイファだけではなく、幹部候補生全員に義務づけられていることなのだ。現場を知るための実習のようなものなのだろう。

地平の向こう側に陽が落ち、あたりは次第に闇に飲み込まれていく。長く伸びた影も、その闇 に融けるように輪郭が曖昧になっていった。

「どこへ行くんですか」

サイファは感情を隠して尋ねた。

班長のマックス、班員のエリック、ティムとともに、歓迎会を行う場所へと向かっているのだが、進めば進むほど寂れていく街並みに、次第に不安が湧き上がってきた。このようなとこ

ろに、まともな店があるとはとても思えない。

「もう少し先だな。そう心配するなって」

マックスは白い歯を見せた。

サイファは横目を流して口を開く。

「あらかじめ言っておきますけど、いかがわしい店なら帰りますよ」

「いかがわしい店?それってどんな店だ?」

「女性がお酒を作ってくれるような店です」

マックスは面食らったようにきょとんとした。だが、次の瞬間、弾けるように豪快に笑い出 した。後ろを歩くエリックとティムも、つられて笑い出す。

「どうして笑うんですか」

サイファはマックスを軽く睨んだ。

「いやぁ、可愛いなぁ、おぼっちゃんは」

「おぼっちゃんはやめていただけますか」

そう言ってもマックスはまだ笑い続けていた。ひとしきり笑うと、サイファの肩に腕をまわし 、ニッと口の端を上げて顔を寄せる。

「その定義で言うならな、実はちょっといかがわしいってことになる」

「……僕、帰ります」

サイファは低い声で言った。

「まあまあ、店を見てからでも遅くないだろう」

マックスはサイファの頭をガシガシと乱暴に撫でまわす。鮮やかな金髪がぐしゃぐしゃになった。

「いかがわしい店だったら本当に帰りますよ」

サイファはマックスの手をゆっくりとどけた。頭を軽く左右に振る。乱れた髪はすぐに元に戻った。

一行はさらに狭い路地裏へ入っていった。すでにあたりに人気はない。気味が悪いくらいに静 かだ。サイファは周囲を見まわし、無意識に警戒心を強める。

「この下だ」

マックスが地下へと続く細い階段を指差した。その先には飾り気のないドアがひとつだけある 。とても店には見えない。物置といった方が説得力がある。

「看板、出ていませんよ」

「一見さんお断りの店だからな、あえて出してないんだ」

一応、筋の通った話ではあるが、そこまで隠すのはやはり妙だ、とサイファは思う。

「何というお店ですか?」

「え?」

「お店の名前です」

「何だったかな……おまえら知ってるか?」

マックスは後ろのふたりに振り返って尋ねる。

「さあ、記憶にはありませんね」

「気にしたこともなかったな」

ふたりの答えは素っ気ないものだった。

「俺たちは隠れ家って呼んでるがな」

マックスはサイファに振り返り、陽気に声を弾ませる。

サイファは眉根を寄せた。その呼び方を聞いて、不審に思う気持ちがますます大きくなった。

マックスが先頭をきって階段を降りていく。そのあとにサイファ、エリック、ティムと続く。 階段が狭いため一列にならざるを得ない。体格のいいマックスとティムは、それでも窮屈そうで ある。擦れ違うだけの余裕はない。

「ちーっす」

挨拶だか何だかわからない言葉を発しながら、マックスはドアノブをまわして扉を開いた。サイファの上腕を掴み、強引に中に連れ込む。

「いらっしゃい」

狭く薄暗い店内には、数人が座れるくらいの小さなカウンターと、ふたつの小さなテーブル席があった。カウンターには、長い黒髪の妖艶な美人が座っていた。頬杖をつき、物憂げにこちらを見つめている。この店の女主人なのだろう。客はひとりもいないようだ。

「帰ります」

サイファは踵を返そうとしたが、マックスは腕を掴んだまま放さない。

「まあ待て」

ニヤリと笑いながら引き留める。

サイファは眉を寄せて反論する。

「見るからにいかがわしいじゃないですか」

「いかがわしいって私のことかしら?」

女主人が気怠そうな声で尋ねる。サイファが振り向くと、彼女は朱い唇に微かな笑みをのせた

「いえ……申しわけありません」

サイファは彼女を窺いつつ頭を下げた。店の主人を前にして失礼だった、と素直に反省する。 「入口で騒いでないで、とりあえず中に入りなさい。取って食いはしないわ」

「ま、観念するんだな」

マックスは笑いながら、サイファの背中をバシッと叩いた。エリックとティムも、後ろで軽く笑っていた。

「いらっしゃい、マックス!」

サイファたちがテーブル席につこうとしたとき、奥から少女が飛び出してきた。長い銀色の髪をなびかせながら、笑顔でマックスのもとに駆け寄る。女主人とは対照的に、明るく溌剌とした

子だ。

「おう、久しぶりだな!」

マックスは大きな手で彼女の頭をクシャクシャと撫でた。その様子は、まるで叔父と姪のように微笑ましく見えた。だが、実際の関係はわからない。「いらっしゃい」と発言していたところからすると、彼女はこの店の関係者に違いない。明らかに未成年だが、ここに雇われているのだろうか――サイファは怪訝な眼差しを彼女に送る。

その視線に気がついたのか、少女は瞬きをして振り向いた。濃い蒼色の瞳が、サイファを興味深げに捉える。

「ねえ、この人は?」

「そうだ、先に紹介しておこう」

マックスはサイファの首に腕をまわして引き寄せた。頭に拳骨をグリグリと押し当てる。

「こいつはウチの新人のサイファ。カウンターにいるのは女主人のフェイ。で、このお嬢ちゃんが、フェイの娘のアルティナちゃん」

娘か.....。

サイファは少し安堵した。

「よろしくね!」

アルティナはまっすぐ腕を伸ばし、右手を差し出した。

サイファはふっと口もとを緩める。

「よろしくお願いします」

穏やかな声でそう言うと、彼女と握手を交わした。

この店に対するいかがわしいという評価は、このとき、サイファの中からほとんど消え去った。 。ふと、女主人のフェイの方に目を向けたが、彼女はもうカウンターにはいなかった。

マックスはサイファの肩を抱いたまま、ニコニコして話を続ける。

「こいつ、実はラグランジェ本家の跡取りなんだ」

「ラグランジェ?」

アルティナは首を傾げた。

「知らないの? 魔導の名門一族だよ」

既に座っているエリックが、横から補足する。

「お金持ちってこと?」

「すっごいぞ、半端ねぇぞ、とんでもねぇぞ」

マックスは力を込めて畳み掛ける。どれも抽象的な言葉だ。ラグランジェ家のことをそれほど 詳しく知っているわけではないのだろう。

「へぇ……じゃあ、私、玉の輿ねらっちゃおうかなっ」

アルティナは両手を組み合わせ、はしゃいだ声で言う。

「残念ながら、そりゃあ無理なんだな」

マックスは白い歯を見せる。

「どうして?」

アルティナは口をとがらせて尋ねる。

「こいつには既に婚約者がいるんだよ、な?」

「ええ」

サイファは微笑みながら頷いた。

「それがもうめちゃくちゃ可愛い子なんだぞ!」

今まで大人しかったティムが、急に興奮したように割り込んできた。なぜか両手を挙げている。 。椅子が倒れそうになり、慌てて座り直した。

エリックはくすくす笑うと、サイファに視線を送って尋ねる。

「確か、アルティナちゃんと同じくらいの年じゃなかった?」

「12歳です」

「やだ、本当に同じ年」

アルティナは上半身を引いて一歩後ずさった。眉をひそめて怪訝にサイファを見つめる。

「.....ロリコン?」

「違いますよ。彼女が生まれたときに、親どうしが決めたんです」

「うそっ、まだそんな前時代的なことやってるの?!」

昔は親同士が決めた婚姻というのもわりとあったらしいが、今はほとんどが本人同士の意思で 決めている。このようなことを伝統的に行っているのはラグランジェ家くらいだろう。王家でも 、今はもう少し自由だ。

「自分で結婚する人も決められないなんて不幸ね……」

アルティナは顔を曇らせ、同情するように呟いた。

サイファは目を細め、くすりと笑う。

「そうでもないですよ」

「そりゃそうだろう! あんな可愛い子で文句を言ったらバチが当たるぞ! 呪われるぞ! てか、俺が呪ってやる!!」

ティムは右手をぐっと握りしめ、鼻息荒く力説する。

「へぇ、そんなに可愛いんだ」

「まあ、ティムがそう言いたくなる気持ちもわかるかな。アルティナちゃんは美人系だけど、あの子は可愛い系だね。お人形さんみたいだよ」

エリックはにこやかに言った。

「人形……?」

アルティナは、隅に放置して埃をかぶっている操り人形に目を向けた。

「違う、違う。そうじゃないって!」

ティムは立てた手を大きく左右に振り、むきになって否定する。

「可愛らしい少女人形だよ。ひらひらの服を着たやつ。色白で目がぱっちり、ほっぺはピンク色でぷくっとしててさ。とにかくものすごく可愛いんだぞ!」

「知らないからわかんない」

アルティナはティムの熱弁を冷たく流した。サイファに振り向き尋ねる。

「ねぇ、写真は持ってないの?」

「持ってないですよ」

「えー、本当? お財布とかに入れてるんじゃないの?」

「写真なんかに頼らなくても、目を閉じれば姿が思い浮かべられますから」 サイファはすまして言う。

だが、マックスはニヤニヤして、太い腕で首を絞めつつ覗き込んできた。

「本当は持ってたくせに、なに格好つけてんだよ」

「ちょっと、苦しいですって」

サイファは顔をしかめて訴えた。

マックスは笑いながら腕を外すと、アルティナに向き直って言う。

「この前、写真を取り上げられてみんなに回されてから、持ってこなくなっちまったんだよ。ク ールに見えて意外と照れ屋なんだコイツ」

「違いますよ。彼女に好奇の目を向けられるのが耐えられなかっただけです」

それは嘘ではなかった。レイチェルの写真を見てにやついたり、あれこれ好き勝手なことを言う連中が許せなかった。そのときは何とか耐えたが、今度そんなことがあったら、抑えが利かなくなりそうだと思ったのだ。

「いつまで喋ってるの? アルティナ」

いつのまにかフェイが近くまで来ていた。光沢のある黒のロングドレスを身に纏い、ビールの入ったジョッキと簡単なつまみを載せた丸盆を両手で持っている。

「奥へ行って手伝ってちょうだい」

「はーい」

アルティナは軽い調子で返事をすると、軽い足どりでカウンターの奥へ駆けていった。

フェイは盆の上のものを、優雅な所作で、手際よく狭いテーブルに移した。

「ごゆっくり」

目を細めてゆったりと言うと、空になった盆を脇に抱え、颯爽と踵を返して戻っていく。艶や かな黒髪が、背中で緩やかに揺れた。

「えー、それでは.....」

マックスはジョッキを持って立ち上がった。サイファ、エリック、ティムは、座ったままでジョッキを手にしている。

「サイファ、一年という短い期間だが仲良くやろうや。俺たちは、おまえを心から歓迎する」 「こちらこそ、よろしくお願いします」

サイファはにこやかに微笑んで応える。

「それじゃ、乾杯っ!」

マックスは勢いよく高々とジョッキを掲げた。泡が波を打ち、こぼれ落ちる。

「乾杯!」

残りの三人は、マックスよりも上品にジョッキを持ち上げた。

こうして、ささやかな宴が始まった。

「今日は俺の奢りだ。じゃんじゃん飲め!」

マックスは豪快に笑いながら、サイファの肩に腕をまわした。マックスのジョッキは既に空になっている。先ほど大声でフェイに追加を頼んでいた。

「それほど強くないので、あまり勧めないでください」

その言葉を裏付けるかのように、サイファのジョッキの中身は、まだほとんど減っていない。

「なんだ、何でもできるスーパーおぼっちゃんにも不得手なものはあったのか」

マックスは妙に嬉しそうだった。まるで子供のような笑顔を見せている。

「おぼっちゃんはやめてください」

「だけど、おぼっちゃんには違いねぇだろ。親にぶたれたこともないんだろう?」

「ありませんよ。家庭教師には何度か殺されかけましたけどね」

サイファは涼やかな表情でさらりと言った。嘘ではないが、少しばかり誇張していた。死ぬかと思ったことはあったが、死にかけたことはない。

「殺され……って……」

ティムは真に受けたらしく、言葉をなくし唖然とした。

エリックはハッとしてジョッキを置いた。

「そうか、君の家庭教師ってラウルだったよな?」

「そうですよ」

サイファは素っ気なく答える。

「ラウルって?」

ティムは誰にともなく尋ねる。

「王宮医師のデカいヤツだよ。睨んだだけで人を殺せるって噂の。聞いたことないのか?」 マックスはよくわからない身振り手振りを交えながら言う。

「さあ……」

ティムは奇妙な表情で首を傾げた。

サイファもそんな噂は聞いたことがなかった。睨んだだけで人を殺せるなど、まるで神話の世界だ。とんでもない噂が一人歩きしているな、と可笑しくなった。下を向いてこっそりと笑う。

「まあ、人を殺せるってのは大袈裟だろうけどな。そのくらいの迫力はあるぞ。一度、腕の怪我 を治療してもらったことがあるんだが、ビビリすぎて腕の痛みを忘れちまったくらいだ」

「班長、ビビリすぎですよ......」

屈強なマックスの情けない話を聞き、ティムは苦笑いした。

「おまえはラウルを知らないから、そんなことが言えるんだ」

マックスは眉根を寄せて腕を組む。

「しかし、あとで冷静になって思い返してみれば、医師としては結構まともだった気がするな。 言うことはきついが間違ってないし、治療も的確だったよ」 「自分も診てもらったことがありますけど、そんなに恐ろしくはなかったですよ。確かに無愛想でとっつきにくいですし、積極的に行こうとは思いませんけど」

エリックも同調する。

「サイファ、教え子のおまえから見たらどうなんだ?」 マックスは、黙って聞いていたサイファに話を振った。 サイファは満面の笑みで答える。

「内緒です」

「何だ、気になるなオイ!」

マックスは机に片手を置き、身を乗り出した。

「もしかして、意外な一面とか知ってるんじゃないのか?」

「話の種になるような面白いことはなかったですよ」

「もったいつけんな! ケチくせぇぞ!」

エリックはふたりのやりとりを聞いて微笑んだ。

「ラウルのこと、嫌いではないんだね」

「好きですよ」

サイファはさらりと答えた。

「はぁ?」

マックスは口をあんぐりと開けた。太い眉を寄せ、訝しげに尋ねる。

「殺されかけたのにか?」

「ええ」

サイファは軽く言う。

マックスは腕を組んだ。何とも言えない微妙な表情で首を傾げる。

「おまえ、ちょっとズレた奴だと思っていたが、ちょっとどころじゃなく、かなりズレて るな……」

「そうですか?」

サイファはとぼけたようにそう言うと、涼しい顔でナッツを口に運んだ。

それから二時間ほどが過ぎた。

その間、他の客は二人しか来ていない。それぞれふらりとやってきて、カウンターで静かにフェイと話しながら軽く飲み、帰っていった。二人とも魔導省の制服を身に着けていた。今は他の客はひとりもいない。

サイファたちのテーブルは、最初から変わらず賑やかなままだった。陽気なマックスが、途切れることなく場を盛り上げるのだ。これも一種の才能といえる。主にたわいもない雑談だったが、だからこそ何も考えずに笑えるのだろう。

「サイファ、ちょっとこっちに来ない?」

カウンターからアルティナが呼んだ。両手で頬杖をつき、ニコニコとしている。

「アルティナちゃんからのご指名だぞ! 行ってこいや!」

マックスは野太い声を響かせると、残り少ないビールのグラスをサイファに押しつけ、大きな 手で肩をバンと叩いた。

サイファは椅子から落ちそうになり、よろけながら立ち上がる。ビールは辛うじてこぼれなかった。マックスを一瞥すると、小さく息をつき、カウンターに向かって歩き出した。

「こんにちは、アルティナちゃん」

サイファはにっこり微笑んで、彼女の前の席に座った。グラスをカウンターに置く。

アルティナはムッとして口をとがらせた。

「ちゃん付けはやめてくれる?」

「他の人はそう呼んでいたけど?」

サイファは顔を斜めにして頬杖をついた。

「サイファとはそんなに年が違わないじゃない。バカにされてるみたいに感じるわ」

「じゃあ、アルティナさん」

「アルティナさん? アルティナさんか……それ、いいかも」

「気に入ったんですか?」

「ちょっとくすぐったいけど、でも、うん、それでお願いね!」

アルティナは上機嫌で声を弾ませた。

「わかりました」

サイファは笑顔で応じた。だが、内心では少し驚く。まさかこれを気に入るとは思わなかった。本当はからかうつもりで言ったのだ。しかし、彼女が望むのであれば、そう呼ぶことに異存はない。今は少し奇妙に感じるが、そのうちに慣れるだろう。

「お酒、何か作ってあげよっか。ウィスキーでいい?」

「そうですね、ロックでお願いします」

「了解!」

アルティナは手際よくウィスキーのロックを作る。随分と手慣れているようだ。いつもこうやって店を手伝っているのだろう。

「はい、どうぞ」

作りたてのウィスキーをサイファに差し出し、古い方のグラスを引っ込める。

「じゃんじゃん飲んでね!」

「じゃんじゃんは無理です。僕はそんなに強くないんですよ」

「えーっ、せっかくの金づるだと思ったのに」

アルティナのあまりに率直な物言いに、サイファはくすっと吹き出した。

「お金、どうしたいんですか?」

「この店、だいぶ古びてるでしょう? 修復したいところが結構あるの」

「お母さん思いなんですね……お父さんは?」

サイファはウィスキーに口をつける。

「いないわ」

アルティナはすぐに答えた。屈託のない笑顔で続ける。

「私、お父さん知らないの。お母さんはいわゆる未婚の母ってやつ」

「そうですか」

サイファは表情を変えずに相槌だけを打った。カウンターの隅にいるフェイにちらりと目を向ける。彼女は無表情でジョッキにビールを注いでいた。話が聞こえていないということは、おそらくないだろう。

「ねぇ、この店、気に入った?」

アルティナは両腕をついて身を乗り出した。目をくりっとさせて、サイファに顔を近づける。 艶のある銀色の髪が、肩からさらりと落ちた。

「ええ」

サイファは微笑んで答える。

「じゃあ、また来てくれる?」

「ときどきはね」

「毎日来るって言ってくれないの?」

アルティナは首を傾げながらサイファを覗き込み、不満げに口をとがらせた。

「そんなに暇じゃないですよ」

サイファは落ち着いた口調で返した。ウィスキーグラスに手を掛ける。

「一日おきなら来てくれる?」

「それも無理です」

「三日に一回は?」

「夜勤もあるんですよ」

「じゃあ、せめて一週間に一回!」

アルティナは片目を瞑り、指を一本立てた。

サイファは急にくすくすと笑い出した。口もとに左手を添える。

「え? なに.....?」

アルティナは困惑して顔を曇らせた。

サイファは息をついて笑いを止めると、視線を上げて言う。

「いえ、すみません。元気だなと思って」

「あ、バカにしてるわね?!」

アルティナは腰に両手を当て、眉を吊り上げた。

「そうじゃないです。こういう子がレイチェルの友達になってくれたら、って考えてたんですよ -

「レイチェル? 誰?」

「僕の婚約者」

サイファは頬杖をつき、口もとを緩めた。目を細めて彼女を見る。

「アルティナさんとなら、気が合いそうな気がする」

「いいところのお嬢さまなんでしょう? どうかなぁ.....」

「正反対の方が、かえって上手くいくことが多いですよ」

「どうせ、私はお嬢さまとは正反対ですよーだ」

アルティナは拗ねたようにそう言うと、つんと顔をそむけて頬を膨らせた。しかし、ふと寂し げな表情を覗かせると、サイファに視線を流してぽつりと尋ねる。

「お嬢さま、もしかして友達いないの?」

「まわりに同じ年頃の子がいないんだ。学校にも行ってないしね」

サイファはカウンターに肘をつき、顔の前で両手を組み合わせる。

「今までは僕がずっと一緒に遊んできたけど、就職してからは、今までのようにはいかなくてね

。寂しい思いをしているんじゃないかな」

「大切に思ってるんだ、婚約者のこと」

アルティナは優しい声で言った。

「大切ですよ、誰よりもね」

「あれ?でも、親どうしが決めた婚約じゃなかったっけ?」

「僕はとても運がいい、ってことになるかな」

サイファは柔らかい表情で言った。

アルティナはにこりとした。立てた人差し指を口もとに当て、斜め上に視線を流す。

「こういうときは『ごちそうさま』って言えばいいのかな?」

「え? どうしてですか?」

サイファは大きく瞬きをして、不思議そうに尋ね返した。

「おう、飲んでるかー?」

赤ら顔のマックスが、ジョッキを片手にやってきた。足どりはしっかりとしている。それほど 酔いはまわっていないようだ。ジョッキをカウンターの上に置き、サイファの隣にどっしりと 座る。細身の椅子がギシリと軋んだ。

「飲んでますよ」

サイファはウィスキーグラスを軽く爪で弾いて答える。だが、顔色も口調も、まったく普段の ままだった。

「おまえ、まだ全然しらふだろう」

「あしたも仕事があるじゃないですか」

「あしたになれば抜けるさ」

マックスは半分くらい残っていたビールを一気に呷った。そして、空になったジョッキを掲げて言う。

「アルティナちゃん、おかわりね」

「はーい」

アルティナは愛想良く返事をして、空のジョッキを受け取った。

「実はな.....」

アルティナが二人から離れると、マックスは急に真面目な声で切り出した。カウンターに両腕 を置いて寄りかかり、思い出したように小さく笑う。

「おまえの配属がウチに決まって、最初に書類を見せられたとき、とんでもねぇ嫌なヤツだなって思ったんだ」

「そんな気はしてました」

サイファは僅かに微笑んだ。

「ラグランジェの、それも本家の一人息子なんていうだろう? 写真を見たら、案の定、苦労なん ざまったく知らないような綺麗な顔をしてやがる。おまけに、試験もなしに入ってきたってい うじゃねぇか。なんだそりゃって思ったよ |

「そう思って当然ですよね」

顔のことはともかく、無試験の特別措置で入省したことについては、反発があるだろうと予想はしていた。サイファ自身でさえ不穏当だと感じるくらいである。だが、前当主である祖父が進めたことであり、逆らうことはできなかった。ラグランジェ家の力を誇示し、威厳を強めたかったのだろう。

「今までも何度か幹部候補生を預かってきたが、おまえさんみたいな大物は初めてだったし、ど うしたものかと頭を抱えていたわけさ」

「班長でも悩むことがあるんですね」

「おまえ、バカにしてるな? こう見えて、俺の心はガラス細工のように繊細なんだぞ」 マックスは眉をひそめ、自分の厚い胸板に、節くれ立った右手を当てて主張する。

「そうですか」

サイファは笑顔で軽く受け流した。

マックスはカウンターに肘をつき、小さく息を吐いた。顔を大きく上げて、僅かに目を細める

「だがな、実際のところは想像とえらく違ってて驚いたよ。確かに育ちの良さそうなおぼっちゃんだが、仕事に関しては新人とは思えないくらい使えるじゃねぇか、って。初めてのときでも驚くくらい落ち着いてたしな。ビビって腰が引けるか、興奮してまわりが見えなくなるか、緊張してガチガチになるか、ってあたりが普通なんだが」

「多少は緊張していましたよ」

「多少緊張しているくらいがちょうどいいんだよ」

マックスはウィスキーグラスに手を伸ばした。サイファの手もとに置いてある、サイファが飲んでいたものだ。それを左右に振って揺らすと、一口だけ流し込んだ。

「それに素直だ」

「えっ?」

サイファは話の繋がりが理解できずに聞き返す。

マックスは、グラスをサイファの手に戻して言う。

「指示通りに動いてくれる」

「班長の指示が的確なので従っているだけです。間違っていると思えば反論します」

「ああ、もちろんそれは構わない。問題なのは、正しいとわかっていても従わない奴だ。幹部候補生にはときどきいるんだよ」

「そんなことをしても何のメリットもないですね」 サイファは淡々と言う。

「プライドが邪魔をするんだよ。現場の人間なんかに指示されたくないって思ってるのさ」

「それはプライドとはいいません。単なる思い上がりです」

マックスはニヤリと笑い、サイファに目を向けた。

「俺はおまえをけっこう気に入っている。ちょっと変わった奴だがな」

「僕もこの班のことをけっこう気に入ってますよ」

サイファも、にっこりと笑って言葉を返した。

マックスはふっと息を漏らす。

「おまえが上に行っても、俺たち現場のことを忘れないでいてくれたら有り難いんだがな」

「努力します」

サイファは笑顔のままで軽く言う。

「ま、そこまでは期待しないさ」

マックスは背筋を伸ばしながら、頭の後ろで手を組み、胸を張って大きく呼吸をした。

「はい、おまちどうさま」

アルティナが元気よく姿を現すと、マックスの前にジョッキを置いた。ビールがなみなみと注がれている。ビールを持ってくるだけにしては時間が掛かりすぎた。サイファたちの会話に割り込めなかったのかもしれない。

「おう、ありがとな」

マックスは待ってましたとばかりにジョッキを手に取り、半分ほどを一気に飲んだ。これで何杯目かはわからないが、最初からずっとこの勢いで、ほとんど途切れることなく飲み続けている。相当な量になることは間違いない。それでも意識ははっきりしているようだ。

「強いんですね」

「まあ、そこそこな」

マックスはサイファの肩に腕をのせ、ニッと白い歯を見せた。少し体重を掛けて寄りかかる。

「しかし、おまえ間近で見ても綺麗な顔してるなぁ」

「唐突に何ですか」

サイファは僅かに眉をひそめた。少し顔をそむける。

「女でも十分に通用するぞ。潜入捜査に使えるかもな」

マックスは値踏みするように横顔をまじまじと見つめ、独り言のように呟く。

「使えませんよ。無理に決まってるでしょう」

サイファは即座に却下した。少し呆れたような声音が混じった。

「可能性を闇雲に否定するのは良くないな。やってみなきゃあ、わからん」

「そんなに顔を近づけられると酒くさいんですけど」

マックスの腕はずっとサイファの肩にのったままだった。かなり重い。顔も近い位置にある。

「つれないこと言うなよ。せっかく親睦を深めようとしてるのに」

「普通に会話するだけでいいじゃないですか」

「何をいう、スキンシップも大切だぞ?」

「班長は普段からスキンシップ過多だと思いますけどね」

そのとき、不意に生温い感触が頬に当たった。

「.....えっ?!」

サイファはぎょっとして仰け反るように身を引いた。その勢いで椅子からずり落ち、バランス を崩して足がもつれ、背中から床に倒れ込んだ。視線の先には天井の梁があった。

それを見て、アルティナは腹を抱えてケラケラ笑った。

「大丈夫?」

テーブル席の方にいたエリックも、笑いを噛み殺している。隣のティムは下を向いて大きな背中を揺らしている。やはり笑っているに違いない。

サイファは手の甲で頬を拭いながら立ち上がり、あからさまに不機嫌な表情を見せた。背中も軽く払う。自分では汚れているのかわからなかったが、脱いでまで確かめる気にはなれなかった

「いやぁ、可愛い反応だなぁ。驚いたか?」

マックスは嬉しそうに尋ねる。

「驚きましたよ」

サイファは静かな口調で、しかし腹立たしげに言う。

マックスはニッと口の端を吊り上げた。

「素直に認めるのはいいことだ。そうでなくちゃ、成長しない」

「ええ、もう二度と同じ手は通用しませんよ」

サイファは先ほどまで自分が座っていた席の隣、つまりマックスからひとつ離れて座った。カウンターの上で両手を組み合わせる。

おまえは想定外の事柄に対する即応力が不足している——ラウルから繰り返し注意されていた ことである。それにもかかわらず、よりによって、こんなつまらないことで露呈させてしまう など、言いようもないくらいに悔しい。

「あれはただの冗談だから、気にしない方がいいよ」

エリックは苦笑しながら、気遣わしげにフォローした。

「反応を楽しんでるだけなんだ。酔うとときどきやるみたいだね。僕も何度かされたことあるし _「

「本気だったら怖いですよ」

サイファはぼそりと言い返す。冗談であることくらい言われずともわかっていた。だからこそ 、まんまとそれに嵌ってしまった自分を情けなく思うのだ。

「いや、本気だぞ。本気の愛情表現だ!」

マックスはまるでサイファの神経を逆撫でするかのようにそう言い、愉快そうにワハハと笑った。

「班長、俺はされたことないですよ?」

ティムは自分を指差し、寂しげに尋ねる。

「俺より体格のいい奴は守備範囲外なんだよ」

「そんなぁ.....」

「あなたたちの方が、僕よりよっぽど変わってますよ」

サイファは肘をついて額を押さえ、大きく溜息をついた。金の髪がさらりと頬にかかる。みっともないところを晒しすぎた——そんな自己嫌悪が湧き上がる。だが、それと同時に、なぜだか 笑いも込み上げてきた。

「サイファ!」

静かな路地裏に響く高い声。

帰ろうと外に出たサイファたちを追いかけ、アルティナが階段を一段とばしで駆け上がって きた。癖のない銀色の髪が、月の光を浴びて神秘的な輝きを放つ。

「本当にまた来てね」

彼女は後ろで手を組み、にっこりと笑いかけて言う。

「そのうちね」

サイファも笑顔を返す。

「おいおい、サイファだけかよ。俺たちには言ってくれないのかよ」 ティムが呆れたように抗議する。

「だってサイファが一番の金づるなんだもの。大切にしなくちゃ」

アルティナは人差し指を立て、悪戯っぽく小首を傾げる。

マックスは彼女の頭に、大きな手をぽんとのせた。片目を瞑って言う。

「俺がまた連れてくるぜ。無理やり引っ張ってでもな」

アルティナはパッと顔を輝かせた。

「本当?! じゃあ約束ね、マックス!」

「おう!任せとけ!」

マックスは笑いながら答えた。

「じゃあな」

アルティナの頭から手を離し、大きく手を上げると、月明かりがほのかに照らす道を進んでいく。サイファたちも彼女に手を振り、マックスのあとについて歩いた。

アルティナは、彼らの姿が見えなくなるまで、大きく両手を振って見送った。

「どうだった? いかがわしい店は」

サイファと並んで歩きながら、マックスは濃紺の空を見上げて尋ねる。

「店は悪くなかったですね。ただ、客の一部がいかがわしかったようですけど」

サイファは無表情で淡々と答える。

「お? それは俺のことか?」

マックスはニヤリとして嬉しそうに言うと、サイファの肩に腕をまわそうとした。だが、それは豪快に空振った。サイファが屈んでかわし、素早く後ろに逃げたのだ。涼しい顔でエリックの隣に立っている。

「おまえ、反応が過敏になってるぞ」

マックスは眉根を寄せて振り返り、低い声で言った。

サイファはくすりと笑った。

「でも、楽しかったですよ。いろいろと新鮮な経験でした」

「それ本心か? どうもおまえは考えてることが読みにくいんだよなぁ」

マックスは腕を組み、眉をひそめて大きく首を捻った。

サイファはとびきりの笑みを浮かべた。形の良い唇から言葉が紡がれる。

「信じる、信じないはご自由に」

闇夜の空には無数の星が散りばめられていた。ひとつひとつ、異なる大きさと異なる色で煌めく。地上にもたらされた微かな光は、静寂の街をほんのりと柔らかく彩った。

「家庭教師だと?」

「そう、レイチェルのな」

アルフォンスは真面目な顔で頷いた。大きな体にはいささか頼りない小さな丸椅子に腰掛け、 正面のラウルをまっすぐに見据えている。

「サイファの家庭教師を終えたばかりで申し訳ないが、引き受けてはもらえないだろうか」 ラウルは眉根を寄せ、横の机に肘をついた。

「魔導の制御を学ばせるということか」

「それも目的のひとつだ」

アルフォンスは目を逸らすことなく冷静に答える。

「ただ、今は魔導を嫌がっている状態でな。無理強いはしたくない。いずれ説得をして学ばせる つもりだが、とりあえずは、あの子を見守りつつ、普通に勉強を教えてやってほしい」

「おまえに説得などできるのか。娘には甘いのだろう」

ラウルは冷ややかに言う。アルフォンスが娘を溺愛していることは知っていた。サイファはよくその話をしていたし、ラウル自身もそういう光景を目撃したことがある。魔導の教育を止めているのも、娘の我が侭を聞き入れてのことだろう。そもそも「無理強いをしたくない」ということが、甘いとしか言いようがない。

アルフォンスは眉間に皺を寄せ、表情を険しくした。

「確かに難しいとは思うが、やらねばなるまい。それがあの子のためだからな。そのときは君に も手伝ってもらうかもしれない。もちろん、家庭教師を引き受けてくれたらの話だが」

「.....いいだろう」

ラウルは表情を動かさず、低い声で言った。

断ることなど初めから考えていなかった。レイチェルを見守ることは、彼自身の望みでもあったのだ。ただ、微かな不安が胸にわだかまった。彼女の傍で心を乱さずにいられるだろうか、と——。

外で木々がざわめいた。クリーム色のカーテンがふわりと丸みを作り、大きく波を打つ。そこから滑り込んだ新鮮な風が、消毒液の匂いを攫い、焦茶色の長髪を舞い上げた。

数日後、ラウルはレイチェルの家へやってきた。

非常識に大きなラグランジェ本家と比べると格段に小さいが、その家も豪邸と呼んで差し支えないくらいのものだった。新しくはないが、単に古びているという印象ではなく、価値のある年代物といった風格がある。

玄関で呼び鈴を鳴らし、しばらく待つと、重厚な扉がゆっくりと開いた。

「待っていたよ、来てくれてありがとう」

アルフォンスは穏やかな笑顔を浮かべ、歓迎の意を表した。平日だが休暇を取ったと聞いている。律儀な男だ、とラウルは思う。

「紹介しておこう、妻のアリスだ」

「初めまして、アリス=ローズマリー=ラグランジェです」

アルフォンスの背後に控えていた彼女は、一歩前に出ると、ドレスの裾を持ち上げ、軽く膝を曲げた。長い金色の髪がさらりと揺れる。まだ若く可愛らしい印象ではあるが、レイチェルとはそれほど似ていない。そのことに、ラウルは無意識に安堵する。

「ウチは壊さないでもらえるとありがたいんだけど」

アリスは上目遣いで悪戯っぽく言った。サイファの家庭教師のときに、ラグランジェ本家の屋敷を壊したことを知っているのだろう。本気で頼んでいるのか、からかっているだけなのか、彼女の本心はわからない。

「今のところ壊すような予定はない」

「ずっとそんな予定は立てないでね」

愛想のないラウルに臆することなく、アリスは明るく答えてくすくすと笑った。

アルフォンスは二人の間に入り、両の手のひらを上に向けて提案する。

「どうだろう、家庭教師を始める前に、我々だけで少しお茶でも」

「気遣いは不要だ」

ラウルはぶっきらぼうに言った。

「では、レイチェルのところへ案内しよう」

アルフォンスは落ち着いた声で、すぐに話を切り替えた。右手で幅の広い階段を示すと、そこを静かに上がってラウルを先導した。

コンコン----。

アルフォンスは二階の突き当たりにある白い扉をノックした。

「レイチェル、新しい先生が来たよ」

「はい」

中から可憐な声が聞こえた。しばらくして、カチャリと扉が開き、レイチェルが姿を現した。 薄水色のドレスを身につけている。アルフォンスの後ろに立っているラウルを見上げると、驚い たように大きく目を見開いた。新しい家庭教師が誰であるかは、聞かされていなかったらしい。

「サイファのところで何度も会っているな? 王宮医師のラウルだ」

「私の家庭教師?」

「そうだよ。おまえ以外にはいないだろう」

アルフォンスは優しく笑いながら言った。娘の頭に大きな手をのせる。

「言うことを聞いて、よく勉強しなさい。あまり困らせるんじゃないぞ」

「はい、お父さま」

レイチェルはよく通る澄んだ声で答えた。

アルフォンスは嬉しそうに顔を綻ばせる。彼のこのような表情は、娘の前でしか見られないだろう。ラウルに振り返ると、急に神妙な顔になる。

「では、よろしく頼む」

「わかった」

ラウルは短く返事をした。

「どうぞ」

レイチェルはにっこりと微笑むと、扉を大きく開き、ラウルを中へ招き入れた。

彼女の部屋は広かった。だが、豪華という印象はあまりなく、拍子抜けするくらい簡素ですっきりとしていた。置いてあるものに無駄がないのである。人形やぬいぐるみといったものは見当たらず、家具類のほとんどは飾り気のないものだった。カーテンも、勉強机も、本棚も、さすがに質は良さそうだが、形状的にはごく普通のものである。普通でないものは、天蓋のついたベッドくらいだった。これだけはとても華やかで人目を惹いていた。だが、浮いているというわけではない。むしろ、この広い部屋には、ほどよく釣り合っているように感じられた。

「まずはこれをやれ。おまえの力を知っておきたい」

ラウルは紙の束を取り出し、レイチェルの前の机に置いた。それはテスト問題だった。分量はかなり多い。彼女がこれまで勉強してきた内容をアルフォンスから聞いて、ラウルが作ったものである。これで今の実力を量ることが出来るだろう。けっこう頭がいい、とアルフォンスは言っていたが、親バカの言うことでは当てにならない。

レイチェルは「はい」と答え、素直に机に向かって解き始めた。ときどき考え込みながら、紙 に鉛筆を走らせていく。静寂の中で、筆記の軽い音だけが淡々と響いた。

ラウルは彼女の斜め後ろの椅子に座り、腕を組んでその様子を見つめた。身じろぎもせず、ずっと目を逸らすことなく視線を送る。そうする必要はない。他のことをして時間を潰せばいいのだ。実際、サイファのときはそうしていた。だが、今は、彼女に重なる面影が、自分の目を惹いて離さなかった。

レイチェルは不意に手を止めた。ゆっくりと振り向き、不思議そうにラウルを窺う。

「どうした」

ラウルが尋ねると、彼女は曖昧に目を伏せ、首を横に振った。金の髪がさらさらと揺れ、後頭部のリボンも小さく揺れる。何か言いたげな表情を抑え込むと、無言のまま、再び机に向かって手を動かし始めた。

彼女は自分に向けられた視線が気になったのだろう。じっと見つめられては無理もないことだ。そして、その相手を訝しく思う気持ちもあったのかもしれない。

ラウルは椅子から立ち上がった。彼女に背を向けて窓際に向かう。レースのカーテンをさっと開け、窓枠に寄りかかりながら腕を組むと、ガラス越しに空を見上げた。流れゆく雲を眺めながら、小さく溜息をつく。こうでもしないと彼女から目を離すことが出来なかった。

「終わったわ」

レイチェルはそう言って鉛筆を置いた。窓際のラウルに駆け寄り、何枚もの解答用紙を両手で 差し出す。

ラウルは無表情でそれを受け取った。

「今日はここまでだ。明日、これを採点してくる」

「はい」

レイチェルは明るく返事をして微笑んだ。

ラウルは眉根を寄せた。手にした紙束をまとめ、部屋を出ようと足早に扉に向かう。その後ろから軽い足音が追いかけてきた。

「送っていくわ」

「来なくていい」

ラウルは振り返りもせず、冷たくあしらった。だが、レイチェルは素早く前に回り込むと、後ろで手を組み、ラウルを見上げてにっこりと笑った。やめるつもりはなさそうだった。

外はまだ日が高かった。澄みきった青い空から、強めの陽射しが降り注いでいる。予定では夕 方頃までかかるはずだったが、レイチェルは随分と短い時間で終えた。だが、感心するのはまだ 早い。きちんと解けているかどうかは、採点しなければわからないのだ。

前を見ながら嬉しそうに歩くレイチェルに、ラウルはふと疑問に思ったことを尋ねる。

「他の家庭教師も送っていたのか」

「ううん、ラウルだけよ」

なぜだ、と続けて問いたかったが、一瞬の躊躇いが口に出すことを止まらせた。だが——。「ラウルは特別だから」

レイチェルは愛くるしい笑みを浮かべて言った。まるで心を読んだかのような、絶妙のタイミ ングだった。

ラウルは僅かに眉を寄せ、視線だけを彼女に流す。

「特別?」

「サイファがそう言っていたの」

レイチェルは無邪気に答えた。

ラウルはそれで合点がいった。彼女のこの行動に深い意味などない。サイファのやっていたことを真似ているだけなのだ。それが正しいと信じ込んでいるのだろう。他人との接触があまりない彼女にとって、サイファの影響は想像以上に大きいようだ。

「サイファとはどんな話をしていたの?」

レイチェルはラウルを見上げ、顔を斜めにして尋ねた。頭のリボンがひょこりと弾む。

「あいつが勝手に喋っていただけだ」

「じゃあ、私が喋らなくちゃいけないのね」

「無理に喋らなくてもいい」

ラウルは前を向いたまま、淡々と答えを返した。

その隣で、レイチェルは柔らかい微笑みを見せた。

暖かい陽だまりの中を、ふたりは並んで歩いた。他には誰の姿も見えない。そこは通路にはなっていないため、普段からあまり人通りがないのだ。両側には高低の木々が立ち並び、視界は豊

富な緑に彩られている。時折、草の匂いが鼻を掠めた。

ふたりとも何も喋らなかった。無言のまま足を進める。だが、そこに張り詰めたものはなかった。少なくとも、ラウルの方は、心地よい穏やかな空気を感じていた。

建物内に入り、無機質な廊下を歩いていく。途中で何人かとすれ違った。その多くが、遠慮がちに、あるいは物珍しそうに、ラウルたちを窺っていた。化け物との噂もある王宮医師と、魔導の名門一族の愛らしい娘——確かに奇妙な取り合わせなのだろう。

しかし、レイチェルには、まわりの視線を意識している様子は見られなかった。実際はどうなのかわからない。気がついているのか、ついていないのか、それさえラウルには判別がつかなかった。嫌な思いをしていなければいいが、と願うような気持ちになる。

「ここだ」

ラウルは医務室の前で足を止めた。隣のレイチェルを軽く一瞥する。そして、カチャリと鍵を 開け、ガラガラと扉を引いた。

「今日はありがとう」

レイチェルの澄んだ声が背後から聞こえた。

ラウルはそのままの体勢で、顔だけ僅かに振り返る。

「あしたもよろしくね」

彼女はそう言って、綿菓子のようなふわりと甘い笑顔を浮かべた。

ラウルは眉を寄せ、目を細めた。

「.....ひとりで帰れるか」

「王宮にはよく来ているから大丈夫」

レイチェルは微笑んだまま答えた。そして、小さく手を振ると、まっすぐな廊下を歩いていった。後頭部の大きな薄水色のリボンが、その足どりに合わせて揺れた。

ラウルは扉に手を掛けたまま、彼女の後ろ姿を見えなくなるまで見送った。

その夜、ラウルは自室でテストの採点をした。結構な分量があるため時間がかかる。一通り終えた頃には、すでに深夜といってもいい時間に差し掛かっていた。

息をついて立ち上がると、部屋の明かりを消し、カーテンと窓を開け放った。濃紺色の空を見上げる。その片隅には、下弦の月がひっそりと浮かび、淡く儚い光を放っていた。

翌日、ラウルは再びレイチェルの部屋に来ていた。もちろん、家庭教師としてである。 きのう採点したテストを机の上に広げると、軽く溜息をついて腕を組む。

「習ったところは良く出来ているが、習っていないところは面白いくらいに空欄だな」

「だって習っていないんだもの」

レイチェルは当然のように言った。

ラウルは呆れたように彼女を見下ろす。

「応用という言葉を知っているか」

だが、レイチェルは何も答えず、にこっと笑顔を返すだけだった。

ラウルは頭に右手をやり、深く溜息をついた。

決して出来が悪いわけではない。習っている部分に関しては、ほぼ完璧に近かった。アルフォンスの言うとおり、頭は良い方なのだろう。だが、未知の問題となると、途端に考えもせずに放棄している。それは、もしかすると、性格によるものなのかもしれない。

「これから授業を始める。数学、物理学、魔導理論、どれか選べ」

「数学」

レイチェルは即答した。

「数学が好きなのか」

ラウルが問いかけると、彼女は首を横に振った。

「魔導よりはましということか」

「……すごい。ラウルって何でもわかるのね」

レイチェルは目を大きく見開き、感心したように言った。

ラウルは無表情で口を開く。

「魔導もそのうちにやる。理論も実技もな」

実技、という言葉を耳にした途端、レイチェルの顔に小さな怯えの色が浮かんだ。無言のまま 、逃げるように視線を逸らせて目を伏せる。

ラウルは眉根を寄せて言う。

「おまえを守るために必要なことだ」

レイチェルは戸惑ったような表情で、上目遣いにラウルを窺った。僅かに首を傾げる。自分が 危ういくらいに強大な魔導力を抱えていることなど、彼女自身は何も知らない。その意味を理解 できなくても当然である。

だが、ラウルは答えを示さなかった。

「今日は数学だ」

「.....はい」

レイチェルはそう返事をしてから、ゆっくりと微笑んだ。

途中で一度だけ休憩を挟み、3時間ほど授業を行った。

レイチェルは手のかからない教え子だった。言われたことには「はい」と返事をして素直に 従う。サイファとは大違いである。もっとも、比較対象がサイファでは、ほとんど誰でも「手の かからない子」ということになってしまう。

「今日はここまでだ」

ラウルはそう言うと、束ねた教本を脇に抱えて部屋を出た。

当然のように、今日もレイチェルがついてきた。軽い駆け足でラウルに追いつくと、横に並んで歩き、にっこりと笑顔を見せる。

ラウルはもう何も言わなかった。

今日も空は青かった。

言葉もなく、静かな道を並んで歩く。

彼女に振り向けば、無条件で笑顔を返してくれる。

ただ、それだけのこと。

ラウルの歩幅は、いつもより心持ち小さかった。

「ラウル、どこへ行くの?」

医務室とは違う方向へと足を進めるラウルに、レイチェルは顔を上げて尋ねた。不安そうには していない。ただ、不思議そうな顔をしていた。

「別の道を行くだけだ」

ラウルは素っ気なく答えた。

レイチェルは疑う様子もなく、嬉しそうな笑顔を見せた。

ふたりは、王宮内の中庭のひとつに足を踏み入れた。さほど広くはないが、隅々まで手入れが行き届いており、清々しく居心地の良い空間だった。豊かな緑に囲まれたその中央には、透明な水を湛える小さな噴水が佇んでいる。派手な演出はなく、単純に水を噴き上げるだけのものだ。それでも、爽やかな涼しさを感じさせるには十分だった。

ラウルは噴水の脇で足を止めた。ここは、かつての懐かしい場所にとてもよく似ている。それを知っていてここに来た。知っていたからこそ連れて来たのだ、彼女を……。口を結んで眉根を寄せると、ゆっくりとレイチェルに振り向いた。一瞬遅れて、彼女は花が咲いたようにふわりと微笑んだ。その背後では、噴き上げた水と揺れる水面が、太陽の光を受けてキラキラと煌めいていた。色彩を持って目の前に甦った、色褪せたはずの遥か遠い追憶——意識は過去を浮遊する。

しかし、それは長くは続かなかった。

不意に右手に感じた小さな温もりに、はっと現実に引き戻される。

噴水の奏でる和音が、急に大きく聞こえた。

レイチェルの小さな左手は、ラウルの右手に重ねられていた。

まっすぐに向けられた蒼の瞳には、ラウルの姿が映っていた。

その目が苦しげに細められる。

胸を衝かれ、息が止まった。

小さな温もりはそっと離れていった。

ラウルは追い縋るように手を上げかけて、止めた。奥歯を噛み締めてうつむく。そのまま背を向けると、再び医務室を目指して歩き出した。レイチェルも後ろから黙ってついてきた。

翌日も、ラウルは家庭教師に向かった。

「今日も来てくれて嬉しいわ」

レイチェルは微笑んで迎え入れた。いつもと変わらない愛らしい笑顔だった。

ラウルは怪訝な視線を彼女に向けた。昨日のことがあったにもかかわらず、今日の彼女はあま

りにも普段どおりである。もしかしたら、あの柔らかな温もりは夢だったのかもしれない、という疑念さえ頭をもたげる。

しかし、冷静に考えれば、手に触れてきただけである。ほんの些細なことだ。特別な意味などないのかもしれない。ぼんやりしていた自分を呼んだだけかもしれない——そう思おうとするが、どうしても腑に落ちない。あのときの彼女の表情が、脳裏に焼きついて離れないのだ。

「きのうの続き?」

先に椅子に座ったレイチェルが尋ねる。

「.....ああ」

ラウルも椅子に座った。机の上に置いた教本を開き、目的の箇所を探して捲っていく。だが、 なかなか見つけられない。行ったり来たりとページを繰る。

そのとき、凛とした声が、彼を不意打ちにする。

「ラウルは、いつも、誰を見ているの?」

ドクン、とラウルの心臓が大きく打った。

止まった指先から、するりと紙が滑り抜けた。

ゆっくりと顔を上げ、その声の主を窺う。

彼女は、今までに見たこともない真剣な表情をしていた。大きな蒼の瞳をまっすぐにラウルに向けている。その奥には、とても12歳とは思えないほどの鋭さが潜んでいた。

「ラウルは私を見ていない。小さいときからずっとそうだった」

「何を言っているのかわからん」

ラウルはそう答えるのが精一杯だった。

レイチェルは濃色の瞳をじっと探るように見つめる。

「私を通して遠くの誰かを見ている。そうでしょう?」

ラウルの鼓動は次第に速く強くなる。指先が冷たくなっていく。あまりに唐突で、心の準備が何も出来ていなかった。否定すべきなのか、認めるべきなのか、それさえ決めかねている。頭が 混乱して何も考えられない。

「その人は私と似ているの?」

レイチェルは胸もとに手をあて、首を傾げた。金色の髪がさらりと流れる。レースのカーテン越しに広がる柔らかな光が、背後から彼女をほんのりと照らす。

「私に何を求めているの?」

静かなその声が、ラウルの胸に深く突き刺さる。もう目を合わせることなどできない。何一つ 答えを返さないまま、固く口を閉ざしてうつむいた。長い焦茶色の髪が、その表情を覆い隠す。

レイチェルはゆっくりと呼吸をした。

「ラウル、私は.....」

「もうやめろ」

ラウルは唸るような声で彼女を遮った。椅子を揺らして立ち上がると、大きな足どりで扉に向かう。

「ラウル、待って!」

レイチェルは呼び止めながら追いかける。

「来るな!」

腹の底から絞り出した凄みのある重低音。

背後の足音が止まった。

ラウルは勢いよく振り切るように部屋をあとにする。長い髪が大きくなびいた。

レイチェルは追いかけてこなかった。

ラウルはまっすぐ医務室に戻った。乱暴に扉を開け、医務室を突っ切り、そのまま自室へと 入る。バタンと叩きつけるように扉を閉めると、そこに背中をつけてもたれかかった。深くうな だれ、体の横でこぶしを強く握りしめる。

幻想は、砕けた。彼女自身によって砕かれた。

何もかも見透かしたあの蒼い瞳。

思い返すだけで体の芯から震えがくる。

長らく忘れていた感情――。

そう……、これは、恐怖だ。

腰から体を折り曲げ、額を掴むように押さえる。

指先が小刻みに震えていた。

その夜、ラウルはアルフォンスに連絡を入れ、レイチェルの家庭教師を断った。王宮医師の仕事が忙しくなった、と嘘の理由を告げる。彼にも嘘だということはわかっていただろう。だが、何も言わずに了承してくれた。

――私は、逃げた。

カーテンを閉め切った真っ暗な寝室で、ラウルはベッドに腰掛け、ずっと、ずっとうなだれていた。

サイファが魔導省に入省して二年が過ぎた。

最初の一年に義務づけられている公安局での勤務を無事に終え、今は内局で勤務している。現場を離れれば少しは楽になるかと思っていたが、忙しさという点ではあまり変わりはなかった。

仕事に対する大きな不服はない。もちろん、まったくないわけではなかったが、いずれも些細なことであり、我慢できないほどではない。どこに勤めていても、多少は問題が出てくるものだろう。

同僚とも上司とも上手くいっている。公安局のときほど密な付き合いをしているわけではないが、仕事は円滑に進められており、職場の雰囲気は良い方だろう。若手の意見もきちんと聞いてもらえ、尊重もされている。もっとも、サイファの場合は、ラグランジェの名が影響しているという可能性は否めない。しかし、サイファはその利点も欠点も理解しており、それを受け入れる覚悟はとうに出来ていた。

そんな彼の、ただひとつといってもいい不満——それは、レイチェルと会う時間が思うように 作れないことだった。

その日は、早くに仕事が終わった。空はまだ青い。

サイファは自宅に戻ることなく、まっすぐレイチェルの家に向かっていた。もしかすると、まだ家庭教師の時間かもしれないが、そのときは家の中で待たせてもらうつもりだった。一刻も早くレイチェルに会いたい、その一心での行動である。自宅に戻ることなど考えられなかった。

彼女の家の前に差し掛かったところで、反対側から駆け足で近づいてくる小さな少年に気がついた。彼の方もサイファに気がついたらしく、「あっ」と小さく声を上げて足を止めた。眉間に 皺を寄せ、嫌悪感を露わにして睨みつけてくる。

この少年の名前はレオナルド。レイチェルの家の隣に住む、6歳の子供である。柔らかそうな金の髪と、鮮やかな青の瞳——そう、彼もまたラグランジェ家の人間なのだ。そのこともあってか、最近、彼女のところへ毎日のように遊びに来ていると聞く。彼の両親も自由にさせているようだ。同じ一族という気安さと安心感があるのだろう。いい遊び友達が出来たとでも思っているのかもしれない。

それだけなら良かった。だが——。

レオナルドはレイチェルに並々ならぬ好意を抱いていた。平たくいえば、恋をしているという ことになるだろう。本人がそう言ったわけではないが、見ていれば誰でもわかるくらいに態度が あからさまだった。彼女といるときだけ表情が違う。必要以上に甘えたり、抱きついたりして触 れ合おうとする。そのうえ、一人前に独占欲まで見せている。

幼い憧れといってしまえばそれまでだ。

だが、サイファは、それを微笑ましいものとして受け止めることなど出来なかった。レイチェルは自分の婚約者である。レオナルドも、ラグランジェ家の人間である以上、そのくらいのこと

は知っているはずだ。それにもかかわらず、彼女に独占欲を抱くなど、図々しいとしかいいようがない。

だいたい、レオナルドという名前からして気に入らなかった。

レイチェルが生まれる前、アリスは子供の名前についてこう言っていた。

――男の子ならレオナルド、女の子ならレイチェルにするつもり。

だから、どうというわけではない。それだけのことだ。だが、何か運命めいたものを感じてしまい、どうにも面白くなかった。まるで言いがかりのような嫉妬である。自分でも大人げないことはわかっていた。それでも、心の中に渦巻く黒い気持ちは止めようがなかった。

もちろん、サイファは理性のある大人だ。極力、それを表に出さないようにしていた。他の人の見ている前では——。

「何だ、レオナルド」

サイファは冷ややかに見下ろし、突き放した口調で言った。

「おまえなんかに用はない。レイチェルのところへ行くんだ」

レオナルドは敵対心を剥き出しにして答えた。だが、内心びくついていることは、手に取るようにわかった。サイファがラグランジェ本家の次期当主であることも、そのサイファに良く思われていないことも、幼いなりに理解しているのだろう。

「悪いが今日は帰ってくれ。彼女は僕と過ごす」

「おまえが勝手に決めるな!」

冷淡に告げるサイファに、レオナルドは精一杯、強気に言い返す。

サイファは無視して門をくぐろうとした。

そのとき、扉が重たい音を立てて開き、中から知らない男性、続いてレイチェルが出てきた。 ふたりはその場で足を止め、微笑みを交わした。

サイファはとっさに塀に身を隠した。同時に、レオナルドを自分のもとに引き寄せた。抗議の 声を上げようとした彼の口を、しっかりと手で塞ぎ、じたばたと手足を動かして抵抗する小さな 体を、反対側の手で拘束する。そして、見つからないようにそっと首を伸ばし、玄関の様子を窺 った。

「先生、今日はありがとうございました」

レイチェルはにっこりと笑って言った。

先生と呼ばれた気弱そうな青年は、照れたように頭を掻きながら顔を赤らめた。

「あのさ、今度、よかったら僕の研究所に遊びに来ないかな? 今日の授業で出てきた実験とかも、実際に見せてあげたいんだ。きっと、君が見ても面白いものだと思うから……」

「本当? 嬉しい。私も見てみたいと思っていたの」

レイチェルは胸の前で両手を組み合わせ、無邪気に顔を綻ばせた。

サイファはレオナルドの拘束を解くと、何食わぬ顔で門をくぐり、玄関のふたりに近づいてい

った。レオナルドも仏頂面でトコトコとついてくる。追い返したい気持ちはあったが、今はそんなことに時間を割いている余裕はない。

「やあ、レイチェル」

「サイファ!」

レイチェルはパッと顔を輝かせて振り向いた。長い金色の髪が柔らかく舞い上がる。まるで彼 女のまわりだけ明るい光に包まれたかのように感じた。

「レオナルドも一緒なのね」

「一緒に来たわけじゃない」

自分に向けられた微笑みに頬を染めながら、レオナルドは言葉足らずな反論をする。そして、 邪魔するようにふたりの間に割って入ると、レイチェルの白い手をぎゅっと握り、甘えるように 体を寄せた。その合間に、ちらりとサイファに挑戦的な視線を投げつける。

サイファは殴り倒したい衝動に駆られた。しかし、彼は理性のある大人である。その衝動を抑えるのは当然のこと、その感情すら悟られないように、一瞬たりとも穏やかな笑顔を崩すことはなかった。

そのまま、見知らぬ青年に振り向いて言う。

「新しい家庭教師の先生ですね。レイチェルのこと、よろしくお願いします」

「あ、はい……えっと、君は……」

家庭教師はとまどいながらサイファを見た。まだ年若いにもかかわらず、保護者気取りでこんなことを言う男はいったい誰なのか、見当もつかないのだろう。

サイファはにっこりと微笑み、胸もとに手をあてて頭を下げた。

「失礼しました。僕は、レイチェルの婚約者の、サイファ=ヴァルデ=ラグランジェです」 「あ、君が……」

家庭教師は口ごもって、顔を少しこわばらせた。その反応からすると、何か良からぬ噂を聞いているに違いない。それを聞き出すのは造作もないことだが、サイファはあえて触れることなく流した。噂についてはおおよその見当がついている。いずれそれが単なる噂でないことを、彼は思い知ることになるだろう。

「レイチェル、アリスかアルフォンスはいるかな?」

「お父さまも、お母さまもいるわ」

「少し話をしてくるから待っていてね。あとで一緒にお茶を飲もう」

「ええ、楽しみにしているわ」

レイチェルは愛らしく微笑んだ。その白い手は、まだレオナルドと繋がっていた。

サイファは小さな少年に冷たい一瞥を送り、家の中へ入っていった。

「あの家庭教師を辞めさせてください」

「またかね」

アルフォンスは呆れたように言った。ソファに大きな体を預け、腕を組んで溜息をつく。

「確かこれで5人目だぞ。君が辞めさせろと言ったのは」

「彼はレイチェルに良からぬ感情を抱いています」

サイファは正面からアルフォンスを見据え、真剣に訴えた。

「真面目な好青年を選んだつもりなんだがな」

「彼のことをすべて知っているわけではないでしょう。裏の顔がないとも限りません。先ほど、 レイチェルを連れ出そうと画策しているところを目撃しました」

アルフォンスは再び溜息をついた。

「娘を大事にしてくれるのは有り難いと思っている。だがな、サイファ。近頃のおまえは神経質すぎるぞ。もう少し鷹揚に構えてもいいのではないか?遠くない将来、ラグランジェ家を背負って立つ身でもあるんだ。余裕を持って見守るくらいでなければな」

「確かに、僕の早合点という可能性もあります」

サイファは冷静にそれを認めてから、一呼吸おいて続ける。

「でも、そうではないかもしれない。何かが起こってからでは遅いんです。取り返しがつかないんですよ。アルフォンス、あなたには僕との結婚までレイチェルを守る義務があるはずだ」

「確かに、それはそうなんだが......」

アルフォンスはゆっくりと腕を組み、眉間に皺を寄せて考え込む。彼もレイチェルを大切に思う気持ちは同じである。そこまで言われては反論が難しいのだろう。諦めたように大きく息をついて言う。

「わかった。彼には辞めてもらうことにしよう」

「でも、どうするの? レイチェルの家庭教師」

隣に座っていたアリスが、疑問を投げかけた。

「サイファが次々に辞めさせちゃうから、いいかげん困ってるんだけど」

茶目っ気のある口調でそう言うと、肩をすくめて苦笑する。

「サイファ、おまえ、推薦したい人物はいるか?」

アルフォンスは真剣な面持ちで尋ねた。

サイファは少し考えてから答える。

「ラウルなら信頼できます。いや、ラウルしかいないと思います」

それは本心からの言葉だった。頭脳でラウルに勝る人物はほとんどいない。魔導においても、 レイチェルが持つ本来の魔導力を押さえ込めるのはラウルだけだ。そして、何より、彼が邪な感 情を抱くなどとは考えられない。なぜもっと早くに気づいて提案できなかったのかと悔やまれた

だが、ふたりの反応は芳しくなかった。示し合わせたかのように表情が曇る。

それでも、サイファは何とかして説得しようとした。

「愛想はありませんが、信用に足る人物です」

「そういうことじゃなくて、ね.....」

アリスは中途半端に言葉を濁し、アルフォンスと顔を見合わせた。ふたりとも微妙に困ったような表情をしている。何か言いにくいことを抱えてそうな雰囲気だ。

「どういうことなんですか?」

サイファは怪訝に眉を寄せ、やや強い調子で問いただす。

アリスは観念したらしく、肩をすくめて、二年前のことについて説明を始めた。

ガラガラガラ――。

サイファはいつもより乱暴に扉を開き、ラウルの医務室に入った。今日も誰ひとりとして患者 はいない。

「ノックくらいしろと何度言えばわかる」

机に向かっていたラウルは、本を読む手を止め、サイファを横目で睨んだ。

だが、サイファはまるで動じることなく、ラウルの後ろのパイプベッドに腰を下ろした。清潔な白いシーツに皺が走る。膝の上で手を組み合わせると、焦茶色の髪が流れる背中をじっと見つめた。

「聞いたよ、三日坊主の話」

「何のことだ」

「レイチェルの家庭教師」

本のページを繰ろうとしていたラウルの動きが止まった。

サイファは眉をひそめて続ける。

「どういうつもりだ。こんな重大なことを黙っているなんて」

「おまえに報告する義務はないだろう」

ラウルは背中を向けたまま答える。

「僕はレイチェルの婚約者だぞ」

サイファは自分の声が感情的になっていたことに気がついた。深く呼吸をして気を静める。 終わってしまったことを、ただ怒りまかせに問い詰めたところで、何にもなりはしない。ここへ 来たのは、大人げない拗ねた文句を言うためではない。建設的な話し合いをするためだ。

「辞めた本当の理由は何なんだ?」

今度は落ち着いた口調で問いかける。だが、答えは返ってこない。小さく溜息をつき、少し呆れたように言い添える。

「王宮医師の仕事が忙しくなったなんて、誰がそれを信じるんだ。嘘をつくにしても、もっとま しな嘘をつけよ」

実際、アリスもアルフォンスも信じてはいなかった。レイチェルが無神経なことを言って怒らせたのではないか、というのがアリスの推測である。

だが、サイファはどうにも腑に落ちなかった。

ラウルは一度引き受けたことを簡単に投げ出したりはしない。サイファの家庭教師を8年も務めたことで実証済みである。8年の間に数え切れないほど怒らせてきたが、それでもラウルが辞めると言い出したことは一度もなかった。いったいどんな言葉をぶつければ、そこまで至らせることが出来るというのか。まるで想像もつかない。

「あのときは忙しかった」

「じゃあ、今は忙しくないんだな?」

ラウルは警戒しているのか、口をつぐみ、答えようとはしなかった。何を答えても逆襲に遭うとわかっているのだろう。だが、答えなくても同じことである。

サイファは広い背中を見つめ、真剣に言う。

「ラウル、もう一度、レイチェルの家庭教師を頼む」

「断る」

ラウルは振り返りもせず拒絶した。

サイファは軽い軋み音とともにパイプベッドから立ち上がった。険しい表情で腕を組み、椅子 に座った後ろ姿を見下ろす。

「理由は何だ」

「家庭教師など他にいくらでもいる」

「それは理由ではなく詭弁だ。ただの家庭教師なら確かにいくらでもいる。だが、レイチェルを安心して預けられるのは、おまえしかいないんだ。彼女の魔導のことも忘れたわけではないだろう。今のところ何の変化もないが、今後もそうだとは限らない。おまえならわかっているはずだ。そのうえで見捨てるつもりか」

ラウルは反論の言葉を返さなかった。僅かに顔をうつむける。長髪が肩から滑り落ちた。

「他に理由がないなら引き受けてもらう」

サイファは強い口調で言った。ほとんど命令だった。

「......あいつの方が嫌がる」

ラウルは小さくぽつりと言った。

——レイチェルの方が、ラウルを嫌がる……?

サイファは怪訝に眉根を寄せた。

ふたりの間にいったい何があったというのだろうか。単にレイチェルがラウルを怒らせただけ、ということではなさそうだ。だが、それを尋ねたところで答えてくれるとは思えない。なおさら態度を硬化させるだけだ。

ラウルの隣に足を進め、机に片手をつく。そして、おもむろに腰をかがめると、その横顔を覗き込んだ。濃色の瞳をじっと探るように見つめる。

「レイチェルが嫌がってなければ引き受けるんだな?」

息がかかるくらいの距離で、静かに尋ねかけた。

ラウルは何も答えなかった。サイファを無視し、無表情で本に目を落としている。だが、視線は少しも動いていない。指先だけがほんの僅かに震えた。

「待っていろ」

サイファはそう言い残して、医務室を出て行った。

逸る気持ちを抑えられず、自然と早足になっていく。

サイファが門をくぐると、庭の方から澄んだ声が聞こえてきた。レイチェルの声だった。芝生をさくりと踏みしめながら、その姿を探してあたりを見まわす。

彼女はすぐに見つかった。薄水色の大きなリボンを揺らしながら、花壇の片隅にしゃがんで

いた。隣にはレオナルドもいる。ふたりは何か話をしつつ、花を植えているようだ。レオナル ドも、そしてレイチェルも、楽しそうに笑顔を浮かべている。

サイファは足を止め、小さく呼吸をした。

「レイチェル、ちょっといいかな」

背後から声を掛けると、レイチェルは少し驚いたように振り返った。だが、すぐにそれは笑顔に変わる。スコップを置いて立ち上がり、体ごとサイファに向き直ると、愛らしく微笑んで小首を傾げた。

「今からふたりだけで話がしたいんだ」

「お茶をするんじゃなかったの?」

「そうだったね、お茶を飲みながら話そうか」

サイファは彼女の頭に優しく手を置いた。そして、小さく丸まったレオナルドの背中に声を落 とす。

「そういうわけだ、レオナルド。君はもう帰るんだ」

「おまえに命令されたくない」

レオナルドは花壇を見つめたまま、むくれながらスコップで土を叩き続けた。

「聞き分けのないことを言わないで、素直に帰ってくれないかな」

サイファはレオナルドの隣にしゃがみ、優しく微笑みながら言った。小さな肩に手を掛ける。 はたから見れば、小さな子を宥めようとしているだけの光景。しかし、その手には、表情とは裏 腹の強い力が込められていた。

レオナルドの顔が一気に引きつった。スコップを投げ置き、逃げるように走り去っていく。そ して、離れたところから泣きそうな顔で睨みつけてきた。

サイファは僅かに顎を上げ、冷たい目で応じた。早く行けと無言で促す。

「サイファ?」

「さあ、行こうか」

横から首を傾げて覗き込んできたレイチェルに、サイファはにっこりと微笑みかけた。細い肩を抱くと、一緒に玄関へと足を進める。もうレオナルドには目を向けなかった。

レイチェルの部屋に置かれている小さなティーテーブルに、ふたりは向かい合って座った。レースのカーテン越しの柔らかい光が、あたりを優しく包み、ほんのりとした暖かさをもたらしている。

サイファは慣れた手つきで紅茶を淹れた。丁寧な所作で、ティーカップを差し出す。

「どうぞ」

「ありがとう」

レイチェルは無邪気な笑顔でそう言うと、紅茶をゆっくりと口に運んだ。その途端、驚いたように大きな目をぱちくりさせる。

「おいしい」

「気に入った? 母上が最近見つけて気に入っているものなんだ」

サイファは明るく声を弾ませた。久しぶりの幸せな時間だった。こういう穏やかな時間が何よりも嬉しい。だが、今日はいつまでも浸っているわけにはいかない。

「レイチェル、家庭教師のことなんだけど……」

レイチェルはティーカップを両手で持ったまま、無垢な瞳をサイファに向けた。 サイファは出来うる限りの柔らかい口調で言う。

「今の先生には辞めてもらって、新しい先生に来てもらおうと思っているんだ」

「どうして?」

レイチェルは不思議そうに首を傾げた。ティーカップをそっとソーサに戻す。

「安心して任せられる先生にお願いしたいからね」

「その先生って誰なの?」

「ラウル」

「えっ……」

彼女の顔に動揺の色が広がった。やはり何かあったのだ、とサイファは確信する。

「ラウルは嫌なの?」

まるで幼子に接するように優しく尋ねる。

レイチェルは何ともいえない表情で目を伏せた。困惑しながらも小さな口を開く。

「二年前に来てもらったことがあって……」

「アリスに聞いたよ。三日で辞めたんだって?」

サイファは軽い口調で先を促す。

「私がいけないの。私が言ってはいけないことを言ってしまったから……きっとラウルは怒っている。私の家庭教師なんて引き受けないと思うわ」

レイチェルはつらそうに眉根を寄せて言った。小さな唇をきゅっと噛みしめる。

その瞬間、サイファは息が止まるほどに胸を締め付けられた。彼女のこんな表情を見るのは初めてのことだった。鼓動が次第に速くなっていく。同調するように気持ちが焦っていく。意識的に呼吸をしてから、ゆっくりと尋ねる。

「ラウルに何を言ったの?」

「それは……言えない」

「どうしても?」

「これ以上、ラウルを傷つけたくないから」

うつむいたままではあったが、その口調は迷いのない毅然としたものだった。

サイファはふっと息を漏らした。

「わかった、もう聞かない」

目を閉じ、両手を広げて言う。ラウルを傷つけたという言葉には興味があったが、レイチェルが言わないと決めたのなら、どう問いただしても口を割ることはないだろう。見かけによらず頑固なところがあるのだ。

「レイチェルの気持ちはどうなのかな。ラウルの家庭教師は嫌なの?」

「私は……」

レイチェルは体をすくめながら、両手を重ねて胸を押さえた。

「許してもらえるのなら、もう一度、ラウルにお願いしたい」

訥々と落とされる健気な言葉。そこからは彼女の一途な後悔が感じられた。事情はわからないが、これだけ反省しているのだ。許さないなどとは言わせない——そんな強い気持ちが湧き上がる。

「わかった。じゃあ、あしたからラウルに来てもらうよ」

「えっ?」

レイチェルはきょとんとした顔を上げた。

「今から説得してくるから、お茶を飲みながら待っていてね」

サイファは彼女の柔らかい頬に優しく触れた。そして、安心させるように微笑むと、立ち上がって部屋を出て行った。

サイファは再び医務室へ戻った。ガラガラと引き戸を開けて入っていく。ラウルは相変わらず 机に向かって本を読んでいた。それしかすることがないのだろう。

「お待たせ」

サイファは抑揚のない声でそう言うと、ラウルの机の上に躊躇なく腰掛けた。驚くラウルの胸 ぐらを掴み、強引に自分の方へ引き寄せると、じっと睨み下ろして言う。

「おまえはあしたからレイチェルの家庭教師だ」

ラウルは思いきり眉をひそめ、凄みのある眼差しで無言の抗議をした。

だが、サイファは怯むことなく、きっぱりとした口調で続ける。

「明日の午後、彼女のところへ行け。彼女の両親にもそう言ってあるからな」

「勝手に決めるな」

ラウルはサイファの手を振り払った。だが、サイファは逆にその手首を掴んだ。軽く捻りながら捩じ上げる。

「レイチェルは嫌がってなどいない。許してもらえるならもう一度お願いしたいってさ」

「……あいつは何を言った」

ラウルは鋭く射抜くように睨み、低く唸るように尋ねた。

「言ってはいけないことを言ってしまったと。ただ、その内容は教えてくれなかった。おまえを これ以上、傷つけたくないんだと」

サイファはラウルの手を放した。軽く溜息をついて目を細める。

「何を言ったか知らないが、きっとレイチェルに悪気はなかったんだよ。今は反省している。ひとりで随分と苦しんだんじゃないかな。許してやってくれよ」

ラウルは険しい表情でうつむいた。

「……悪いのは……許しを請わねばならないのは私の方だ。すべての原因は私にある。あいつが 反省する必要など何もない」

眉間に縦皺を刻みながら、噛みしめるように言う。

サイファは怪訝に首を捻った。ますますわからなくなった。だが、互いに嫌い合っていないこ

とだけはわかった。それで十分だ。無理に聞き出すつもりはない。今はそれより優先すべきことがある。

「レイチェルの家庭教師、決定でいいな。もう駄々をこねるなよ」

ラウルはあからさまにムッとしていたが、拒否はしなかった。サイファは了承したものと判断 する。

「まったく、子供の喧嘩を仲裁している気分だったよ。レイチェルは実際まだ子供だが、おまえはいったいいくつなんだ?」

小さく笑い、からかうような視線をラウルに向ける。

「おまえこそ、机の上に座るなどまるきり子供だ」

ラウルは冷静に切り返した。もうすっかり普段の彼に戻っていた。

「こうでもしないと、おまえと向き合って話が出来なかったからね」

サイファは机に手をつき、軽やかに床に降りた。革靴がタイルを打ちつけ、乾いた音を鳴らす

「何もかも思いどおりになって気がすんだだろう。もう帰れ」

ラウルは面倒くさそうに追い払おうとする。

サイファは口をとがらせ、両手を腰に当てて言う。

「王宮とレイチェルの家を二往復もしたんだぞ。もう少しいたわってくれてもいいんじゃないか? お茶でも淹れてくれよ」

「喉が渇いたなら水を飲め」

ラウルはぶっきらぼうに洗面台を顎で示した。

予想どおりの返答だった。

サイファは笑いながら肩をすくめた。

「レイチェルのところで、報告がてら、ゆっくりお茶してくるよ」

軽く右手を上げ、医務室を出ようと扉に向かう。だが、途中で足を止めると、真顔で振り返った。まっすぐにラウルを見つめて言う。

「強引に事を進めて悪かった。レイチェルと会える時間が少なくなると、何もかもが不安になってしまってね。特に、信用のおけない家庭教師に預けておくことは我慢ならなかったんだ。おまえが引き受けてくれて、本当に感謝している」

「結局は自分のためということか」

ラウルは腕を組み、冷淡な眼差しを向けながら、呆れたように言った。

サイファはくすりと笑った。

「まあ、否定はしないよ。でも、同時にレイチェルのためでもあるからね」

「おまえが何を望んでいるか知らんが、期待はするな。なぜいつも私を過大評価する」

「性格に問題があることは認識しているよ」

笑顔のまま軽口を叩く。そして、少しだけ真面目な顔になって続ける。

「それでも、やはり信頼できるのはおまえだけなんだ」

ラウルは難しい表情で口を閉ざしていた。何か言いたそうにも見えたが、何も聞かなかった。

「何か問題があったら相談してくれ。勝手に辞めるなよ」 サイファはそう釘を刺しながら、右手を上げて医務室をあとにした。

これで最も大きな不安が排除できた。胸のつかえが取れたような気がする。安堵した――いや、それ以上である。浮かれているといってもいい。ラウルにレイチェルを託せることが、なぜか無性に嬉しかった。それは、きっと、自分にとって二人ともかけがえのない存在だからだ。その二人に仲良くしてほしいと願うのは、ごく自然な気持ちだろう。

外はもう風が冷たくなっていた。火照った頬をそっと掠め、熱を奪い去っていく。茜色の空を 眺めながら、サイファは婚約者のもとへと足を速めた。 翌日の午後、ラウルは約束どおり家庭教師としてレイチェルの家へ向かっていた。強烈な日差しが降りそそぐ中を、浮かない顔で歩く。いや、そう思っているのは自分だけで、まわりの人間には、いつもの無愛想な表情としか映っていないだろう。

サイファの強引さに負けて、渋々ながら引き受けたものの、不安は拭えなかった。

同じことを繰り返してしまうかもしれない――。

頭の中ではわかっていても、彼女を目の前にすると、自制や理性など何もかもが飛んでしまう。二年前も、それより前も、ずっとそうだった。自分がこれほどまでに意志の弱い人間であることを、初めて思い知らされた。

だが、二年前のあのとき、はっきりと目が覚めたはずだ。

頭から豪快に氷水を掛けられたかのようだった。夢は一瞬にして消え去った。そして、もう夢など見ようのないくらいに、幻想は粉々に砕け散った。

それでも自信は持てなかった。自分という人間を信用することが出来なかった。

レイチェルの家に着くと、アルフォンスが出迎えた。彼はサイファが無理を言ったこと、そして、二年前のレイチェルの非礼を詫びた。二年前のことについては、彼も事情はわかっていないはずだが、サイファから断片的な情報を聞いたのだろう。何をどのように聞いたのかは詮索しなかった。

アルフォンスはあらためて仲立ちすると言ったが、それは断った。ラウル自身の都合である。 レイチェルと会ったとき、自分がどのような顔をするかわからない。彼女の父親には見られたく ないと思ったのだ。

ラウルは一人で二階に上がった。部屋の場所は二年前から変わっていないと聞いた。突き当たりに進み、白い扉の前で立ち止まる。たった3回しか来ていないが、鮮明に覚えている光景だ。 少し緊張しながら、その扉をノックする。

「はい、開いているわ」

中から聞こえた澄んだ声。それは紛れもなくレイチェルのものだった。

突如、躊躇いの気持ちが湧き上がった。

だが、ここまで来ながら引くわけにはいかない。水に潜るときのように大きく息を吸い込み、 ドアノブを回して扉を押し開ける。

扉は音もなく開いた。

五歩くらい離れたところに、二年前より少し成長したレイチェルが立っていた。彼女はワンピースの裾を僅かに持ち上げ、軽く膝を曲げた。

「来てくれて嬉しいわ」

そう言ってにっこりと微笑む。

一瞬、ドキリとした。

確かに笑顔は似ている。だが顔立ちは、そもそも瓜二つというほどは似ていなかった。今はは

っきり別人だと認識できる。そのことを強く意識し、面影を重ねないようにする。

「レイチェル.....」

二年前のことを詫びようと思った。だが、言葉が続かない。すべてを話して許しを請うべきなのだろうが、そこまでの覚悟はまだなかった。

そのとまどいを見透かしたかのように、レイチェルは柔らかく微笑み、ゆっくりと首を横に振った。言わなくてもいい、ということのようだ。ラウルのためなのか、彼女自身のためなのか、それはわからない。だが、どちらにしても、彼女の望みであれば受け入れるべきだろう。このまま何も説明せず、互いに水に流すということを——。

「座って」

レイチェルは明るい声で椅子を勧めた。

ラウルは言われるまま素直に座った。レイチェルも自分の椅子に座り、ラウルの方に体を向けた。膝の上に行儀良く手を重ねて置き、ちょこんと小首を傾げて尋ねる。

「今日はテスト?」

「昨日の今日で何も準備をしていない。おまえがどこまで勉強しているのかも聞いていない」 「じゃあ、説明するわ。私がこの二年間で勉強してきたことを」

彼女はにっこりと笑って立ち上がり、本棚からいくつもの本を取り出した。

レイチェルから勉学の進捗を聞いたが、あまり芳しいとはいえなかった。家庭教師が何度も替わっているのが原因だろう。なぜ、それほど頻繁に家庭教師を替えたのかはわからない。彼女にもわからないらしい。もしかしたら、サイファの仕業かもしれないと思う。ラウルのところに乗り込んできて交渉をしたくらいだ。ありえないことではないだろう。

その日は、一時間ほど話を聞いただけで終わりにした。授業は翌日から始めることにする。

「明日は数学にする。予習をしておけ」

ラウルはそう言って立ち上がった。大きな足どりで扉に向かう。

「送っていくわ」

レイチェルも立ち上がり、軽い駆け足でラウルのあとを追う。

「送ってもらう必要などない」

「必要がなくても送りたいの、ラウルは特別だから」

横から笑顔で覗き込み、二年前と同じことを言う。

ラウルは眉根を寄せた。

「サイファの言うことなど真に受けるな」

「サイファが言ったからじゃなくて、私自身がそう思っているの」

「迷惑だ」

冷たく突き放すように言い、扉を開けて部屋を出る。

だが、レイチェルは諦めずについてきた。愛らしい微笑みを見せて言う。

「じゃあ、送るんじゃなくて、勝手について行くことにするわ」

「.....勝手にしろ」

ラウルは大きく溜息をついた。

レイチェルは、面影の少女とはまるで性格が違った。彼女が控えめで思いやりのある子だった のに対し、レイチェルは身勝手で何でも思いどおりになると思っている節がある。

思い返してみれば、二年前にもその片鱗はあった。もう少し大人しかったような気はするが、 時折、今と同じように身勝手な言動が見受けられた。

無意識に都合のいいところしか見ようとしていなかったのかもしれない。面影を重ねていたのは、彼女が喋っていないときばかりだったことを思い出す。それに気づけたのは、もうはっきりと目が覚めているからだろう。今となっては面影など重ねようもない。

医務室を目指し、人通りの少ない裏道を歩く。二年前にもレイチェルとともに歩いた道だ。だが、心情はあのときとはまるで違う。心地よい穏やかな空気を感じることはなかった。

「怒っているの?」

レイチェルが横から覗き込んで尋ねた。

顔はいつもの仏頂面だが、怒っているつもりはなかった。だが、わからなくなった。彼女は妙に勘がいい。もしかすると、自分が気づいていないだけで、本当は腹を立てていたのかもしれない。たとえそうだとしても、怒りをぶつける相手が彼女であってはならない。

「怒ってなどいない」

出来る限り感情を抑制した声で答える。

「良かった」

レイチェルは胸に右手をあて、無邪気なくらいの笑顔で言った。

ラウルは溜息をつき、空を見上げた。青い空にかかっている薄い雲が、ゆっくりと流れていた

医務室の前に到着し、ラウルは足を止めた。レイチェルを一瞥する。何と言おうか迷ったが、何も言わないまま、鍵を開けて扉を引いた。

「ねえ、ラウル。医務室の中を見せてくれる?」

レイチェルが背後で声を弾ませた。

ラウルは扉に手を掛けたまま、顔だけ振り向いた。冷たい視線を向けて言う。

「病人でも怪我人でもない人間が入るところではない」

「.....わかったわ」

レイチェルは大きな瞳でラウルを見つめてそう言うと、来た方とは反対側へ歩き出した。 ラウルは慌てて彼女の肩に手を掛けた。

「どこへ行く」

「怪我をしてくるの。そうすれば入れてくれるんでしょう?」 真顔で振り返って言う。当然と言わんばかりの口調だった。

「.....入れ」

「ありがとう」

レイチェルはにっこりと笑った。

ラウルは溜息をついた。もしかすると、こうなることを計算しての行動だったのかもしれない。サイファにそっくりだ。ラグランジェの人間は、どうしてこうも身勝手な連中が多いのだろうか。

「病院みたいな匂いがするわ」

「医務室だからな」

入るなり感嘆の声を上げるレイチェルに、ラウルは呆れ口調で返答をした。

「本当にお医者さんなのね」

レイチェルはあたりをぐるりと見まわしながら言う。

「お医者さんをしながら家庭教師って大変そう」

「そうでもない」

ラウルは扉を閉めながら答えた。医師としての仕事はあまりない、ということは敢えて言わなかった。言う必要がないと思っただけで、隠そうとしたわけではない。

レイチェルは窓際に駆けていき、クリーム色のカーテンを開けた。窓ガラスに手をつき、下の道に目を向ける。そこは、レイチェルが父親に手を引かれてよく通っていた道だった。くすっと 笑い、懐かしそうに言う。

「ラウルはよくここの窓際に座っていたわね。私、いつも楽しみにしていたの」

そのことは当時からずっと不思議に思っていた。なぜ彼女は見ず知らずの自分に笑顔を向けてきたのだろうか——。それを尋ねることは出来なかった。

あれから10年が過ぎた。

そのうちの大部分は、彼女を彼女として見ていなかった。勝手な幻想を重ねていた。今、自分は彼女のことをどう見ているのだろうか。その華奢な後ろ姿を見ながら、自分に問いかける。答えはわからない。わからないということが答えなのかもしれない。二年ぶりに会って、まだたったの数時間である。そう簡単に答えが出せるものでもない。

レイチェルは薬棚や本棚、机の上、パイプベッドなど、あちらこちらを興味深げに見てまわった。動きまわるたびに、後頭部のリボンが弾むように揺れる。

ラウルは扉付近で腕を組み、その様子をただじっと眺めていた。

「楽しいか」

「ええ」

レイチェルは振り返って嬉しそうに笑った。

「ねえ、この向こうがラウルのおうちなんでしょう?」

ほとんど壁と同化している目立たない扉に、そっと両手で触れながら尋ねる。

ラウルは怪訝に眉根を寄せた。

「なぜ、知っている」

「サイファから聞いたの」

レイチェルはあっけらかんと答えた。

ラウルは溜息をついた。確かにサイファなら知っている。だが、まさかレイチェルに話しているとは思わなかった。別に隠しているわけではないので構わないが、こんなどうでもいいことまで話題にしている事実に驚いた。おしゃべりな奴だとは思っていたが、想像以上かもしれない。「サイファは、いくら頼んでも一度も部屋に入れてくれないって嘆いていたわ。どうして入れてあげないの?」

「誰も入れないことにしている。それだけだ」 ラウルは冷静に答える。

「私も、だめ?」

「駄目だ」

少しの迷いも隙も見せず、冷淡にきっぱりと言う。

レイチェルは僅かに寂しそうな表情を見せた。大きな蒼の瞳が小さく揺らぐ。

ラウルは溜息をつきながら、目を閉じてうつむいた。

「あら? 開いた.....」

その声につられて顔を上げると、レイチェルがドアノブに手を掛けて扉を開いているところだった。鍵はついているが、今日は掛けていなかったようだ。医務室の方は忘れず施錠するが、自室の方は医務室からしか入れないため、掛けないことも多い。

「おい!」

ラウルは慌てて組んだ腕を外し、扉に向かって駆けだした。だが、彼女は素早く逃げ込むように部屋に入り、カチャリと扉を閉めた。そのあとを追って、ラウルも扉を開けて部屋に入る。 幸い、鍵は掛けられていなかった。

「きれいにしているのね」

「おまえ……」

悪びれもせず部屋の中を見まわすレイチェルに、ラウルは低い唸り声を上げた。

「怒っているの?」

レイチェルは振り返り、大きく瞬きをしながら首を傾げて尋ねる。

「当然だ」

ラウルは抑えた声で言った。その中に秘めた怒りを感じ取ったのだろう。レイチェルは急にしゅんとして頭を下げた。

「ごめんなさい.....」

「.....もういい」

ラウルは溜息をついて言った。

レイチェルはほっと息をついてニコッと笑った。

「じゃあ、お茶を淹れてくれる? 美味しい紅茶が飲みたいの」

「……おまえ、本当に反省しているのか?」

「ええ、でも、もういいんでしょう?」

邪気のない顔で明るく言う。どこまでが計算なのかさっぱりわからない。天然だとするとなお

のこと恐ろしい。サイファよりたちが悪いかもしれないと思う。

「美味い紅茶はない。並のでよければ淹れてやる」

「ありがとう」

ラウルは溜息をついて湯を沸かし始めた。紅茶やティーカップの準備をする。

その間、レイチェルはあちらこちらウロウロして、いろいろなところを覗き込んでいた。寝室 や浴室、棚の中、引き出しの中まで開けて見ていた。

「おい、あまりあちこち見るな」

「紅茶が出来るまで暇なんだもの」

「いいから座れ」

ラウルはレイチェルの手を捕まえて、ダイニングテーブルの椅子に無理やり座らせた。

「お菓子は?」

レイチェルは両手で頬杖をつき、ラウルの横顔を見ながら尋ねる。

「そんなものはない」

ラウルはティーポットに湯を注ぎながら言った。

「そう……じゃあ、今日は我慢するわ」

レイチェルはニコッと笑った。

今日は ----?

ラウルは引っかかったが、敢えて尋ねなかった。藪蛇になりそうだと直感したからだ。紅茶の入ったティーカップをレイチェルの前に置く。

「ありがとう」

レイチェルは無垢な笑顔を浮かべ、ティーカップを手に取った。湯気の立ち上る紅茶にゆっくりと口をつけて、少しだけ流し込む。

ラウルは流しに寄りかかって腕を組み、その様子をじっと見下ろしていた。

「ラウルは飲まないの?」

レイチェルは両手でティーカップを持ったまま、顔を上げて尋ねた。

「ティーカップはそれしかない」

「どうして?」

「誰もここに入れないことにしていると言ったはずだ」

ラウルは面倒くさそうに答える。

レイチェルは少し考えてから、ぱっと顔を輝かせる。

「じゃあ、今度うちから持ってきてあげる。ラウルと一緒に飲みたいもの」

「......また来る気か?」

「ええ、今度はお菓子も用意しておいてね」

ラウルは盛大に溜息をついた。溜息のつきすぎで、体がだるくなった気さえする。頭痛がするのは精神的なものが影響しているのだろうか。右手で頭を押さえる。

「サイファには言うな」

「どうして?」

レイチェルは不思議そうに首を傾げた。

「このことを知られたら、あいつも入れなければならなくなる」

「だめなの?」

「誰も入れないことにしていると何度言わせる」 ラウルはいらつきながら答える。

「3人でお茶したかったのに……」

レイチェルは残念そうに言い、眉をひそめる。

「言わないと約束しなければ、おまえもここには二度と入れん」

「……わかったわ、約束する」

レイチェルはそう言ってニッコリと笑った。

ラウルは眉を寄せた。

何か話がおかしな方に行った気がする。レイチェルも入れるつもりではなかったはずだが、こんな約束をしてしまっては入れざるをえない。サイファよりはましか――いや、もしかするとサイファよりもやっかいかもしれない。自分の判断がわからなくなってきた。

「飲み終わったらとっとと出て行け」

「じゃあ、ゆっくり飲まなきゃ」

Γ......

思いきり呆れた視線を送るラウルに気づいていないのか、気づいていながら無視をしているのか、レイチェルは本当にゆっくりと紅茶を飲んだ。いい度胸である。ティーカップがほぼ空になったのを見ると、ラウルは組んだ腕をほどいた。

「飲み終わったな。さあ、出て行け」

「行かなきゃだめ?」

レイチェルは名残惜しそうに空のティーカップを両手で持ったまま、ラウルを上目遣いに見上 げて首を傾げた。

「出て行け」

ラウルは冷たく見下ろし、迫力のある低音でゆっくりと威圧するように言った。たいていの人間はこれで震え上がる。だが、彼女はまるきり平然としたまま、不服そうに小さな口をとがらせた。

「じゃあ、仕方がないから今日は帰るわ」

「早くしろ」

ラウルは立ち上がった彼女の肩を押し、追い立てるように部屋から出した。さらに、医務室からも追い出そうとする。勢いよく扉を引き開け、出て行くように目線で促した。

レイチェルは素直に廊下に出ると、くるりと振り返った。

「あしたも忘れないで来てね」

愛らしい笑みを浮かべて言う。

ラウルは扉を締めようとしていた手を止めた。

「わかっている。心配するな」

「ねえ、ラウル」

「何だ」

「私のことは嫌い?」

レイチェルは首を傾げて尋ねた。

ラウルは眉根を寄せた。その言葉だけで、彼女の言いたいことを理解してしまった。誰かの面影を重ねた状態ではなく、彼女自身の本当の姿についてどう思うかと尋ねているのだろう。自分はこの質問に答える義務がある——。

「まだ、わからん」

低い声で言う。それが正直な答えだった。

「私はラウルのことが好き」

レイチェルは無邪気に声を弾ませて言った。屈託のない笑顔で続ける。

「だから、また家庭教師になってくれて嬉しいわ」

「.....帰れ」

ラウルは無表情のまま、短くそれだけ言った。酷く冷たい口調だった。

それでもレイチェルは笑顔を見せていた。

「今日はありがとう」

顔の横で手を振り、帰っていく。

ラウルは静かに扉を閉めた。その扉に手を置いたまま、うつむいて奥歯を噛みしめる。

――愚かな女だ。

なぜだか無性に腹が立っていた。レイチェルが自分の何を知っているというのだろう。まともに向かい合ったのは、二年前の三日間と今日だけである。しかも、彼女にはひどい仕打ちしかしていない。にもかかわらず、そんな屈託のない顔でよくそんなことが言える。おそらく、サイファから聞いた話だけで、好意に値すると判断しているのだろう。本当の姿を見ていないのは、彼女の方も同じではないか。

ラウルはそこまで考えて溜息をついた。

このようなことを真剣に考察する必要はないのだと気がつく。誰にどのように思われようと知ったことではない。好きなように思っていればいい。誤解でも何でもしていればいい。それが自分の姿勢だったはずだ。

カーテンが開いたままの窓際へと歩いていき、窓枠に両手をついた。目を細めてガラス越しに 空を見上げる。濃い青色に浮かぶ白い雲は、僅かに形を変えながら、ゆっくりと右から左に流れ ていた。その下では、木々が微かにざわめいていた。 翌日から、ラウルはレイチェルの授業を始めた。

授業中に関していえば、レイチェルは二年前とあまり変わっていなかった。つまり、手のかからない教え子ということだ。言われたことには素直に従い、記憶力は良く、飲み込みも早い。教えたことはすぐに出来るようになる。

ただ、やはり応用力はほとんど無いといってもいい。未知の問題だと判断すると、途端に思考を放棄してしまう。このことに関しては、性格的なものが大きいため、克服させるのは難しそうだ。考えると頭が痛くなる。

そして、魔導のことも――。

彼女にはまだ切り出していない。だが、避けては通れない問題だろう。少なくとも基本的な制 御だけは学ばせなければならない。それは、二年前にアルフォンスから頼まれたことでもある。

だが、ラウル個人としては、それだけで済ませたくはなかった。

出来ることなら、彼女の秘められた魔導の力を引き出したい。彼女の潜在的な力は、ラウルを除けば、間違いなくこの国で一番である。それを引き出したうえで、それなりの訓練を積めば、稀代の使い手になるかもしれない。どこまでになるか、行き着く先を見てみたい——魔導に携わるものならば、誰もが抱いても不思議ではない好奇心である。

しかし、それは、彼女自身は全く望んでいないことだ。自分の身勝手な好奇心で、そこまでの ことを押しつけるのは傲慢というものだろう。

「今日はここまでだ。明日は物理学にする」

「ちょっと待って」

レイチェルは軽く呼び止めながら、立ち上がろうとするラウルの袖を掴んで引いた。

「何だ?」

ラウルは眉をひそめながらも、促されるまま椅子に座り直した。

レイチェルは机の下に身を屈めると、手提げの白い紙袋を慎重に取り出した。それを膝の上に 置き、ラウルに向かってにっこりと笑いかける。

「これ、きのう約束したプレゼント」

「プレゼントだと?」

ラウルは訝しげに聞き返しながら、差し出された紙袋を受け取った。そこそこ重量感がある。 上から覗き込むと、淡いピンク色のリボンが掛けられた大きめの白い箱が見えた。

「ティーカップよ。ついでにティーポットもあるみたい」

「家にあるものを持ってくるのではなかったのか」

確かに彼女はティーカップを持ってくると言った。だが、それは「うちから」だったはずだ。 家で余っているものを持ってくるのだろうとラウルは理解していた。しかし、これはそういう類 のものには見えない。

「そのつもりだったんだけど、お母さまがそれでは失礼だからって買ってきちゃったの」

レイチェルは肩をすくめて言った。

「母親に何を言った?」

「二年前のお詫びにティーカップをプレゼントしたいって言っただけよ」

そんなことを聞いたら、家にあるものでは失礼だと考えるのも当然だろう。名門のラグランジェ家なのだ。そういうところはきちんとしているに違いない。

「もらってくれる? そうじゃないと、私、困るんだけど……」

レイチェルは上目遣いで心配そうに尋ねた。

このプレゼントを拒めば、彼女の謝罪を拒んだことになってしまう。それも、彼女の両親に宣言するに等しい状態だ。彼女が困るというのも理解できる。そして、自分にとっても本意ではない。

「.....わかった」

「これでラウルと一緒にお茶が出来るわね」

レイチェルは顔の前で両手を組み合わせ、無邪気に声を弾ませた。

ラウルは溜息をついた。何か騙されたような気がしないでもないが、成り行きとはいえすべて 自分が承諾したことだ。今さら覆すようなことは言えないだろう。

澄みきった青空の下、いつものように人通りの少ない裏道を通って医務室へと向かう。

今日もレイチェルはついてきた。嬉しそうにニコニコしながら隣を歩いている。口数は多くないが、時折、ラウルを見上げて話しかけてくる。その表情は、まるで小さな子供のように屈託がなかった。

王宮に入って階段を上がり、しばらく歩くと医務室の前に到着する。

ラウルは鍵を開けた。いつもはまず医務室の席に着くのだが、今日は大きな荷物を持っている。まっすぐに奥の自室へと向かった。当然のようにレイチェルもついてきた。ラウルのすぐ後 るで、軽い足音が弾んでいた。

ラウルは白い紙袋をダイニングテーブルの上に置き、中から白い箱を取り出した。リボンを外し、包装紙を破いて箱を開ける。そこには白いティーカップとソーサが2組、そして同じ色のティーポットが入っていた。何も模様は入っていないが、決して安物ではなく、上質であることは一目でわかった。

「ラウルの好みがわからないからシンプルなものにしたって、お母さまが言っていたわ」 何も考えてなさそうなレイチェルとは違い、彼女の母親は細かいことまで気をまわす人物のよ うだ。見た目よりもしっかりしているのだろう。

「気に入った?」

レイチェルは無表情のラウルを覗き込んで尋ねる。長い金の髪がさらりと揺れた。 ラウルは破いた包装紙を丸めながら、ぶっきらぼうに言う。

「礼を言っておけ」

「良かった」

レイチェルは胸もとに手を当てた。安堵したとでも言いたげな様子だが、それほど心配しているようには見えなかった。甘やかされて育った彼女のことだ。今までほとんどのことが思い通りになってきたのだろう。そのため今回も突き返されるようなことはないと確信していたのかもしれない。いや、そんなことは想像すらしていなかったに違いない。

「じゃあ、お茶にしましょう」

彼女はダイニングテーブルの向かい側にまわって椅子に座った。そこは昨日と同じ場所である。彼女の中ではすでに指定席になっているのだろうか。ニコニコしながら両手で頬杖をつくと、 無邪気に愛くるしく言う。

「今日はラウルも一緒ね」

ラウルは溜息をつきながらも、言われるままにティータイムの準備を始めた。水の入ったヤカンを火に掛けると、その間に、新品のティーカップとティーポットを手際よく洗った。棚から紅茶の缶を取り出し、ティーポットに目分量で茶葉を入れる。

「ねえ、お菓子はあるの?」

レイチェルは頬杖をついたまま口を開く。

「ケーキでいいのか?」

ラウルはティーポットに湯を注ぎながら尋ね返した。白い湯気が視界を覆う。顔が少し熱くなった。

「ケーキ、用意してくれたの?」

「おまえがそうしろと言った」

「嬉しい、ラウルありがとう」

レイチェルの声は、感情のままに弾んでいた。

結局、何もかも彼女の思うままになっている気がする。それは、自分が彼女に対して負い目を感じているせいだろう。優しくしようなどと思っているわけではないが、無意識に甘くなっていることは否めない。

ラウルは冷蔵庫から小さな箱を取り出し、その中のケーキを皿にのせて彼女に出す。

「ひとつだけ?」

レイチェルはラウルを見上げて尋ねた。

「いくつ食べる気だ?」

ラウルは呆れた眼差しで見下ろしながら言う。

「そうじゃなくて、ラウルの分は?」

「それひとつしか買っていない」

「じゃあ、半分にしましょう」

レイチェルはケーキの皿を両手で持ち上げ、ラウルに差し出した。

「いらん、だから買わなかった」

ラウルは腕を組みながら、冷たくきっぱりと撥ねつけた。

それでもレイチェルは諦めなかった。にっこりとして腕を伸ばし、優しく諭すように言う。

「だめよ、一緒にお茶をするんだから。一緒に食べなければ意味がないわ」

ラウルは溜息をついた。観念するしかなさそうだった。

彼女からその皿を受け取ると、ケーキを半分に切り、もうひとつの皿にその半分を移した。ふたつの皿をそれぞれの席に置く。紅茶もティーカップに注ぎ、ソーサに載せてテーブルに置いた

これでティータイムの形はそれなりに整ったはずだ。もう文句はないだろう。

「ラウルも座って」

レイチェルは顔を斜めに傾け、にっこりと笑って言った。

二人はささやかなお茶会を始めた。ただ紅茶を飲んで、ケーキを食べるだけである。

「楽しいか」

「ええ」

向かいのレイチェルに尋ねると、満面の笑みで答えが返ってきた。

何がそんなに楽しいのか、ラウルにはわからなかった。面白い話をしているわけでもなければ、紅茶やケーキが特に美味しいわけでもない。彼女なら普段からもっと上等なものを口にしているはずである。

「ラウルはここでいつもひとりなの?」

レイチェルはティーカップをソーサに戻しながら尋ねた。

「誰も入れないことにしていると言ったはずだ」

ラウルはぶっきらぼうに答えた。きのうから何度も同じことを言っている。彼女はわかっていて尋ねているのかもしれない。ケーキにフォークを突き立てて口に運ぶ。

「寂しくないの?」

レイチェルは大きな瞳でじっと見つめて言う。

「ひとりの方が煩わしくなくていい」

「今は私がいるから煩わしいの?」

「ああ、紅茶やケーキの準備までさせられて迷惑している」

ラウルは責めるように言ったつもりだが、レイチェルは反省するどころか、なぜかクスクスと と笑っていた。何がそんなに可笑しいのだろうか。彼女の思考回路がまるでわからない。

レイチェルはケーキを食べながら言う。

「このケーキ、美味しいわね。イチゴのショートケーキって、私、大好きなの」

ラウルは紅茶を飲みながら、無邪気な彼女に目を向けた。ティーカップをゆっくりとソーサに 戻す。

「好き嫌いがあるなら言っておけ。おまえの好みは知らんからな」

「んー……レーズン以外ならたぶん大丈夫」

レイチェルは斜め上に目を向けて考えたあと、ラウルに向き直ってにっこりと答えた。

「わかった。レーズンを避ければいいんだな」

ラウルは淡々と確認する。

「ねえ、ラウル。お店のケーキもいいけれど、ときどきは手作りのお菓子も食べたいの」

レイチェルは身を乗り出して言う。

ラウルは溜息をついた。いったいどこまで我が侭を言うつもりなのだろうか。

「何を作ってほしい」

面倒だと思いながらも尋ねてみる。

レイチェルはフォークを握りしめて目を輝かせた。

「えーっと、じゃあ、ミルフィーユとかモンブランとか」

「……おまえ、それは嫌がらせか」

ラウルは眉根を寄せた。

「だめなの?」

レイチェルはきょとんとして小首を傾げた。

「そんな手間のかかるもの、作る気も起きん」

ラウルは額を押さえた。自分の要求がどれほどやっかいなことなのか、彼女はわかっているのだろうか。作ろうと思えば作れないことはない。だが、冗談ではないと思う。そこまでの義理も筋合いもない。小さく溜息をついて言う。

「スコーン、ショートブレッド、プリン、ホットケーキ、どれか選べ」

「じゃあ、スコーンとプリン」

レイチェルはすぐに答えた。

ラウルは眉をひそめて睨んだ。低い声で言う。

「ひとつにしろ」

「プリン」

レイチェルはまっすぐラウルを見たまま即答した。

ラウルは腕を組んでうつむき、目を閉じる。肩から焦茶色の髪が滑り落ちた。

「気の向いたときに一回くらいなら作ってやる」

「楽しみにしているわ」

レイチェルはそう言って愛らしく微笑んだ。

翌日も、翌々日も、レイチェルはラウルの部屋にやってきた。

ラウルは両日とも律儀にケーキを用意した。いくら彼女に負い目があるからといって、ここまで言いなりになる必要があるのだろうか。なぜ拒否しなかったのだろうか。なぜ無視しなかったのだろうか。自問してみるものの答えは出ない。

ただ、嫌でたまらないというほどのことはない。

煩わしいという気持ちに変わりはないが、仕方がないという諦めの気持ちが大きくなっているような気がする。いや、正直なところをいえば、彼女の嬉しそうな笑顔を見ていると悪い気はしない。そう思う自分はどうかしているのだろうか——。

その翌日も、やはりレイチェルはついてきた。これで4日連続である。家庭教師の授業とその後のティータイムが、ラウルにとって日常の一部になりつつあった。

医務室の前に着くと、いつものように鍵を開けて扉を引く。

「ラウル、今日はここで帰るわね」

中に足を踏み入れようとしたとき、レイチェルが背後でそう言った。ごく普通の落ち着いた口調だった。申し訳なさそうにも、怒っているようにも、思いつめたようにも感じられなかった。 ラウルは扉に手を置き、ゆっくりと顔だけ振り返った。

「.....なぜだ」

「サイファがね、今日は早く帰れそうだから二人でお茶をしようって」 レイチェルは胸もとで手を組み合わせ、にっこりと笑顔を見せた。

「そうか」

ラウルは無表情を保ったまま呟くように言った。

----そうならそうと、あらかじめ言っておけ。

喉もとまで出かかった言葉を、ぐっと堪えて飲み下す。別に約束をしていたわけではない。 ただ、今日も来るだろうと自分が勝手に思い込んでいただけだ。彼女は何も悪くない。だが——

「嬉しそうだな」

「ええ、サイファの家でお茶をするのって久し振りなんだもの」

レイチェルははしゃいだ声を上げた。

その様子を眺めるラウルの心には、もやもやとした重いものがのしかかっていた。

「やあ、レイチェル」

よく通るはっきりとした声を響かせながら、サイファは後ろからレイチェルを抱きすくめた。 魔導省の制服を身に着けている。仕事帰りなのだろう。右手に持っていた手提げの紙袋が、彼女 の前で大きく弧を描いて揺れた。

「サイファ!」

レイチェルはとびきりの笑顔で振り返った。後頭部のリボンが大きく弾み、長い髪がさらりと 舞い上がる。窓から射し込む光を受けて、透きとおるような金色が上品に煌めいた。

サイファは彼女の頬を左手で包み、慈しむように柔らかく微笑んだ。

「ラウルに挨拶してから帰ろうと思って、ここへ寄ってみたんだけど、ちょうどいいタイミングだったみたいだね」

優しい声でそう言うと、端整な顔をゆっくりとラウルに向けた。青い瞳に挑発的な光を宿し、 口の端を僅かに上げる。

「ラウル先生、今度は逃げずに続けているみたいだね」

ラウルはムッとして眉をしかめた。

「嫌味を言うために来たのか?」

「様子を聞きに来たんだよ」

サイファは両手を腰に当てて言う。

「困ったことや相談したいことはないか?」

「何もない」

ラウルは冷ややかに答えて腕を組んだ。

「レイチェルはちゃんと勉強しているか?」

「おまえよりよほど真面目だ」

「それは良かった」

サイファはくすっと小さく笑って言う。その余裕の態度が、ラウルには何か無性に腹立たしく感じられた。サイファには特に意図はなかったのだろう。ただ、自分の方に余裕がなかっただけだ。

「レイチェル、これからも先生の言うことをよく聞いて勉強するんだよ」

サイファは小さな子供に言い含めるような口調でそう言うと、彼女の前髪を人差し指で小さく払って微笑む。

「我が侭ばかり言って怒らせないようにね」

「我が侭なんて言っていないわ。ねえ、ラウル」

レイチェルはラウルに振り向いて同意を求めた。少しも悪びれた様子はない。あどけない無垢な笑顔を見せている。嘘をついているつもりはなく、本当にそう思っているのだろう。確かに、授業中に関してだけでいえば、間違いではない。

「.....ああ」

ラウルは彼女の望むままの答えを返した。

「ちょっと待て、ラウル」

無言で医務室に入ろうとしたラウルを、サイファは慌てて引き留めた。手にしていた薄黄色の 紙袋から、同色の紙の箱を取り出す。片手で持てるくらいのものだ。それほど大きくはない。

「レイチェルがお世話になっているお礼だ」

人なつこい笑顔でそう言うと、その紙の箱をラウルに差し出した。

ラウルは怪訝に眉根を寄せた。

「何だ?」

「レアチーズケーキ。僕たちの分のついでなんだけどね」

サイファは反対の手に持っていた紙袋を掲げた。その上部には店のロゴタイプが小さく入っている。ケーキ店の名前らしい。これからサイファの家でお茶をするとレイチェルが言っていた。 そのときに食べるケーキを買ってきたのだろう。

「ここのレアチーズケーキ、とっても美味しいのよ」

レイチェルはサイファの隣で微笑みながら、無邪気にそんなことを言った。

「もしかして、甘いものは苦手だったか?」

無表情で立ち尽くすラウルを見て、サイファは覗き込みながら尋ねた。

「.....もらっておく」

ラウルは小さな箱を片手で掴んだ。

サイファは満足そうな笑みを浮かべると、隣のレイチェルの頭に手をのせた。

「じゃあ、そろそろ行こうか。とびきり美味しい紅茶も用意してあるよ」

「本当? 嬉しい」

レイチェルはサイファを見上げ、幸せそうに笑った。

「ラウル、それじゃあ、またな」

「またあしたね」

ふたりは笑顔でさよならの挨拶をした。そして、どちらからともなく自然に手を取り合うと、 楽しそうに話をしながら帰っていった。もうラウルのことなど眼中にないのだろう。ただの一度 も振り返ることはなかった。

ラウルは医務室の奥の自室にひとりで戻った。

サイファからもらった薄黄色の紙箱を、ダイニングテーブルの上に置く。それをじっと見下ろしながら、腕を組み、流しにゆっくりと寄りかかった。

秒針の単調な音が耳朶に響く。

不思議なくらいに静かな部屋。

無意味に流れていく時間。

ラウルは小さく溜息をついた。

体を屈めて冷蔵庫を開ける。あまり物は入っていない。テーブルの上の箱を無造作にその中に 放り込むと、代わりに中から小さなカップを取り出した。

それはプリンだった。買ってきたものではない。ラウルが作ったものである。

気が向いたら一度くらいはプリンを作ってやる――。

数日前にレイチェルとそう約束した。それを今日のティータイムで果たすつもりだった。だが、彼女はここにはいない。自分ではなく、サイファの方を選んだ——いや、その言い方は適切ではない。ただタイミングが悪かっただけだ。

ラウルはその場に立ったまま、スプーンですくってそれを食べ始めた。

底のカラメルがほんの少し苦かった。

ラウルは、高い塀で囲われた建物の前で立ち止まり、それを仰いだ。窓ガラスの反射光が眩しくて目を細める。ここからでは全貌は見えないが、一部で改装工事をしているのが目についた。 魔導科学技術研究所——。

それがこの建物の名前だった。魔導を科学的に分析し、その仕組みを解明することを目的として設立された、魔導省の管轄の施設である。つまり、国立の研究所だ。国がその研究を必要としているということだろう。

「わざわざ足を運んでもらってすまない」

「どのみち外へ出る用があった」

入口まで迎えに来たアルフォンスに連れられて、ラウルは研究所の廊下を歩く。横に目を向けると、ガラスの向こうに研究フロアが見えた。立っているのは数人だけで、多くの所員は整然と並んだモニタに向かい、黙々と作業をしている。話し声はほとんど聞こえず、機械音や打鍵音の方が大きいくらいだ。

ラウルがここへ来たのは、この研究所の所長であるアルフォンスに呼ばれたためだった。理由は聞いていない。聞き出そうともしなかった。そうするまでもなく、おおよその見当はついている。だから、あえて言われるままにやってきたのだ。

「ここに入るのは初めてか?」

「ああ」

アルフォンスは歩きながら後ろで手を組み、ちらりとラウルを振り返る。

「このフロアなら自由に見学しても構わんがどうする?」

「不要だ。ここではたいした研究をやっていないのだろう」

ラウルはつれない答えを返す。

アルフォンスは気難しい顔で目を伏せた。

「根幹となる研究は、立入制限区域で行っている。そちらに入るためには面倒な手続きが必要でな」

「論文にはすべて目を通している。それらを総合して考えれば、入らなくても何をやっているの か察しはつく」

「というと?」

「戦争のための兵器開発、それと人間を兵器化する技術開発」

ラウルは端的に答えた。

アルフォンスは息を飲んで振り返り、それからあたりを見まわす。そして、誰もいないことを確認すると、一瞬だけ安堵したような表情を浮かべた。「所長室」というプレートが掛かった扉に向かい、鍵を開けると、ドアノブに手を掛けて押し開く。

「否定はしない」

そう言いつつ、ラウルを部屋に招き入れる。そこは、個室としては十分すぎるくらいに広か

った。正面にはうずたかく書類が積まれた大きな机、端の方には応接用と思われるソファとローテーブルがあった。机の隣の本棚には整然と新しい本が並んでいる。奥の大きなガラス窓からは自然光が入り込み、部屋を明るく爽やかに照らしていた。アルフォンスは静かに扉を閉めると、ラウルをソファに促す。

「だが、戦争を仕掛けるわけではない。あくまでこの国を防衛するためのものだ」

「魔導は人に属するからこそ、辛うじてバランスを保っていられる。人の意思のない魔導や、人の意思をねじ曲げた魔導など、存在すべきではない。いずれ世界を壊すことになる」

ラウルはソファには座らず、その場に立ったままで言った。

アルフォンスは表情を険しくする。

「使用は厳しく制限していくつもりだ」

「判断を誤らなかった戦争などない」

「.....」

アルフォンスは反論しなかった。いや、出来なかったのだろう。口を固く結び、目を伏せる。 眉間には深い皺が刻まれた。

ラウルは腕を組んで言う。

「今のはただの忠告だ。おまえたちが何をしようと知ったことではない。これ以上の干渉をする つもりもない。ただ、レイチェルは巻き込むな」

アルフォンスはハッとして顔を上げた。

「なぜ、それを……」

「あれだけの魔導力を有する人間は他にいない。おまえたちからすれば、喉から手が出るほど欲 しい実験体だろう。私を呼んだのも、そのことで何か相談があったのではないか」

アルフォンスがラウルを研究所に呼んだ理由として考えられるのは三つだった。ラウルに研究への参加を依頼する、ラウルに実験体としての協力を依頼する、レイチェルを実験体として使うことについての相談——。その推測を一つに絞ることができたのは、ラウルをここへ呼んだときのアルフォンスの声が苦悩に満ちていたからだ。レイチェルに関することでなければ、そこまで思い詰めた声は出さないはずだという確信があった。

「ああ、だが勘違いするな。私個人としては反対している。そもそも、あの子の魔導のことを誰かに話したことは一度もない。だが、気づいてしまった部下がいてな」

コンコン——。

扉をノックする音が聞こえた。アルフォンスの顔に緊張が走る。

「フランシス=ゴードンです」

「入れ」

アルフォンスが毅然とした声でそう言うと、三十代後半と思われる男が、静かに扉を開けて入ってきた。背筋を伸ばし、両足を揃えると、真剣な表情をまっすぐ前に向ける。体格はアルフォンスより一回り小さいが、気構えは負けていないようだった。

ラウルはその男に見覚えがあった。過去に何度か医務室に来たことのある男だ。口をきけなくなった姪を診せに来たこともあった。リカルドが研究所に勤務していたときの部下だったと記

憶している。

「これが先ほど言っていた部下だ。レイチェルを研究に使うことを強硬に主張してな」

「そうすべきだと思います。所長が娘を溺愛していることは知っていますが、この研究所の所長であれば国のことを第一に考えるべきです。国の機関に勤める人間が、国より家族を優先するなどあってはならない」

アルフォンスは反論こそしなかったが、その青い瞳には怒りを思わせる鋭い光がたぎっていた。それが、彼のできる唯一の抵抗だったに違いない。理屈としてはフランシスの方が正しい。所長という立場もあり、おおっぴらに本音を言うわけにはいかないのだろう。

フランシスは臆することなく続ける。

「何も傷つけようというわけではありません。彼女の身の安全は最大限考慮するつもりです」 「下手に手を出せば暴発する。そうなれば、それこそ国が崩壊する可能性もありうる」 ラウルが横から口を挟んだ。

フランシスは睨むような眼差しで振り向いた。

「あなたに言われるまでもなく、慎重に事を進めるつもりです。私たちは科学者だ。あらゆる可能性をシミュレーションし、危険を回避しつつ結果を得られるよう、常に綿密な計画を立てています」

強気な姿勢を崩さずに、明瞭にきびきびと言う。あれほどラウルのことを恐れていた人物とは 思えない。それだけ成長したのだろうか。それとも、仕事のこととなると人が変わるのだろうか 。

ラウルは無表情のままフランシスに歩み寄った。正面のごく近い距離で止まる。胸もとあたり の位置に彼の頭があった。ゆっくりと腕を組み、顎を軽く上げると、目線だけで彼を見下ろす。

名前を呼ばれた瞬間

名前を呼ばれた瞬間、フランシスはビクリと体を竦ませた。それでも精一杯の虚勢を張り、上目遣いでラウルを睨む。

「.....何ですか」

「フランシス」

「レイチェルには手を出すな」

「あなたこそ部外者のくせに口を出さないでほしい。私たちはこの国のために……」

「この国がどうなろうと知ったことではない」

ラウルはフランシスの言葉を遮って言った。まっすぐ彼の首筋に右手を伸ばし、触れる寸前で それを止める。その気になれば、防御する間もなく一瞬で首を落とせる距離だ。冷徹な眼差しを 向け、凄みのある低い声で威圧する。

「レイチェルには手を出すな。もし手を出すことがあれば、この研究所ごとおまえを消す」

「……脅迫するのか、卑怯な」

フランシスは恐怖に歪んだ表情のまま顔をこわばらせた。奥歯を強く食いしばる。喉仏が上下に動いた。額に滲んだ汗が、頬を伝って地面に落ちた。体の横で固く握りしめたこぶしは、怒りのためか、恐怖のためか、小刻みに震えていた。

「何とでも言え。本気だということだけは言っておく」

ラウルは冷たく凍てついた瞳を見せつけてから、ゆっくりと彼の首から手を引いた。

フランシスは何か言いたそうにしていたが、震える口からは少しも声が発せられなかった。

「フランシス、もう下がれ」

アルフォンスが静かに声を掛けると、フランシスは悔しそうに顔をしかめながら、それでもき ちんと頭を下げて所長室をあとにした。

「用件はこれだけか」

ラウルは腕を組んで振り向き、何事もなかったかのようにさらりと尋ねた。

アルフォンスは困惑した様子を見せながら口を開く。

「これだけというか……相談しようと思っただけなんだが……いや、しかし感謝する」

「おまえのためにやったわけではない。私の意志だ」

ラウルは躊躇いなくきっぱりと明言した。

「そうか……」

一方、アルフォンスは歯切れが悪かった。感謝しつつも訝っている様子である。他人に無関心だったはずのラウルが、レイチェルを助けるべく自ら積極的に行動したのだ。これまでではありえないことである。怪訝に思うのも無理はないだろう。

ラウルは視線を落とし、小さく息をついて言う。

「助けられたはずなのに、助けられなかった……そんな結末をもう見たくないだけだ」

「それは、もしかして、君の……」

アルフォンスはそこまで言いかけて口をつぐんだ。訊くべきではないと判断したのだろう。真面目な顔で目を細めてラウルを見つめる。その瞳にもう訝るものはなかった。

「何か礼をさせてほしい」

「礼など不要だ。おまえのためにやったわけではない、そう言ったはずだ」

ラウルは無表情のままにべもなく受け流す。

アルフォンスはそれでも引き下がらなかった。

「昼食くらいは奢らせてほしい」

「これから行かなければならないところがある」

それは断る口実だった。言ったことは嘘ではないが、昼食に付き合う時間も取れないということはない。ただ、こう言えば諦めざるをえないはずである。

「そうか……それではまたいつか機会があれば付き合ってほしい」

アルフォンスはラウルに真摯な視線を送る。

「レイチェルのこと、これからもよろしく頼む」

「.....わかっている」

ラウルは静かに声を落とした。腕を組んだまま、目を閉じて深くうつむく。長い焦茶色の髪が 、カーテンのように横顔を覆い隠した。

その日の午後、ラウルはレイチェルの家に向かった。

今日もいつものように授業を行う。

ラウルは真面目に指導をする。

レイチェルも真面目に取り組む。

ふたりとも授業中は関係のないことを口にしなかった。

「今日はここまでだ」

ラウルはいつもの言葉で授業を区切る。しかし、いつものようにすぐに立ち上がろうとはせず 、椅子に座ったままレイチェルをじっと見つめた。

「……どうしたの?」

レイチェルはきょとんとして尋ねた。小さく首を傾げる。

「今日は来るのか?」

ラウルは最も気になっていたことを質問した。言葉が足りないことは自覚していたが、これだけでも彼女には通じるだろう。思い浮かぶ場所は一箇所しかないはずだ。

「ええ、今日はラウルとお茶するわ」

レイチェルは戸惑うことなく、にっこりと笑顔を浮かべて答える。

「そうか」

ラウルは小さく相槌を打って立ち上がった。脇に教本を抱え、部屋を出て行く。

レイチェルも嬉しそうに微笑みながらついてきた。その足どりは軽やかに弾んでいた。

ラウルの部屋へ入ると、レイチェルは当然のようにダイニングテーブルの指定席についた。両 手で頬杖をつき、ニコニコとしてラウルを見る。

「今日は何のケーキ?」

「ケーキはない」

ラウルはぶっきらぼうに答えを返す。

「そう、残念」

レイチェルは軽く言った。多少、落胆している様子はあったが、すぐに笑顔に戻る。もっと駄々をこねるかと思っていたので意外だった。それほど重要ではなかったのだろうか。

ラウルは冷蔵庫を開けると、中からカップを二つ取り出した。

「それは何?」

「おまえが作れと言ったプリンだ」

無愛想に答えると、それを机の上に置いた。きのう作ったものではない。今朝、新たに作った ものだ。彼女が来るかどうかもわからないのに、なぜ昨日の今日でまた作ってしまったのだろ うか。もしかすると何か意地になっていたのかもしれない。

レイチェルは大きな目をぱちくりさせてそれを覗き込むと、顔を上げて不思議そうに尋ねる。 「ラウルが作ってくれたの?」

「約束しただろう」

ラウルは仏頂面で腕を組んだ。ちらりと彼女を一瞥して眉根を寄せる。まさか約束したことを

忘れているのだろうか。まだほんの数日前のことだ。普通ならば覚えていて然るべきである。忘れているとすれば、よほど無関心だったことになる。

だが、その心配は無用だった。

「ありがとう、本当に作ってくれたのね」

レイチェルは嬉しそうに笑顔を弾けさせた。

ラウルは小さく息をついた。

「美味いかどうかは知らん」

「ラウル、スプーンも」

レイチェルは急かすように右手を伸ばした。

「焦るな。今から紅茶を淹れる」

ラウルは湯を沸かしながら、ティーポットとティーカップを手早く準備した。ティーポットに 茶葉を入れ、沸き立ての湯を注ぐ。白い湯気とともに、ふわりと芳醇な香りが立ち上った。蓋を してしばらく置いてから、二つのティーカップに紅茶を注ぎ、ソーサに載せてテーブルの上に 置く。スプーンもプリンの上に置いた。

ティータイムの準備が整うと、ラウルはレイチェルの前に座った。

「それじゃあ、いただきます」

レイチェルは待ちきれないといった様子で声を弾ませると、まず先に紅茶を手にとった。ティーカップに口をつけて傾ける。その途端、目を見開いて大きく瞬きをした。不思議そうに褐色の液体を覗き込み、ゆっくりとティーカップをソーサに戻して言う。

「……美味しい。これ、きのうまでの紅茶と違う」

「きのうではなく、おとといだろう」

ラウルは淡々と訂正する。昨日はラウルのところには来ていない。サイファのところへ行っていたのだ。どうでもいいような些細なことだが、なぜか言わずにはいられなかった。

しかし、レイチェルは気に留めることなく尋ねる。

「これ、どうしたの?」

「前の紅茶がなくなったから、新たに買ってきただけだ」

ラウルは静かに答える。だが、そこにはひとつだけ嘘が混じっていた。前の紅茶はまだなくなってはいない。

「私、これ好き」

「そうか」

にっこりと笑って言うレイチェルに、ラウルは素っ気ない相槌を打つ。だが、内心は違っていた。この紅茶は、彼女のために買ったようなものだった。気に入ってもらえなければ意味がない。といっても、頼まれたわけではない。勝手にやったことである。そうしようと思ったのは、きのうのことがあったからだろう。これもやはり意地のような気持ちが働いたせいかもしれない。

レイチェルは続いてプリンを口にした。

「プリンも美味しい。本当にラウルが作ったの?」

「疑っているのか」

ラウルは紅茶を手に取りながら尋ねた。

「ううん、驚いただけ」

レイチェルは無邪気にそう答えると、ふわりと甘く柔らかい笑みを浮かべた。

「ありがとう、私のお願いをきいてくれて」

ラウルはそれだけで自分の行動が報われたように感じた。

「レイチェル、真面目な話がある」

「真面目な話?」

真剣な表情で切り出したラウルに、レイチェルは小首を傾げて尋ねた。ちょうど食べ終わった プリンのカップを机の上に戻す。

ラウルはじっと彼女の瞳を見つめて口を開いた。

「そろそろ魔導の方も学んでいかなければならない」

今日のように、レイチェルを実験体にしようとする人間がまた現れないとも限らない。自分が 事前に察知できれば潰すつもりだが、陰で計画を進める輩がいても不思議ではない。彼女は未知 の領域を抱える危うい存在である。下手にいじれば、魔導を暴発させてしまうかもしれない。い ざというとき、その危険性を少しでも減少させるためには、彼女に魔導の制御を学ばせる必要が あるのだ。

レイチェルは机の上で小さなこぶしを握りしめ、ゆっくりとうつむいた。

「……魔導はやりたくない」

「高度なものをやろうということではない。ただ、少なくとも制御だけは学ぶべきだと考えている」

ラウルは落ち着いた口調で説得しようとする。

だが、レイチェルは首を小さく横に振った。

「私には制御なんて必要ないわ」

「なぜそう思う」

ラウルは表情を動かさず冷静に尋ねた。

「私にはほとんど魔導力がないの。ラグランジェ失格の出来損ないだって」

レイチェルは顔を上げ、にっこりと微笑んで言った。

「……誰がそんなことを言った」

「ユリアっていう親戚のお姉さん」

確かに、隠れた魔導力を抜きにして考えれば、彼女の魔導力はラグランジェ家の中では劣る方になるだろう。それでも、ほとんど魔導力がないとは言いすぎだ。出来損ないなどという明らかな中傷の言葉を選んでいることから考えると、彼女に何か恨みでもあるのかもしれない。ラグランジェ家の内情はよく知らないが、本家次期当主の婚約者ともなれば、妬みを受けることもあるのだろう。

「おまえにも魔導力はある。それは魔導を学んでいけばわかることだ」

「ユリアに言われたからってだけじゃなくて、自分でも力がないことはわかっているの」 レイチェルは微笑みを保ったまま言った。

ラウルは眉根を寄せた。

「おまえは自分のことをわかっていない」

「いいの、悲観なんてしていないから」

レイチェルは澄んだ声で言う。

「それでも私は幸せよ。みんな私を責めたりしないもの。きっとこのままでいいの。私に魔導は必要ないと思うわ。お仕事をすることもないし……16歳になったら、私、サイファと結婚するから」

ラウルの眉が僅かに動いた。険しい表情でレイチェルに鋭い視線を向ける。

「.....おまえはそれでいいのか」

「えっ?」

レイチェルは大きく瞬きをした。

「その結婚はおまえが望んだことなのかと訊いている」

「望んだっていうか……そう決まっているから……」

彼女は戸惑ったような表情で首を傾げ、曖昧に答えた。

ラウルはまっすぐ彼女を見たまま質問を続ける。

「他人に決められた人生を歩んで、それで幸せなのか」

「私はサイファが好きだし、みんな優しくしてくれるし、それでいいって思ってるんだけど……」

レイチェルは自信のなさそうな声で言う。表情は次第に曇っていった。

「おまえの本当にやりたいことは何だ。自分で考えたことはあるのか」

ラウルは責め立てるように畳み掛けた。

レイチェルは困惑したように蒼い瞳を揺らした。小さな口をきゅっと結び、難しい顔でゆっくりとうつむく。机の上に置いた自分の手をじっと見つめた。

「……悪い、余計なことを言った」

ラウルは頭に手をやり、溜息をついて詫びた。

レイチェルとサイファの婚約については、これまでもずっと小さな棘のように心に引っかかっていた。彼女の意向など少しも考慮されずに決められたことである。口に出すことはなかったが、常に疑問には思っていた。

彼女に不満そうな様子は見られなかった。むしろ、幸せそうに見えた。

だが、それは、初めから他の選択肢をすべて排除されていたためだろう。生まれたときからサイファの婚約者と決められ、16歳で結婚して家庭に入るのだと言い聞かされて育った。他のことは考えも及ばなかったに違いない。言い方は悪いが洗脳のようなものだ。

現実として、彼女がそれを受け入れるしかないことは理解している。彼女ひとりの力ではどうすることもできない問題だ。そうだとすれば、下手に自分の考えなど持たない方が幸せなのかも しれない。 しかし、不条理な運命を当然のように受け入れている彼女を目の当たりにすると、無性に腹立たしく感じられた。それは自分の勝手な感情である。相手に押しつけてはならないものだ。

そう、彼女をこんなふうに問い詰めるべきではなかった。

そもそもラウルは他人には干渉しないようにしている。誰がどういう人生を送ろうと、自分には関係のないことだ。レイチェルについては、様々ないきさつもあり、特別な感情がなかったとはいわないが、それでも積極的に関わろうとはしなかった。

だが、今日は――。

彼女に関することにおける今日の行動は、どれも普通ではない。完全に自分の基準から外れている。いまだに過去の面影を引きずっているのだろうか。いや、そうではない。研究所でアルフォンスに言った理由は嘘ではないが、それはレイチェルに面影を重ねているということではなく、彼女を同じような目に遭わせたくないという思いである。

ラウルは立ち上がった。冷蔵庫から小さなカップを取り出し、レイチェルの前に置く。それは 、先ほどと同じプリンだった。余分に作ってあったものである。

「食べろ」

「うん.....」

レイチェルは曇った表情のまま小さく頷いた。だが、じっとしたまま手を伸ばそうとはしなかった。

「紅茶ももう一杯飲むか」

「うん.....」

ラウルは無言でレイチェルに背を向け、ヤカンに水を入れて火に掛けた。青い炎をじっと見つめる。その青の放つ強い光が、何か自分を挑発しているように感じられた。そんなふうに思うなどどうかしている——小さく溜息をつき、後ろのレイチェルに視線を向ける。

彼女はそっとプリンに手を伸ばしていた。それをすくって口に運ぶと、ようやく少し微笑みを 取り戻した。

「わかったわ」

二個目のプリンを食べ終わり、二杯目の紅茶を飲んでいたレイチェルは、唐突に大きく瞬きを してそう言うと、ティーカップをソーサに戻した。テーブルに腕をついて身を乗り出す。

「ラウル、私にプリンの作り方を教えて」

「……何を言っている」

ラウルは怪訝に目を細めて言う。彼女の発言はあまりに突飛なものだった。いったい何がわかったというのだろうか。何を思ってそんなことを言い出したのだろうか。まるで見当がつかない

「私、このプリンを食べて元気が出たの。幸せを感じたの。だから、私もこのプリンを作ってみ たい、作れるようになりたいなって」

「なぜそうなる.....」

「これが私のやりたいことよ。ちゃんと自分で考えたの」

レイチェルはにっこりとして言った。

ラウルはじっと彼女を見つめる。確かにやりたいことはあるのかと尋ねたが、そういうことをいったのではない。人生をどうするのかということを尋ねたつもりだった。しかし、確かにいきなりそんな大きなことは考えられないだろう。的外れの理解不能な結論でも、彼女が自分で考えて出したのならば、それはそれで前向きといえる。

「おまえ、何か料理をしたことがあるのか」

「お茶を淹れたこともないわ」

レイチェルは清々しいくらいにあっけらかんと答えた。

「……やめておけ、死ぬぞ」

ラウルは眉をひそめ、低い声で言った。

「ラウルに迷惑は掛けないわ。作り方だけ教えて。すぐに作れるようになるとは思わないから、 家で何度も練習しながら頑張るつもり」

「余計に不安だ」

「ねえ、お願い。お母さまに見てもらいながらにするから」

レイチェルは顔の前で両手を組んで懇願した。大きな蒼い瞳が小さく揺れる。

ラウルは腕をつき、額を押さえた。それほど難しいことではないのだが、お茶すら淹れたことのない彼女には危険な作業だ。火傷でもしかねない。だが、こんなにも必死な彼女を見たのは初めてである。そこまでの強い希望であれば叶えてやるべきではないか——そんな気持ちになる。

「……絶対にひとりではやるな」

レイチェルはぱっと顔を明るくして体を起こした。

「ありがとう、約束は絶対に守るから心配しないで」

「今日はもう遅い。あしたでいいな」

ラウルは疲れた声でそう言うと、腕を組んで溜息をついた。

そんなラウルの心情を知ってか知らずか、レイチェルは両手を組んで浮かれた声で言う。

「いつになるかわからないけれど、上手に作れたらラウルにも持ってくるわね」

「食べられるものしか受け付けんぞ」

「ええ、精いっぱい頑張るわ」

レイチェルは愛くるしい笑顔で答えた。

これも我が侭といえばそうだ。だが、今までの我が侭とは違う。単に誰かに何かをしてもらおうというのではなく、自分で考えて努力しようとしている。これまでの彼女にはなかった姿勢である。まだ恐ろしいくらいに危うく未熟だが、彼女は自分の意志を持って歩き始めたのかもしれない。それが良いことなのか悪いことなのか――ラウルにはわからなかった。

その日も医務室はとても静かだった。

昼下がりの穏やかな光が、レースのカーテン越しに柔らかく室内を照らしていた。細く開いた窓から入り込んだ風が、そのカーテンを微かに揺らめかせている。

ラウルは机に向かって黙々と本を読んでいた。来るかどうかもわからない患者を待っているのである。ひとりも来ない日の方が多い。それでも、ここで待機するのが王宮医師としての仕事なのだ。

「ラウル、こんにちは」

ノックもなしに扉が開き、レイチェルが澄んだ声で挨拶をしながら入ってきた。軽い足どりで ラウルに駆け寄り、後ろで手を組んでにっこりと笑顔を見せる。

ラウルは彼女を冷たく一瞥して言う。

「何をしに来た。今日は家庭教師は休みだろう」

「だから遊びに来たの」

「帰れ。家でプリンでも作っていろ」

彼女にはきのう、約束どおりプリンの作り方を教えてやった。呆れるくらい詳細なレシピも渡した。あしたから頑張ると張り切っていたはずなのに、どういうつもりで遊びに来たのかわからない。単なる小休止だろうか。それとも諦めたのだろうか。もうプリン作りに成功した――とは、とても考えられない。

レイチェルは顔の横で右手を広げて見せた。真ん中の三本の指の先には、それぞれ絆創膏が巻いてあった。

「.....火傷か」

「ええ、午前中に作りかけていたんだけど、そのときに手を滑らせてしまったの。それで、この 火傷が治るまでプリン作りはお休みしなさい、ってお母さまに言われて」

ラウルは溜息をついた。早々に懸念が現実になってしまった。だが、これくらいの火傷でまだ 良かったといえるだろう。診てみないと正確なことはわからないが、そう酷くはなさそうである

「座れ」

患者用の丸椅子を顎で示して言う。本を閉じて立ち上がると、薬、包帯、ガーゼなどを棚から取り出し、手際よく準備を進めていった。

「本当にお医者さんなのね」

レイチェルは感心したように言った。数日前にも同じことを言っていたが、あのときは単に医務室を見ただけである。実際に医者として行動するラウルを見て、初めてその実感を持ったに違いない。

「ようやく信じたのか」

「疑っていたわけじゃないの。ただ、少し不思議な感じがしただけ。私にとってラウルは家庭教師の先生だから、お医者さんっていう印象があまりなくて」

レイチェルはにっこりと微笑んだ。

ラウルは無言で椅子に座り、彼女と向かい合った。ほっそりとした白い手を取り、すべての絆 創膏を丁寧に外していく。火傷は思ったとおり軽度のものだった。跡が残ることもないだろう。 消毒をして薬を塗り、ガーゼを当てて包帯を巻いた。三箇所もあるため、少し仰々しく見える。

「ずいぶん大袈裟ね。指が動かしにくいわ」

「我慢しろ」

不満げなレイチェルを、ラウルは冷たく一蹴した。

「どのくらいで治るの?」

レイチェルは広げた右手を表にしたり裏にしたりしながら尋ねる。

「数日、長くても一週間だ」

「治ったらまた頑張るわね、プリン作り」

「……今度こそ気をつけろ」

ラウルは静かに注意を促した。しかし本音は違う。もう止めろと言いたかった。だが、そう言ったところで、彼女が素直に聞くとは思えない。それに、せっかく彼女が意欲を見せているのだ。なるべくその気持ちを尊重してやりたいという思いもあった。

「ありがとう。いつかきっと、ラウルに食べてもらえるものを作るわね」

レイチェルは眩しいくらいの笑顔を見せた。

ラウルは眉根を寄せて目を細めた。

「治療は終わった。もう帰れ」

「これから外へ遊びに行かない?」

レイチェルは顔を斜めにして誘いかけた。

「帰れ」

ラウルは冷たくそう言うと、彼女に背を向けて後片付けを始めた。

それでもレイチェルは引かなかった。

「行きたいところがあるの」

「ひとりで行け」

「ラウルと一緒に行きたいの」

「仕事中だ」

「一時間だけ休憩して行きましょう、ね?」

「……一時間だけだぞ」

ラウルは観念したかのように溜息をついて言った。結局、いつも彼女の思いどおりになってしまう。それを許しているのは、彼女に対する自分の甘さに他ならない。そのことはわかっていた。 。そして、その理由もはっきりと自覚していた。

暖かな陽光が降りそそぐ中、ラウルとレイチェルは人気のない小径へと足を進めた。王宮から

のざわめきが次第に小さくなっていくのを感じる。

「どこへ行く」

「きれいなところ」

レイチェルははぐらかすように答え、顔を上げてくすりと笑った。妙に嬉しそうに見える。どうやら今はまだ秘密にしておきたいらしい。着いてからのお楽しみということなのだろう。ラウルはそれ以上の追及はしなかった。

しばらく歩くと、蔦の絡みついた煉瓦造りのアーチが現れた。

——そうか、ここは……。

特徴的なその建造物を目にして気がついた。いや、思い出したというべきだろうか。自分は以前にもここへ来たことがあったのだ。記憶が正しければ、この先は——。

「ね、きれいでしょう?」

アーチをくぐって駆け出したレイチェルは、大きく両手を広げ、まばゆい笑顔で振り返った。 金の髪が軽やかに舞い上がり、後方からの光を受けて透き通るように煌めく。

その背後には、色鮮やかなバラ園が一面に広がっていた。

「今がいちばん花のきれいな時季って聞いたから、ラウルと一緒にここへ来たかったの」 そう言うと、後ろで手を組み、にっこりとして首を傾ける。

「ラウルは初めて?」

「サイファに連れてこられたことがある」

ラウルは彼女の方へ歩きながら答えた。それはもう10年以上前のことである。このバラ園は、 あのときとほとんど変わっていない。少し広くなったくらいである。今でも手入れは隅々まで行 き届いているようだ。様々な種類のバラが見事に咲き誇っている。ほんのりと甘い匂いが鼻を掠 めた。

「もうずっと昔のことだ」

「そうだったの」

レイチェルは相槌を打って微笑むと、バラ園の中の細道に足を向けた。

ラウルも彼女について歩いた。彼女の足どりが次第に軽くなっていくのがわかった。薄水色の大きなリボンが弾んでいる。顔を見ずとも、浮かれているのが伝わってきた。

ふと、彼女の隣に咲いていた淡い色の花が目に止まった。それはピンクローズである。サイファが好きだと言っていた花だ。レイチェルに似ているというのがその理由だった。

そう、確かに似ているのだ。華やかさも、可憐さも、その棘さえも――。

「気をつけろ。それ以上、怪我を増やすな」

「そうなったら、またラウルに治療してもらうわ」

レイチェルは愛くるしい笑顔でラウルの忠告を受け流し、一輪のピンクローズに手を伸ばした。そっと顔を近づけて目を閉じる。薄く色づいた小さな唇が、同じ色の花びらを掠めた。

「ラウルはこの花、好き?」

「.....ああ」

ラウルは少しの躊躇いのあと、静かな声でそう返事をした。

以前は好きでも嫌いでもなかった。そもそも花に興味などなかった。だが、その花だけは、いつのまにか自分の中で特別な存在になっていた。間違いなくサイファとレイチェルの影響である

「サイファもこれが好きなのよ」

「知っている」

ラウルは無愛想に答えて腕を組んだ。今はそんな話など聞きたくなかったが、レイチェルに他 意はないのだろう。思ったことを無邪気に口にしたにすぎない。ただそれだけだ。

「ねえ、ラウル」

レイチェルは体を起こして振り返った。後ろで手を組み、大きな瞳でラウルをじっと覗き込む

「来て良かった?」

「.....ああ」

ラウルは無表情のまま答えると、嬉しそうに微笑んだ彼女を見下ろした。これが肯定の理由である。彼女が喜んでいるのであれば、自分の気持ちはどうであれ、ここへ来た価値があるといえるだろう。いや、彼女が笑顔を見せてくれるのであれば、自分自身も来て良かったと思える。

レイチェルは微笑んだままで言う。

「キスしてくれる?」

ラウルはわけがわからず眉根を寄せる。

「何だ、唐突に」

「好き合っている二人は、そうやって気持ちを確かめ合うんですって」

いったいそれはどこから得た知識なのだろうか。怪訝に思ったが、敢えて尋ねなかった。聞いたところで、応じるわけにはいかないのである。彼女はサイファの婚約者なのだ。

「そういうことはサイファに言え」

「サイファには結婚してからって言われたの」

レイチェルは軽く答えた。

ラウルは表情を険しくして口を結んだ。彼女が何を考えているのか理解できなかった。おそらく深くは考えていないのだろう。彼女を常識で測ろうとすることが間違いだ。これまで閉鎖的に育てられてきたせいか、普通ならば持ち合わせているべき感覚の欠落が見受けられることも多い

「私はサイファの代わりというわけか」

「そうじゃないわ。私、ラウルのことが好きだし、ラウルだって私のことが好きでしょう?」 レイチェルは当然のように言った。

「おまえが私を好きだというのは幻想だ」

「そんなことないわ」

「ならば、どこが好きなのか、なぜ好きなのか言ってみろ」

ラウルは平静を装いながらも感情的に問い詰める。

「人を好きになるのに理由なんてないでしょう?」

レイチェルは不思議そうに首を傾げる。

「それは思考の放棄に対する言い訳にすぎない」

ラウルは容赦なく切り捨てた。

「必ずしも理由を意識して好きになるわけではないが、好きになったことには理由が存在する。 それを考えることすらせず、ただ相手に気持ちを押しつけるだけというのは、傲慢としか言いようがない。理由を問われれば答える、それが相手に対する誠意だろう。もし理由を考えても見つからないのであれば、その気持ちは単なる思い込みということだ」

レイチェルはじっと黙って聞いていた。話が終わると、ラウルを見つめたまま静かに尋ねる。

「じゃあ、ラウルが私を好きな理由は?」

ラウルはムッとして低い声で言う。

「勝手に決めつけるな。いつ私がおまえを好きだと言った」

「でも好きなんでしょう?」

レイチェルはさらりと言う。そのことを少しも疑っていない様子だ。むしろ、なぜ認めないのかわからないとでも言いたげな顔をしている。

その何もかも見透かしたような態度が腹立たしかった。

「そうであっても、私がそれを口にしていない以上、理由を教える筋合いはない」

「知られたくない理由なの?」

ぽつりと投げかけられた疑問。

「......そういうわけではない」

ラウルは僅かに視線を落として答えた。自分の気持ちについて口を閉ざしているのは、それが最善だと判断したからだ。逃げていると思われるのは仕方がない。だが、変に誤解されることだけは避けたかった。彼女の問いかけは、単なる思いつきだったのだろうか。それとも、本当にそう思っているのだろうか。だとすれば、自分はどう応じるべきなのだろうか——。

「ごめんなさい、私の方が理由を言わなければならないのよね」

レイチェルは申し訳なさそうに肩をすくめて微笑んだ。ラウルに背を向けると、後ろで手を 組み、空を見上げながらゆっくりと歩き出す。ちらりと見えた横顔は、真剣そのものだった。問 われた答えを懸命に探している様子である。

ラウルも彼女の後ろについて歩く。

「無理に言わなくてもいい」

「ううん、ちゃんと考えて答えるわ。信じてもらいたいから」

レイチェルは振り返らずに言った。

彼女の指に巻かれた白い包帯が見える。

両側のピンクローズが小さく揺れた。

「ラウルは.....」

レイチェルはそう切り出して足を止めた。その場でくるりと振り返る。金色の髪と薄水色のドレスがふわりと舞った。

「ラウルは優しいから好き」

甘く愛らしく微笑み、澄んだ声を響かせる。

「……私は優しくなどない」

ラウルは表情を動かさず、気難しい声で反論する。

「私のことをいつも真剣に考えてくれているでしょう?」

「義務を果たしているだけだ」

「私のことを好きでいてくれるのも義務なの?」

レイチェルは淡々と追及する。

ラウルは溜息をついた。納得したという態度を見せない限り、いつまでも食い下がってきそうな気がした。今の彼女はそのくらいひたむきに見えたのだ。言い合って勝てる気がしない。

「.....もういい、わかった」

レイチェルの顔がパッと輝いた。胸の前で両手を合わせる。

「本当?じゃあ、キスしてくれる?」

「それとこれとは話が別だ」

ラウルはきっぱりと冷静に突き放した。他に仕方がなかった。こればかりは彼女の言いなりになるわけにはいかない。その強い決意を瞳に宿す。

「そう……」

レイチェルはラウルの意思を感じ取ったのだろう。もう我が侭を通そうとはしなかった。一瞬だけ悲しげに表情を曇らせたが、すぐにもとの明るい笑顔に戻った。気にしないとばかりに、悪戯っぽく肩をすくめて見せる。そして、再びラウルに背を向けると、まるで何事もなかったかのように、両側のバラを愛でながら歩き始めた。

ラウルは目を細めて青い空を仰いだ。小さく溜息をつく。

「レイチェル、そろそろ帰るぞ」

「もう? 約束の時間はまだ残っているはずだけど……」

レイチェルは瞬きをして振り返り、遠慮がちに不満を口にする。彼女の言うように、確かにまだ約束の時間は残っていた。一時間の半分ほどしか過ぎていない。だが、ラウルはここを離れたかったのだ。彼女のようには気持ちを切り替えられない。この場で散歩の続きをする気にはなれなかった。

「部屋でお茶を淹れてやる」

「本当? 嬉しい」

レイチェルは無邪気に声を弾ませた。ラウルの隣に駆け寄ると、下から覗き込んで笑顔を見せる。今までと何ら変わることのない愛らしい笑顔だった。

ラウルは無言で彼女の手を取り、柔らかく包み込むように握った。

「えっ?」

レイチェルは大きく瞬きをしてラウルを見上げた。

「今日だけだ」

ラウルは無表情で彼女を一瞥して言う。

「ありがとう」

レイチェルはそう答えると、ふたりの手に視線を落とし、そっと穏やかに微笑んだ。それは、 今までに見たことのない、幸せに満たされたような優しい表情だった。

繋がれた大きな左手と小さな右手。 これが彼女の気持ちに対する自分の行動の妥協点だった。 彼女が望んだものとは違う形だが、求める本質は同じだろう。 ラウルは手の中の温もりを感じながら、ゆっくりと歩き始めた。 ラウルがレイチェルとバラ園に行った日から2ヶ月が過ぎた。

家庭教師は淡々と続けている。

レイチェルはそれまでと変わることなく真面目に授業を受けていた。そして、終了後にはラウルを医務室まで送り、ついでに部屋に紅茶を飲みに来るのだ。もっとも、ラウルとのティータイムは毎日というわけではない。週に1、2回は、仕事を早く終えたサイファと過ごすために、部屋には寄らずに帰っていった。婚約者の方を優先するのは当然のことだろう。

約束していた手作りのプリンは、まだ一度も持ってきていない。どうやら納得のいくものが作れていないようだ。ラウルのものと比べると何かが違う、とよく嘆いている。それでも諦めることなく、休日のたびに奮闘しているらしい。

学習状況は良い方に向かっているといっていいだろう。

応用問題はまだ苦手なようで、すぐに自力で解くことはないが、水を向けると少しずつ考えるようになった。当然のように思考を放棄していたときから比べると、格段の進歩であるといえる

魔導についても、理論の方だけは渋々ながらも授業を受けるようになった。ただ、実技の方は、頑として拒否している。彼女に関していえば、制御を学ぶことが何より必要なのだ。理論だけでは足りない。実際にやってみないことには、決して出来るようになるものではない。このままというわけにはいかないのだ。何とかしなければ——。

「レイチェル、今度、テストをやる」

魔導理論の授業を終えたラウルは、教本を閉じながらそう告げた。

レイチェルは目をぱちくりさせて振り向く。

「魔導の?」

「そうだ。この本から出す」

ラウルは右手で先ほど閉じた教本を掲げた。この魔導理論の授業で使ってきたものだ。今日の 授業でこの本は一応終了ということになっている。

「どうして魔導だけテストをするの?」

彼女の学力を確認するため、最初に一度だけ受けさせたことはあったが、それ以外ではテストを行ったことはなかった。それなのに急に一科目だけ、それも他と比べて学習期間の短い魔導だけとなると、彼女の疑問も当然である。

ラウルは正面から彼女を見据えた。

「このテストで一問でも間違えたら、魔導の実技の方も学んでもらう」

「それって……」

レイチェルは目を大きくして何かを言いかけたが、すぐに口をつぐんだ。キュッと眉根を寄せてうつむき、何もない床の一点を見つめながら考え込む。そして、ゆっくりと顔を上げると、大きな蒼の瞳をまっすぐラウルに向けた。

「全問正解だったら、私のお願いを聞いてくれる?」

「いいだろう、何だ」

ラウルは腕を組んで言った。彼女がこのテストを受けなければ始まらない。そのくらいの約束はしてやってもいいだろうと思う。多少の無理を言われても承諾するつもりだった。だが——。

「キスして」

小さな薄紅色の唇から、短い言葉が紡がれる。

ラウルの眉がピクリと動いた。

「おまえは馬鹿か」

「だったら、私、そんなテスト受けないから」

レイチェルは軽い調子で切り返した。ラウルが条件を呑まない限りは、本気でテストを受けないつもりのようだ。彼女からすれば、ラウルが条件を呑んでも、テストを取りやめても、どちらでも構わないのだろう。

「そんな勝手が許されると思っているのか。魔導の力を持って生まれてきたからには、魔導の制御を学ぶ義務がある。何度もそう言ったはずだ」

「それって、私が全問正解できないと思っているってこと?」

ラウルは何も答えられなかった。確かにそう思っている。それが目的のための前提条件なのだ。だが、彼女に悟られてはならなかった。あまりにも不用意な発言をしてしまったと思う。

レイチェルはニコッと笑った。

「だったら約束してくれてもいいじゃない。全問正解だったら私のお願いを聞いてくれるって。 そうなることはないって思っているんでしょう?」

ラウルは少し考えたあと、彼女を見つめて静かに言う。

「いいだろう、その条件を呑もう」

「ありがとう、ラウル!」

レイチェルは胸の前で両手を組み合わせ、無邪気にはしゃいだ声を上げる。

「テストは一週間後にしてくれる? ちゃんと勉強したいから」

「わかった、では一週間後だ」

ラウルは感情のない声でそう言うと、難しい表情で僅かに目を細めた。

その日から、レイチェルはラウルの部屋に来なくなった。医務室の前までは今までどおりに来るが、中には入らず、そのまま帰っていくのである。

怒っているとか、喧嘩をしたとか、そういうことではない。

きちんと試験勉強をしたいという彼女の前向きな意思からの行動である。ティータイムの時間 を試験勉強に費やすのだと言っていた。これほどまでに懸命な彼女は、今までに見たことがない 。必死といってもいいくらいだ。

魔導をやりたくないという気持ちがそこまで強いのだろうか。

去り行く彼女の後ろ姿を見るたびに、ラウルは漠然とそんなことを考えていた。

テストの前日――。

ラウルは自室で机に向かい、テストの準備をしていた。教本から満遍なく出題箇所を選び、問題を作る。ほとんどは彼女が解けないレベルの問題ではない。だが、一問だけ確実に解けない問題を作った。それは、教えていない章から出題したものである。別の教本で詳しく教える予定にしていたので、この本では飛ばした章があったのだ。

彼女には、教わっていないことを自力で勉強して理解する力はまだない。この章から出題されるかもしれないと予想は出来ても、それに対応することは不可能なのである。

つまり、全問正解はありえないのだ。

そして、約束どおり、彼女は魔導の制御を学ぶことになるだろう。

それがラウルの筋書きだった。

褒められた方法とはいえない。だが、他に実現可能な手段が思い浮かばなかったのだ。あまり 悠長に構えている余裕はなかった。彼女の魔導力を利用しようとする輩が、またいつ現れないと も限らない。下手なことをして暴発させられるかもしれない。そうなる前に、自分を守る術を身 につけさせる必要があるのだ。

ラウルは顔を上げ、向かい側の席をじっと見つめる。そこは彼女の指定席だった。ここへ来るたびに、いつも同じその席に座るのである。今は空席で誰もいない。今後もずっと空席のままかもかもしれない。このテストのことで彼女に反感を持たれてしまうのではないかと懸念しているのだ。

だが、たとえそうなったとしても仕方のないことである。それでも自分がやらなければならない。自分以外の誰にも託せることではない。すでに覚悟は決めていた。

翌日、ラウルは作成したテスト問題を持って、レイチェルの家に向かった。少し足が重く感じる。そんな自分の不甲斐なさに呆れ、小さく溜息をついて顔を上げた。澄み渡った青空から降りそそぐ陽射しは、痛いくらいに強かった。眉をしかめて目を細めると、焦茶色の長髪をなびかせながら、雑念を振り切るように足を速めた。

ラウルを部屋に迎え入れた彼女は、普段と変わることなく明るい笑顔を振りまいていた。今日がテストの日であることを忘れているのかと心配になったくらいである。だが、それは杞憂だった。

「今日はテストなんでしょう? 今から始めるの?」

レイチェルは机に向かって座ると、すぐに尋ねてきた。

ラウルは持ってきたテスト問題を彼女の前に広げて置いた。

「時間は90分だ」

「わかったわ」

レイチェルはにっこりと微笑んで答えた。

ラウルは机上の時計で時間を確認すると、静かに短い合図をする。

「始めろ」

レイチェルはその言葉と同時に鉛筆を手に取り、真剣な顔で問題を解き始めた。

ラウルは少し離れたところに椅子を置き、後ろから彼女の様子を窺った。特に悩む様子もなく解いているようだ。最初のうちはそうだろう。だが、最後には絶対に解けない問題が待っているのだ。彼女の後ろ姿を見ながら、眉根を寄せて目を細めた。

「終わったわ」

制限時間の90分を待たずに、レイチェルはそう言って鉛筆を置いた。解答用紙をすべてきちんと重ねると、窓枠にもたれかかって立っていたラウルに振り向き、にっこりと大きく微笑んだ。

「もういいのか」

「ええ」

ラウルは訝しげに眉をひそめる。彼女の曇りのない笑顔がどうにも腑に落ちなかった。解けない問題があったのならば、笑っている場合ではないはずだ。解けたつもりでいるのだろうか。それとも諦めたということなのだろうか――胸にわだかまるものを抱えながら、彼女の方へ足を進めて言う。

「今から採点をする。おまえはしばらくどこかで待っていろ」

「わかったわ」

レイチェルは天蓋のベッドに駆けていくと、その縁に弾むように腰掛けた。そして、ふんわりとした白い布団の上に、倒れこむように身を横たえる。その肩が小さく揺れ始めた。何か楽しそうにくすくすと笑っているようだ。

ラウルは怪訝に彼女を一瞥すると、無言で机に向かって採点を始めた。

なぜだ――。

ラウルは赤ペンを手にしたまま、反対の手で額を押さえた。長めの前髪をくしゃりと掴む。

彼女の回答はすべて完璧だった。絶対に解けないはずだった最後の問題も、文句のつけようもないくらいに見事に解かれている。ありえない——。だが、これは現実だ。

「ね、どうだった?」

レイチェルの声が耳元で聞こえた。待ちきれなかったのか、彼女はラウルのすぐそばまで様子 を見に来ていた。採点中の解答用紙をニコニコしながら覗き込む。

「最後の問題も合っているでしょう?」

「.....ああ」

ラウルは観念して、赤ペンでゆっくりと丸をつけた。

「わぁ、全問正解ね」

レイチェルは顔の前で両手を組み合わせ、はしゃいだ声を上げた。

「.....なぜだ」

「頑張ったんだもの。ラウルも知っているでしょう?」

彼女が努力をして結果を出したことは、素直に喜ぶべきことだろう。だが、これで、魔導の制御を学ばせようというラウルの目論見は崩れ去ってしまった。こんなはずではなかった。いった

い何を見誤ったのだろうか。

しかし、ここで諦めるわけにはいかない。彼女にはどうしても必要なことなのだ。しつこいと思われようとも、早く次の手を考えなければ——。

「ラウル、覚えてる?」

レイチェルは後ろで手を組み、小さく首を傾げてにっこりと微笑む。

「何をだ」

「全問正解だったらキスしてくれるって」

ラウルは机に向かったままハッと目を見開いた。確かにその約束はした。だが、今の今まで忘れていた。全問正解はありえないと考えていたせいかもしれない。可能性があると考えていたならば、そもそもそのような条件は呑まなかった。

「今さらダメなんて言わないでしょう? ラウルは約束を破ったりしないものね」

レイチェルは先回りして釘を刺すように言う。

確かに約束を破ることなどあってはならない。家庭教師の自分が約束を破ったのでは、教え子のレイチェルに約束を守れなどとは言えなくなる。今後の信頼関係にも影響を及ぼすことになるだろう。

しかし、だからといって、彼女の望みをきいてやるわけにもいかないのだ。自分にとってはたいしたことのない行為だとしても、彼女にとっては大きな意味を持つことになる。おそらく、彼女自身が思っている以上に重大な意味を——。

「どうしたの?」

レイチェルは身を屈めて心配そうに覗き込んだ。細い金の髪がさらりと揺れる。強い引力を秘めた深い蒼の瞳で、答えを探るようにじっと見つめる。

ラウルは険しい顔をゆっくりと彼女に向けた。

「おまえはわかっているのか」

「何を?」

レイチェルはきょとんとして尋ね返した。

やはり、少しもわかっていないのだろう。詳しく尋ねるまでもない。これほど率直に尋ね返すということは、思い当たる節がまるでないということだ。罪悪感の欠片もない様子からも明らかである。

ラウルは思いつめた表情で頭を押さえた。その眉間には深い皺が刻まれていた。

「ラウルはそんなに嫌なの?」

「そうではない」

「じゃあ、何を悩んでいるの?」

「おまえのことだ」

「私に何か問題でもあるの?」

レイチェルの容赦ない追及は続く。彼女のためにこれほど苦慮しているにもかかわらず、その彼女がさらに追撃してくるのだ。次第に苦々しく思う気持ちが湧き上がってきた。

「……いいだろう、約束を果たしてやる」

ラウルは投げやりに椅子を引いて立ち上がった。背筋を反るくらいに伸ばし、睨むように見下 るしながら腕を組む。

彼女は子供のように無邪気にニコニコしていた。いや、実際に子供のようなものだ。当たり前の常識も知らず、思いのまま自由奔放に行動するなど、子供としかいいようがない。

そういうところが腹立たしかった。だが、同時に惹かれてもいるのだ。

「後悔しても知らんぞ」

「後悔なんてしないわ」

レイチェルは大きな瞳でラウルを見つめ、澄んだ声できっぱりと言った。しかし、何もわかっていない彼女の決意など何の意味もない。それでも、ラウルにはその言葉が必要だったのかもしれない。

「目をつむれ」

「どうして?」

「やりにくい」

「でも、目をつむったら見えないわ」

「……好きにしろ」

ラウルはもう何も考えないようにした。

細い肩に手を掛けると、身を屈めて彼女に顔を近づける。

焦茶色の長髪がカーテンのようにふたりを覆い隠した。

そっと唇を触れ合わせる。

鼓動を3つ数える。

ゆっくりと顔を離して身を起こす。

たったこれだけのこと。

だが、しかし――。

レイチェルは目を大きくして、離れていくラウルをじっと見つめた。透けるような白い肌には 僅かな赤みが差し、薄紅色の小さな唇は半開きになっている。少しぼんやりしている様子だった

ラウルは彼女を見下ろし、感情を抑えた低い声で言う。

「気が済んだか」

「ええ、ありがとう」

レイチェルは我に返ってにっこりと答えた。いつもと変わらない愛くるしい笑みの中に、幸せ に満たされたような優しい表情が広がっている。それは、バラ園で手を繋いだときに見せたもの と同じだった。

「愚かな女だ」

何もわかっていないで幸せに浸っている彼女は愚かだ。

だが、わかっていながら止めなかった自分はもっと愚かだ。

彼女にはきちんと伝えて説明すべきだった。その望みはサイファを裏切る行為だということを

。そして、ラグランジェ本家次期当主の婚約者であるという事実の重みを——。 だが、どうしても口に出すことができなかった。

別にサイファとの結婚を阻止しようなどとは思っていない。彼女は最終的にはサイファを選ぶ ことになるだろう。そうであるべきだと思う。納得はいかないが、彼女のためを思えば、現実問 題として最善の選択なのだ。それでも、その手助けをすることだけはしたくなかった。

だから、沈黙という嘘をついたのだ。

「早く行きましょう。今日は久し振りにラウルのところでお茶をするんだから」

レイチェルは屈託なく澄んだ声を弾ませた。そして、軽い足どりで扉まで駆けていくと、くるりと振り返り、とびきりの笑顔を見せた。後ろで手を組み合わせ、大きく瞬きをすると、愛らしく小首を傾げる。

――おまえは知らない、本当の私を。

ラウルは心の中で静かに呟き、しかし固く口を閉ざしたまま、扉で待つ彼女のもとへ足を進めた。

「やあ、ラウル」

サイファはいつものように人なつこい笑顔を浮かべると、塀に寄りかかったまま軽く右手を上げた。昼下がりの強い陽射しを浴び、濃青色の制服がよりいっそう鮮やかに見える。当たり前のように佇んでいるが、ここは王宮ではなくレイチェルの家の前である。

「こんなところで何をしている」

「ラウルを待っていたんだよ」

家庭教師であるラウルがこの時間にここへ来ることは、サイファは当然ながら知っていることだ。だが、これまで医務室に来ることはあっても、王宮の外で待ち伏せされたことはなかった。わざわざ仕事を抜けて来るほどの用件なのだろうか。

ふと三日前のことが頭をよぎる。

だが、すぐにその考えを自分で否定する。あのことについては、レイチェルには口止めをしておいた。その理由はわかっていないようだったが、誰にも言わないことについてはとりあえず承諾してくれた。彼女がそう簡単に約束を破るとは思えない。第一、サイファがそのことを知っているとしたら、こんな笑顔でラウルの前に立っていないはずだ。

「レイチェル、良く出来ていただろう?」

サイファは口もとに薄い笑みを乗せて言う。

ラウルの眉がピクリと動いた。

それがテストのことだというのはすぐにわかった。そして――。

「……おまえが教えたのか」

「一週間もあったから余裕だったよ」

サイファは明るい笑顔を見せる。

「仕事はどうした」

「家庭の事情ということで、早く帰らせてもらったんだ」

ラグランジェ本家の次期当主が「家庭の事情」と言えば、表立って咎めることなど誰にも出来ないだろう。サイファはそのことをよく理解している。その上で、あえてその言葉を選んでいるのだ。利用できるものは遠慮なく利用するというのが彼の考えである。

「レイチェルがめずらしく真剣に頼んでくるから断れなかったんだよ。まあ、僕としても、レイチェルに頼りにされて嬉しかったんだけどね。それに、家庭教師気分を味わえてなかなか楽しかったよ」

サイファはくすっと笑うと、少し真面目な顔になった。

「だが、少し気になってな」

「何だ」

「教えてもいない章から出題するなんて、ラウルらしくないからさ」

サイファは鋭いところをついてきた。

「僕は絶対に出ないって言ったんだけど、レイチェルは絶対に出るって言い張ってね。まあ、勉

強するのは悪いことじゃないし、それでレイチェルの気が済むのならと思って教えてあげたんだけど、テストを見せてもらったら本当にそこから出題されていたから驚いたよ」

ラウルは眉根を寄せた。

「おまえのせいで魔導を教える機会をふいにした」

「どういうことだ?」

サイファはきょとんとして尋ねる。

ラウルはテストの目的について説明する。もちろん、レイチェルの提示した条件については触れなかった。もともと後付けの条件であるため、それを言わなくとも話が不自然になることはない。

「それであんなに必死だったわけか……」

サイファは素直に納得したようだった。腕を組みながら難しい顔で言う。

「魔導は徹底的に嫌がっているからなぁ」

「おまえさえ余計なことをしなければ、上手くいったはずだった」

ラウルは感情のない目で見下ろした。知らなかったこととはいえ、結果的にサイファが大切な計画を妨害したことになるのだ。そして、レイチェルの無邪気な裏切りを手助けしたことにもなる。それも彼自身に対する裏切りを——。そのことはまだ知らない。いや、今後も知ることはないだろう。

サイファは眉をひそめて睨み返した。

「あのなぁ、そんな浅はかな手を使うからいけないんじゃないのか? 家庭教師のやることじゃないぞ。ラウルにしてはあまりにも粗末だな。こういうことについては、レイチェルのためにも、正面からきちんと説得するのが筋だと思うけどね」

「説得は何度も試みたが、了解を得られなかった」

ラウルの胸に苦々しい思いがわだかまる。サイファの主張がまぎれもない正論であることは わかっている。だが、理想どおりにいくものではない。レイチェルを説得できないとなれば、別 の方法をとるしかないと考えたのだ。いつまでも先延ばしにするわけにはいかないのである。

「なら、切り札を使うか?」

サイファは上目遣いでそう言うと、片方の口の端を上げた。

「何だ」

「僕ならレイチェルを説得できる」

ラウルは僅かに目を細め、冷たい視線を送った。

「たいした自信だな」

「彼女は僕の言うことなら何でも聞くからね」

サイファは当然のように言う。そのことがラウルの癪に障った。ムッとして言い返す。

「だったら、さっさと説得していれば良かっただろう」

「無理強いをするのは趣味じゃないんだよ。今回はラウルが困っているから特別だね」

サイファは無邪気なくらいに屈託のない笑顔を見せた。鮮やかな金の髪がさらりと揺れて上品な煌めきを放つ。その言いようのない眩しさに、ラウルは思わず眉根を寄せた。

「あら、サイファ、どうしたの?」

門を開けて外に出てきたレイチェルは、二人の姿を認めると、驚いたように目をぱちくりさせて声を掛けた。サイファがここにいることもそうだが、ラウルと一緒にいることを不思議に思ったのかもしれない。

サイファは慌てることなく尋ね返す。

「レイチェルこそどうしたの?」

「ラウルが遅いから心配になって見にきたの」

ラウルはいつもきっちりと約束の時刻に到着するようにしていた。今日はサイファと話している時間分だけすでに遅れていることになる。

「ごめんね、ちょっとラウルと話したいことがあったんだ」

「何の話?」

「おいで、レイチェル」

サイファは寄りかかっていた塀から体を離すと、すっと右手を伸ばして彼女を呼んだ。レイチェルは素直に小走りで駆けていく。サイファはその細い腰に両手をまわして彼女を捉えると、まっすぐに蒼の瞳を見つめ、柔らかく微笑んで言う。

「レイチェル、先生の言うことは聞かないとダメだよ」

「聞いているわ」

「魔導をやりたくないって我が侭を言っているだろう?」

「.....ええ」

僅かにレイチェルの表情がこわばった。

「魔導の力を持つ者は、その扱い方を知る必要がある。義務だといってもいい。そして、それは 君自身を守ることにも繋がるんだ。難しいことじゃないよ。何も高度な魔導を使いこなせという んじゃない。制御の方法を身につけるだけでいいんだ。僕も、アルフォンスも、アリスも、みん なやってきたことだよ」

「でも、私は……私には……」

「大丈夫だよ。僕の言うことを信じて」

サイファは慈しむように彼女の頬に触れた。手のひらでそっと包み込む。

ラウルは仏頂面で腕を組み、その様子を眺めていた。説得の内容は、ラウルがこれまで幾度となく口にしてきたものと変わらない。それでも彼女の心を動かすことは出来なかったのだ。彼女がどれほど頑なに拒絶しているか、サイファは知らないのだろうか。こんなに簡単に説得できれば苦労はしない。そう思った。だが——。

「.....わかったわ」

レイチェルは真摯にサイファを見つめてそう言った。まだ不安そうではあるが、懸命にそれを受け入れようとしているように感じられた。少なくとも、この場を言い逃れるための嘘や出任せではなさそうだ。

「ありがとう」

サイファは優しく礼を言うと、彼女の頭にそっと手を置いた。彼女は表情を緩めて微笑みを浮かべる。大きいとはいえない手だが、彼女には十分な温もりと安心感を与えているのだろう。

「それじゃあ、先生、あとはよろしく頼むよ」

「.....ああ」

サイファが顔を上げてにっこり微笑むと、ラウルは無表情のまま低い声で返事をした。

「ラウル、どうしたの? 怒っているの?」

「怒ってなどいない」

小走りでついてくるレイチェルに振り返ることなく、ラウルは突き放すように答えた。大きな 足どりで彼女の部屋に入ると、立ったまま腕を組んで溜息をつく。

怒ってなどいない、ただ、少し面白くなかっただけだ。

自分も同じように説得したはずなのに、彼女の態度はまるで違う。

やはり、彼女にとってサイファは特別なのだろうか。

サイファの言うことであれば何でも聞くのだろうか。

なぜ、そこまで――。

納得のいかない気持ちが、心の奥でくすぶり続けている。

しかし、これで魔導の制御を学ばせることはできるのだ。今はこのことを考えなければならない。大きく呼吸をしてから彼女に振り向く。

「本当に魔導をやるんだな」

「ええ、サイファと約束したから」

レイチェルはラウルの気持ちを逆撫でするような返事をする。もっとも、彼女にそのつもりがないことは十分に理解している。ラウルの心情など何もわかっていないのだ。

「明日から魔導の訓練を行う。もう少し動きやすい服装を用意しておけ」

「明日から、ね……わかったわ」

レイチェルの声は硬かった。声だけではなく表情も硬かった。小さな口をきゅっとつぐんで目を伏せると、何もない床の一点をじっと見つめる。気のせいか、今にも泣き出しそうに見えた。

「心配するな、危険なことはしない」

「.....嫌いにならないで」

レイチェルは震える声でぽつりと言う。

ラウルは怪訝に目を細めた。彼女がなぜそのようなことを言い出したのかわからなかった。苦 手なことをやらされる不安や恐怖を抱え、心細くなっているのかもしれない。

「嫌いになどならない」

正面から彼女に向き直り、落ち着いた声ではっきりと答える。

レイチェルはうつむいたまま小さく頷いた。それからゆっくりと顔を上げ、ラウルと視線を合わせると、ふっと甘く愛らしい微笑みを見せた。

翌日、ラウルはいつものようにレイチェルの家に向かった。

この日から魔導の訓練を始める予定になっていた。彼女のことが心配ではあったが、よほどのことがない限り、予定どおりに行うつもりでいた。いずれはやらなければならないことなのだ。とはいえ、望まないことを無理強いをするのはやはり心苦しい。あまり怯えてなければいいが――そんなことを思いながら、彼女の部屋の扉をノックする。

「こんにちは、ラウル」

予想に反して、レイチェルは明るかった。屈託のない笑顔でラウルを招き入れる。彼女は思ったより気丈なのかもしれない。きのうの弱音が嘘のように、何もかも完璧にいつもどおりである。だが、服装だけはいつもと違った。

「なに? どうしたの?」

「動きやすい服装ということだな」

ラウルはじっと見つめながら冷静に確認する。ドレスは普段のものと基本的に同じ形だが、丈だけが短かかった。膝が見えるくらいである。また、特徴的な後頭部の大きなリボンは付けられていない。

「これでいいかしら?」

「まあいいだろう」

それほど動きやすい服装ではないが、それでも普段の歩きにくそうなドレスと比べると、格段に活動的であるといえる。そこまで激しい運動をするわけではない。これで十分である。実際のところ、当面は普段のドレスでも問題がないくらいだ。

服装そのものはともかく、その準備をしてきたという事実が、ラウルを少し安心させた。彼女は訓練を受け入れる心構えが出来ている。これならば互いに嫌な思いをせずに進められそうだと思ったのだ。

「地下室へ行くの?」

「そうだ」

ラウルは地下への階段を降りながら答える。

レイチェルの言う「地下室」とは、地下にある魔導の訓練場のことだ。普通は個人が持つようなものではないが、魔導の名門であるラグランジェ家に限っては、本家も分家もみな持っているらしい。それだけ魔導を重要視している証といえるだろう。もちろん、それを作るだけの財力があるという証でもある。

地下の訓練場を使わせてもらうことについては、すでにアルフォンスの許可を得ている。その ときに鍵も渡してもらった。レイチェルが魔導を学ぶ決心をしたことを、彼は素直に喜んでいた 。気は早いが安堵している様子もあった。やはりずっと心配をしていたのだろう。

細くて暗い階段を降りきると、そこに重厚な扉があった。かなり古びているようだ。預かった 鍵で解錠し、その扉を押し開いた。

ギギギ……と錆び付いたような音があたりに反響する。

部屋の中はさほど広くなく、また、殺風景なほどに何もなかった。あるのは蛍光灯と換気扇くらいで、ほとんど無味乾燥な壁に囲まれているだけの部屋といえるだろう。だが、その壁が重要

なのだ。魔導耐性に優れた物質で作られているのである。もちろん、それだけでは軽い魔導力に しか耐えられないため、通常はさらに結界を張って使用することになっている。

ラウルは壁に沿って強力な結界を張った。これを力ずくで破れる人間はほとんどいないはずだ。今のレイチェルにはここまでの必要はないだろうが、彼女の奥底には未知の強大な力が眠っている。それに備えてのことだった。

「この地下室、かび臭くて息が詰まりそう」

「換気はしてある。我慢しろ」

レイチェルは眉をひそめながら部屋の中を見まわした。魔導の訓練を避けてきた彼女のことだ。自分の家ではあるが、ここに来たことはあまりないのかもしれない。

ラウルは壁を叩いて言う。

「ここに向かって打て。何でもいい。カー杯だ」

「わかったわ」

レイチェルは素直に答えると、両手を合わせて呪文を唱え始める。ごく初歩的なものだ。彼女が知っている数少ない呪文のひとつなのだろう。両の手のひらの間に白い光が生じる。頭くらいの大きさになると、それをラウルが示した壁に向かって放った。白い光球は勢いよく突き進む。 そして、結界を張った壁に衝突し、シュワッと軽い音を立てて消滅した。

「……カー杯と言ったはずだ」

「カー杯、打ったつもりよ」

彼女の表面的な魔導力はそう強い方ではない。だが、それと比較しても、彼女が放った魔導はあまりに貧弱だった。これで力一杯とは考えられない、もっと強いものが放てるはずだ——反射的にそう思った。

しかし、嘘を言っているようには見えない。

今の彼女にとっては、もしかすると、本当にこれが精一杯なのかもしれない。そうだとすれば、想像以上にやっかいである。自分の中で魔導力を集中させるというのは、呪文以前の極めて基本的なことである。それすら、彼女はまともに出来ていないことになるのだ。

「もう一度やってみろ。今度はゆっくりとだ」

「ゆっくり?」

「時間を掛けて呪文を唱えろということだ」

「わかったわ」

レイチェルは言われるまま、緩やかな口調で呪文を唱え始めた。

ラウルは彼女の中の魔導を探り、その流れを見極めようとする。しかし、そのとき、ふと何かが意識の隅を掠めた。その正体はすぐにわかった。彼女の奥底に眠っている強大な魔導力である。普段は誰にも気づかれないくらい密やかに潜んでいるが、魔導を使っている間だけは僅かに開いているように感じられた。

もしかすると、引き出せるかもしれない――。

衝動的な思考が頭をよぎる。

ラウルは正面から彼女の肩に右手を置いた。指先に少しだけ力を込める。

「えっ.....?」

「続ける」

レイチェルは驚いて呪文を止めたが、ラウルの言葉に従い、再び緩やかに呪文の詠唱を始めた

ラウルは自分の魔導力を凝縮し、彼女に触れた部分から、それを注ぎ込んでいく。

彼女の奥をこじ開けるように、眠った力を呼び覚ますように――。

それは、魔導の封印を解く方法のひとつだった。正攻法ではないが、これで解けることもある。ただ、彼女の場合は封印とも違うので、この方法が有効かどうかはわからない。それでも、試す価値はあると思った。

「あっ、なに……っ」

レイチェルは体内の反応にとまどいの声を上げる。体がびくりと揺れた。

「.....はっ......はぁ、は......ぁっ......」

次第に息が荒くなっていく。顔も体も熱を帯びて紅潮していた。

「.....んっ、あぁ.....あ.....っ」

必死に何かを堪えるように、苦しそうに眉根を寄せて目をつむる。

「ラウル.....っ、あつい、体が......体の中が......」

「大丈夫だ。もうしばらく耐えろ」

ラウルは冷静に彼女を観察しながら言う。眠っている力を呼び覚ますために注ぎ込んだ力は、 活動中の魔導力にも影響を与える。必要以上に活性化させてしまうのだ。彼女には刺激が強すぎ るのかもしれない。

「ラウル……お願い……もう、ダメ……っ」

これが限界か――。

ラウルは力を注ぐのをやめた。そっと手を離す。だが、レイチェルがふらりと揺れるのを見ると、慌ててその小さな体を両手で支えた。そして、軽く肩を抱いて自分の体に寄りかからせる。

「はっ......はぁっ.....」

彼女は苦しそうに大きく全身で息をしていた。顔が火照り、汗が滲んでいる。だいぶ無理をさせてしまったのかもしれない。それでも、結局、彼女の中の魔導に変化は見られなかった。彼女の奥底に眠る力を引き出すことは出来なかったのだ。そう簡単にはいかないということだろう。

「すまなかった」

ラウルは彼女の頬に張りついた髪を払いながら詫びた。レイチェルはゆっくりと顔を上げ、潤んだ瞳でラウルを見つめる。小さな薄紅色の唇が微かに動いた。そのとき——。

「あぁっ……!」

レイチェルの体が大きくビクリと脈打った。体中が青白い光に包まれる。無防備だったラウルは、その光に弾き飛ばされ、背後の壁に叩きつけられた。支えを失った彼女は床に崩れ落ちる。苦しげに顔を歪ませながら、床の上で背中を丸めた。

「う......うぅ......」

「レイチェル!」

ラウルは立ち上がりながら叫んだ。

彼女の中で大きな力が暴れ出していた。それは、制御を失った魔導として放出される。

つまり、暴発だ。

髪は大きく舞い上がり、服は音もなく裂けていく。体中から強い光が四方八方に散り、結界 を破って壁にいくつもの穴を開けた。それでも、彼女の魔導力は収まるどころか、ますます高ま っていく。

――まずい。

ラウルは急いで呪文を唱えた。瞬間、部屋の中の空気が変わる。

彼女を覆っていた青白い光が消滅した。

この部屋を覆っていた結界も消滅した。

ラウルが唱えた呪文は、特定空間の魔導を使えなくするものだった。ある程度、閉じられた空間でなければ効果はないが、魔導の訓練場はたいていそういう造りになっている。ここも例外ではない。

「レイチェル!!」

ラウルは倒れたままの彼女に駆け寄った。彼女の服は辛うじて断片が残っているだけで、もは やその役割を果たしていない。だが、ざっと見た限りでは、体の方に怪我はないようだ。自分の 上衣を脱いで彼女に掛けると、壊れ物を扱うようにそっと抱き起こした。

レイチェルは言葉もなく、ただ青白い顔で震えていた。ラウルの袖をきつく掴み、縋りつく。 彼女の中で暴れていた魔導の力は、すでに落ち着きを取り戻していた。どうやら再び眠りにつ いたらしい。目覚めたのは一時的なものだったようだ。今後、この影響がどう出るのかはわから ないが、当面の危機は去ったといえる。

ラウルは激しい後悔に苛まれていた。

自分はなぜ彼女の力を目覚めさせようとしたのだろうか。それより先にすべきことがあった。 ただでさえ魔導の扱い方がわかっていない彼女に、この強大な力を受け止められるはずはない のだ。少し考えれば誰にでもわかることである。

おそらく、魔が差したのだ。

下手に手を出せば暴発する——それは、自分が言ったことである。安易に触れるべきでないということは、誰よりも理解していたつもりだった。

だが、誰にも曝されたことのない彼女の奥底を近くに感じたとき、歯止めとなるものすべてを忘れてしまった。触れられるかもしれないという誘惑には勝てなかった。触れたいという衝動を止めることができなかった。そして、何より、他の誰でもない自分が目覚めさせたいと思ったのだ。

自分はどうしようもなく愚かだ――。

今度こそ彼女は魔導を完全に拒絶するようになるかもしれない。そうなったとしても、ラウルには咎める資格はない。説得することも無理だろう。自分に出来ることは何かあるのだろうか。 ラウルは奥歯を噛みしめ、彼女の体を抱える手に力を込めた。

「説明、してもらおうか」

アルフォンスは応接間に入るなり、ソファに座っていたラウルを激しく睨みつけ、低く唸るように言った。抑えきれない怒りを、それでも懸命に抑えようとしている様子が窺える。

アリスから連絡を受けるとすぐに、アルフォンスは研究所から飛んで帰ってきた。仕事どころではなかったのだろう。真っ先にレイチェルの部屋へと駆け込み、自分の目でその無事を確認してきたようだ。彼女が少しでも負傷していたら、この程度の怒りではすまなかったに違いない。我を忘れてラウルを殺そうとしたかもしれない。娘を溺愛している彼なら十分にありえることだ

「アルフォンス、とりあえず座ったら?」

「.....ああ」

アリスの冷静な声に促され、アルフォンスはラウルの正面に腰を下ろした。革張りのソファが小さな摩擦音を立てて深く沈む。その間も、彼はずっと睨みをきかせたままだった。今にも爆発しそうなピリピリとした気が、その全身から発せられていた。

「何があった」

概要についてはアリスから聞いているだろうが、それでもラウルは省略せず、一から説明を始めた。自分がどう考えたかということは述べず、起こした行動と起こった現象のみを淡々と伝えていく。

アルフォンスは膝の上で両手を組み合わせ、ずっと下を向いたまま聞いていた。力の入った指 先が小刻みに震えている。眉間には深い縦皺が刻まれ、もともと険しかった表情が、さらにその 険しさを増していった。

ラウルが一通りの説明を終えると、アルフォンスはゆっくりと視線を上げた。じっと睨みつけながら、低い声で質問する。

「なぜ、レイチェルの力を目覚めさせようとした」

「それが可能だと感じたからだ」

ラウルは目を逸らすことなく端的に答えを返した。

瞬間、アルフォンスの瞳に激しい光が宿る。

「おまえにそんなことを頼んだ覚えはない。万一に備えて魔導の制御を学ばせることが目的だったはずだ」

「わかっている」

ラウルのその落ち着き払った態度が、アルフォンスの抑制した怒りに火をつけた。憤怒に顔を 歪め、声を爆発させて逆上する。

「わかっていてなぜやった?! 好奇心か?! まるきり実験ではないか! いや、実験ならば万全の 準備を整えて行う。その場の思いつきでやったおまえの方が余程たちが悪い!!」 応接間に迫力のある重低音が響き渡る。空気の振動が目に見えて伝わってくるようだった。

「浅はかな行動だったことは認める」

「認めればすむと思っているのか!!」

アルフォンスはローテーブルを踏みつけて身を乗り出すと、ラウルの胸ぐらを両手で掴み上げた。ティーカップとソーサが床に落ちて割れる。ラウルの白い布製の靴に、ぬるい紅茶が染みを作った。

「取り返しのつかないことになっていたかもしれないとわかっているのか? レイチェルに何かあったらどうするつもりだった? おまえにとっては物珍しいだけの存在かもしれんが、私にとっては何よりも大切な娘だ。もうおまえには預けられん。失望した......出て行け! おまえなどクビだ!!」

「アルフォンス、落ち着いて」

少し離れたところから、立ったままのアリスが声を掛けた。

しかし、今のアルフォンスにそれを聞き入れる余裕はなかった。むしろ逆効果だったのかもしれない。アリスをキッと睨みつけると、ますます激しく怒りをたぎらせる。

「おまえは落ち着きすぎだ! この男はレイチェルを危険にさらしたのだぞ?!」

「でも無事だったわ。ラウルでなければ、何事もなく収めることは出来なかったはずよ」 アリスはなおも諦めることなく、アルフォンスを宥めようとする。

「コイツと一緒でなければ、そもそも暴発を起こすこともなかった!!」

「そうとは限らないでしょう?」

「......それは......そうだが......」

アルフォンスは図星を指されて言葉に詰まった。悔しそうに奥歯を噛みしめてうつむく。レイチェルの隠れた魔導力は未知のもので、いつ目覚めるか、いつ暴発を起こすかもわからない。ただ、これまで何事もなく平穏に時が過ぎてきたので、その危険性の認識が薄らいでいたのだ。それは、アルフォンスだけではなく、ラウルもまた同じだった。

「だが、ラウルが暴発させたという事実は変わらんだろう!」

「ええ、そうね」

必死に言い返したアルフォンスの言葉を、アリスは拍子抜けするくらい素直に肯定した。

「だから、魔導はしばらく休ませるべきだと思うけれど、家庭教師は続けてもらってもいいんじゃないかしら。よくやってくれているもの。レイチェルがこれほど真面目に勉強するようになったのも、ラウルの指導のおかげでしょう? アルフォンス、あなたもそう言っていたじゃない」

ラウルの胸ぐらを掴む手から、少し力が抜けた。

アリスはさらに畳み掛ける。

「それに、ラウルには、今後しばらくレイチェルの経過を見守ってもらわなければならないわ。 今回の影響がどのように出るかわからないもの。このことがきっかけで暴発を起こしやすくなる かもしれない。もちろん私たちも気をつけるべきだけれど、残念ながらラウルほど察知する能力 はないから」

アルフォンスの口からもう反論の言葉は出てこなかった。ラウルから手を離し、どっしりと

ソファに腰を下ろすと、開いた両膝に腕を掛けてうなだれる。大きな背中が丸まって、小さく上下し、まるで泣いているように見えた。

アリスはラウルに振り向き、まっすぐに見つめながら、凛とした声で言う。

「ラウルもそれでいいわね。家庭教師、続けてくれるでしょう?」

「レイチェルの気持ち次第だ。彼女が望むのであれば続ける、望まないのであれば辞める」

ラウルは無表情のまま答える。配慮のない行動で怖がらせてしまった以上、彼女の方が自分を 拒絶する可能性がある。その心情を無視するわけにはいかない。

「そうだな……何よりもあの子の意思を優先すべきだ」

アルフォンスもうなだれたままラウルに同調した。

アリスは顎を引き、ソファの二人をじっと睨むように見つめた。

「でも、ラウルには責任があるはずよ」

「出来ることはするつもりだ。家庭教師でなくとも経過を見守ることは可能だろう」

「そうね.....」

アリスはしばらく考えてから顔を上げ、明瞭な口調で結論を述べる。

「では、ラウルの言ったとおりにしましょう。レイチェルが落ち着いたら意思を確認するわ。あの子が望めば続ける、拒否すれば辞める、その場合でも何らかの方法で経過は見守る。そういう ことでいいわね」

「ああ」

「結果は明日中に連絡するわ」

「わかった」

ラウルはソファから立ち上がった。割れたティーカップの白い欠片をまたいで足を踏み出す。 靴についた紅茶の染みは、もうだいぶ乾きかけているように見えた。

「すまなかった」

アルフォンスは大きな体をゆっくりと起こし、力のない声で言った。

「先ほどの非礼を許してほしい。君に悪気がなかったことはわかっている。実験などというつもりでなかったことも。研究所に来てもらったとき、私の代わりにレイチェルを守ってくれたことは忘れていない」

「責められて当然のことをした」

ラウルは振り返ることなく応じると、大きな足どりで応接間をあとにした。

「ラウル!」

廊下に出てきたアリスが、さらりと金の髪を揺らしながら、小走りで追いかけてきた。振り返ったラウルの前で足を止めると、胸もとに左手を当てて言う。

「さっきはきつい態度をとってしまってごめんなさい」

「おまえはするべきことをしただけだ」

アルフォンスが怒りで冷静さを失っていた以上、あの場を収束させるには、彼女が毅然とした 態度で仕切るしかなかっただろう。そのことで彼女に反感を覚えたということはない。逆に見直 したくらいである。いざというときは、アルフォンスよりも頼りになるのかもしれない。

アリスは小さく安堵の息をつき、にっこりと人なつこく微笑んだ。

「これからも私たちの力になってくれると嬉しいわ」

「ああ.....」

その肯定の返事には、若干の迷いが滲んでいた。ラウルに異存があるわけではない。当然ながらそうするつもりであるし、そうしなければならないと思っている。だが、レイチェルがそれを望んでいるとは限らない。彼女は、もう自分など——。そのことが抜けない棘のように心に疼きを与えていた。

それを敏感に感じ取ったのか、アリスは補足するように言う。

「レイチェルのことなら心配ないと思うわ」

「どういうことだ」

「あなたを拒絶したりしないってこと。レイチェルに言われたのよ、ラウルは悪くないから責めないでって。魔導のことは怖がっているかもしれないけれど、あなたのことは大丈夫なんじゃないかしら。まだ信頼しているみたいよ」

ラウルは無表情のまま、僅かにうつむいた。奥歯を強く噛みしめる。

「……帰る前にもう一度レイチェルの様子を見たい」

「ええ、どうぞ」

アリスはくすりと笑う。

「あっ、でも、寝ていたら起こさないでもらえるかしら」

「わかった」

ラウルは静かに答えると、二階へ続く階段を上っていく。その歩みを導くように、上方から色 づいた光が降り注いでいた。

二階の突き当たりにあるレイチェルの部屋――。

ラウルはその扉の前で足を止めた。数ヶ月前に彼女の家庭教師を始めて以来、毎日のように訪れている場所である。もうすっかり見慣れた光景だ。だが、今は何か少し違って見える。僅かな緊張を感じつつ、白い扉をノックした。

しばらく待ったが、返事はなかった。物音ひとつ聞こえない。

おそらく彼女は眠っているのだろう。アリスには起こすなと言われている。このまま帰るべきだということはわかっていた。それでも、どうしても諦めきれなかった。せめて顔だけでも見たいと思う。音を立てないように扉を開き、静かに足を踏み入れた。

広い部屋の奥に、天蓋つきの大きなベッドが置かれている。

彼女はそこに眠っていた。布団が掛けられているため、首もとまでしか見えないが、淡いピンク色の寝衣を身につけているようだ。脇には椅子が置いてあった。ラウルが家庭教師のときにいつも使っているものだ。アルフォンスかアリスのどちらかが、ここに持ってきて座ったのだろう。ラウルもそこに腰を下ろす。

そのとき、レイチェルの目が開いた。

澄んだ蒼の瞳は、迷うことなく、深い濃色の瞳を捉える。

ラウルの鼓動は大きく打った。

まるで心まで見透かされるようだった。それでも、その瞳の持つ強い引力には抗えず、少しも目を離すことができない。喉が渇いていくのを感じる。ごくり、と唾を飲み込んでから、平静を装いつつ口を開く。

「悪かった、起こしてしまって」

「起きていたわ」

レイチェルは少し掠れた声で答えると、肘をついて上半身を起こそうとする。だが、ラウルは それを制止した。細い肩を押さえてベッドに戻す。

「寝ていろ」

「ラウルと話がしたいの」

「そのままでも話はできる」

「私、どこか悪いの?」

レイチェルは不安そうに顔を曇らせて尋ねた。

ラウルは布団を掛け直しながら言う。

「体に損傷はないが、少し衰弱が見られる。無理な魔導が体に負担を掛けたのだ。心配は不要だ。ただ、体力を回復させるために、少なくとも今日一日は安静にしている必要がある。大人しく横になっている。医師としての命令だ」

その説明に納得したのか、レイチェルはもう起き上がろうとしなかった。小さく息を吐くと、 天蓋を見つめて目を細める。

「無理な魔導……暴発……私がラウルの力を受け止められなかったからなのよね」

「いや、そうではない。あれは……」

ラウルはそう言いかけて口をつぐんだ。暴発を起こした強大な魔導力は、レイチェル自身が潜在的に持っているものだ——そんなことを知ったら、彼女は余計に怯えることになるかもしれない。自分の力だと思わない方が、まだましなのかもしれない。

「ラウルの力が私の中に入ってくるのは感じたわ」

レイチェルはゆっくりとラウルに顔を向けた。大きな瞳でじっと見つめる。

「私はその力を受け止めなければならなかった。でも、私にはそれだけの器がなかった。だから、行き場をなくした魔導力が暴発してしまった。そういうことでしょう?」

彼女の解釈はそれなりに筋が通っていた。いっそ、そういうことにしてしまった方がいいのかもしれないと思う。だが、積極的に肯定するほどの潔さは持ち合わせていなかった。何も答えを返さず、ただ沈黙するだけである。それが肯定を示すことになると知りながら——。

「ごめんなさい、ラウル、お父さまに怒られたわよね」

レイチェルは申し訳なさそうに目を細めて、謝罪の言葉を口にする。

「おまえは何も悪くない。悪いのは私だ。私の行動が配慮に欠けていたからだ」

ラウルは早口で畳み掛けるように言った。その事実だけは明確に伝えたかった。彼女が自分を 責めることなどあってはならないのだ。 「ラウル、お願いがあるの」

「何だ」

「サイファにはこのことを内緒にしておいて」

レイチェルは思い詰めた表情で、真摯に頼み込む。

「なぜだ」

「心配をかけたくないの。サイファってすごく心配性だから、暴発を起こしたなんて知ったら、 どんな行動をとるかわからない。ラウルもきっとまた怒られてしまうわ」

「わかった、サイファには何も言わない」

ラウルは彼女の目を見つめて答える。

「だが、さっきも言ったが、私は怒られて当然のことをした。おまえが気を遣う必要はない」 「優しいのね、ラウルは」

レイチェルはそう言って微笑んだ。だが、それは力のない儚いものだった。疲労からきている というよりも、何か精神的なものが影響しているように感じられた。

ふと、その目から一筋の涙が伝った。

そのことに彼女自身が驚いているようだった。はっと目を見開くと、慌てて手のひらで拭う。 しかし、すぐにまた拭いきれないほど溢れ出し、髪と枕を濡らしていく。やがて、彼女は泣き顔 を隠すように両腕で目を覆った。浅い呼吸でしゃくり上げながら嗚咽する。それでも、声だけは 必死に抑えようとしていた。

「レイチェル.....」

ラウルはどうしていいかわからず、ただ名前を呼ぶことしかできなかった。

「わ……たし……力がなくて……魔導が下手で、ごめんなさい」

レイチェルは泣きながら、弱々しく震える声で言った。

頭をガツンと殴られたような衝撃がラウルを襲う。

このときまで気づけなかった。

彼女がそれほどまでに気にしていたとは、それほどまでに自分を責めていたとは――。

「レイチェル、違う、そうではない」

「私のことを嫌いにならないで……っ」

縋るような悲痛な声が、胸を掻きむしる。焼けるように熱く、痛い。

ラウルはようやく理解した。

単に魔導を怖がっていたわけではない。

単に訓練を不安がっていただけではない。

彼女が最も怯えていたことは別にあった。

それは、魔導を使えない自分を拒絶されること——。

だから、これほどまで頑なに魔導の訓練を拒否してきたのだろう。魔導を使えない自分を見せたくない、知られたくないという一心だったに違いない。

ラグランジェ家にとっては、魔導がすべてだといっても過言ではない。

その一族に生まれながら、思うように魔導を扱えない彼女が、どのような気持ちでいたのか。

今ならばおおよそ想像がつく。たとえ誰かに何かを言われなくとも、居心地の悪さは感じるだろう。実際には「ラグランジェ失格」「出来損ない」などの酷い言葉を浴びせられることもあったらしい。それを真に受けたとしたら、彼女が自分を責めるようになるのも不思議ではない。

それでも、サイファや両親に心配を掛けないように、その気持ちをひた隠しにし、努めて明るく振る舞っていたのだ。もしかしたら、魔導の力がなくとも気にしないと自分に言い聞かせ、思い込もうとしていたのかもしれない。

だが、今は、脆く臆病な心を守るものすべてが崩れてしまっている――。

「レイチェル、きのうも言ったはずだ。嫌いになどならない」

レイチェルは両腕で目を覆ったまま、頭を強く左右に振った。

「ラウルは私に幻滅している。でも、優しいからそれを認めないだけ!」

「レイチェル、私を見ろ」

ラウルは椅子から腰を上げ、彼女の両手首を掴んで腕を開いた。少しの抵抗はあったが、ラウルの力に敵うはずもない。すぐにその腕は白いシーツに押しつけられた。しかし、それでもなお、彼女はラウルを見ることを拒んだ。怯えたように目蓋を震わせながら、きつく目をつむっている。そして、苦しげに浅い息を繰り返すと、閉じた目の端から新しい涙を溢れさせた。

「レイチェル.....」

ラウルは呟くように名を呼んだ。押し潰されそうなほどに胸が苦しい。折れんばかりの細い手首を掴んだまま、真上から目を細めて彼女を見下ろすと、そっと身を屈めて顔を近づけた。

長い焦茶色の髪が音もなくシーツに落ちる。

重なる自分の唇と彼女の唇。

長い、無言の会話。互いの気持ちを確かめ合う術――。

時が止まったかのような錯覚。

時計の秒針の音が引き戻す現実。

名残惜しげにゆっくりと体を起こしていく。

ベッドの上のレイチェルは、大きく目を見開き、ただ呆然とラウルの顔を見上げていた。泣く ことも、瞬きすることも、そして息をすることすら忘れているように見える。固まったまま身じ ろぎひとつしない。

「私を信じろ」

ラウルは深く静かな声を落とす。そして、彼女の腕を押さえていた手を離すと、濡れた目もと を親指で拭った。温もりを伝えるように、大きな手で柔らかな頬を包み込む。

ようやく、レイチェルは安堵したように表情を緩ませた。僅かにこくりと頷いて、小さな微笑 みを見せる。もう大丈夫、そう言っているかのようだった。

新たなひとしずくが目尻から零れ落ちる。だが、彼女はもうそれを拭おうとはしなかった。

ラウルは部屋を出て白い扉を閉めると、そこにもたれかかった。小さく息を吐いてうつむく。 そして、眉根を寄せて額を押さえると、無造作に前髪を掴んだ。

どうかしている――。

なぜ、あんなことをしてしまったのだろうか。二度とすべきではないと思っていたことだ。 彼女を慰めようとしたわけではない。彼女を泣きやませようとしたわけではない。 おそらく、そこにあったのは根源的な衝動だけだ。

行動を起こしたときには何も考えていなかった。考えるより先に体が動いていたのだ。 ラウルはそのことが何よりも怖かった。

「馬……だと?」

「そう、乗れるか?」

夕陽の射し込む医務室で、サイファは机に片手をついて身を屈めると、眉をひそめるラウルを 覗き込んで質問を繰り返した。斜めにした顔に、金色の髪がさらりと掛かる。気のせいかもしれ ないが、その薄い唇には、何か意味ありげな笑みが浮かんでいるように見えた。ラウルは訝しげ な視線を送ると、椅子に座ったまま手元のカルテ整理を再開した。

「この国に来てから一度も乗っていない」

「乗れるってことだな」

サイファは間髪入れずに切り返した。

ラウルはカルテを持ったまま手を止め、横目で鋭く睨みつける。

「何を企んでいる」

「あしたレイチェルと遠乗りに行く予定なんだ。だから、ラウルも一緒にどうかなと思って」 サイファは人なつこく声を弾ませると、顔の横で右手を開いて見せた。

「断る」

ラウルは何の躊躇もなく拒否した。遠乗りなど楽しくもなんともない。ただ疲れに行くようなものだ。サイファと一緒となると尚更である。たとえレイチェルが一緒だとしても、いや、むしるレイチェルが一緒だからこそ、余計に行きたくないのかもしれない。ふたりの仲睦まじいところを見せつけらるなど冗談ではないと思う。

「そう言うなよ。レイチェルも喜ぶと思うし、来てくれよ」

「……あいつがそう言ったのか?」

「いや、でもラウルに懐いているみたいだからさ」

サイファは軽い口調で答えた。しかし、黙ってうつむいたラウルを目にすると、少し真面目な表情になった。何か普通ではないことを感じ取ったのだろう。それでも、ラウルには取り繕う方法など思い浮かばない。

「実を言うとさ」

サイファはラウルの肩に腕を置き、軽く体重を掛けて寄りかかった。

「アルフォンスに頼まれたんだよね。レイチェルを気晴らしに連れて行ってほしいって。アルフォンスは何も言わなかったけれど、何かあったんじゃないのかな」

斜め上に視線を流しながら淡々と言うと、不意にラウルに振り向いて至近距離で覗き込んだ。 鮮やかな青い瞳が宝石のように透き通って見える。

「ラウルは何か知っているか?」

「いや……」

知っているも何も、ラウルがその当事者なのだ。しかし、どれほど厳しく追及されようとも教えるわけにはいかない。サイファには内緒にすることをレイチェルと約束したのである。

「そうか……気にならないのか?」

「おまえの勘違いかもしれん」

サイファはその言葉を聞くと、ラウルの肩口で小さく溜息をついた。

「アルフォンスは嘘が下手なんだよ。ラウルと同じくらいにね」

ラウルは思わず視線を逸らせた。その耳元に、サイファは確信を持った声を送る。

「レイチェルと喧嘩でもしたんだろう?」

「喧嘩などしていない」

「レイチェルが我が侭を言って怒らせたのか?」

「そんなことはない」

「それともラウルの方がひどいことを言ったのか?」

「……言っていない」

「ちゃんと謝って許してもらったんだろうな?」

「.....」

彼が推測しているだろうことは、全くの間違いとはいえないが、根本的な部分で的を外していた。だが、事実を知られるよりは、このまま勘違いさせておいた方がいいのかもしれない。問題は彼が納得するかである。なんとか核心に触れることなく言い逃れられないものかと思案する。だが——。

「まあいいよ」

サイファは拍子抜けするくらいにあっさりと引き下がった。体を起こして両手を腰に当てる。 「レイチェルかアルフォンスに口止めされているとしたら、いくら尋ねても口を割ることはない からな。それに、すでに問題は解決しているみたいだしね。もう仲直りはしたんだろう?」

自分の推測が的外れであるなどとは考えてもいないようだ。完全にそれが事実だと思い込んでいる。以前にも似たようなことがあったせいかもしれない。

「あしたの遠乗りは来てくれるよな?」

「……ああ」

ラウルは顔をそむけたまま小さな声で返事をした。カルテを持つ指先に力が入る。深く追求しない代わりに、遠乗りを了承しろということなのだろう。サイファが得意な駆け引きである。ここで断ればどうなるかは想像がつく。おそらく容赦のない追及が再開されるはずだ。そうなれば隠し通すことなど不可能に近い。ラウルには大人しく了承する以外に道はなかった。

サイファは、硬直したラウルをほぐすかのように肩をポンと叩くと、曇りのない笑顔で手を振りながら医務室をあとにした。規則正しく廊下を打ちつける靴音が次第に遠ざかり、やがてラウルの耳に届かなくなった。

翌朝、ラウルは約束通りサイファの家に向かった。

青い空にかかる白い雲が、緩やかに流れていく。遠乗りには絶好といってもいい穏やかな日 和だった。

集合場所であるサイファの家の前には、レイチェルがひとりで門を背にして立っていた。両手で籐のバスケットを持っている。近くにサイファはいないようだ。彼女はラウルに気がつくと、

明るい笑顔で挨拶をする。

「おはよう、ラウル」

「ああ……サイファはどうした?」

「馬を取りに行っているわ」

レイチェルの暴発事故から一週間が過ぎていた。

家庭教師は彼女の希望により続行することになっていた。もちろんアルフォンスも了承済みである。魔導の訓練については厳しく止められているが、それ以外については今まで通りということになったのだ。アリスの説得が功を奏した形である。

再開は明日からの予定だ。

だが、これまでも毎日欠かすことなく彼女の家には行っていた。彼女の手前、医者として体調を経過観察するという名目になっていたが、実際は彼女の魔導に何らかの変化がないかを探ることが目的だった。

ラウルが見た限りでは、この一週間、その兆候は少しも現れなかった。今もひっそりと奥深くで息を潜めるようにして眠っている。無理な魔導の使い方さえしなければ、ずっとこのままでいられるのかもしれない。そうであってほしいと切実に思う。

「どうしたの?」

「何でもない」

不思議そうに小首を傾げるレイチェルから目を逸らすと、腕を組んで塀にもたれかかった。そ して、目を細めて澄み渡った空を見上げた。

「お待たせ」

サイファが門の内側から姿を現した。馬を二頭、引き連れている。一頭は白色、もう一頭は茶色である。共通しているのは、どちらも頑丈そうな立派な体躯をしていることだ。毛並みのつややかさからも、手入れの行き届いた上等な馬であることが窺える。

「おまえの家は馬まで飼っているのか」

「これは王宮から借りてきたんだよ。まあ、昔はウチでも飼っていたらしいけどね」 サイファはにっこりと笑って答えると、レイチェルに振り向いて尋ねる。

「レイチェル、どっちがいい?」

「んー……白い方」

レイチェルは少し考えてから答える。

「じゃあ、ラウルはこっちね。鞍はそこに置いてあるから自分でつけて」

門柱のそばに準備してあった鞍を示しながら、サイファは茶色の馬の手綱をラウル手渡した。

「おまえの馬はどこだ」

「僕はレイチェルと一緒に乗るんだよ。レイチェルはひとりでは乗れないからね」

サイファは手際よく鞍を取り付けながら答えた。よく見てみれば、確かにその鞍は二人乗り用のようだ。しかし、今までそんなものは見たことがなく、存在すら知らなかった。あまり一般的なものではないだろう。

ラウルは二人に背を向けると、地面に置いてあった一人用の鞍を取り付け始めた。

「じゃあ、行こうか」

準備を終えたサイファは、大きな馬に軽々と跨ると、レイチェルの手を引き、彼女が鞍の後部に乗るのを手伝った。彼女はどうやら横乗りで行くようだ。普通に跨った方が安定感があるはずだが、脚がほとんど隠れるくらいのドレスを着ているため、横乗り以外は難しいのかもしれない

「しっかり掴まっててね」

サイファが後ろに振り返ってそう言うと、レイチェルは微笑みながら頷いた。細い腕をサイファの腰にまわし、背中に頬をつけて寄りかかる。その表情はとても穏やかで幸せそうだった。

二人とも見せつけようとしているわけではない。そのことはわかっている。だが――。

その光景を眺めながら立ち尽くしていたラウルは、手綱が引かれるのを感じて我に返った。急かすように首を動かしている馬を、軽く撫でて宥めると、素早く鐙に足を掛けて騎乗する。

「どこへ行く」

「来ればわかるよ」

サイファは視線を流して挑発的な笑みを浮かべると、ゆっくりと馬を走らせた。

冷涼な空気が頬を撫でる。

サイファたちの白い馬は、静かな森の小径をのんびりと進んでいった。

木々の隙間から射し込む光は、二人と馬を断片的に照らして斑模様を作る。光を受けた部分は 目映く、その中でも金の髪はひときわ強く煌めいていた。白馬の艶やかな毛並みでさえ霞んでし まうほどである。

ラウルの乗った茶色の馬も、そのすぐあとをついて歩いた。

前の馬に乗るレイチェルがときどき手を振ってきたが、ラウルは無表情でそれを一瞥するだけだった。怒っているわけではなく、それがいつもの態度である。そのことを理解しているレイチェルは、気にする様子もなく、終始にこやかに笑顔を浮かべていた。

しばらく進むと、少し開けた場所に出た。

ラウルはぐるりと辺りを見まわす。正面には小さな湖、そして上方には青い空が見えた。湖のまわりはすべて森に囲まれている。とても静かだった。聞こえるのは木々の微かなざわめきくらいである。

サイファは湖岸で馬をまわしてラウルに向かい合った。

「静かでいいところだろう? ラグランジェ家が所有している森なんだ」

そんなことが書いてある古めかしい看板を、ラウルは森の入口付近で一瞬だったが目にしていた。森をまるごと所有しているなど、にわかには信じがたい話である。看板を見ていなければ、冗談だと思ったかもしれない。しかし、考えてみれば、王宮の近くにこのような手つかずの森が存在できているのは、ラグランジェ家が所有しているからこそだろう。

サイファは後ろのレイチェルを馬から降ろすと、続いて自分もそこから降りた。馬の脇に固定 してあったバスケットを取り外して彼女に手渡す。レイチェルはにっこりと微笑み、両手でそれ を受け取った。そのまま、二人は和やかに会話を続ける。

ラウルは馬をまわして、静かにその場から離れようとした。そのとき――。

「ラウル、競争しないか?」

背後からサイファが声を掛けてきた。ラウルは怪訝に眉をひそめて振り返る。

「何のだ」

「馬だよ。どちらが先に湖を一周して戻ってこられるか、やってみないか?」 人なつこい笑顔を見せるサイファを、ラウルは馬上から冷たく睨みつける。

「ずいぶん自信がありそうだな」

「ラウルの力を知らないから、勝てるかどうかはわからないけどね」

「.....いいだろう」

ラウルはまっすぐサイファを見て言った。普段であれば、こんな無意味な勝負は断っていただろう。だが、今日はどんな些細なことであれ負けたくないと思ったのだ。いや、今日だけではない。このところ、次第にサイファへの対抗心が大きくなってきている。その理由ははっきりと自覚していた。

そんなラウルの心情に、サイファが気づくことはなかった。素直に嬉しそうな笑顔を見せている。彼の方もラウルに対抗心を持っていたが、それは純粋に挑戦したいという思いからだ。ラウルとはまるで違うのである。

サイファはふと何か思いついたように地面に視線を落とすと、少し太めの木の枝を拾い、草の 生えた地面に線を引いた。判然としないその線を指し示しながら言う。

「ここがスタートライン、そしてゴールラインだ……わかりにくいかな?」

「遠くからはわからないだろうが、特に問題はないだろう」

ラウルは馬に乗ったまま、その線を見下ろして淡々と答えた。

「ふたりとも頑張って」

レイチェルは屈託のない笑顔を二人に向けた。サイファは軽く右手を上げて満面の笑みを返す。だが、ラウルは無表情のまま、何の反応も示さなかった。そんな態度しかとれない自分が腹立たしく、そして少しだけ胸が疼いた。

馬に乗った二人はスタートラインに並んだ。ここに乗って来たときと同じく、サイファが白い 馬で、ラウルが茶色の馬である。サイファには好きな方を選んでいいと言われたが、一度も走ら せたことのない馬を選ぶことなどできない。

「用意はいいか?」

「ああ」

ラウルは正面を向いたまま答えた。

「じゃあ、いくよ……3秒前、2、1、スタート!」

サイファの掛け声と同時に、二人は風を切って飛び出した。ラウルの長髪が大きくなびく。サ

イファの方が若干速いが、頭一つくらいでほとんど差はない。どちらの馬もよく走っている。ラウルがこの馬に乗るのは今日が初めてだが、癖も少なく、思ったように走ってくれている。さすがに王宮所有だけのことはある、と走りながらも冷静に評価した。

湖の奥に差し掛かると、その先の道が急に狭くなっているのがわかった。片側が土壁で、反対側には木々が立ち並んでいる。二頭の馬が並んで走ることは不可能だ。ここで前を取っておかなければ勝つことは難しいだろう。ラウルはさらに前傾姿勢をとり、速度を上げようとした。

だが、それより先にサイファが行動を起こした。

細道の入口を目指して強引に馬体を寄せてきた。ラウルはやや速度を落とし斜め後方に避ける。そうしなければ確実にぶつかっていた。だが、サイファがそのことを考慮していなかったわけではないだろう。おそらくラウルが避けることを計算しての行動だ。

結果、サイファが前、ラウルが後ろという状態で、細道に突入することになった。

彼の自信に満ちた計算高さに、ラウルは無性に腹が立った。いつも、何においても、翻弄されてばかりである。

だが、今日はこのまま負けるわけにはいかない。周囲に目を走らせながら機を窺う。

---行ける。

やや傾斜が緩やかな土壁を視界に捉えると、瞬間的にそう判断を下した。迷うことなく飛び出し、そこを勢いよく駆けていく。倒れないことが不思議なくらいに馬体は斜めになっていた。 かなり無理が掛かっていることは間違いない。

同じ速度で下方を走っていたサイファは、はっとして顔を上げた。ありえないところから聞こえる蹄音と大きな影に驚いたのだろう。そして、その正体を目の当たりにして、ますます驚愕したようだ。彼にしては珍しいくらいの、ぎょっとした表情を見せている。

その影響なのか、僅かにサイファの速度が落ちた。

土壁を疾走するラウルはさらに勢いをつけ、サイファの前に駆け下りる。ほとんど飛んでいるかのようだった。それでもぶれることなく着地し、何事もなかったかのようにサイファの前を走り続ける。

やがて、再び開けた湖岸に出たが、ラウルは一度も抜かせることなくゴールラインを越えた。 「負けたよ」

一馬身差でゴールしたサイファは、溜息まじりにそう言った。素直に負けを認めるというよりも、どこか疲れたような、そして半ば呆れたような声音だった。

「まさかあんな斜面を走ってくるなんてな……。本当に無茶苦茶としか言いようがないよ。倒れたり滑ったりしたら、どうするつもりだったんだ? 下手をしたら僕まで巻き添えだぞ」

「そのときはそのときだ」

ラウルは馬から降りながら素っ気なく答えた。

サイファは大きく溜息をついて、じとりとした視線をラウルに向けた。

「それ、借り物の馬なんだから丁寧に扱ってくれよな」

「ならば競争など持ちかけてくるな」

「はいはい、僕が悪かったよ」

そう小さく肩をすくめて受け流すと、手綱を握り直して言う。

「僕はもう一周、走ってくるよ。ラウルはどうする? 今度はのんびりまわるつもりだけど」「一人で行ってこい」

ラウルは目を向けることもせず、ぶっきらぼうに突き放した。馬を連れながら、背を向けて歩き出す。

「もしかして疲れたのか?」

「おまえと一緒に走りたくないだけだ」

「そうか」

いつもと変わらないラウルの憎まれ口に、サイファはくすりと笑って相槌を打った。

「おめでとう」

茶色の馬を大きな木に繋ぎ、そのままぼんやりしていたラウルは、背後から声を掛けられて我に返った。振り返ると、少し離れた木陰に座ったレイチェルが、甘い微笑みをラウルに向けていた。小さな手で自分の隣を示して言う。

「ラウルも座ったら?」

ラウルは無言でその言葉に従った。彼女から少し距離をとってビニルシートの端に座る。そこから地面のひんやりした感触が伝わってきた。

「ラウル、今日は来てくれてありがとう」

「……ああ」

それだけで今日のすべてが報われたように感じた。同時に、そんな自分をどうかしているとも 思う。

「あしたから家庭教師、またよろしくね」

レイチェルは愛らしく小首を傾げてラウルを見つめた。金色の細い髪がさらりと流れて揺れる

ラウルは細めた横目で彼女を窺った。

「本当にもう大丈夫なのか?」

「その質問、いったい何度目?」

レイチェルは肩をすくめて微笑むと、しっかりとした口調で続ける。

「私は大丈夫よ」

「無理をしているのではないだろうな」

「そんなことないわ」

「ならいいが.....」

何度、彼女の「大丈夫」を聞いても、ラウルの不安は拭いきれなかった。その言葉すらもラウルを安心させるための嘘なのではないか、という考えが頭にこびりついて離れない。

それを見透かしたかのように、レイチェルは膝を抱えて前を向くと、落ち着いた声で付け加える。

「私、たいていのときは心から笑っているのよ。お父さまやお母さま、それにサイファが守って

くれているから、いつも幸せな気持ちでいられるの。無理をしているのは、ほんの少しのことだけだから……」

「しているんだな」

溜息まじりのラウルの言葉を耳にすると、レイチェルは視線を落として小さく笑った。

「誰だって多少は無理をしているでしょう? 言ってもどうにもならないのなら、言っても困らせるだけなら、黙っていた方がいいって思うの」

「そうやって内に溜め込んでいては、おまえの心が持たないだろう」

「でも……うん……そう、ね………」

レイチェルはしばらく逡巡すると、ゆっくりと顔を上げ、大きな瞳でじっとラウル見つめた。 小さな薄紅色の唇がそっと開く。

「じゃあ、本当につらいときは、ラウルに甘えさせてくれる?」

ラウルは身じろぎもせず、まっすぐに彼女を見つめ返した。

「それは、この前のように泣きたいということか?」

「泣くかどうかはわからないけれど、寄りかからせてくれるといいなって」

「.....わかった」

そう答えたものの、具体的にどういうことなのかは理解していなかった。弱音を吐露したいということだろうか。言葉どおり寄りかかりたいということだろうか。それとも、もっと他のことなのだろうか――。どんなことであろうとも、彼女の救いになるのであれば受け止めるつもりである。

レイチェルはほっとしたように息をついて微笑んだ。

「こんなことを頼めるのはラウルだけだわ」

「……サイファには、頼めないのか?」

それは率直な疑問だった。あれほど信頼しているサイファになら頼めても良さそうなものだ。 自分がサイファより信頼されているというわけでもないだろう。そこまで自惚れてはいない。

レイチェルはラウルの言わんとすることを汲み取ったようだ。視線を落としてしばらく考え込むと、真面目な表情でゆっくりと口を開く。

「きっと、ラウルとはお互いさまだから」

「どういうことだ?」

「ラウルが先に自分の弱さを見せてくれたから、私もラウルになら見せられるって思ったのかも」

彼女が言っているのは、おそらく二年前のことだろう。あのとき彼女に別の少女の面影を重ねていた。そして、彼女にそれを知られて逃げ出した。それはすべて自分の弱さが起こした行動である。自分でも認めてはいるが、今さらあまり触れてほしくないことだ。しかし、それが今に繋がっているのであれば、無駄ではなかったと思う。だが——。

「サイファだっておまえの弱さを受け止めてくれるはずだ」

別にサイファを援護するつもりはない。あえてそれを言ったはレイチェルのためである。婚約者に本心を見せられないとしたら、今後の彼女の人生はつらいものになるかもしれないからだ。

「そうね、私もそう思うわ」

レイチェルは意外にもあっさりと認めた。

「でも、サイファの負担になるようなことはしたくない。これ以上お荷物にはなりたくないの」 「どういう意味だ」

ラウルは訝しげに眉をひそめて視線を流す。だが、レイチェルはその視線に振り向くことなく 空を見上げた。大きな瞳に澄んだ青を映し、何かを諦めたような寂しげな微笑を浮かべて言う。

「私、ラグランジェ本家に嫁ぐでしょう? なのに、何の取り柄もなくて……魔導だって上手く扱 えないし……だから、せめて笑顔でいなければって……」

「そんなふうに思うならやめればいい」

口調は淡々としたものだったが、それはラウルの感情のままの言葉だった。

レイチェルは少し驚いたように目を見開いてラウルに振り向く。

「結婚のこと?」

「.....ああ」

ラウルは低い声で答えた。

「私の意思で変えられることじゃないわ」

レイチェルは苦笑しながら肩をすくめた。しかし、すぐにハッとすると慌てて弁明する。

「誤解しないでね。サイファとの結婚をやめたいってわけじゃないの。ただ少し不安なだけ。私 でいいのかしらって」

サイファはもちろんのこと、ラグランジェ家としても不満などないだろう。むしろ、レイチェルの潜在的な力を欲しているはずだ。彼女の魔導力と、サイファの才能・頭脳を受け継ぐ子供が本家に生まれれば、ラグランジェ家はさらに大きく飛躍できるかもしれないのである。

「でも、心配してくれてありがとう」

レイチェルの穏やかな微笑みに、ラウルは何も言葉を返せなかった。礼を言われるようなこと はしていない。彼女に対する心配というより、ただの身勝手な感情だったことは自覚している。

レイチェルは唐突にビニルシートに手をついて立ち上がった。湖の方へ小走りで駆けていく。 湖岸のギリギリのところで足を止めると、後ろで手を組んで湖を覗き込み、それから縁に沿っ てゆっくりと歩き出した。ドレスの裾の半分は湖上でひらめいている。

「そんなところを歩くと落ちるぞ」

「落ちても助けてくれるでしょう?」

レイチェルは振り向いて笑った。背後で湖面がきらきらと光を反射して眩しい。だが、それ以上に彼女の笑顔が眩しいと思った。今、彼女は心から笑えているのだろうか。そうであってほしいと願わずにはいられなかった。

軽快な蹄の音が、次第に大きくなって止まった。

サイファは白い馬を降りて近くの木に繋ぐと、ラウルたちの方へ歩いてきた。

「レイチェル、そんなに端を歩いたら危ないよ」

「ごめんなさい」

レイチェルは可憐な笑顔でそう言うと、金髪をさらりとなびかせながら、サイファのもとへ駆けていった。まるでずっと待ちかねていたかのようだ。やはりラウルよりもサイファといる方が楽しいのかもしれない。ラウルは無表情のまま小さく溜息をついた。

サイファはにっこりと笑って、彼女の頭に手をのせる。

「お昼にしよう」

「ええ」

二人は目を見合わせると、手を繋いでラウルの座っている方へ歩き出した。

三人は並んでビニルシートに座った。ラウルが中央で、その両隣がサイファとレイチェルという配置だ。なぜだかわからないが、サイファが勝手に決めてそうなったのである。ラウルとしては、この二人に挟まれていることに、何となく落ち着かないものを感じていた。

昼食はサンドイッチだった。レイチェルがバスケットに入れて持参してきたものである。手作りのようだが、彼女が作ったわけではないだろう。お茶すら淹れたことのない彼女に、サンドイッチなど作れるとは思えない。

「ねえ、私、プリンを作ってきたんだけど、食べてくれる?」

用意されたサンドイッチがすべて無くなると、レイチェルは少し浮かれた声でそう切り出した

「え?作ったって、レイチェルが?」

サイファはラウルを押しのけんばかりに身を乗り出し、目をぱちくりさせて聞き返す。そんな 彼の反応を見て、レイチェルはくすりと笑った。

「味見はしたから安心して」

「うわぁ、本当に? もちろん食べるよ」

サイファはレイチェルがプリン作りに挑戦していることは知らなかったらしい。彼にしては珍しく興奮を露わにしていた。まるで子供のようにはしゃいだ声を上げている。それほど意外で、 それほど嬉しかったのだろう。

レイチェルはいそいそとバスケットを引き寄せ、そこからプリンのカップを取り出す。

「.....えっ?」

その途端、彼女の動きは止まった。大きく目を見開いて驚いている。とまどい、そして落胆へ と表情が変わっていく。

「どうしたの?」

「崩れて混ざっているの……」

半透明のカップの中は、ラウルのところから見ても、プリンとカラメルが混じり合っているのがわかった。ぐちゃぐちゃといっても差し支えないほどである。

「馬はけっこう揺れるからね」

サイファもその状態を確認すると、立てたラウルの膝にもたれかかりながら、苦笑して言った

ラウルは無言でレイチェルに手を伸ばすと、手のひらを上に向けて催促した。何を催促しているか、彼女はもちろん理解しただろう。だが、プリンを握りしめたまま、困惑の表情を浮かべていた。大きな手とプリンを交互に見て悩んでいるようだ。

「それでも十分に食べられる」

「僕も食べるよ」

二人にそう言われて観念したのか、彼女はそのカップとスプーンをそれぞれに渡した。

サイファはさっそくスプーンですくって食べ始める。少し驚いたように目を大きくすると、顔 を綻ばせてレイチェルに振り向く。

「本当においしいよ。驚いたなぁ。ひとりで作ったの?」

「ええ……今度また作るから食べてね。ちゃんとしたものを」

「もちろん」

落ち込んでいたレイチェルも、心から嬉しそうなサイファを見て、少し笑顔を取り戻した。今 度はラウルを上目遣いで窺うと、遠慮がちに尋ねる。

「ラウルもまた食べてくれる?」

「ああ」

最初からそういう約束になっていたはずだ――ラウルは続けようとしたその言葉を飲み込んだ。誰がプリンの作り方を教えたのか、どうして彼女がプリンを作るようになったのか、サイファは何も知らないのだ。下手なことは言えない。思えば、サイファに秘密にしていることは他にもいろいろとある。しかも、次第に増えてきているような気がする。

そんなことを考えながら、ラウルは黙々とプリンを口に運んだ。サイファが言っていたように、確かにそのプリンは美味しかった。出来れば作られたときの状態で食べてやりたかったと思う

「しばらく休憩したら帰ろう」

サイファはそう言ってごろりと寝転がった。両手を上げて伸びをする。反対側のレイチェルも同じように仰向けに寝転がった。二人はラウルの背後で顔を見合わせてくすりと笑う。

ラウルは空を見上げて溜息をついた。

長い鳴き声を響かせながら、二羽の鳥が澄んだ青を横切っていった。

「さ、準備はいい?」

離れたところに繋いでいた馬を連れて戻ったサイファは、バスケットを持って立っているレイチェルに声を掛けた。レイチェルはにっこりと微笑んで言う。

「サイファ、私、帰りはラウルの方に乗るわ」

ラウルは驚いて彼女に振り向いた。長い髪が大きく揺れる。

「どうして?」

サイファは僅かに身を屈めて尋ねた。幼い子供に対するような優しい口調である。

レイチェルも幼い子供のようなあどけない笑みを浮かべて答える。

「競争でラウルが勝ったでしょう?」

「うわぁ、そうなの? 死ぬ気で頑張れば良かったよ」

サイファはおどけたように言う。訝しんでいる様子は微塵もない。単なる無邪気な思いつきと 考えているのだろう。だが、ラウルとしては、やはり素直に受けるわけにはいかない。

「勝手に決めるな。そんな約束をした覚えはない」

「でも、勝負に勝ったらご褒美は必要だわ」

「ご褒美だと?自分がそれだというのか」

「ええ」

「……馬鹿かおまえは」

ラウルは腕を組みながら、ニコニコしているレイチェルを睨み下ろした。自分がご褒美などと、とんでもないことをさらりと言っている。ラウルの心中を察してのことかもしれないが、少なくともサイファの前では自重すべきなのだ。何を考えているのかと思うが、きっと何も考えていないのだろう。

「馬鹿はちょっとひどいんじゃないか? 相手が女の子でも容赦ないよなぁ」

サイファは腰に両手を当てて、呆れたように溜息をついた。

「せっかくレイチェルがそう言ってるんだし、もらってあげてよ、ご褒美」

ラウルの気も知らないで、能天気にそんなことを言う。

レイチェルを過保護なくらいに溺愛しており、他の男には触れさせたくないはずだが、ラウルだけはなぜか昔から例外だった。それほど信頼しているのだろうか。それとも、男だという認識がないのだろうか。

サイファは何も知らない。二人の間に起きたことも、彼女に対するラウルの想いも――。

「二人乗りは出来るか?」

「さあな。やって出来ないことではないだろう」

ラウルは無愛想な口調で他人事のように答えた。

「そうだな」

サイファは口もとを緩め、小さくふっと笑った。

ラウルとサイファは馬を交換した。ラウルが二人乗りの鞍をつけた白い馬、サイファが茶色の 馬である。二人とも馬に対するこだわりはなかったため、鞍を交換するより手っ取り早いという 判断だった。

「くれぐれも大切に扱ってくれよ」

ラウルの後ろにレイチェルが乗ったのを確認すると、サイファも茶色の馬に乗った。それでもまだ心配そうに様子を窺っている。他のことはそうでもないが、レイチェルのこととなると途端に神経質になるのだ。それだけ大切にしていることの証左だろう。

しかし、レイチェルは、彼の心配をあまり気に留めていないようだった。いつものことだからかもしれない。安心させるようにサイファに軽く笑顔を送ると、ラウルに向き直り、その腰に細い腕をまわした。

「よろしくね、ラウル」

背中に柔らかい温もりを感じる。

「本当におまえは馬鹿だ」

「嬉しいでしょう?」

体を通して伝わってくる彼女の声。顔が見えないこともあり、真面目に言っているのか、からかっているのかわからない。どちらにしても自信はあるようだった。そして、それは間違ってはいない。だが——。

「それとこれとは話が別だ」

ラウルは前を向いたまま、ぶっきらぼうに答えた。

昼下がりの強い陽射しが、鬱蒼とした緑の隙間から射し込み、森の小径に光の雨を降らせている。朝よりもほのかに空気が暖かい。

意識してのことではないが、ラウルは行きよりもやや遅い速度で馬を走らせていた。

茶色の馬に乗ったサイファは、ラウルたちの後ろについている。レイチェルが気になるからということらしい。目の届かないところにいるのは不安なのだろう。

レイチェルは後ろを振り返ってサイファに手を振った。

「危ないぞ、手を放すな」

ラウルは思わずそんなことを口にする。危ないと思ったのは事実だが、それ以外の感情がなかったとはいえない。むしろ、そちらの方が大きかったかもしれない。

「ごめんなさい」

背後から小さな声が聞こえた。背中にあたたかい吐息がかかり、腰にまわされた腕に力が込められる。より緊密になった柔らかな温もりから、寄りかかった彼女の姿がはっきりと伝わってきた。実際に目にしているとき以上に、その存在を強く感じる。

こんなことは、もう二度とないかもしれない――。

ラウルはまっすぐ前を見据えたまま、僅かに眉根を寄せて目を細めた。

――まただ。

書類を眺めていたサイファは、視界がぼやけるのを感じて目を閉じた。左手で額を押さえて深く溜息をつく。

「随分と調子が悪そうだな」

隣に座る先輩のデニスが、ちらりと視線をよこして言った。ぶっきらぼうな言い方ではあったが、その声音から責めるようなものは感じられなかった。むしろ心配してくれているのだろうと思う。

「やっぱりわかりますか?」

「君がぼうっとしているのは珍しいからな。それに、顔も少し火照っている」

サイファは答えの代わりに、微かな笑顔を見せて肩をすくめた。少なくとも職場では普段どおりを装うつもりでいたが、いつのまにかそんな余裕をなくしていたらしい。思った以上に体がいうことをきかず、仕事を進めるだけで精一杯だったのだ。何度も顔を曇らせ、溜息をついた覚えがある。見るからにつらそうな状態だったのだろう。

医者に診てもらったわけではないが、おそらく風邪だ。

今朝は喉の痛みを感じる程度だったが、午後になって熱が上がってきたようだ。体がだるくて 力が入らないうえに、背筋がゾクゾクするような悪寒を感じる。さらに、頭がぼんやりとして、 まるで仕事がはかどらない。

昨日の遠乗りが原因だろうか。

そう思うものの風邪につながるような心当たりはない。朝が早かったせいか、多少の肌寒さを 感じることはあったが、我慢するほどのものでもなかったし、湖には足さえつけていないのだ。

いや、もしかすると――。

帰路でのことが原因だろうかと考える。往路はレイチェルと二人乗りだったが、帰路は一人で乗ることになった。ラウルの後ろに横乗りするレイチェルを見つめながら、冷たい風を背中に受けなければならなかったのである。そのことが嫌だったわけではないが、一抹の寂しさを感じたのは事実だった。

そこまで思考を走らせると、ふと我にかえって苦笑した。

どうやら寒かったのは体よりも心の方らしい。それで風邪をひくことはないだろう。

結局、原因はわからないままだ。

どうも今日は物事を論理的に考えられていない気がする。これしきの結論にも随分と遠回りを してしまった。やはり熱のせいで頭の働きが鈍っているのだ。

「今日はもう帰った方がいい。遠慮はするなよ」

「そうですね」

サイファは先輩の厚意を素直に受けた。急を要する仕事がないのであれば、このまま非効率的に続けることは得策ではない。早めに休養して早々に完治させた方が、結果的には早く仕事を進められるはずだ。

「では、医務室に寄ってから帰ります」

「お大事に」

デニスは軽く右手を上げてサイファを見送った。彼はあまり愛想が良い方ではないが、いつも さりげなく気遣ってくれる。サイファはそのことに感謝していた。

サイファはまだ明るい窓の外を眺めながら、廊下を歩いていった。タイル張りの固い床にもかかわらず、足もとがふわふわしているように感じる。高熱で力が入らないせいかもしれない。

彼の向かった先はラウルの医務室だった。

そこに到着すると、いつものようにノックもせずに扉を引く。だが、何かに引っかかってガシャンと音がしただけで、それが開くことはなかった。

鍵が掛かっているようだ。

ラウルが家庭教師以外で外出することはあまりない。まだレイチェルの家から帰っていない可能性の方が高いだろう。普段であればとっくに終わっている時間だが、長引いているのかもしれない。サイファは扉の前で息をつきながら腕を組み、ここで待つか、他の医務室に行くかを考えた。

そのとき――。

カチャリと鍵を外す音が聞こえ、続いてガラガラと扉が開いた。

「あれ.....?」

扉の向こうにいた人物はレイチェルだった。その背後にはラウルもいる。ふたりとも扉の前に立っていたサイファを目にし、少し驚いたような表情を見せていた。

「レイチェルどうしたの?」

「医務室を見学していたの」

レイチェルは後ろで手を組み、小さくニコッと微笑んで答えた。

それを聞いて、サイファは安堵の息をついた。自分と同じように患者として来たのではないか思ったが、どうやらその心配はなさそうだ。無理をしているようには見えないし、おそらく彼女の言うとおりなのだろう。

「今から帰るところ?」

「ええ、サイファは?」

レイチェルは小首を傾げて尋ねた。

「風邪をひいたみたいだから、ラウルに診てもらおうかと思ってね」

「風邪……? 大丈夫なの?」

大きく瞬きをして歩み寄ろうとしたレイチェルを、サイファは右手を前に出して制止した。軽く握った左手を口元に当てて言う。

「あまり近づかない方がいいよ。うつるといけないから」

「そう.....」

レイチェルは寂しげな声を落とすと、胸元で両手を組み合わせて心配そうに言う。

「サイファ、早く良くなってね」

「治ったらまた一緒にお茶をしよう」

サイファが笑顔を向けると、レイチェルもほっと表情を緩めて頷いた。そこに浮かぶ甘く柔らかい微笑み——彼にとってはそれが何よりもの薬だった。あたたかいものがじわりと胸に広がっていく。

「入れ」

今まで沈黙していたラウルが、唐突に短い一言を発した。いつもより僅かに声が低い。振り向いたサイファを一瞥すると、長髪をなびかせながら踵を返し、大きな足どりで医務室の中へ戻っていく。

虫の居所が悪いのだろうか、とサイファは思う。

やけに機嫌が悪く、苛立っているように見えた。もっとも、表面上は普段とそれほどの違いがあるわけではない。長い時間をともに過ごしたサイファだからこそ、微妙な変化から察することができたのだろう。

「じゃあね、レイチェル」

サイファは軽く右手を上げ、名残惜しさを振り払うかのようにそう言うと、ラウルのあとを追って医務室へと入っていった。

「風邪だな。かなり熱が高い。大人しく帰って寝ていろ」

ラウルは一通りの診察を終えると、ぶっきらぼうにそう言い放ち、薬の包みを投げてよこした

「毎食後に飲め。一日分だ。足りなければまた来い」

「なあ、これから夜ごはんを食べにいかないか?」

サイファはもらった薬をポケットにしまいながら言った。

机に向かってカルテを書いていたラウルは、手を止めると、眉根を寄せて横目で睨みつける。 「私の言うことを聞いていたのか」

「家に帰っても夕食は用意されてないんだよ。遅くまで仕事をするつもりだったから、いらないって言っちゃったんだよね」

サイファは笑顔を見せて軽い口調で言う。

「ひとりで食べに行け」

「医者のくせに病人に冷たいな」

「病人なら病人らしくしろ」

ラウルはカルテにペンを走らせながら、苛ついたように突き放した返答をする。

サイファはわざとらしく溜息をつき、両手を腰に当てた。

「わかった。病人らしくここで大人しくしているよ。ベッドで寝ていればいいのか? でも夕食は ラウルの部屋で食べさせてくれよ。手作りでも出前でもどちらでも構わない。あ、別におかゆじゃなくていいからな」

「.....帰れ」

ラウルのペンを持つ手が止まった。眉間には深い縦皺が刻まれている。それだけではなく、抑

えきれない怒りが全身から滲み出ているように見えた。

それでもサイファは怯むことなく平然として続ける。

「だから食べに行こうって言ったんだ。外食なら問題はないだろう? 今日くらい付き合ってくれ よな。食べたら大人しく帰るからさ」

「おまえ……」

ラウルは怒りとも呆れともつかない呟きを漏らした。頭を押さえて溜息をつく。そして、眉をひそめてサイファを一瞥すると、無言で立ち上がり、不服そうな表情ながらも外に向かって歩き出した。

サイファは満足そうにニコニコしながら、そのあとをついていった。

「ラウルは何が食べたい?」

「何でもいい」

サイファが問いかけると、隣を歩くラウルは無愛想に素っ気ない答えを返す。前を向いたまま、視線を向けようともしない。

「好き嫌いはあるか?」

「ない」

ラウルの好きなものも嫌いなものも、サイファは何も知らなかった。8年もの間、家庭教師と教え子として毎日のように会っていたが、一度もラウルとともに食事をしたことはなかったのである。食事だけではない。ラウルの私的な生活については、ほとんど踏み込むことができずにいた。

「ならどこでもいいな」

サイファはそう言うと軽く溜息をついた。ポケットに片手を入れ、僅かに眉を寄せて目を細める。少し頭がクラリとした。

カラン、カラン――。

サイファが鈴のついた扉を開いて中に入り、そのあとにラウルが続く。

「静かで落ち着けるところだろう?」

サイファは振り返ってにっこりと微笑んだ。

そこは王宮内の喫茶店だった。内装はアンティーク調に統一され、窓にも上品なレースのカー テン掛かっていた。その窓からは、噴水のある中庭が見下ろせる。店の雰囲気は申し分なかった

だが、その割には、いつ来ても客はあまりいないのだ。王宮の奥まった場所にあるためか、上品すぎる雰囲気のためか、気後れしてしまう者が多いのだろう。そもそも、こちらに来る用事のない下役では、存在すら知らないのかもしれない。そのため、この店に来るのは、ある程度の地位にある者がほとんどである。

「サイファ」

奥から弾んだ声が聞こえ、サイファは反射的に振り向いた。だが、見るまでもなく相手が誰か

はわかっていた。

「父上」

その姿を奥のテーブルに認めると、にっこりと微笑みながら足を進めた。入口からは死角になっていたが、父であるリカルドの向かい側には、アルフォンスとフランシスが座っていた。目が合うと軽く会釈をする。

フランシスはいずれ魔導科学技術研究所の所長になると目されている人物だ。つまり、現在の 所長であるアルフォンスの部下である。そして、リカルドの元後輩でもあり、その縁でサイファ も何度か顔を合わせたことがあった。もっとも挨拶を交わしたくらいで、特に親しいということ はない。

「ラウルと一緒に来たのか?」

リカルドは興味深げに身を乗り出して尋ねた。

「やっと念願が叶いました」

サイファは肩をすくめておどけたように言う。しかし、それは限りなく本心に近いものだった。 。 魔導省に勤務するようになってから何度か誘ったのだが、すべて断られていたのである。

「いったいどんな手を使ったんだ?弱みでも握ったのか?」

「人聞きの悪いことを言わないでくださいよ」

ラウルを連れ出すことの難しさは、リカルドもよく知っているのだろう。納得いかないと言わんばかりの不思議そうな顔をしていた。そして、じっと探るような視線をラウルに向けて言う。

「この10年で少しは丸くなった、ということかな?」

「こいつの異常なまでのしつこさに負けただけだ」

ラウルは腕を組むと、顎をしゃくってサイファを示した。

「ラウルの扱いには自信があるよ」

サイファは両手を腰に当て、軽く笑いながら言った。そして、意味ありげな視線をラウルに流すと、片方の口角を僅かに吊り上げた。その挑発に対抗するかのように、ラウルは眉を寄せ、冷たく燃えたぎる瞳で睨み下ろす。二人の視線は火花を散らしながらぶつかり合った。

「まあまあ、ふたりとも」

リカルドは両の手のひらを見せ、微笑みながら軽い口調で二人を宥めた。

ふと、居心地の悪そうなフランシスに気がつくと、安心させるようににっこりと微笑みかけて 言う。

「紹介するよ。サイファは知っているな? その向こうにいるのが……」

「知っている」

リカルドを遮って答えたのはラウルだった。

「えっ?」

リカルドは思わずラウルに振り向いて聞き返す。

「こいつは私のことを知っている。私もこいつのことを知っている」

ラウルは無表情のままフランシスを見下ろして淡々と言った。

「ああ、そうか、医務室で風邪を診てもらったことがあったな」

リカルドは思い出したように言った。その記憶を反芻しながら、二度ほど小さく頷く。自分で 見つけたその答えに満足しているようだった。

しかし、サイファは違うと思った。

フランシスの強張った表情に引っかかりを感じていた。それだけならば、単にラウルの冷たい態度に怯えているだけとも取れなくはない。しかし、隣のアルフォンスまでもが何か緊張している様子なのである。口を固く結んだまま、目を細めて視線を流し、フランシスとラウルを交互に窺っている。机の上で組み合わせた手には、不自然に力が入っていた。

「妙な気を起こしていないだろうな」

ぞっとするほどの冷たい瞳で、ラウルはフランシスを刺すように睨む。

フランシスはビクリを体を震わせた。冷や汗が頬を伝う。強張った顔をさらに強張らせ、それ でも必死に笑みを張り付かせて答える。

「もう、きっぱりと諦めています」

「私が本気だということを忘れるな」

静かな声で重々しくそう言うと、ラウルは長髪を舞い上げながら背を向け、大きな足どりで歩き出した。リカルドたちとは離れた席にドカリと腰を下ろす。

サイファは当惑しつつも、とりあえず父親たちに軽く一礼し、早足でラウルを追いかけた。

一瞬、目眩がして足が止まりそうになる。目を閉じて少し大きく息をした。やはり体調は良くないようだ。

「フランシスと何かあったのか?」

ラウルの正面に腰を下ろしながら、声をひそめて尋ねる。

「おまえは知らない方がいい」

「そういう言い方、余計に気になるんだけど」

頬杖をついて口をとがらせ、じとっとした目を向ける。

ラウルは背もたれに身を預け、小さく息をつきながら腕を組んだ。そして、サイファの追及から逃れるかのように、うつむいて視線を落とした。

エプロンドレスに身を包んだウエイトレスが、水の入ったグラスとメニューを持ってきた。上 品な所作で一礼すると、それぞれをラウルとサイファの前に置いていく。

だが、サイファはそのメニューを手に取ることなく言う。

「ここのカレーライス、美味しいんだよ。ラウルも食べてみるか?」

「.....ああ」

ラウルは無表情のまま答えた。

「じゃあ、カレーライスふたつ」

まだそこにいたウエイトレスに、サイファは笑顔を見せて注文する。ウエイトレスは復唱して確認を取り、一礼してからその場を離れた。

――意外と疲れるな。

サイファは冷静にそんなことを思う。普段はまったく苦にならないが、今日は愛想を振りまく

たびに体力も気力も消耗するように感じていた。これも風邪の影響だろうか。だが、そういう素振りは少しも見せることなく続ける。

「で、フランシスと何があった?」

「あいつに訊け」

先ほどの質問を繰り返したが、ラウルは目を伏せたまま素っ気なく受け流す。どうあっても答えないという感じではない。食い下がれば口を割るだろう、とサイファは判断する。

「ラウルの口から聞きたいんだよ」

「誰から聞いても内容は変わらん」

「だったらラウルが教えてくれよ」

ラウルは僅かに視線を上げた。じっとサイファの目を見つめて言う。

「聞いたら後悔するかもしれん」

「聞かなければそれもわからない」

サイファは強い意志を秘めた瞳で、まっすぐに見つめ返した。何を言われても諦める気はないということを、ラウルにわからせたかった。

ラウルは溜息をついて背もたれに身を預けた。

「あいつはレイチェルを魔導の実験に使う計画を立てていた」

「えっ.....」

サイファは思わず後ろを振り返った。だが、そこからはフランシスの姿は見えなかった。前に向き直ると、机の上で両手を組み合わせ、真面目な顔でラウルに尋ねる。

「どうやってそれを知ったんだ?」

「アルフォンスに相談された」

「そうか……」

アルフォンスは自分ではなくラウルに相談を持ちかけた――そのことは少し残念だったが、仕方のないことだと思う。少なくとも魔導に関しては、ラウルの方が知識も実力も圧倒的に上なのだ。それはきちんと自覚している。妬ましく思うような気持ちはなかった。

「ラウルが説得して諦めさせたのか?」

「研究所ごとおまえを消すと言った」

さらりと落とされた答えに、サイファは無言のまま目を大きくした。そのままじっとラウルを 見つめる。その物言いたげな眼差しを受けたラウルは、苛ついたように眉をひそめた。

「何だ?」

「いや、ラウルが他人のためにそこまでやるなんて意外だったからさ。特にレイチェルのことは 苦手に思っているみたいだしね」

今度はラウルが目を大きく見開く。しかし、すぐにきまり悪そうに視線を落とした。

サイファは小さく笑って続ける。

「まあ、嫌ってはいないようで安心したよ。レイチェルはときどき突拍子もないことを言うから 扱いづらいだろうけど、彼女に悪気はないんだよ。大きな心で受け止めてやってくれると嬉しい ラウルとレイチェルには仲良くしてもらいたい——それは、サイファが以前からずっと望んでいたことだった。その根底にある思いは、ごく自然なものである。自分の好きな二人の間で諍いなど起こしてほしくない、ただそれだけだ。

「また三人でどこかへ行こうよ。きのうの遠乗り、楽しかったよな」

「楽しんでいたのはおまえだけだ」

ラウルはうつむいたまま憎まれ口を叩く。

「そんなことはないよ。レイチェルも喜んでいたし、ラウルだっていい気分転換になっただろう? たまには思いきり外の空気を吸うべきだよ」

むきになって言ったせいか、少し息が苦しくなった。ぎゅっと胸を締めつけられたように感じる。額にはじわりと汗が滲んできた。

「おまえ、遠乗りのせいで風邪をひいたのだろう。懲りていないのか」

「遠乗りのせいとは限らないさ。それに、それほどひどい風邪でもないし……」

不意に目の前が暗くなった。慌てて机に片腕をつき、ふらつきそうな体を支える。一瞬の後に 、視界はうっすらと戻ってきたが、その視野は極端に狭まっていた。

「熱は高いけど、わりと体は平気みたいだよ」

精一杯に笑顔を作ってそう言うと、近くのグラスを手に取った。だが、すぐにするりと滑り落ち、ガシャンと音を立てて割れる。足に水が掛かったようで冷たい。

再び目の前が暗くなった。目を開いているのに何も見えない。ただ、体が傾いていくのはわかる。闇の中に沈み込んでいく感覚。しかし、それに抗う術はない。

意識が薄れていく頭の片隅で、サイファは自分を呼ぶラウルの声を聞いた。

胸を圧迫されたような息苦しさを感じ、サイファは目を覚ました。

ぼんやりした薄暗い視界に、見知らぬ天井が映る。ベッドもいつもと違って寝心地が悪い。そ して、微かに消毒液のような匂いが漂っている。

ここは——?

少しだけ頭を動かし、ぐるりとあたりを見まわした。自分が寝かされていたのはパイプベッドであることに気がつく。周囲はクリーム色の薄いカーテンに覆われ、そのカーテンレールには、自分のものと思われる制服の上着が、ハンガーに掛けて吊るされていた。カーテンの外の様子は窺えないが、それだけでも十分に推察できた。

おそらくラウルの医務室だろう。

だが、自分がどうしてここにいるのかが思い出せない。手の甲を額にのせて目を細め、おぼろ げな記憶を辿る。

確か、ラウルと食事に出かけて――。

ウエイトレスにカレーライスを注文してから、レイチェルについての話をしていた。そこまでは憶えているが、それ以降の記憶がぷっつりと途切れている。しかし、体調が良くなかったこと、ラウルの医務室に寝かされていることを合わせて考えると、おそらくあの店で昏倒したに違いない。

サイファは腕時計を見ようと右手首を眼前に掲げたが、そこには何もついていなかった。上着を脱がされたときに、一緒に外されたのだろう。体を起こしてあたりを探そうとする。

シャッ---。

軽い音がしてカーテンが開いた。薄暗い中に大きな影が姿を現す。ほのかな逆光のため、顔はよく見えなかったが、それが誰なのかはすぐにわかった。

「倒れるまで我慢をするな。迷惑だ」

「ラウルがここまで運んでくれたのか?」

「放って帰るわけにはいかない」

どうやって自分を運んだのか興味があったが、訊いても答えてはくれないだろうと諦める。もっとも、普段であれば無理やりにでも聞き出そうとしただろう。だが、今はまだ体調が戻っていないせいか、そこまでの気力はなかったのだ。

ラウルは溜息をついて、ベッド脇においてあったパイプ椅子に腰を下ろした。

「そこまで体調が悪いことを見抜けなかった私にも落ち度はある。単純な風邪というわけでは なく、過労からきているようだな」

「過労? そんなに無理をした覚えはないんだけどな」

サイファは腕を組んで首を傾げた。確かにこのところ仕事は忙しく、その日のうちに帰れない ことも多かったが、あまりそれを負担に感じたことはなかった。

「せめて風邪をひいているときくらいは大人しくしていろ」

「こんなときでもないと、ラウルが食事に付き合ってくれないと思ったからさ」

軽く笑って肩をすくめる。彼の優しさに付け込んだつもりだったが、結果はこのざまだ。罰が 当たったのかもしれない。

「医者の言うことは素直に聞くべきだったな」

「めずらしく殊勝だな」

「それだけ弱ってるってことだよ」

「軽口を叩けるくらいには回復したようだ」

ラウルは冷ややかにそう言うと、椅子から立ち上がり、背を向けて歩き出した。

サイファはシーツを掴み、慌てて身を乗り出す。

「どこへ行くんだよ」

「自室へ戻る」

「病人を置いて?」

ラウルは足を止めて僅かに振り返った。濃色の長い髪が緩やかに揺れる。月明かりに縁取られ た横顔は、いつにもまして無感情に見えた。

「家に帰るなり、そこで寝るなり好きにしろ。リカルドには連絡を入れてある」

素っ気ない言い方だったが、そこに冷たさはなかった。少し責任を感じているせいかもしれない。サイファは凝りもせずそこに付け入ろうとする。

「ここじゃなくてラウルの部屋に入れてくれないか?」

「断る」

ラウルの返答には少しの躊躇いもなかった。それだけは譲れないということなのだろう。今までも何度となく懇願して、すべてにべもなく拒絶されているのだ。簡単にいかないことはわかっていた。それでもサイファはもう少しだけ粘ってみようと考える。

「ここのベッドは寝心地が悪いんだよ」

「贅沢を言うな。文句があるなら帰れ」

「シャワーだけでも使わせてくれよ。汗をかいて気持ちが悪いんだ」

「……家に帰れ」

ラウルの声が一段と低くなった。

サイファは目を伏せ、意識的に瞬きをしてから顔を上げた。

「じゃあ、せめてもう少しだけここにいてくれないか」

ラウルはじっとサイファを睨み下ろした。サイファもまっすぐにラウルを見つめた。どちらも引こうとせず、瞳の奥を探り合うかのように視線を絡ませる。

無言のまま時が過ぎていく。

先に視線を外したのはラウルだった。小さく溜息をつくと、ベッドから少し離れた机に向かって座る。そして、手元の電気スタンドをつけると、サイファに背を向けたまま本を読み始めた。 サイファはふっと小さく笑みを漏らした。

「たまには風邪をひくのも悪くないな」

呟くようにそう言うと、再びベッドに体を横たえ、掛け布団を肩まで引き上げた。

途端にあたりは静寂に包まれる。気味が悪いくらいに無音だった。

いつもこんな感じなのだろうか......。

わざと大きく息をつき、天井を見つめて目を細める。

「なあ、ラウルは寂しくないのか。ずっとひとりで、誰にも心を開かないで」

ラウルからの返答はなかった。本を捲る微かな音だけが聞こえる。

「ラウルを見ていると、何か放っておけないような気持ちになるよ。きっと、レイチェルも同じ ように思っているんじゃないかな。ラウルにとっては迷惑かもしれないけれど……」

サイファは静かに淡々と続けた。だが、ラウルに言っているのか、独り言なのか、自分でもよくわからなくなっていた。

「僕じゃ、駄目なのかな」

一瞬の沈黙の後、ラウルの座っている椅子が小さく軋んだ。

「おまえらしくない弱気な言葉だな」

「本心はそんなものだよ、きっと」

サイファは急に疲れを感じ、細く息をついて目を閉じた。まだ体の状態が良くないにもかかわらず、調子に乗って話をしすぎたようだ。眠気に襲われて意識が沈み込んでいく。

「またどこかへ行こう、三人で……」

それは、ほとんど無意識に口をついた言葉だった。その微かな声は、この静寂でなければラウルの耳には届かなかっただろう。

サイファはそれを最後に眠りに落ちた。

三人に訪れるはずの穏やかな未来を信じながら――。

「お母さま、私、今日はラウルに夕食をご馳走になるの」

よく通る澄んだ声が、広い部屋に響く。

授業を終えたレイチェルは、ラウルとともに階下に降りると、居間の扉を開けるなりそう言った。さらりと金の髪を揺らしながら、屈託のない笑顔を見せている。

「レイチェル、あなた、また我が侭を言ったのね」

母親のアリスは溜息をついてソファから立ち上がり、まっすぐレイチェルの方に足を進めた。 そして、彼女の背後に立っていたラウルを見上げると、僅かに首を傾げて尋ねる。

「ラウル、いいの?」

「.....構わん」

ラウルは無表情のまま、感情のない声で短く答えた。

「じゃあ、今回はよろしくお願いするわ」

アリスは申し訳なさそうに会釈した。それから、再びレイチェルに視線を移すと、表情を引き締め、毅然とした声で言いつける。

「レイチェル、あまり遅くならないうちに帰ってきなさい。明日の準備もあるんだから」 「はい、お母さま」

レイチェルははきはきと聞き分けのよい返事をした。

風が緩やかに吹いている。

人通りの少ない裏道に立ち並んだ緑の木々は、微かなざわめきを奏でながら、燦々と降り注ぐ陽光を浴びてきらきらと輝いていた。その上方に広がる鮮やかな青空には、薄い筋状の雲がかかっている。そろそろ夕刻に差しかかろうという時刻だが、その光景には早朝のような清々しさがあった。

ラウルとレイチェルは、いつものようにその裏道を並んで歩いていた。

「私がおまえに夕食をご馳走するのか?」

「ええ」

ラウルが横目を流して尋ねると、レイチェルは声を弾ませて当然のように返事をした。後ろで 手を組み、心地よさそうに空を見上げている。軽い足どりに合わせて、薄水色のリボンが小さく 揺れた。

「おまえからは何も聞いていなかったぞ」

「先にお願いしたら断られてしまうでしょう?」

そう言ってラウルに振り向くと、眩しいくらいの笑顔を浮かべる。

やはり、そうだったのか――。

言い忘れていたわけではなく、あえて言わなかったのだ。普通に頼めば断られることではあるが、いきなり母親の前で決定事項のように言ってしまえば、話を合わせてくれるのではないか——そんなふうに計算したに違いない。稚拙だが効果的な作戦である。それがずるいことだ

とは、彼女自身は少しも思っていないのだろう。無邪気な笑顔に毒気を抜かれ、怒る気も失せて しまった。

「今日だけだぞ」

「ありがとう」

アリスに意思を尋ねられたとき、そんな話は聞いていないと冷静に突っぱねることはできた。 そうすることなくレイチェルの作戦に乗ったのは、自分も心のどこかでそれを望んでいたからに 他ならない。いや、以前の自分であれば、たとえ望んでいたとしても拒絶したはずだ。これ以上 、彼女との距離を縮めるわけにはいかないのである。

なのに――。

ラウルは空を見上げて目を細めた。緩やかな風に吹き流され、焦茶色の長髪がさらさらと音を 立てて揺れた。

二人はラウルの部屋に到着すると、いつものようにささやかなティータイムを始めた。いつもの指定席に座り、いつもの白いティーカップで、いつもの琥珀色の紅茶を飲むのである。

だが、いつもと違ってそこに茶菓子はなかった。

用意していなかったわけではない。あえて出さなかったのだ。今日は普段より早めに夕食をとることになる。いまケーキやマフィンを食べてしまっては、夕食が入らなくなる可能性もあるだろう。

レイチェルも意図を理解しているのか、そのことについて何も文句は言わなかった。それどころか、ずっと浮かれた様子でニコニコしている。

「今日の夕食は何を作ってくれるの?」

「どこかへ食べに行くという手もある」

「ラウルの手作りがいいの」

当然ながらそう来るだろうと思っていた。以前も手作りの菓子を要求してきたことがあった のだ。推測は容易である。

「突然そう言われても、たいしたものは作れん」

「ラウルがいつも食べているものでいいわ」

レイチェルはティーカップを両手で持ち、くすっと愛らしく笑った。

ラウルは腕を組んで溜息をついた。

「今度からは前もって言え」

「今度.....?」

レイチェルはきょとんとして首を傾げた。不思議そうな顔でラウルを見つめる。ここへ来る途中の道で、ラウルが「今日だけだ」と口にしたことを覚えていたのだろう。その発言と今の発言は明らかに矛盾している。

ラウルはきまり悪そうに視線を泳がせた。

それでも、これで終わりにするわけにはいかない、せめて一度くらいはまともなものを作ってやりたい——そんな思いを消し去ることは出来なかった。

「おまえが望むなら、だが......」

「じゃあ、今度はそうするわね」

レイチェルは嬉しそうに声を弾ませると、砂糖菓子のような甘い笑みを浮かべた。その心から幸せそうな笑顔は、重くなっていたラウルの心までもふっと軽くしてくれた。

「もう夕食を作るの?」

まだ紅茶を飲んでいたレイチェルは、材料の用意を始めたラウルを眺めながら、不思議そうに首を傾げて尋ねた。夕食の準備をするにはいささか早すぎる時間である。彼女が疑問に思うのも無理はない。

だが、もちろん理由はあった。背を向けたまま、動きを止めることなく答える。

「おまえの母親が遅くなるなと言っていた」

遅くなればレイチェルは叱られてしまうだろう。また、当然ながらラウルにもその矛先が向けられるはずだ。ラウルには彼女を危険な目に遭わせた過去がある。家庭教師を続けるためには、 これ以上の不興を買うようなことは避けねばならない。

「私も何かお手伝いをするわ」

ティーカップをソーサに戻して駆けてきたレイチェルは、大きな瞳を輝かせながら、しゃがんでトマトを選ぶラウルの横から、ひょこりと顔を覗かせて言う。

「おまえは座っていろ」

「お手伝いしたいの」

ラウルは溜息をついた。ろくに料理も出来ないレイチェルに、簡単に手伝いなどさせるわけにはいかない。できれば大人しくしていてほしいと思う。怪我などされては困るのだ。しかし、彼女にはまったく引く気配はなかった。ニコニコと笑顔のままで、ラウルの指示を待っている。

「……皿を並べておけ」

「わかったわ」

思いつく限りで最も無難なことを頼むと、それでもレイチェルは嬉しそうに張り切って返事をした。軽い足どりで戸棚へと駆けていく。その中から大きな皿をふたつ取り出し、重ねてテーブルの方へ運んでいった。それをラウルの席と自分の席に一つずつ並べる。そして、無事にきちんと並べ終わると、ニコッと満足そうに微笑んだ。

横目でこっそりと窺っていたラウルは、心の中でほっと安堵の息をついた。

まったく難しい作業ではないのだが、彼女を見ているとなぜか危うく感じてしまうのだ。

今回のことだけではない。

彼女の行動にはいつもどこか危うさを感じていた。それは、彼女の無邪気さに起因するものなのかもしれない。あまりにも危機感がなさすぎるのである。それが彼女の魅力ではあるが、同時に心配だとも思う。

サイファも同じように思っているのだろうか、それとも——。

ぼんやりとそんなことを考えながら、ラウルは彼女から目を離して自分の作業を再開した。

「わぁ、美味しそう」

席に着いたレイチェルの目の前で、フライパンから皿に盛りつけられたものは、ごくありふれたトマトソースのパスタである。何のひねりもないものだ。それでも彼女は待ちきれないといった様子で、目をきらきらさせながら待っている。

ラウルが席に着くと、レイチェルはにっこりと微笑みかけた。

「冷めないうちに食べろ」

「それじゃあ、いただきます」

行儀良く手を合わせてそう言うと、フォークを手に取り食べ始めた。

ラウルも無言で食べ始める。

本当に普段どおりの味で、不味いわけではないが、取り立てて美味いものでもない。ラグランジェ家の令嬢である彼女が、到底満足できるようなものではないだろう。

だが、彼女は美味しいと言いながら笑顔で食べている。

それが本心なのか、世辞なのか、ラウルには判断がつかなかった。ただ、料理の味はともかくとして、二人で過ごすこの時間については、少しは楽しんでくれている——そう信じてもいいような気持ちになっていた。

食事が終わってから、ラウルは再び紅茶を淹れた。

向かいに座るレイチェルとともに、静かに食後のティータイムを過ごす。

彼女はときおり顔を上げ、ラウルににこやかな微笑みを見せた。

しばらくは、そんな穏やかな空気が流れていた。

だが、ティーカップの中身が少なくなるにつれ、彼女の表情は固くなっていった。それを持つ 手にも力が入っているように見える。何かひどく思いつめているようだった。

「言いたいことがあるのか?」

「でも、ラウルには関係のないことだから……」

レイチェルはティーカップに視線を落としたまま言葉を濁す。彼女にしてはめずらしくはっきりしない。その口ぶりからすると、言いたいことがあるのは間違いなさそうだ。ただ、ラウルには関係のない内容だという。

そうだとすると、考えられることは——。

ラウルはうつむくレイチェルをじっと見つめた。片手でティーカップをソーサごと横に退ける。カチャン、と陶器のぶつかり合う小さな音が響いた。

「レイチェル、こっちへ来い」

不意に呼ばれたレイチェルは、僅かに顔を上げ、不思議そうな表情を浮かべた。それでも、言われるままに立ち上がって足を進める。

「どうしたの?」

その問いに、ラウルは無言で大きく椅子を引いた。彼女の小さな手を引き、膝の上に横座りに させる。そして、後ろから細い肩に手をまわすと、自分の胸に体ごと寄りかからせた。 レイチェルは為すがままだった。

あっというまのことで、何が起こったかさえ理解していないのかもしれない。広い胸に頬を寄せたまま、きょとんとして顔を上げた。大きな目をぱちくりと瞬かせる。ラウルの真意はいまだに掴めていないようだ。

「遠乗りのときの約束を忘れたのか。甘えさせろと頼んだのはおまえだろう。今さら何を遠慮している。言いたいことがあるなら言え」

ラウルは落ち着いた声で言った。

彼女が強引な方法で夕食をともにしようとしたのは、もしかしたらこのためだったのかもしれない。何とかして時間やきっかけを作ろうとしたのだろう。そのくせなかなか言い出せないでいる。普段はさんざん我が侭を言っているくせに、肝心なことは臆して遠慮するなど、おかしなやつだと思う。

彼女の顔に複雑な笑みが浮かんだ。目を伏せてこくりと頷くと、ためらいつつも、小さな薄紅色の唇をそっと開く。

「あした……パーティがあって……」

「パーティ?」

「年に一度、ラグランジェ家のみんなが本家に集まるの」

そういえば、サイファからそんな話を聞いたことがあった。興味がないので聞き流していたが 、そのパーティが毎年の恒例行事ということだけは、うっすらと覚えている。

「そこで何かあるのか?」

ラウルが静かに尋ねると、その胸の中で、レイチェルはゆっくりと首を横に振った。

「何もないわ。何も起こらない。けれど……」

言葉を詰まらせると、ラウルに寄りかかったまま、小さな手で縋るように服をぎゅっと掴んだ。体は僅かに震えていた。ラウルが肩にのせた手に少し力を込めると、彼女は小さく頷いた。深く呼吸をしてから話を続ける。

「私のことを良く思っていない人たちがいるの」

「どういうことだ」

ラウルは焦る気持ちを抑えつつ、意識してゆっくりと尋ねた。

レイチェルはうつむいたまま答える。

「たいした魔導力もないうえに、他に何の取り柄もないから、本家次期当主の婚約者には相応しくないって、その人たちに言われているの」

意外としっかりした口調だった。しかし、ラウルの服を掴む手には力が入っていた。

「本当にその通りだから、言われても仕方がないわ。我慢するしかない。わかっているの。

でも……その人たちの私を見る目が、何か、とても怖くて……」

「アルフォンスやサイファは何をやっている」

ラウルは無性に腹が立った。レイチェルがこんな思いをしているというのに、二人はなぜ助けないのだろうか。レイチェルよりもパーティの方が大事なのだろうか。普段あれほど溺愛しているにもかかわらず、肝心なときにはまったくの役立たずである。

レイチェルは寂しそうにふっと笑った。

「このことはきっと知らないと思うわ。あんなことを言うのは私に対してだけだから。お父さまたちの前ではそんな素振りは少しも見せなくて、逆に私のことを褒めそやしていたりするの。そういうところも少し怖いけれど……」

レイチェルはまさしく箱入り娘だ。身近な人間に惜しみない愛情を注がれ、その一方で、それ以外の人間とはあまり接することなく育てられてきた。そのため人の悪意というものをほとんど知らず、それに対する免疫が出来ていないのだろう。そうでなくても、まだ14歳の少女には厳しすぎる現実である。

「でも、そのおかげで、お父さまたちに心配を掛けずにすんでいるのね」

レイチェルは気丈にも明るい声でそう続けた。顔を上げてにっこりと微笑む。

ラウルは眉根を寄せて目を細めた。

「そのパーティには、必ず行かなければならないのか」

「私は次期当主の婚約者だから……特に、今年はその正式なお披露目の意味もあるって聞いているわ。行きたくないなんて言ったら、お父さまにも、お母さまにも、サイファにも迷惑を掛けてしまう」

そのお披露目があるから余計に行きたくないのかもしれない。注目を浴びれば、さらにやっか みを受けることになる。火に油を注ぐようなものだ。

レイチェルは顔を上げ、険しい表情のラウルを宥めるように優しく微笑んで言う。

「心配しないで、大丈夫よ。私が我慢をすればいいだけだから」

ラウルは小さく息をつき、彼女の頭に大きな手をポンとのせた。

「私にまで気を遣うな」

「.....うん」

レイチェルはうつむいて小さな声で返事をした。ずっと掴んでいたラウルの服を離して手を下ろすと、力が抜けきったかのように、体ごとラウルに寄りかかる。うつむいた頬に、金色の髪がさらりとかかった。

行くな、と言いたかったが言えなかった。

行かないという選択は、行くよりもつらい結果を招くかもしれない。それ以前に、そんな選択をすること自体が不可能なのかもしれない。

彼女もそれがわかっているからこそ、今まで誰にも言わずに耐えてきたのだ。

どうにもしてやれないのがもどかしい。

だが、彼女はどうにかしてほしいとは思っていないだろう。無責任な慰めの言葉が欲しいわけでもない。ほんの少しの時間、こうやって寄りかかっていたいだけなのだ。

そもそも、それが二人の交わした約束である。

ラウルは彼女に両手をまわし、そっと優しく抱きしめた。いや、包み込んだというべきかもしれない。触れる程度の力しか込めていないのである。約束を違えぬように、繊細な花を手折らぬように――。

そのままどれくらいの時間が過ぎただろうか。

ラウルは腕の中に視線を落とす。しかし、うつむいたレイチェルの顔は見えない。眠っているのか、泣いているのか、ただじっとしているだけなのか、それを知ることはできなかった。

ちらりと掛け時計に目をやる。

もうそろそろ彼女を帰さなければならない時間だった。

それを認識すると同時に、相反する感情が湧き上がる。

彼女が毎年つらい思いをしてきたという事実を知ってしまったのである。帰すしかないと頭では理解していても、感情はそれを拒絶していた。できることなら、このまま自分の腕の中に引き留めておきたいと思う。

願っても叶わないことはわかっている。

しかし、ありえないことだが、もし彼女がそれを望んでくれたとしたら――。

「こんなに優しくされると、帰りたくなくなってしまうわ」

無言の願いに応えるかのようなレイチェルの言葉。

ラウルの心臓がドクンと大きく跳ねる。

「でも、帰らなくちゃ」

彼女はぽつりとそう続けると、ラウルの広い胸に小さな手をつき、ゆっくりと上体を離した。 そして、ラウルの脚の上から降りると、後ろで手を組んでくるりと振り返る。薄水色のリボンが 跳ね、金色の髪がさらりと舞い、ドレスがふわりと広がった。大きくにっこりと微笑んで言う。

「あした、頑張ってくるわね」

「.....ああ」

ラウルはまっすぐに彼女を見つめたまま、低い声で虚ろに返事をする。頑張れと言うべきか、 頑張るなと言うべきか——しばらく迷っていたが、結論は出せなかった。

「ありがとう」

まるでラウルの心を見透かしたように、レイチェルはあたたかい声でそう言った。そして、ふわりと柔らかい微笑みを見せると、くるりと背を向けて部屋を後にする。彼女の姿が視界から消え、すぐに、扉の閉まるパタンという軽い音が聞こえた。

ラウルは渦巻く気持ちを抱えながらも、ただ黙って見送ることしかできなかった。

「サイファ、やっと見つけた」

鈴を転がすような可憐な声で呼ばれ、サイファは二十枚ほどの皿を抱えたまま振り返った。声の主であるレイチェルが軽い足どりで駆け寄ってくるのが見える。彼女は嬉しそうに微笑んでいたが、サイファの抱えた皿を目にすると、急に顔を曇らせて声のトーンを落とした。

「ごめんなさい、邪魔をしてしまって……」

「気にしないで、大丈夫だから」

サイファは安心させるように陽気な笑顔を見せた。作業中で忙しいことは確かだが、しばらく 休憩するくらいの余裕はあるのだ。近くのテーブルに皿を置いてから話を続ける。

「それよりレイチェルの方こそ準備はいいの?」

「私はドレスを着替えるだけだから」

レイチェルは後ろで手を組み、小さく肩を竦めてくすっと笑った。

ラグランジェ本家の三階にある大広間――。

今日はこの場所で、ラグランジェの本家と分家が一堂に会するパーティを開催することになっている。その準備で、朝から大勢の人がせわしなく行き交っていた。カジュアルな立食形式のパーティではあるのだが、それでも出席者が多いため、配置や段取りが何かと大変なのだ。

シンシアとリカルドは、全体を見ながら作業の指示を出していた。

その指示を受けて実際に作業しているのは、この日のために雇った外部の人間である。サイファもそこに加わって働いていた。それは、母親であるシンシアの昔からの方針である。本家の一人息子でも甘やかさず、出来ることはさせなければならないという考えだ。

「ごめんね」

不意に落とされた詫びの言葉。

それを耳にしたレイチェルは、えっ、と小さく聞き返した。聞き取れなかったわけではないだろう。その意味がわからなかったのだ。答えをせがむように、不思議そうな顔でじっと見つめている。

「レイチェルがこのパーティを苦手に思っていることはわかってるんだけど……」

サイファは腰に両手を当て、曖昧に微笑んで言葉を濁した。

それはわかっていてもどうにもできないことだった。本家次期当主の婚約者という立場である彼女を、特に理由もなく欠席させることはできない。そんなことをすれば、彼女だけでなく、父親のアルフォンスまでも咎められることになるだろう。

しかし、レイチェルは首を横に振ると、屈託のない笑顔で答える。

「サイファは何も悪くないわ。気にしないで、私なら大丈夫だから」

年端もいかない彼女の精一杯の気遣いに、サイファは小さく息をついて目を細めた。これでは 立場が逆である。本来ならば、自分の方が安心させる言葉を掛けなければならないのだ。それに もかかわらず、心細いはずの彼女にこんなことを言わせてしまうなど、自分が情けなかった。 しかし、すぐに気を取り直すと、レイチェルを見つめて真摯に言う。

「もし何かあったら、どんな些細なことでも遠慮なく言ってね。君のことは必ず守る。僕はどんなときでもレイチェルの味方だから」

それは、子供の頃から今に至るまで、ずっと思ってきたことである。彼女はかけがえのない大切な存在であり、守りたいというのはごく自然な願いだった。

だが、それだけではない。

本家次期当主の婚約者ということで、彼女は受けなくてもいいはずの謗りを受けている。自分のせいでつらい思いをさせているのだ。だから、自分には彼女を守る義務があるとも考えていた

「ありがとう」

レイチェルはそう答えて愛らしく微笑む。

彼女はサイファの深い思いなど何も知らないのかもしれない。それでもサイファは構わなかった。あえて伝えようとは考えていない。この笑顔を自分に向けてくれる——ただそれだけで十分だった。

「あら、レイチェル、来ていたの?」

レイチェルの存在に気づいたシンシアが、そう声を掛けて足早に歩み寄ってきた。普段はロングドレスを身に着けていることが多いが、今は作業中のため、シンプルなブラウスと膝丈のタイトスカートという動きやすい格好をしていた。しなやかに流れる長い金髪も、後ろで一本に束ねられている。

「こんにちは」

レイチェルが甘い声で挨拶をすると、シンシアはネジが弛んだように顔を綻ばせた。

「ちょうど良かったわ。そろそろ持って行こうと思っていたところだったのよ」

「持って行く……?」

レイチェルはきょとんとして首を傾げ、そのまま不思議そうに瞬きをする。

そんな彼女の様子が可愛らしくて、サイファは思わず口もとに笑みを漏らした。

「アリスから聞いてなかった? 今回は、母上がレイチェルのパーティドレスを用意したんだよ。 もう何ヶ月も前から大騒ぎしていてね」

「だってこんなことって滅多にないじゃない」

そう答えるシンシアは、いつも冷静な彼女とは別人のように浮かれていた。

今回の件は、彼女の方からアリスに頼んで実現したことだった。

娘がいない彼女には、女の子のドレスを見立てる機会などなかった。そのことを少し寂しく思っていたのだろう。一度やってみたいとアリスに申し出たのだ。大袈裟な言い方をすれば、念願が叶ったということになる。あのはしゃぎようも無理のないことだ。

「今からドレスを合わせましょう。いらっしゃい」

「はい」

シンシアが差し出した手に、レイチェルが小さな手をのせる。

「それじゃあね、サイファ」

「またあとでね」

振り向いて笑顔を見せるレイチェルに、サイファも笑顔で答えて軽く手を振った。そして、彼女がシンシアとともに出て行くのを見送ると、まだ見ぬドレス姿を心待ちにしながら、運びかけていた皿を抱えて自分の作業を再開した。

「我々ラグランジェ家の、さらなる発展と繁栄を祈念して、乾杯!」

本家当主リカルドの音頭で、大広間に集まった皆が唱和してグラスを掲げた。天井のシャンデリアから降り注ぐ光を受けて、シャンパンが宝石のようにキラキラと煌めく。

そうしてパーティが始まった。

色とりどりの艶やかなドレス、胸元や指で光を放つ宝石、そして、その宝石さえくすませるほどの鮮やかな金の髪——。それらが大広間を華麗に装飾していた。

「レイチェル」

背後から呼ばれたレイチェルは、細い髪を踊らせながら振り返り、声の主であるサイファに微 笑みかけた。右手にはカクテルグラスを持っている。もっとも、まだアルコールが許される年齢 に達していないため、中身はノンアルコールのカクテルである。

身に纏っているのは、シンシアが用意したパーティドレスだった。淡い水色と純白を基調にしたものだ。ボリュームのあるスカートは床につくほどの長さで、上は首元まできっちりと覆われており、肌の露出はほとんどないといってもいい。胴回りや袖はタイトに作られているが、肩の部分は膨らみ、袖口もひらひらと波を打って広がっていた。その袖先や胸元には、繊細で豪奢なレースがあしらわれている。

装飾品も、ドレスに合わせて用意されたものだ。

胸元の透かし模様の上には、ブルーサファイアのペンダントが輝いている。その透明感のある 鮮やかな青は、サイファの瞳ととてもよく似ていた。それを意識して選んだのかもしれない。 また、透き通るような金の髪には、精緻な銀細工の髪飾りがつけられていた。そこにも小粒の宝 石がいくつか散りばめられている。レイチェルの動きに合わせて控えめにキラリと輝いた。

サイファは上から下まで眺めると、愛おしげに目を細めて言う。

「とてもよく似合っているよ。清楚で上品だけど、華があって、可愛らしさも感じられて」 レイチェルはニコッと笑顔で応えた。彼女自身もシンシアの見立てを気に入っていた。それが 似合うと褒められたことは素直に嬉しかった。

サイファは少し腰を屈めて覗き込む。

「これから、ルーファス前当主に挨拶に行くけれど……大丈夫?」

「ええ、大丈夫よ」

本心では多少の心細さを感じていたものの、それを悟られれば心配を掛けてしまう。大丈夫と 自分に言い聞かせつつ、不安な気持ちを笑顔でくるみ、芯の通ったしっかりとした声でそう答 えた。

その直後、急にまわりの空気が変わった。穏やかな会話が止み、代わりに聞こえるのは小さな ざわめき、急いだ靴音、いくつも重なる衣擦れの音——。

レイチェルはゆっくりと振り返った。

そこには人が避けてできた一本の道があった。広い大広間の奥まで続いている。周囲の人々は、小さな声でこそこそと話をしながら、好奇心を宿した目で奥を窺っていた。

そこにいたのは前当主のルーファスだった。

恰幅のいい大きな体を見せつけるように、後ろで手を組んで悠然とレイチェルたちの方へ足を 進める。その後ろには数人の男性が付き従っていた。もちろんいずれもラグランジェ家の人間で ある。

ぼんやりしているレイチェルの手から、誰かがさっとグラスを取った。そして、前に出ようと したサイファを制止し、レイチェルの背中を軽く押した。それは、ルーファスの目的が彼女にあ ることを示していた。

あたりは水を打ったようにしんと静まりかえった。

「レイチェル=エアリ」

ルーファスの迫力ある低音が、大広間内に静かに響いた。

周囲の人間に緊張が漲る。

しかし、レイチェルは臆することなく笑顔を見せた。流れるような手つきでドレスの裾を持ち 上げ、軽く膝を折って頭を下げる。

「ルーファス=ライアン前当主、お久しぶりです」

その挨拶に、ルーファスは言葉を返さなかった。ただ無言で二人の間を詰める。そして、何の 前触れもなくレイチェルの顎を掴んで持ち上げると、蒼の双眸をじっと探るように見つめた。

「本当に面白い.....」

レイチェルはきょとんとして瞬きをした。その意味を尋ねかけるように、大きな瞳でルーファスを見つめ返す。彼の口もとの皺が少しだけ吊り上がった。

「何も案ずることなく嫁ぐが良い。ラグランジェ家のことは、すべてサイファが取り仕切る。おまえは子を生めばそれで良い」

「.....はい」

ルーファスがなぜそのようなことを言うのか、レイチェルにはわからなかった。しかし、その内容については理解はできる。不思議に思いながらも、彼の瞳から目をそらすことなく肯定の返事をした。

「どのような奇跡が起きるか楽しみだな」

ルーファスは低い声でそう言うと、鼻を鳴らして意味ありげに含み笑いをした。

「ルーファス=ライアン前当主、あまりレイチェルを怖がらせないでいただけますか」

サイファはすっと歩み出て言う。恭しく丁寧な口調ではあるが、抑えきれない反感のようなものが滲んでいた。その表情も、目だけは笑っていない。

ルーファスはサイファを冷たく一瞥した。

「怖がってなどいないだろう。この子はおまえより肝が据わっておる」

なおもレイチェルを見つめつつ、どこか愉しげに口の端を上げてそんなことを言う。そして、ようやくレイチェルの顎から手を離すと、近くのテーブルにあったカクテルグラスをその手に取った。それを高々と掲げ、大きく声を張る。

「皆の者、こちらに注目してくれ」

大広間にいたほとんどの人間が会話を止め、ルビー色のカクテル、もしくはルーファス自身に 注視した。

ルーファスはマイクもなしに、大広間の隅にまで声を響かせる。

「皆も知っておろうが、次期当主のサイファ=ヴァルデと、その婚約者レイチェル=エアリだ。 いずれはこの二人がラグランジェ家を背負って立つことになる。その暁には、皆も手を貸し、共 にラグランジェ家を盛り上げていってほしい」

パラパラと拍手が起こる。それが呼び水となり、大きな拍手が沸き起こった。

皆がサイファとレイチェルに注目している。

レイチェルはドレスを持ち上げ、軽く膝を曲げた。隣のサイファも頭を下げて、深く一礼する。それから二人は横目で視線を合わせると、安堵したように小さくそっと笑い合った。

パーティは穏やかな歓談の時間に移った。

レイチェルはベランダの隅で一人ひっそりと座っている。

サイファや両親たちは、大広間の中央付近で多くの人と挨拶を交わしていた。まだ子供のレイチェルには、彼らの話は理解できないことが多い。一緒にいても会話に参加できず、気を遣わせるだけである。邪魔だけはしたくないと思い、ここにいることを選んだのだ。

空は次第に暗くなっていく。地平近くのオレンジ色も、間もなく消えようとしていた。対照 的に、大広間はますます煌びやかに光量を増しているように見えた。

「本当に本家に嫁ぐつもりなのかしら」

不意に耳に届いた攻撃的な声。

レイチェルは反射的に振り向いた。少し離れたところに三人の女性がいる。その中央がサイファの元婚約者候補のユリアである。すらりと背が高く、ひときわ目を引く美人だ。レイチェルと視線がぶつかると、嘲笑するように口の端を吊り上げる。あたりは暗くなりかけていたが、濃い口紅を引いた唇は、嫌でもはっきりと識別できた。

両隣の二人も、レイチェルに横目を流しながらユリアに同調する。

「ルーファスおじさまも、どういうわけかレイチェルにだけは甘いのよね」

「所詮は男ってことよ。たいていの男は、ああいう従順そうな子に弱いの」

「以前のおじさまは才能のある子にしか目をかけなかったはずなのに……」

「あの人もそろそろ耄碌してきたってことかもね」

「聞こえるわよ」

ユリアが口先だけで窘めると、他の二人は口を軽く押さえて笑い合った。

レイチェルはなるべく気にしないようにした。白いテーブルに手を置いて空を見上げる。少し 冷たさを増した風が、桜色の頬から熱をさらい、細い髪をさらさらと揺らした。

「何よあれ、すました顔しちゃって」

「黙っていれば本家に入れるものね」

二人は腹立たしげに語気を強めた。眉をひそめてレイチェルを睨む。

「図々しいのは今に始まったことじゃないわ。あなたはそんな器じゃないって何度も教えてあげたのに、一向に身を引こうとしないんだもの」

ユリアは豊かな巻き髪を後ろに払いながら、冷ややかに言う。

「頭に来るわね。どうしてあんな子が本家に嫁ぐの?」

「ラグランジェ家の未来はどうなってしまうのかしら」

二人は遠巻きにレイチェルを眺めながら、わざとらしい抑揚をつけて、ネチネチと責めるよう に言った。

「レイチェル、探したよ」

幼いながらも立派に盛装したレオナルドが、ジュースの入ったグラスを両手に持ってやってきた。彼はレイチェルの隣家に住んでいる少年である。ときどき庭などで一緒に遊ぶような関係だ。彼はレイチェルの隣の椅子に座ると、グラスのひとつを差し出しながら言う。

「あんなババァたちの言うことなんか気にするなよ。レイチェルが可愛いから妬んでるだけなんだぜ。みっともないよな」

「バ、ババァっ.....?!」

「子供の言うことなんだから放っておきなさいよ」

裏返った声を上げて顔を真っ赤にする友人を、ユリアは冷めた口調で宥めた。容姿端麗を自負する彼女にとっては、そんな言葉は気に掛けるにも値しないものだったのだろう。

レイチェルは少し困惑したように微笑みながら、首を傾げてレオナルドを覗き込む。

「レオナルド、お母さんとお父さんはどうしたの?」

「あんまり子供扱いするなよな。一人でもいられるよ」

レオナルドはツンとすましてそう言うと、急にパッと顔を輝かせて振り向いた。机に肘をついて身を乗り出す。細くて柔らかい髪がふわりと風をはらんだ。

「それよりレイチェル、大事な話があるんだ」

「なあに?」

レイチェルは少し目を大きくして尋ねる。

レオナルドはその目をまっすぐに見つめ返して言う。

「計算してみたんだけどさ、僕が18歳のとき、レイチェルは26歳なんだ」

「足し算ができるようになったのね」

「そんなの前からできるよっ!」

優しく微笑むレイチェルに、レオナルドは顔を紅潮させながら必死に言い返した。眉根を寄せて口をとがらせ、小さな声で言葉をつなぐ。

「そうじゃなくてさ……そんなに悪くないだろう?」

[ż?]

レイチェルにはその意味がわからなかった。しかしレオナルドは考える間も与えず、一方的に 話を進めていく。

「だから、待っていてほしいんだ」

「何を……?」

レオナルドはテーブルにのせていたレイチェルの両手をとった。小さな手でぎゅっと挟むよう に握りしめる。そして、まだあどけない顔を凛と引き締め、真剣な眼差しを向けて言う。

「僕と結婚しよう」

それはあまりにも予想外な言葉だった。レイチェルは目をぱちくりさせて言う。

「私はサイファと結婚するのよ?」

「あんなヤツとじゃ幸せになれない! 僕なら絶対にこんな思いはさせない!」

レオナルドは身を乗り出してひたむきに訴えた。レイチェルの両手を握る手に力を込める。そ して、小さな口をきゅっと結ぶと、澄んだ青の瞳を微かに揺らした。

レイチェルは柔らかく表情を緩めた。

「心配してくれているのね。ありがとう、でも大丈夫だから」

「あいつに言いづらいんだったら僕がきっちり断ってきてやるよ。だから僕と結婚しよう。一生 レイチェルのことを守る。絶対に幸せにするって誓うから」

熱く、強く、真摯に畳み掛けられる言葉。しかし、それを言い終わるか終わらないかのところで、背後から彼の頭に拳骨が落とされた。

「イタッ!」

「まったくこの子は! 次期当主の婚約者にプロポーズ? 何を考えているの?!」

それはレオナルドの母親だった。腰に両手をあて、眉を吊り上げながら叱りつける。優美で上 品なドレスを着ているが、その行動は普段どおりで容赦がない。

しかし、レオナルドも簡単には引かなかった。反抗的な目を向けて言い返す。

「僕は真剣だ!」

しかし、母親は無言でレオナルドの頭をはたくと、口をふさいで小さな体を抱え上げた。手足をジタバタさせる息子を睨みつけてから、呆然とするレイチェルに向き直り、思いきり愛想笑いを浮かべる。

「ごめんなさいねレイチェル。気を悪くしないで。子供の戯れ言だと思って許してやってもらえないかしら。この子には私がきつくお灸を据えておくから」

「え......ええ......」

早口で捲し立てるその勢いに圧倒され、レイチェルは困惑ぎみに返事をした。そして、息子を 抱えたまま逃げるように去っていく彼女を見送りながら、いまだに無駄な抵抗を続けるその息子 の身を案じて、胸元で祈るように手を組み合わせた。

「レオナルドの求婚、受ければいいんじゃないの?」

離れたところから様子を窺っていたユリアは、レオナルドとその母親がいなくなると、レイチェルのもとヘツカツカと足を進めて言い放った。腕を組みながら顎を上げ、蔑むように見下ろす

「あなたにはそれがお似合いだわ」

しかし、レイチェルは何も答えることなく、ただ曖昧に微笑むだけだった。

その態度がユリアの癪に障ったのだろう。彼女の表情が一気に険しくなった。あからさまな苛立ちと憎しみがその瞳にこもっている。

「来なさい」

有無を言わさぬ口調で命令すると、レイチェルの手を引いて無理やり椅子から立ち上がらせた。その手をしっかりと捕まえたまま、大きな足どりで大広間の方へ歩き出す。レイチェルはよろけながらも、何とか小走りでついていった。

「待っていて」

大広間の中央まで来ると、ユリアはそう告げて手を放した。そして、近くで談笑していたリカルドのもとへ駆けていき、華やかな笑顔を作って声を掛ける。

「リカルドおじさま」

「やあ、ユリア」

リカルドはグラスを掲げて陽気に応えた。普段よりも気分が高揚しているようだ。顔も少し赤らんでいる。酔いがまわってきているのだろう。

「存分に楽しんでいるかい?」

「ええ、でも少し退屈してしまって……」

ユリアはそう答えると、笑顔のまま肩を竦めて見せる。

「だから、ちょっとだけ地下の訓練場を借りたいの」

「え? 今かい?」

リカルドは面食らったように尋ね返した。

ユリアがまだ婚約者候補だった頃は、本家の訓練場を借りることも度々あった。それゆえ彼女 の希望自体はおかしいとはいえない。だが、パーティ中ということを考慮すれば、明らかに不自 然な行為である。いくら退屈したといっても、パーティの途中で魔導の訓練など、普通はしない のだ。

しかし、怪訝な顔を向けられても、ユリアが動揺を見せることはなかった。下手な言い訳をすることなく、ただ少女のように小首を傾げながら、上目遣いで甘えるように見つめて言う。

「ダメ?」

「まあ、構わないよ」

リカルドは小さく笑いながら了承した。酔っていて気が大きくなっているのか、頭の働きが鈍くなっているのか、目的も理由も尋ねることはなかった。ポケットからキーホルダーを取り出すと、その中の一つを外してユリアに渡す。

「はい、じゃあこれ」

「ありがとう、おじさま」

差し出された鍵を、ユリアは両手で受け取り、胸元で握りしめて微笑んだ。それから、にこやかに会釈をすると、豊かな巻き毛を揺らしながら、レイチェルのところへ戻ってくる。

そのときのユリアの顔からは、すっかり笑みが消え失せていた。

レイチェルは言い知れぬ恐怖を感じて息を呑んだ。

「訓練場で何をするの?」

「あなたがどれだけ成長したか見てあげる」

ユリアは感情のない声で答えながら、レイチェルの手を取って歩き出そうとする。だが、レイチェルは素直には従わなかった。少しだけ手を引き戻して抵抗を見せる。

「そんなこと……」

「いいから来なさい」

ユリアに強く手を引っ張られ、レイチェルは前につんのめりながら足を進めた。慌てて後ろを振り返り、縋るように目を走らせる。そして、何人かと話をしているサイファを視界の隅に捉えた。

――サイファ、助けて!

そう声の限りに叫びたかった。しかし、彼の邪魔をしてはいけないという思いが、彼女の行動をギリギリのところで押しとどめる。きつく目をつむり、胸を押さえつけ、その衝動をぐっと飲み込んだ。

レイチェルはこれまで本家の訓練場には入ったことがなかった。

こわごわと遠慮がちにあたりを見まわす。

彼女の家の訓練場よりも数倍は広そうである。しかし、ただ広いだけであり、特に立派という ことはなかった。むしろ、ところどころ壁に亀裂が入っていたりして、かなり古びているような 印象を受けた。

「あなた、あのラウルに師事しているそうじゃない。もしかしたら、隠れた才能でも開花したのかしらと思ってね」

ユリアは右手を腰に当てて振り返った。彼女がそんなことを微塵も思っていないということは 、その棘のある口調からも明らかである。レイチェルでも理解できるくらいの露骨な皮肉だ。

「ラウルにはお勉強を教えてもらっているだけ。魔導は教わっていないわ」

「どうせやりたくないって我が侭を言っただけでしょう」

図星を指されたレイチェルは、何も言い返すことが出来ずにうつむいた。

「まあいいわ。ちょうど試したいことがあるのよ。袖を両方とも捲りなさい」

「袖……? どうして?」

「その綺麗なドレスを破りたくないでしょう?」

ユリアはそう言うと、口もとを斜めにし、凄みのある冷笑を浮かべた。

レイチェルは胸元で両手を重ね合わせて身震いする。怖かった。極度の不安に押し潰されそうになる。しかし、頼れる人はここにはいない。自分ひとりでこの場を切り抜けなければならない

のだ。

少し考えを巡らせたのち、命令のままに袖を捲り始める。

このドレスはシンシアがわざわざ自分のために用意してくれたものだ。何ヶ月も前から張り切って準備をしていたと聞いている。そんな気持ちのこもったものを傷つけるわけにはいかない。 そして、あれほど嬉しそうにしていた彼女を落胆させたくなかった。

ドレスはタイトに作られているため、袖を捲ることすらきつい。だが、なんとか肘のあたりまで引っ張り上げると、広がった袖口をそこでまとめた。白く細い腕が半分ほど露わになる。

「後ろで手の甲を合わせなさい」

ユリアが何をするつもりなのか想像もつかず、不安は募る一方だった。だが、もう逃げること はできない。観念して従うほかはなかった。

そっとユリアに振り向いて様子を窺う。

彼女は無表情で両手を向かい合わせていた。そして、呟くような声で呪文を唱え始める。両手の間に白い光が生じた。その両手を大きく引き離すと、光は細い紐のように形を変える。後ろで合わされたレイチェルの手首に、それを幾重にも巻きつけた。

「いっ.....」

思わず引きつった声が漏れる。

手首に巻きつけられた光の紐は、素肌に擦れて焼けるような痛みを与えた。無理な力がかかった肩と腕にも、違う種類の痛みが走る。

ユリアは冷たく見下ろし、真紅の唇に満足げな笑みをのせた。

「それはね、魔導師の動きを封じるためのものよ。魔導省でも罪人を拘束するために使われているわ。普通の縄や手錠では簡単に壊されてしまうものね。簡単には解除できないわよ。あなた程度の魔導力や知識では確実に無理ね」

外そうとして手をずらしてもビクともしない。ただ食い込むだけである。それでも諦めることなく、痛みに耐えながらもがき続ける。

「きゃあ!」

そうこうしているうちに、うっかりドレスの裾を踏んで転んでしまった。手をつくこともできず、肩から倒れ込み、床に頭を打ちつけた。小さなうめき声を上げて身を捩る。何とか起き上がろうとするものの、手が拘束されて使えないうえに、裾の長いドレスが邪魔をして、どうにも思うようにならなかった。

「なんてみっともない格好なのかしら」

ユリアは芝居がかった口調で嘲笑する。

薄汚れた埃だらけの床に、金色の長い髪と白いドレスを乱れさせたまま、レイチェルは苦しげ に肩で息をしていた。顔にかかる髪を払うことも、膝上まで捲れあがったドレスを戻すこともで きない。ユリアの言うように、本当にみっともない格好になっているのだと自覚した。

「その拘束を破ることができたら、あなたを認めてあげてもいいわよ」

「ユリアに認められる必要はないわ」

実際、ユリアには何の権限もなかった。本家の婚約に口を挟む立場にはなく、意見を届けるだ

けの力も持ち合わせていない。ただ個人の感情のみで、勝手に動いているだけだった。

痛いところをつかれたユリアは、カッと頭に血を上らせる。

「生意気なのよ!!」

「ああっ!!」

縛られた手首からのびる光の紐を、ユリアが勢いに任せて引くと、レイチェルは体を弓なりに 反らせて甲高い悲鳴を上げた。

「いくら声をあげても誰にも届かないわよ」

「う......う.....」

ユリアが愉快そうに送った忠告の言葉は、レイチェルの耳にはほとんど届いていない。彼女は 痛みに耐えることで精一杯だった。背中を丸めて眉を寄せながら、額に汗を滲ませている。

「ねぇ、わかる? みんな言い出せないだけなの。あなたみたいな出来損ないは本家当主の妻に相応しくないって。サイファだって本心ではそう思っているのよ」

「私は、サイファの口から聞いたことしか信じない」

苦しげに目を細めながらも、気丈にはっきりとした口調で言う。

ユリアの顔に苛立ちが広がった。

「だからサイファは言い出せないの。思っていても口に出せないの。優しい人だものね。サイファのことを思うなら、それを察して自ら身を引くべきなのよ」

「私はサイファの言うことだけを信じる」

レイチェルは揺らぐことなく同じ内容を繰り返した。

「バカと話をすると疲れるわ」

ユリアは腰に両手を当て、わざとらしく溜息をついた。床に倒れ込んでいるレイチェルの傍らにしゃがむと、彼女の顔を覆う金髪を乱雑に払った。

「わかりやすく説明してあげる。いい? ラグランジェ家は魔導がすべてなの。特に本家は優秀な血筋を繋げることで、その権威を保ってきた、いえ、より強力なものにしていったわ。その二千年近くにわたって積み上げてきたものを、あなたが台無しにしようとしているの。あなたの出来損ないの血が、本家の血筋に混じってしまうのよ」

「それでも私はサイファに従う」

レイチェルは頭上のユリアには目を向けず、ただまっすぐに何もない正面を見据えて言う。

「いい加減にしなさい!」

「きゃぁっ!」

バチンという音とともに、頬に熱い痛みが走った。ユリアが思いきり手を振り上げて叩いた のだ。それでも彼女は満足していないようだった。睨みを利かせながら立ち上がると、奥歯を強 く噛みしめて腕を組む。

「本当に強情な子ね……。いい加減に認めなさいよ、自分は本家当主の妻に相応しくないって。 そうしたら拘束を解いてあげる」

レイチェルの目にうっすらと涙が滲んだ。

叩かれた頬がジンジンと疼く。後ろで縛られた手首も焼けるように痛い。

でも、誰も助けに来ないのだ。

自分ひとりで何とかしなければならない。何とかしなければ――。

そう思うものの、レイチェルに巧みな対処など考えつくはずもなかった。このような格好では 魔導すら使えない。何とかして引きちぎろうとするだけである。食い込むような激しい痛みを感 じたが、それでも中断することなく力を込め続けた。こぶしを強く握りしめる。肩と腕が小刻み に震えた。額からは汗が噴き出し、床に滴り落ちて染みを作った。

その姿を見下ろしながら、ユリアは鼻先でせせら笑った。

「バカね、それは魔導の紐なのよ。力任せに引っ張ったってどうに……も……」

レイチェルの拘束された手首のあたりから、ぼんやりとした青白い光が発せられた。それを目 にしたユリアは、顔をこわばらせて一歩後ずさる。

「えっ?ちょっ......と......何なの?魔導?」

「く......うぅ......」

レイチェルがさらに力を込めると、その光はますます強さを増していく。彼女に魔導を使っているという意識はなかった。ただ必死にこの拘束から逃れようとしているだけである。

バチン、と何かが弾ける音が響いた。

彼女の手首を拘束していた魔導の紐がちぎれ、霧散するように消滅した。腕が解放され、くたりと床に投げ出される。そのままの格好で、レイチェルは肩を上下させて大きく呼吸をした。

「どうして、こんな......あなた.....」

困惑と驚愕の混じり合った声が、頭上から落とされる。

レイチェルは床に腕をつくと、ゆっくりと上体を起こした。頬にかかる髪を払うことなく、立ちつくしたユリアに強い眼差しを送る。それを受けた彼女の体がビクリと震えた。

「な……何よ、その目は? それがあなたの本性ってわけ?!」

「どうして……? こんなことをしても、ユリアが本家に入れるわけじゃないのに……」

ユリアはもう他の人と結婚している。いくらレイチェルを退けたところで、今となっては本家に嫁ぐことなど不可能なのだ。頭のいい彼女がそれをわかっていないとは思えない。

「それでも……それでもあなたが気に入らないのよ!!」

ユリアは感情を爆発させて叫んだ。レイチェルを睨みつける瞳がじわりと潤む。

「私は物心ついたときからずっと努力をしてきた。魔導も学問も教養も何もかも。シンシアのように、いえ、シンシア以上になれる自信はあった。私にとって、本家に嫁ぐことがすべてだったのよ。それなのに……あなたが生まれた、ただそれだけですべてが終わってしまったわ」

涙を含んだ声でそう言うと、眉根を寄せてうつむいた。

「それでも、あなたが本家当主の妻に相応しい立派な人間だったら諦めもついた。けれど、あなたはたいした魔導力を持たない出来損ない、そのうえ笑うしか能のないバカだった。許せるはずないじゃない!生まれたときから何の努力もせずに何もかも手に入れて、幸せを約束されて......

ユリアはそこで言葉を詰まらせた。体の横で握りしめたこぶしを小刻みに震わせている。 床にぽたりとひとしずくが落ちた。 レイチェルは大きく瞬きをして彼女を見上げた。ゆっくりと立ち上がる。遠慮がちに歩み寄ると、胸元で両手を組み合わせて困惑したように言う。

「ユリアだって今は幸せでしょう? 結婚して子供も生まれて……」

「幸せなんかじゃない!!」

ユリアは金切り声を上げてレイチェルの頬をひっぱたいた。よろけて床に倒れ伏す彼女に、さらに呪文を唱えて魔導を仕掛ける。

「きゃあ!!」

レイチェルは頭を抱えて身を丸めた。

光の矢が彼女に降り注ぐ。

だが、その矢はすべてギリギリで彼女を避けて床に落ちた。

「呆れた、結界すら張れないなんて」

ユリアは乱暴に涙の跡を拭い、吐き捨てるようにそう言うと、レイチェルを残して訓練場を出て行った。憎々しげに打ち鳴らされるヒールの音は、次第に遠ざかっていき、やがて聞こえなくなった。

レイチェルは洗面台の前に立ち、正面の鏡を見つめた。

落ちそうになっていた髪飾りは、いったん外してから付け直した。床に擦れてついた顔や手の汚れは、洗面台で洗って落とした。叩かれて赤くなっていた頬も、流水で冷やしてほとんど元通りになっている。

ドレスの汚れは何度も叩いて払ったが、完全には落とせなかった。遠目にはわからないくらいではあるが、近づけばくすんだような灰色の汚れが見えてしまう。ただ、汚れているのは主に側面であるため、多少は目に付きにくいかもしれない。気づかれないことを祈るしかない。

一番の問題は手首の傷だ。

強く擦れたような赤い跡が何本も走り、ところどころ血も滲んでいた。

水道の蛇口をひねって洗い流す。

傷口に水が沁みて痛かった。思わず顔をしかめるが、それでも我慢して続ける。血はもう止まっているようだ。ドレスを汚す心配はないと判断し、ハンカチで拭いてからその袖を戻した。幸いにも袖は長い。気をつけていれば隠し通せるだろうと思う。

早く戻らなければ、いないことに気づかれてしまう――。

レイチェルは洗面台に手をつき、鏡の中の自分を真剣な眼差しで見つめた。そして、ゆっくり と深呼吸して、ゆっくりと瞬きをすると、鏡に向かって笑顔を作ってみせた。

——レイチェル、どこへ行ったんだろう。

サイファはあたりを見回しながら歩いていた。一通り大広間の中は探したはずだが、レイチェルの姿を見つけることはできなかった。どこかで見逃してしまったのだろうか。それともすれ違ってしまったのだろうか。

レイチェルと離れている歓談中であっても、彼女が助けを呼べば駆けつけられるように、また

、彼女に対して行きすぎた行為があれば止められるように、気を配りつつ備えてきたつもりである。

だが、サイファにも本家の人間としての役割があり、ずっと彼女だけを見守り続けることはできない。しばらく目を離している間に見失ってしまったのだ。最後に見たのはレオナルドと何かを話していたところである。しかし、今、レオナルドは母親と一緒にいる。

「サイファ」

不意に後ろから声を掛けられ振り返る。そこにいたのは、今まさに探していたレイチェルだった。彼女のいつもと変わらない笑顔を目にすると、ほっと安堵の息をつく。

「良かった、姿が見えないから心配したよ」

レイチェルは後ろで手を組み、小さくくすっと笑った。

「ごめんなさい。外の空気を吸ってきたの」

「ここは息が詰まるよね」

サイファは肩を竦めて同調した。彼女がこういう場が苦手であることは知っている。気分転換になるのであれば、そしてきちんと戻ってくるのであれば、少しの間くらい外に出るのも悪くないだろう。

安心させるように微笑みかけたあとで、何気なく視線を落とすと、彼女のドレスがうっすらと 汚れていることに気がついた。はっきりとわかるものではないが、埃をかぶったように薄く灰色 になっている。

「そこ、どうしたの? 汚れてるみたいだけど」

「あ……さっき少し転んでしまったから……」

そう答えるレイチェルの顔には、微かな動揺の色が浮かんでいた。しかし、後ろで手を組んだ まま小さく肩を竦めると、すぐににっこりと笑顔を浮かべて取り繕った。

もうすっかり普段の表情だ。

しかし、サイファは先ほどの小さな動揺を見過ごさなかった。

「もしかしてどこか怪我したんじゃないの?」

「大丈夫……あっ……」

彼女の返答を待つことなく、優しく力を込めて手首を掴み、後ろで組まれていた手をほどいた。そして、戸惑う華奢な指先を掴まえると、広がったレースの袖口を持ち上げて中を覗き込む。 傷は思わぬところにあった。手首に赤く擦れたような跡が何本も走っていたのだ。

サイファにはそれが何なのかすぐにわかった。

転んでできた傷などではない。拘束の呪文によるものだ。魔導省では一般的に使用されており、サイファも実際にそれで罪人を拘束したことは幾度となくある。そのため同じような傷は何度も目にしてきた。見間違うはずはない。

「転んだ……の?」

「ええ、転んだときにロープを引っかけてしまったの」

レイチェルは相手を庇っているのか、心配を掛けたくないのか、本当のことは隠し通すつもりのようだった。彼女は見かけによらず強情なところがある。聞き出すことは容易ではないだろう

。なるべく無理強いはしたくない。彼女の意思を最大限に尊重し、それ以上の追及はしないこと に決めた。

「おいで、手当てをしよう」

静かにそう言うと、彼女の肩を優しく抱きながら大広間を出た。

誰が、こんなことを――。

こっそりと背後の大広間に目を向ける。酔いがまわっている者も多く、そのせいか、騒々しいくらいの賑やかさだった。外部から冷めた目で見ているので、余計にそう感じるのかもしれない。皆、自分たちの会話に夢中で、サイファとレイチェルが出て行ったことには気づいていないようだ。こちらを窺っていたのは、たまたま近くにいた子供たち、そして、不安そうな顔のユリアくらいだった。

サイファはレイチェルを連れて階下の居間へと入っていった。本当は医者に診せた方がいいのだが、パーティ中であるため、あまり長く大広間を離れるわけにはいかない。とりあえずはここで応急処置をしようと考えたのである。

レイチェルを革張りのソファに座らせると、戸棚から木製の薬箱を取って戻り、彼女の隣に腰を下ろした。袖を捲り上げ、両方の手首を消毒し、傷薬を塗っていく。

「沁みる?」

「大丈夫よ」

レイチェルはにっこりとして答えた。

手当てを始めてから痛そうな顔は一度も見せていない。しかし、血が滲むくらいの傷である。 沁みないわけはない。心配を掛けたくなくて我慢しているのだろう。こういうことに関しては、 彼女はいつも極端なくらいに気を遣うのだ。

サイファは薬箱からガーゼと包帯を取り出した。傷を覆うようにガーゼをかぶせ、厚くならない程度に包帯を巻く。

ひらひらした長い袖口がすっぽりと隠してくれるので、手を上げない限り見えることはない。 気をつけてさえいれば、誰にも悟られることはないだろうと思う。

だが、彼女の両親には伝えておかなければならない。

レイチェルは知られたくないだろうが、そういうわけにはいかないのだ。ただ、それを聞いた アルフォンスが極端な行動に出ないかが心配である。彼を落ち着かせて、釘を刺すことも必要に なるかもしれない。

サイファは包帯の残りを片付けながら、感情を抑えた固い面持ちで口を開く。

「レイチェル、何かあったら言って……って言ったよね」

「ごめんなさい」

レイチェルはしゅんとして目を伏せた。その声の落ち込みように、サイファは少し驚いて顔を 上げる。うつむく彼女を見つめながら、その頭にぽんと手をのせて表情を和らげた。

「怒っていないよ。でも、傷はちゃんと手当てしないといけないから」

「うん……」

レイチェルは視線を落としたまま、小さく頷きながら返事をする。

「僕の方こそごめんね。守ってあげられなくて」

「サイファは悪くないわ。私が勝手に転んだだけだから」

申し訳なさそうに詫びるサイファに、レイチェルは首を横に振りながら慌てて力説する。その 傷がどういうものかわかっている、と暗にほのめかしたサイファを牽制する意味もあったのかも しれない。どうあっても転んだことにしたいようだ。

サイファは無言で微笑んだ。彼女の肩に手をまわして引き寄せると、心地よい重みを感じながら、天井を見上げて目を細めた。

「……そろそろ戻ろうか」

「サイファ、手当てしてくれてありがとう」

にこりとして感謝を述べるレイチェルに、サイファは優しく微笑みを返した。

彼女をもうパーティに戻したくない。

出来ればずっと二人でここにいたい。

無防備な彼女の笑顔を見ていると、そんな思いが湧き上がってくる。だが、それは許されない ことなのだ。逃げ出すわけにはいかないのである。叶わない願いを振り切るように立ち上がると 、ソファに座るレイチェルに手を差し伸べた。

大広間ではまだパーティが続いていた。

レイチェルとともに戻ったサイファは、軽く見まわしてあたりを窺う。取り立てて変わった様子はない。ただ、扉付近にいたユリアだけが不自然にこちらを気にしていた。サイファと目が合うと、慌てて視線を逸らせ、逃げるように背を向けて歩いていく。豊かな金色の巻き毛が背中で上下に揺れていた。

「おい、おまえっ!」

幼い声が偉そうに割り込む。声の方へ視線を下げると、口をへの字に曲げて腰に両手を当てた レオナルドが仁王立ちしていた。もっとも小さいので迫力は全くない。

「レイチェルを連れ出して何してたんだよ。婚約者だからって好き勝手するなよな!」

そう噛み付いてくる彼を、サイファは値踏みするようにじっと見つめた。使えるかもしれない と思う。どれだけ頼りになるかわからないが、一人にさせるよりはましだろう。

「レオナルド、レイチェルを頼む」

「えっ?」

「僕が戻るまで一緒にいてやってくれ」

「じゃあもう二度と戻ってくるなよな」

レオナルドは小生意気に腕を組んで言い返した。サイファは呆れたように冷たい視線を向けると、ゆっくりと手を伸ばし、彼の眉間を人差し指で弾いた。

「痛いな!何するんだ!」

「頼んだぞ」

静かな低い声で念押しすると、レオナルドはビクリとして口をつぐんだ。しかし目だけは反抗

したままで、悔しそうにサイファを睨みつけている。それでもレイチェルに好意を寄せる彼ならば、その傍にいることを選ぶに違いない。

「レイチェル、ごめんね。ここでレオナルドと少し待っていて」

今度はレイチェルに振り向くと、先ほどとは別人のような柔らかい声で言う。

彼女は何か言いたそうにしていた。サイファが何をしようとしているのか不安に思っているのだろう。もしかすると何か察しているのかもしれない。だが、結局は何も言えず、ただ硬い面持ちでこくりと頷くだけだった。

そんな彼女を安心させるように、サイファは優しく微笑みかけた。

それでも彼女の表情は変わらない。

しかし、だからこそ行かなければならないのだ。もう二度とこんなことが起こらないように、 いや、起こさせないために――。

サイファは二人をその場に残し、煌びやかな光の中に足を進めていった。

「お久しぶりです、ユリア=イリーナ」

サイファが背後から声を掛けると、彼女は剥き出しの肩をビクリと震わせた。豊かな巻き毛を 揺らしながら、ゆっくりと振り返る。その顔にはぎこちない笑みが張り付いていた。

「サイファ……何か用かしら」

「随分と冷たいんですね。昔とは大違いだ」

サイファは意味ありげにそう言うと、口の端を上げて挑発的な視線を送る。

ユリアは露骨に眉をひそめると、語気を強めて尋ね返す。

「何なの?」

「外で話をしませんか?」

サイファはにこやかに笑顔を浮かべた。それでもユリアは警戒の色を弱めない。むしろ強めているようだった。顎を引いて上目遣いで睨みつける。

「あなたとする話なんて何もないわ」

「僕の方はあるんですよ。付き合っていただきます」

丁寧ではあるものの、その言葉には有無を言わさぬ強さがあった。

ユリアは忌々しげに顔をしかめて目を伏せると、仕方なくといった様子で、先行するサイファ について歩き出した。

サイファはユリアとともに屋敷の外に出ると、庭の方へとまわった。

開けた視界に空が広がる。

そこはすっかり夜の色に塗り替えられていた。無数の星がキラキラと瞬き、時折、すっと降るように流れていく。これほど幻想的な光景はそうあるものではない。

レイチェルと一緒にこの星空を眺められたら、どれほど幸せだろう——。

しかし今のサイファにはやるべきことがある。気を引き締めなければならない。そのささやかな夢に思いを巡らせるのは、この障害を取り除いたあとにしようと心に決めた。

サイファは無言のまま歩き続けた。

ユリアも何も言わずについてくる。耳に届くのは芝生を踏みしめる音だけだ。しかし、やがて 沈黙の圧力に耐えきれなくなったのか、少しうわずった声で話を切り出した。

「ねぇ、レイチェルに何を言われたか知らないけれど、そのまま鵜呑みにするのはどうかと思うわ。甘やかしすぎていないかしら」

サイファは足を止めた。背を向けたままで静かに尋ねる。

「レイチェルが何を言ったと思っているんですか?」

「そんなの知らないわよ!」

ユリアは苛立ったように声を荒げた。

「そのわりには、随分、怯えているようですけど」

「そんなの当たり前でしょう? あなたは私よりレイチェルの言うことを信じるんだもの。特に今はあの子が傷を負っているから、あなたは冷静じゃないはずだわ」

「どうしてレイチェルが負傷したことを知っているんですか?」

「.....えっ?」

サイファはゆっくりと振り返った。冷や汗を滲ませるユリアを正面から見据えて言う。

「彼女の傷はドレスに隠れて見えない。そして、彼女は戻ってきてから僕としか話をしていない。 。つまり、僕以外で知っているのはただ一人——犯人だけ、ということになります」

その決定的な一言に、ユリアは大きく目を見張った。慌てて口を開くものの、何も言葉は出て こない。もはやどんな言い訳をしても無駄だと気づいたのだろう。悔しそうに顔を歪ませてうな だれると、喉の奥から声を絞り出す。

「きつく、口止めしておくんだったわ」

「レイチェルは何も言ってないですよ」

「え?」

ユリアは僅かに視線を上げて怪訝に聞き返した。

サイファは腰に右手を置き、目を細めて大広間の方を仰ぎ見る。

「あなたの名前なんて一言も出していない。ただ転んで紐を引っかけてしまったと」

「じゃあ、どうして.....」

形の良いサイファの唇に不敵な笑みが乗った。

「僕の勤務先をお忘れですか? 彼女の手首の傷――あれが何で出来た傷かくらいわかります。あの呪文が使える人間となると、ラグランジェ家の中でもそれほど多くはないでしょう。ユリア、あなたは僕たちの方を何度も不安そうに窺っていましたよ。意外と小心者なんですね」

「だったら何よ!」

ユリアは逆上して叫んだ。しかし、自分を射抜くような、その冷たく燃えたぎる青の瞳を目に すると、大きく息を呑んで口を閉ざした。

サイファはゆっくりと唇を動かし、重みのある声を落とす。

「いま、僕ははらわたが煮えくり返っている。あなたに報復をしなければ気がすまない。気がふれるほどの痛みと恐怖と浴びせ、肉体も精神もズタズタに壊してやりたい——」

彼女の顔から一気に血の気が引いた。表情を引きつらせ、震える足で小さく後ずさる。

「安心してください。何もしませんよ。そう思っているのは事実ですけどね」

サイファは軽い口調でさらりと付言する。

「なぜ、それをしないかおわかりですか?」

ユリアは黙ったまま何も答えなかった。答えられなかったのだろう。今の彼女は論理的に物事 を考えられる状態ではない。弱く揺れる瞳で疑問を返すことが精一杯である。

サイファは無表情で彼女を見つめて答える。

「レイチェルが望んでいないから」

彼にとってはそれがすべてだった。ユリアに対する同情や配慮の気持ちは欠片もない。自分の 立場でさえどうでもいいと思うほどに強い憤りを感じていた。だが、そんな感情のままに行動し てしまえば、レイチェルは自分を責め苛むだろう。彼女を苦しめるようなことはしたくない。

「しかし、次にこのようなことがあれば、忠告だけで済ますつもりはありません。それと悟られないような、間接的な報復をするつもりです」

「どういう……こと……?」

「分家の一つや二つ、何か理由をつけて潰すことは可能でしょう」

ユリアは目を見開いて息を呑んだ。

ラグランジェ家に執着し、極端に世間体を気にする彼女にとっては、これほど恐ろしいことはないだろう。だからこそ、あえてそれを選んだのだ。もちろん単なるはったりではない。忠告を無視するようなことがあれば、あらゆる手段を行使して実行に移すつもりである。

サイファはまっすぐ彼女の方へ足を進めた。近づいても足を止めず、腕がぶつかりそうなくらいの近さですれ違う。その瞬間、前を向いたまま重い声を落とす。

「あなたは僕に勝てない」

それはとどめを刺す言葉だった。

サイファは呆然と立ちつくす彼女を庭に残し、振り返ることなく屋敷の中へ戻っていった。

「ただいま」

サイファはパーティの続く大広間に戻ると、扉付近で待ち構えていたレイチェルに、屈託のない笑顔を見せてそう言った。それでも彼女は心配そうな表情を崩さない。胸元で両手を組み合わせ、揺れる瞳でサイファを見つめる。

「サイファ.....」

「おまえやっぱり最低だな! 婚約者をほったらかして他の女とデートなんて!」

レイチェルを守るように飛び出したレオナルドが、こぶしを握りしめて喚き立てる。レイチェルを思ってのことだろうが、彼女が心配しているのはそんなことではない。彼の根本的な勘違いである。

サイファは疲れたような冷めた目で見下ろすと、彼の眉間を人差し指で弾いた。

「いてっ!」

レオナルドは額を押さえて、恨めしそうに涙目でサイファを睨む。しかし、サイファはすでに

彼の方を見ていなかった。レイチェルの頭に手をのせ、覗き込みながら言う。

「ひとりにしてごめんね。寂しかった?」

「ユリアは……?」

「もう少し外の空気を吸いたいってさ」

Γ.....

レイチェルは何か言いたそうにしている。ユリアに何か仕返しをしたのではないかと心配しているのだろう。ユリアと一緒に帰ってこなかったことが、余計にその不安を煽っているのだ。サイファの嘘も少し白々しかったのかもしれない。

「彼女にはちょっと注意しただけだよ。信じてくれる?」

レイチェルはしばらく考えていたが、やがてこくりと頷いて微かな笑顔を浮かべた。

サイファはそっと腕を伸ばして彼女を抱きしめた。細い髪がふわりと舞い、ほのかに甘い匂いが立ち上る。そのほっとするような匂いに、痛いほど胸が締めつけられた。目を細めて、腕の中の少女に視線を落とす。

彼女の体は小さくて柔らかい。強く抱きしめると壊れてしまいそうだ。

そんな彼女が、ひとりで大変なことを抱え込もうとしていたのである。具体的に何があったのかは聞いてないが、気性の激しいユリアのことだ。無抵抗のレイチェルに対して言いたい放題に責め立てたり、拘束の呪文でいたぶったりしたのだろう。多少の嫌味くらいならともかく、体に傷までつけられては放っておけるはずがない。

「レイチェル……もう少しでいいから僕を頼ってくれないかな。まだまだ頼りないかもしれないけれど、精一杯、力になれるように努力するから」

「.....私、迷惑じゃない?」

弱々しくぽつりと言うレイチェルに、サイファはすぐに答えを返す。

「少しも迷惑じゃないよ。君に頼ってもらえることが嬉しいんだ」

「でも.....、ん.....わかったわ、ありがとう」

レイチェルは戸惑ったように口ごもりながらも、ようやくそう返事をすると、顔を上げてにっ こりと笑顔を見せた。

サイファはその柔らかな頬にそっと触れる。

彼女はまだ完全には納得していないのだろう。だが、今は形だけでも構わなかった。自分を頼ってくれることさえ約束してくれれば、とりあえずは彼女を守ることができるのだ。

しかし、いつまでもこのままではいけない。

彼女が遠慮なく頼ることのできる人間にならなければ――。

その決意を深く心に刻みつける。単なる意地ではない。彼女に認められたいという気持ちも確かにあるが、それよりも、彼女を幸せにするためにという考えの方が遥かに大きかった。

「レイチェル、もうすぐパーティが終わるけど、そのあとで少し時間を取れる?」

「ええ、お父さまに許可をもらえれば……どうしたの?」

首を傾げて尋ねるレイチェルに、サイファは柔らかく微笑みかける。

「今夜は星空がきれいなんだ。レイチェルと一緒に見たいと思ってね」

「本当?楽しみだわ!じゃあ、お父さまに許可をもらってくるわね」

「待って」

離れていこうとしたレイチェルを、抱きしめる腕に力をこめて引き留める。彼女は不思議そう に顔を上げ、じっとサイファを見つめた。

「もう少しだけ、このままでいさせて」

サイファは縋るように小さな彼女を抱きしめ、小さく呟くように言う。

彼女からの返事はなかった。だが、言葉の代わりに、背中にそっと手がまわされた。

その手はほんのりと温かく、柔らかく、そしてとても優しかった。

「今日はここまでだ」

ラウルがいつものようにそう言うと、隣のレイチェルはにっこりと微笑み、小さな手で分厚い 教本を閉じた。バタンという重みのある音とともに、小さな風が起こり、彼女の細い金髪を微か に揺らす。

今日はいつもより早くに授業を終えた。

特にこれといった理由はない。ただ、朝からずっと気もそぞろで、授業どころではなかったのだ。それゆえ、ちょうど区切りがついたからと自分に言い訳をしつつ、少し早めに切り上げることに決めたのである。

ラウルは焦る気持ちを抑えながら、その原因となっていたことを切り出す。

「きのうのパーティはどうだった」

「なんとか大丈夫だったわ。心配を掛けてごめんなさい」

レイチェルは何事もなかったかのように、屈託のない明るい笑顔で答える。

一見、問題はなさそうに見えた。

しかし、ラウルはその言い方に引っかかりを感じた。何もなかった、とは言わなかった。やは り何かはあったのだと思う。これ以上の心配を掛けまいとして隠しているのだろう。大丈夫とい う言葉も信じていいものか疑問である。

笑顔の向こう側では傷ついているのかもしれない。

彼女の脆い部分を目の当たりにしてしまったから、そして、それを他人にあまり見せないことを知ってしまったから、些細なことでも過剰なまでに心配になる。せめて自分にだけは気を遣わないでほしい、あのときのように本心を見せて頼ってほしい——ラウルはそう願った。

「星空がすごくきれいだったの」

彼女の小さな口から不意にそんな言葉が紡がれた。

ラウルは何のことだかわからず、訝しげに眉をひそめる。

「パーティが終わってから、サイファと一緒に外に出て夜空を眺めたの。数え切れないくらい星が出ていて、眩しいくらいにキラキラしていて、たくさん降るように流れて……宝石よりもずっときれいだったわ」

彼女は膝の上で両手を組み合わせ、嬉しそうに声を弾ませた。

「星くらいこれまでにも見たことがあるだろう」

「あんなにきれいなのは初めてだったの。私、あまり夜は外出しないし、早く寝てしまうから、 星空ってそれほど見たことがなくて。きっと今までたくさん見逃してきたのね。きのうがパーティの日で本当に良かったわ」

ラウルは軽く溜息をついて腕を組んだ。

彼女が何を伝えたかったのかがようやく理解できた。要するに、つらいことが霞んでしまうくらいの楽しい出来事があった、だからパーティも大丈夫だった、ということが言いたかったのだろう。これほど嬉しそうに話されては信じざるをえない。そのことに関しては、心から良かった

と思う。

だが、複雑な気持ちがあったのも事実だった。

結局、彼女を守ったのはサイファである。自分はただ気を揉んでいただけで、行動を起こすことはなかった。パーティに出席していない自分には、彼女を守ることは出来ないと諦めていたが、何かしら出来ることはあったのかもしれない。

「ねぇ、ラウルは星空って好き?」

「さあな、好きでも嫌いでもない」

投げやりな答えだが、はぐらかしたつもりはない。昔は好きだったが、嫌いになり、今はどちらなのか自分でもわからないのだ。

星空を背に優しく微笑む少女が、ラウルの脳裏に浮かぶ。

彼女を守れなかったあのときから幾星霜が過ぎただろう。それでもまだラウルは自分を責めている。彼女のことを忘れることは決してない。だが最近は、思い出すことは少なくなっていた。 自分は薄情なのだろうか。

今はレイチェルに頭が占められている。少女とよく似た面影を持っているが、二人を重ねて見ているわけではない。確かにきっかけはそうだった。しかし今は違う。どちらも大切な存在ではあるが、その意味合いは違っているのだ。

だからこそあらためて思う。

レイチェルには彼女のような運命を辿らせてはならない。そうならないように守っていかなければならない。救えなかった彼女の代わりではなく、レイチェル自身の幸せのために――。

「今度はラウルと一緒に見られたらいいなって思っているんだけど」

レイチェルの可憐な声で、思考の海から現実に引き戻される。

「.....ああ、そうだな」

ラウルは僅かに目を細めて答えた。

だが、それが実現することはないだろうと思う。満天の星が見られる時間まで彼女といられる機会があるとは思えない。簡単なようで難しいことなのだ。ラウルはただ彼女がそう願ってくれただけで十分だった。

「じゃあ、約束ね」

レイチェルは声を弾ませてそう言うと、軽い足どりで立ち上がり、急いで教本やノートを片付け始めた。手を伸ばして本棚にしまう。

そのとき――。

ラウルはハッとして彼女の腕を掴んだ。自分の方へ引き寄せ、長い袖を少しだけ引き上げる。 そこから白い物が覗いた。すべては見えなかったが、それが何なのか医者のラウルにはすぐに わかった。いや、医者でなくともわかるだろう。

彼女の手首には包帯が巻かれていた。

彼女はきまりが悪そうに目を伏せる。

今にして思えば、授業中も何か気にしている様子だったし、いつもに比べて動きが大人しかった。おそらくこれを隠すためだったのだろう。なぜもっと早くに気づかなかったのかと思う。

「これは何だ。きのうのパーティで何かあったのか?」

「……少し怪我をしただけ。たいしたことはないの」

レイチェルはそっと手を引き戻すと、袖を捲り、自ら包帯を外してガーゼを取った。

そこには赤く擦れたような傷が幾重にも走っていた。縄で強く縛られたのだろうか。彼女の言うように重傷ではなさそうだ。しかし、白く細い手首にこれだけの傷がついていると、目を背けたくなるくらい痛々しく見える。

「どうしたのだ。誰かにやられたのか」

「.....ええ」

嘘はつけないと思ったのか、彼女は困惑した顔を見せながらも肯定する。

「誰だ。前に言っていたユリアとかいう奴か」

心当たりとして思い浮かぶのはその名前だけだった。レイチェルを出来損ないなどと罵っているラグランジェ家の女である。一度も会ったことはないが、そういう話を聞いたことを覚えていたのだ。

レイチェルは驚いたように目を見開いた。しかし、すぐに視線を落として考え込むと、戸惑いがちに瞳を揺らしながら小さく頷いた。

まさか、ここまでやるとは――。

ラウルは奥歯を噛みしめた。嫌味を言われたり冷たい目を向けられたりするだけだと聞いていたが、それどころの話ではなかった。これはすでに立派な犯罪である。魔導を使って故意にやったのであれば、禁錮刑に処せられてもおかしくないくらいだ。

「サイファは何をやっていた!」

「サイファは何も悪くないわ」

レイチェルはラウルを見つめて冷静に答えた。それでもラウルは納得できなかった。むしろ、彼女が庇い立てをしたことで、なおさら腹立たしさが増していた。

「あいつにはおまえを守る義務があるはずだ」

「ユリアにはもう二度としないように言ってくれたみたい」

「事が起こってからでは遅いだろう」

「それは私がいけなかったの。私がサイファに何も言わなかったから……」

レイチェルはほどいた包帯を無造作に絡ませた手で、胸元をぎゅっと押さえる。

ラウルは眉根を寄せて目を細めた。

「なぜ、そんなに必死に庇う」

「本当のことを言っているだけよ」

確かに本当のことなのだろう。だが、それでも庇っていることには違いない。彼女に自覚のないことが、ラウルになおのことやりきれなさを募らせる。

「.....座れ」

小さく溜息をついてそう言い、彼女を椅子に座らせた。ここは医務室ではないため、新しいガーゼも薬もない。剥がされたガーゼをそっと手首に戻すと、丁寧に包帯を巻いていく。

「医務室に着いたらきちんと診てやる」

「うん.....」

レイチェルは神妙な顔つきで、小さくこくりと頷いた。

「怪我はここだけか」

「こっちも……」

彼女は左手を軽く上げた。袖口から白い物がちらりと覗いている。右手と同じように手首に包帯が巻かれているようだ。両手を拘束されていたということだろう。そうなると、それだけで終わったとは考えづらい。自由を奪った上で何かをしたと考えるのが自然だ。

まさか――。

いや、そんなことはない。脳裏に浮かんだ可能性を懸命に否定する。だが、考えれば考えるほどそれが困難になる。相手は女であるが、彼女ひとりだけだったとは限らない。レイチェルが本家に嫁ぐことを阻止したがっているのだとしたら、男をけしかけるくらいのことはしたかもしれない。

「レイチェル、正直に話せ。何をされた。ここで聞いたことは絶対に口外しない」 ラウルは彼女の細い両肩を掴み、真剣に真正面から見据えて言う。

レイチェルはその勢いに圧倒されて大きく目を見張ったが、やがて冷静な顔に戻ると、思い出 すような素振りを見せながら少しずつ話し始めた。

「ユリアに、地下の訓練場に連れて行かれて……」

彼女の肩を掴む手に力が入る。そこは防音対策がなされた部屋で、悲鳴程度の音ならほとんど 漏れることはない。事を為すにはうってつけの場所だ。

レイチェルは斜め上に視線を向けて淡々と続ける。

「魔導の紐みたいなもので手首を縛られて、サイファとの結婚をやめなさいって迫られたけれど 、拒否したら頬を平手打ちされたわ」

「それからどうなった」

「それだけよ」

彼女は軽くそう答えるとニコッと笑顔を見せた。

しかし、ラウルは訝しげに眉根を寄せる。

「……本当にそれだけなのか?」

「本当よ。信じてくれないの?」

レイチェルはきょとんとして尋ね返す。

それでもラウルは首を縦に振ることができなかった。彼女が嘘を言っているようには見えない。それでも一抹の疑念までは拭いきれなかった。彼女なら心配を掛けまいとして頑固に口をつぐむだろうことは想像がつくからだ。

「じゃあ、見る?」

ぱつりと落とされた言葉に反応し、ラウルは怪訝な視線を彼女に向ける。今までの話とどう繋がるのかわからない。それどころか何を言っているのかさえ理解できなかった。

その無言の問いに答えるように、レイチェルは真面目な顔で言う。

「体を見せて傷がないことを証明すればいいのよね。脱ぎにくい服だから少し時間がかかると思

うけれど、ここで今から見てくれてもいいわし

「……いや、いい。信じる」

ラウルは低い声でそう言うと、彼女の肩から手を引いて溜息をついた。

完全に負けたと思った。

だが、彼女は駆け引きをしたわけはでなく、実際にそうするつもりで言ったのだろう。だから こそ自分が引かざるをえなかったのである。これしきのことで狼狽えたわけではない。彼女にそ こまでのことをさせてはならないと判断したのだ。

「こんな馬鹿なことを言うのはやめろ」

「誰にでも言うわけじゃないわ。ラウルだから言えるのよ」

まっすぐ向けられた言葉に、ラウルの心臓が大きく跳ねた。息を止めて彼女を見つめる。その無垢な瞳に吸い込まれるように感じた。しかし――。

「だってラウルはお医者さまだもの」

レイチェルは行儀良く両手を膝にのせたまま、にっこりと無邪気に微笑み、ラウルの視線にそう答えを返した。

「今日もいいお天気ね」

レイチェルは玄関を出ると、後ろで手を組んで青空を仰ぎ、そのまま心地よさそうに目を閉じた。長い金の髪がさらさらと優しく揺れ、きらきらと上品に煌く。そして、振り返って目映い 笑顔をラウルに見せると、後頭部のリボンを弾ませながら、軽い足どりで門に向かって歩き出 した。

しかし、その足が途中でピタリと止まった。ドレスの裾が大きく揺れて戻る。

彼女は胸元に小さな手を当て、まっすぐ正面を見つめていた。無言のまま口を開こうとしない。 その表情からは微かな驚きが窺えた。

ラウルは彼女の視線を辿った。

その先には一人の女が立っていた。鮮やかな金の髪に青い瞳——ラグランジェ家の人間だろう。眉をしかめてレイチェルを睨みつけると、門を開いてツカツカと中に入ってくる。

どうやら彼女がユリアのようだ。その敵意を露わにした態度と、レイチェルの狼狽した様子から考えると、おそらく間違いないだろうと思う。

ラウルはレイチェルを庇うように前に出た。

しかし、彼女は二人に目を向けることなく、豊かな巻き毛をなびかせながら、まっすぐ前を向いて通り過ぎようとした。間際に憎しみのこもった小さな声を落とす。

「もうあなたとは二度と関わり合いになりたくないわ」

その瞬間、ラウルは彼女の手首を強く掴み上げた。

「おまえがユリアか」

「痛っ……!!」

ユリアは眉をしかめ、反抗的な眼差しでラウルを見上げた。だが、その凍てつくような鋭い瞳 に射抜かれると、はっと息を呑んで顔を引きつらせ、脚を震わせながら一歩後ずさった。 ラウルは逃がさないとばかりに詰め寄る。

「レイチェルに傷を負わせておきながら何だその態度は。謝罪はしたのか」

「ラウル、やめて、もういいの」

レイチェルは袖を掴んで懇願した。

しかし、ラウルはユリアを放さなかった。たとえレイチェルが許しても、自分は許す気にはなれなかった。反省しているならまだしも、少しもそのような素振りはなく、むしろ逆恨みさえしてそうに見える。このままではいずれ同じことが繰り返されてしまうだろう。いや、さらに酷いことになるかもしれない。

レイチェルはラウルの袖を引き、なおも首を左右に振って訴える。

「もう終わったことなの」

「私が悪かったわよ! 二度とこんなことはしないわ!!」

突然、ユリアは顔をそむけてヒステリックに叫んだ。ラウルに手首を拘束されたまま、肩を震わせて大きくうなだれる。豊かな巻き毛が肩から滑り落ち、その表情を覆い隠した。

「もう二度と……こんなことは御免だわ。サイファに脅され、シンシアとリカルドに責められ、 これからあなたの両親に怒鳴られに行くのよ。私の人生もうおしまいよ」

彼女は涙声で吐き捨てるように言った。

ラウルは彼女の手首を放した。許したわけでも同情したわけでもない。ただ、もう十分に譴責を受けていると感じたのだ。ラウルが責め立てても同じことの繰り返しにしかならないだろう。 たいして意味のあることとは思えない。

「おまえはそれだけのことをした。当然の報いだ」

腕を組みながら冷ややかな目で見下ろし、彼女の行いを断罪する。

ユリアは唇を噛んだまま、何も言い返さなかった。

「ねぇ、ユリア」

レイチェルはそう言って遠慮がちに進み出ると、胸元で両手を組み合わせた。

「私、お父さまとお母さまにお願いしてくるわ。もうユリアを怒らないでって」

「余計なことはしないで」

ユリアは感情を抑えた声で撥ねつけると、濡れた目元を手の甲で拭って歩き出した。扉の前に立ち、震える手でチャイムのボタンを押そうとする。

「行くぞ」

ラウルが声を掛けても、レイチェルは心配そうにユリアの背中を見つめたまま、動こうとはしなかった。何か迷うように瞳を揺らす。ユリアには拒否されたが、やはり両親に頼みに行こうと考えているのかもしれない。

ラウルは無言で彼女の手を引き、半ば強引にその場から連れ去った。

「おまえはもう少し自分のことを大事にしろ」

ラウルは彼女の傷を診ながら小さく溜息をついて言う。

そこは医務室ではなくラウルの自室だった。医務室である必要はないと判断してのことだ。ダ

イニングテーブルの隣で、椅子を向かい合わせにして座っている。

彼女の手首の傷は、擦り傷と火傷を同時に負ったものだった。完治までは時間を要するだろう。もしかすると傷痕が残るかもしれない。もちろん、そうならないように手は尽くすつもりだが、どうにもならないこともあり得るのだ。

「危険を感じたら迷わず誰かに助けを求めろ。遠慮などしている場合ではない。おまえに何かあったら、その方がまわりに迷惑が掛かるのではないのか」

「ええ……そうよね……」

レイチェルは顔を曇らせてそう言うと、しゅんとしてうなだれた。

それでもラウルは止まらなかった。

「おまえは危機感がなさすぎるぞ。世の中、優しい良い人間ばかりではない。もっと気をつけろ。自分に怪我まで負わせた奴に、甘い顔など見せている場合ではない」

「でも、かわいそう……」

彼女は視線を落としたまま、呟くようにぽつりと言う。

「あんな奴に同情などするな」

ラウルは少し苛立っていた。自分のことを大事にしろと言ったばかりなのに、彼女はなおも他 人のことを優先して考えている。それも相手は自分を傷つけた人間だ。なぜ同情など出来るの かまったく理解不能だった。

「うん……でも、私には守ってくれる人がたくさんいるけれど、もしかしたらユリアには一人もいないのかもしれないって思ったから……」

「自業自得だろう」

素っ気なくそう言いながら、彼女の手首に新しいガーゼを被せ、包帯を巻いていく。

今日のユリアの態度を見る限りでは、とても守ってやりたいと思わせるような人物ではない。 もし一人も味方がいないのだとすれば、彼女自身の行動が招いた結果なのだろうとラウルは思 った。

しかし、レイチェルは真面目な顔で反論する。

「立場の違いもあると思うの。私だって本家次期当主の婚約者じゃなければ、こんなに大事にされていなかったはずだわ」

「それは違う。おまえは本気でそんなことを考えているのか?」

ラウルは包帯を巻く手を止め、彼女の双眸を見つめる。

アルフォンスもアリスも、そんな理由で大切に育ててきたわけではないだろう。サイファも婚 約者の義務のみで大切にしているとは思えない。見ていればそのくらいのことはわかる。そして 、何より確実に言えること——。

「少なくとも、私にはそんなものは関係ない」

ラウルはラグランジェ家の人間ではないし、ラグランジェ家に取り入ろうと考えているわけで もない。そのことはレイチェルもわかっているはずだ。

「ありがとう」

彼女は小さく笑みを浮かべてそう答えた。

しかし、ラウルは彼女の様子に何か釈然としないものを感じた。本心から納得しているように思えなかったのだ。根拠はない。何となくそう感じただけである。だが、それだけでは行動の起こしようがない。自分の気のせいであることを願うしかなかった。

ラウルは彼女の傷の手当てを続けた。

右手首に包帯を巻き終わると、次は左手首の包帯を取り、傷の具合を診ながら消毒して薬を 塗る。傷は左右とも同程度のものだった。両手首に包帯を巻いていると仰々しく見えるが、日常 生活にはさほど支障はないだろう。

「ねぇ、ラウル」

「何だ?」

ラウルは包帯を巻きながら、レイチェルに先を促す。

「あのね、私、魔導の訓練をちゃんとしようと思うの」

「......それは自衛のためか?」

一瞬、何を言い出すのかと驚いたが、考えてみればわかりやすい話だ。今回のことで、さすがに彼女も危機感を覚えたのだろう。結界くらいは使えるようになりたいと思っても不思議ではない——ラウルはそう考えた。

しかし、レイチェルは首を横に振った。

「そうじゃなくて、やっぱり本家に嫁ぐのに魔導もまともに扱えないのは問題があるでしょう? どれだけ上達するかわからないけれど、頑張っても下手なままかもしれないけれど、それでも努力だけはしなければって」

落ち着いた口調でそんなことを言う。無理をして力んでいる様子もない。冷静に考えた上で決めたことのようだ。そのことが、かえってラウルに複雑な感情をもたらした。

「あいつに言われたことなど気にするな」

「ユリアの言ったことは間違っていないわ。私みたいな出来損ないは本家当主の妻に相応しくない。なのに私は、みんなの優しさに甘えるばかりで、何の努力もしていなくて......」

レイチェルはそこで表情を引き締めると、真摯にラウルを見つめて言う。

「だから、ラウルにはまた魔導を教えてほしいの」

「ああ......いや、だが、アルフォンスに止められている」

あれほど魔導を怖れていた彼女が、今は自ら魔導を学ぶ気になっている。その理由までは肯定できないが、しっかりと自分の意思をもって前に進もうとしていることは、大きな成長と言えるだろう。

しかし、ラウルは気が進まなかった。

暴発事件以前なら歓迎しただろうが、今は不安の方が大きかった。彼女に適切な指導を行えるかわからない。その自信がない。またあのような目に遭わせてしまうのではないかと考えてしまう。

それ以前に、彼女に魔導を扱わせることが正しいことなのかわからなかった。魔導に触れなければ暴発を起こすこともないのではないか、魔導に触れるほど暴発の危険性が高まるのではな

いか、そんなふうにも考えられなくはない。

「お父さまには私がお願いするわ」

「……おまえは怖くないのか」

「少しは、怖いわ」

レイチェルは硬い表情で答えた。伏せられた瞳が微かに揺れる。包帯を巻きかけの左手も小さく震えた。それでも彼女は顔を上げて気丈に微笑む。

「でも、ラウルと一緒なら大丈夫って信じているから」

そのまっすぐな瞳を、ラウルは受け止めることができなかった。逃れるように視線を落とす。 自分には信じてもらう資格などない。

一度、身勝手な行動で失敗して、そのことで迷いが生じている。自分でさえ信じることが出来ないのに、他人に信じられていいはずがない。彼女に大丈夫と言ってやることすら出来ないのだ。

レイチェルも危険であることは身をもって理解しているはずである。怖がっても構わない。 いや、むしろ怖がるべきなのだ。それが自らの身を守るための本能である。しかし彼女は、頼り ないラウルを信じることで、その感情を乗り越えようとしていた。

彼女の選択は間違っている――。

ラウルは眉根を寄せ、奥歯を強く噛みしめた。彼女の左手を握る手にも力がこもる。

「もうやめろ」

思わずそんな言葉が口をついた。

「.....え?」

「結婚などやめてしまえ」

今度は顔を上げ、強い意思を持って言う。感情的な部分も確かにあったが、それに流されて口を滑らせたわけではない。それゆえ、驚いて呆然としているレイチェルを見ても、その忠告を止めることはなかった。

「おまえの結婚は生まれる前に勝手に決められたものだ。おまえが望んだわけではない。なのに、なぜおまえがそこまでしなければならない。なぜあんな目に遭わなければならない。あまりにも不条理だろう」

ラウルは一気に捲し立てると、小さく息を継ぎ、真剣な表情で彼女を見つめた。

「おまえ一人くらい私が守ってやる。どこへでも連れて行ってやる。ラグランジェ家など捨てて 逃げろ」

「そんなこと出来ないわ」

レイチェルは少しも迷うことなく、当然のようにさらりと答えた。

「そんなことをしたらみんなに迷惑を掛けてしまうもの」

「自分のことを大事にしろといったはずだ。おまえの気持ちはどうなんだ」

「私は大好きな人たちが笑っていてくれると嬉しいの。みんなを困らせるようなことはしたくない。だから、逃げないわ」

気負うことなく淡々と落とされる言葉——。

ラウルは眉根を寄せて目を細めた。彼女の手を取ったまま、背中を丸めてうなだれる。肩から 焦茶色の長髪がさらさらと落ち、少し熱を帯びた頬を掠めていく。

「怒っているの?」

「怒ってはいない」

ただ、自分の無力さを思い知って嫌になっただけである。所詮、自分は雇われているだけの家庭教師にすぎず、ラグランジェ家の事情に介入できる立場にはない。彼女を救うにはここから逃がしてやる以外にないと思った。だが、ラウルがどれほどそれを強く願っても、彼女自身にその気がないのでは、もはやどうすることもできない。

ラウルは中断していた手当てを再開した。包帯を巻いて留める。これで両方の手当てが終わった。触れている理由のなくなった彼女の手をゆっくりと放す。

「診察してくれてありがとう」

レイチェルはそう言って腰を上げ、椅子に座るラウルの脚の間に立った。そして、その広い肩に両手をついて自分の体を支えると、踵を上げ、焦茶色の髪のかかる額に、そっと柔らかな口づけを落とす。

「元気の出るおまじない」

レイチェルは甘く微笑んだ。いつもは身長差で随分と下の方にある彼女の顔が、今はほとんど 正面といってもいいくらいの位置にある。それもかなり近い。

「落ち込んでいるときにお母さまがしてくれるの。ラウルがとてもつらそうだったから……ごめんなさい……私のせいなのよね……」

「いや、何ともない。気にするな」

ラウルは慌ててそう言った。

確かに打ちのめされて落ち込んではいたが、それは彼女のせいではない。自分の問題である。 彼女を守りたいという思いが空回りしていた。自分の気持ちを押し付けすぎていたような気が する。

「私、いつも迷惑をかけてばかりで、ラウルには何もしてあげられないけれど……それでもラウルに傍にいてほしいって思っているの」

不安そうに小さく首を傾けるレイチェルを見て、息が詰まりそうになった。

「それは……私が言うべきことだ」

僅かに目を細めてそう言うと、彼女の華奢な肩口にゆっくりと額をつけて寄りかかる。そして 、そのまま目を閉じて小さく息を吐いた。

何もしてやれないのは自分の方である。守ることも、救うことも、願うばかりで実現していない。それどころか、自分に与えられた魔導を教えるという役目すら果たせていないのだ。

――それでも、傍にいてほしい。

そんな単純な気持ちにようやく気がついた。いや、気付いていなかったわけではない。心のど こかで自覚はしていたが、向き合うことなく目を背けてきたのだと思う。

それは、おそらく、終わりの日がそう遠くないことを知っているからだ。

だからといって割り切れるはずもなく、無意識のうちに気持ちが追い詰められていたのだろう

0

そんなラウルを、レイチェルは何も言わずに受け止めた。寄りかかる頭にそっと両手を回し、 その小さな手に優しく力をこめる。

温もりがじわりと広がっていく。心がほどけていく。

ラウルはまるで自分のすべてが彼女に包み込まれているように感じた。

ラグランジェ家のパーティから二ヶ月が過ぎていた。

レイチェルの両手首の傷はすでに完治している。痕も残っていない。

そのことは、彼女自身よりも、彼女のまわりの人間を安堵させた。当然ながらラウルもそのひとりである。サイファやアルフォンスと違い、あまり言葉や態度には表さなかったが、彼らに負けないくらいに心配していたのだ。

それ以外では特に大きな出来事もなく、ただただ平和な日々が続いていた。ラウルが家庭教師 としてレイチェルの家に向かい、彼女がお茶を飲みにラウルの部屋へ来るという、そんな穏やか でささやかな関係も、当たり前のように続いていた。

「今日はここまでだ」

ラウルが終了を告げると、レイチェルはいそいそと教本を片付け始めた。授業中はそうでもなかったが、今はすっかり落ち着きをなくしているように見える。きのう彼女から聞いた話では、このあと何かとても楽しみなことがあるらしい。そのためラウルの部屋には行けないとも告げられている。もう気持ちはそちらに向かっているのだろう。

「私はこれで帰る」

ラウルはそう言って立ち上がり、教本を脇に抱えて背を向けた。

思えば、彼女が部屋に来るようになってから、一人で帰るのは初めてではないだろうか。その ことが思いのほか寂しく感じられた。彼女と並んで歩くことが当たり前になりすぎていたのかも しれない。

「待って」

レイチェルの凛とした声が、去りゆくラウルの足を止めた。せっかく気持ちを振り切ろうとしていたのに、と少し恨めしく思いながら、彼女にしかめ面を振り向ける。

「何だ?」

「ラウルも用事があるのよ」

レイチェルは二コ二コしながらそんなことを言う。だが、ラウルにはその意味するところがまるでわからなかった。少なくとも自分はその用事とやらに覚えはない。

「来て」

レイチェルは困惑しているラウルに駆けていくと、その大きな手を引いて、何の説明もないま ま強引に部屋から連れ出した。

ラウルが連れて行かれた先は、階下の応接間だった。

レイチェルはラウルの手を引いたまま、その重みのある扉をゆっくりと押し開く。

広がる視界に飛び込んできたもの――。

それはホームパーティでも始めるかのような光景だった。気軽に食べられるような料理がテーブルの上にいくつも並び、その端にはグラスと取り皿が用意されている。いずれも手をつけられ

た形跡はない。

「あれ? ラウルも呼ばれていたのか?」

窓際のソファでひとり寛いでいたサイファは、読みかけの本を置きながらそう言うと、立ち上がって二人の方へと足を進めた。濃青色の制服を崩さずきっちりと身に着けている。休暇というわけではないようだ。

「……おまえ、仕事はどうした」

「家庭の事情で早退だよ」

サイファは悪びれもせず、あっけらかんと答えた。確か、以前もこんなことを言って早退していたことがある。そのときはレイチェルに勉強を教えるためだった。おそらく今回もたいした理由ではないのだろう。

「勝手なことばかりせず真面目に仕事をやれ」

「レイチェルの誕生日くらいいいだろう?」

サイファは両手を腰に当て、軽く肩を竦めながら言った。

「誕生日……?」

「聞いてなかったのか? これからレイチェルの誕生日パーティだよ」

それを聞いて、ラウルはようやく悟った。これはレイチェルの幼い策略なのだということを。 前もって招待しても断られると思ったのだろう。だから何も教えることなく直接ここへ連れてき たのだ。

彼女がこの手を使ったのは何度目だろうか――。

確かに、以前は彼女に頼まれたことを何もかも断ろうとしていた。だが今は違う。出来るだけのことはしてやりたいと思っているのだ。しかし、それが伝わっていないのは自業自得なのだろう。ラウルは溜息をつきながら、ニコッと無邪気に笑う彼女を見下ろした。

「あ、ちょっと待っていてね」

サイファは急に何かを思い出したようにそう言うと、部屋の隅に駆けていき、そこに用意してあったものを取って戻った。

それは、十数本のピンクローズを中心とした花束だった。

強烈な派手さはないが、上品な華やかさがあり、なおかつ可憐な雰囲気も持ち合わせている。 それは、花が完全に開ききっていないことに起因するのかもしれない。無垢な色の柔らかな花 弁は、まだその奥を隠したままだ。まさにこれから咲き誇るところなのだろう。

「レイチェル、お誕生日おめでとう」

「わあ、ありがとう」

サイファが花束を差し出すと、レイチェルは嬉しそうに甘い笑みを浮かべて受け取った。そのピンクローズを胸いっぱいに抱え、ほのかな芳香を楽しむように、心地よさそうに目を閉じる。僅かに開いた窓からは、柔らかな風が滑り込み、淡いピンクの花弁と細い金の髪をささやかに揺らした。その姿はまるで絵に描いたように愛らしく、そして美しかった。

「ラウルはお誕生日いつなの?」

彼女はふいに顔を上げて尋ねた。それはたわいもない世間話のようなものである。特に深い意味はなかったのだろう。だが、ラウルはすぐに言葉を返せなかった。

「……知らん」

暫しの沈黙のあと、感情を抑えた低い声でぶっきらぼうに答える。

レイチェルはきょとんとして瞬きをすると、不思議そうに小さく首を傾げた。

「教えてくれないってこと?」

「知らないと言っている」

それは言い逃れなどではなく、紛れもない事実であり、ラウルの精一杯の答えだった。

レイチェルは急に真面目な顔になると、少し考えてから口を開く。

「じゃあ、ラウルも今日が誕生日ってことにすればいいわ」

あまりに簡単になされた突拍子もない提案。

ラウルは面食らって息をのんだ。

「……おまえは何を言っているのだ」

「私と一緒の日なら忘れないでしょう?」

レイチェルはくすりと笑って言う。そして、抱えていた花束から一輪のピンクローズを抜き取ると、ラウルの目の前に差し出した。

「お誕生日プレゼント」

彼女のペースに流され、ラウルは呆気に取られたままそれを受け取った。微かな甘い匂いが鼻を掠める。頭の芯が少し痺れるように感じた。

「私、花瓶に活けてくるわね」

レイチェルは二人に笑顔を見せてそう言うと、軽い足どりで応接間を後にする。後頭部の薄水 色のリボンが、その足どりに合わせて小さく弾んだ。

「わかってるのかなぁ、年の数だけ贈ったってこと」

サイファは片手を腰に当てて、小さく笑いながら言った。そこに責めるような響きはなく、た だ無邪気なレイチェルを慈しむような、そんな彼の想いが溢れていた。

「せっかくレイチェルがくれたんだ。大切にしろよ」

「ああ.....」

ラウルはそう答えながら、手の中のピンクローズを何気なく回した。

そのとき、指先にチクリと痛み感じた。ごく軽い痛みである。顔をしかめるほどでもなかった。人差し指をそっと茎から離すと、そこからじわりと赤い血が盛り上がる。

「どうしたんだ? 棘? 全部とってもらったはずなんだけど……」

出血したラウルの指を覗き込みながら、サイファはのんびりと考え込む。しかし、ふと何かに 気づくと、血相を変えて弾かれるように飛び出していった。

「レイチェル、待って!!」

まるで人生の一大事かのごとく焦った声が、廊下の高い天井に響き渡る。

ラウルは遠ざかる靴音を聞きながら、血の盛り上がった指先を口に含んだ。少し気持ちの悪く

なるような生ぬるい鉄の味が広がる。

不用意に触れるから、か――。

ふと頭をよぎったその言葉は、かつて自分がサイファに言ったものである。あのときの彼も同じようにピンクローズの棘で怪我をした。そのことに因縁めいたものを感じ、何ともいえない奇妙な気持ちになった。

「棘はそれ一つだけ取り忘れていたみたいだね。怪我をしたのがレイチェルじゃなくて良かったよ。身代わりになってくれて感謝すべきかな。さ、座ってくれ」

応接間に戻って来るなり上機嫌で喋り出したサイファは、どこからか持ってきた薬箱を掲げて 見せながら、近くのソファを勧めた。

「手当ての必要などない」

「医者のくせに舐めておけばいいなんて言うなよな」

拒否することを予想していたかのように、サイファは間髪入れず嫌なところをついてくる。こういうときの彼には勝てない。ラウルは小さく溜息をつくと、怪我をしていない方の手を差し出した。

「それを貸せ。自分でやる」

「いいから座れよ」

サイファは少しも譲歩しなかった。怪我の心配をしているというより、自分が手当てをすることにこだわっているようである。反論する気も失せて、言われるままソファにドカリと腰を下ろし、今度は怪我をしている方の手を差し出した。

サイファは満足げに微笑むと、向かいに座って手当てを始めた。念入りすぎるほど丁寧に消毒し、傷薬らしきものを塗ると、ガーゼを当てて幾重にも包帯を巻いていく。どう考えても大袈裟すぎる。

「おまえ、楽しんでいるだろう......」

「今ごろ気付いたのか? 医者を手当てするなんて滅多にないことだからね」 睨みを利かせるラウルに怯みもせず、サイファは澄ました顔でしれっと答える。

「この怪我もおまえが仕組んだことではないだろうな」

「まさか。ラウルが呼ばれていたことさえ知らなかったよ」

確かにここに来たときの態度はそう見えたが、サイファならその程度しらばくれるのは造作もないことだ。しかし――。冷静に考えてみれば、ラウルの言うようなことを実現するには、レイチェルの協力が必要である。彼女がそんな計画に加担するとは思えない。自分の考えすぎだったのだとラウルは思い直す。

「そうか、ラウルに気を遣っていたんだな」

サイファは薬や包帯を片付けながら、ふと呟いた。

ラウルは怪訝な視線を彼に送る。

「毎年、レイチェルの誕生日はみんなで普通に食事をするだけだったんだよ。だけど、今年はパーティみたいにしたいって言い出したからさ。どういうことかと少し不思議に思っていたんだ

けど、どうやらラウルを呼ぶためだったみたいだね。普通の食事会ではラウルは居づらいだろう? 彼女なりにラウルが来やすい形を考えたんじゃないかな |

サイファは薬箱の金具をカチンと留めると、取っ手を掴んで立ち上がった。

「楽しそうにしろとまでは言わないが、レイチェルの気持ちを踏みにじるような行動だけはとるなよ」

ソファに座るラウルを見下ろし、真面目な顔で念押しをすると、踵を返して応接間を出て行った。颯爽とした足どりに合わせ、長くはない金の髪がさらりとなびいた。

ひとり残されたラウルは、ソファの背もたれにゆっくりと身を預けた。そして、怪我をした手 を視線の先に掲げ、巻かれた白い包帯をじっと見つめると、目を細めて小さく溜息をついた。

それから間もなくしてアルフォンスが帰ってきた。

彼もまた、少し早く仕事を切り上げてきたらしい。応接間で待ち構えていたレイチェルを抱き上げると、普段の彼からは考えられないほどに表情を崩した。娘を溺愛しているのは相変わらずのようである。

応接間にいるのはレイチェル、サイファ、ラウル、アルフォンス、アリスの5人——これが、今から始まるパーティの出席者だ。

自分以外は身内だけということに、ラウルは多少の居心地の悪さを感じたが、今さら帰るわけにもいかなかった。サイファにも釘を刺されている。そうでなくても、レイチェルに不快な思いをさせるような行動をとるつもりは微塵もなかった。

「レイチェル、お誕生日おめでとう」

アルフォンスの声で皆が乾杯し、パーティが始まった。

ラウル以外は楽しそうに会話をしていたが、ラウルだけはひとりで離れたソファに座った。あまり食べるつもりもなかったが、アリスが気を利かせて料理や飲み物を運んでくれたので、手持ち無沙汰にそれを口にする。

テーブルの方を窺うと、レイチェルは立ったままサイファと楽しそうに話をしていた。パーティが始まってからずっと一緒にいるようだ。二人にとって、それはごく自然なことなのだろう。 ラウルは不意にやりきれない虚しさに囚われた。

今日がレイチェルの誕生日であることすら知らなかった。当然ながらプレゼントも用意していない。そして、おめでとうの一言さえ言えていないのだ。このパーティにいる意味など無いも同然である。そもそも何のために呼ばれたのかもわかっていない。彼女は自分に何を求めているのだろうか——。

「ラウル、いいか?」

頭上から降ってきた太い声で、ラウルは現実に引き戻された。顔を上げると、そこにはアルフォンスがワイングラスを片手に立っていた。同席の許可を求めているようである。

「.....ああ」

ラウルが承諾の返事をすると、彼はその正面に大きな体を下ろした。手にしていたグラスをローテーブルに置き、離れたところにいるレイチェルを横目で窺うと、抑えた声で話を切り出す。

「レイチェルの魔導のことなんだが……」

ラグランジェ家のパーティのあと、レイチェルは魔導の訓練を行うことを決意したが、いまだにアルフォンスの許可は下りていない。この二ヶ月の間、彼女が折に触れて説得を試みているようだが、まだ成功はしていないと聞いている。

「ラウル、君は聞いているな? あの子の決意を」

「ああ」

ラウルは腕を組み、無表情のまま相槌を打つ。

「私は娘を危険な目には遭わせたくない。だが、出来れば意思を尊重してやりたいとも思っている。しかし、君もわかってくれるだろうが、これがなかなか難しい問題でな。どうすればいいか決めかねているのだ」

アルフォンスは膝の上で両手を組み合わせてそう言うと、顔を上げ、怖いくらい真摯な眼差しでラウルの双眸を見つめた。

「そこで君の意見を聞かせてほしい。魔導の訓練がどのような影響を与えるのか、そしてどれほ どの危険があるものなのかを」

ラウルは僅かに眉を寄せた。

「……正直言ってわからん。このまま魔導から遠ざけておけば、暴発することはないのかもしれん。だが、もしそれを誘発するような何かが起これば、今の彼女にそれを止める手立てはない。魔導の制御だけでも身に着けておくべきだとは思う」

「訓練に危険がないのかを聞きたい」

アルフォンスはラウルから少しも目を離さずに追及する。

「以前のような無謀なことはしない。精一杯、慎重に行うつもりだ」

「それは答えになっていない。危険はないのかと聞いているのだ」

ラウルの答えに納得しなかったアルフォンスは、感情を昂ぶらせ、ローテーブルに片手をついて身を乗り出した。革張りのソファが高い摩擦音を立てる。だが、その音で我にかえったのか、複雑な表情を浮かべると、ゆっくりとその身を引いていった。そして、組んだ両手を腹の上に乗せ、疲れたように深く息を吐いて言う。

「私は君を信じる。君が大丈夫だと断言するのならば、許可をしようと思っている」

それはまるでラウルを試しているかのような言葉だった。

実際にアルフォンスの意図はそこにあるのかもしれない。

ラウルは無表情を装ったまま考え込む。

「レイチェルの場合、何が起きるかは未知数だ。どれほど配慮したとしても、絶対に危険がないとは言いきれない」

静かに口にした答えは、自分の正直な考えだった。

アルフォンスは目を細めて溜息をついた。

「そうか……、それでは許可はできんな。張り切っているあの子には可哀想だが、諦めてもらう

ことにしよう」

「ああ.....」

危険はない、そう答えるべきだったのだろうか――。

だが、それを言い切るだけの自信がなかった。以前のような目に遭わせてしまうことが怖かった。要するに逃げたのだ。そんな自分には、やはりレイチェルを指導する資格はないのだと思う。

「何も起こらないことを祈るしかないな」

アルフォンスはそう呟くと、ローテーブルに置いたグラスを手に取り、半分ほど残っていたワインを一気に呷った。

「二人で何の話ですか?」

サイファは人なつこい笑みを浮かべながら、ソファに座るラウルたちに声を掛けた。その返事を待たずにアルフォンスの隣に腰を下ろすと、ローテーブルの上に置かれていた淡緑色のワインボトルを示して尋ねる。

「いただいても?」

「ああ」

アルフォンスはそう答えると、ボトルのコルクを外し、サイファが持ってきた空のグラスに 注ぐ。微かに黄味を帯びた液体が、その中で大きくまわりながら波を打ち、爽やかな香りを立ち 上らせた。

サイファはそのグラスを持ち上げ、アルフォンスに軽く会釈をした。

「ほら、ラウルも付き合えよ」

「酒は飲まないことにしている」

ラウルは紅茶を手にして素っ気なく答える。逃げ口上ではない。特に理由があるわけではないが、以前から自分でそう決めているのだ。

しかし、サイファは納得しなかった。ムッとして口をとがらせながら言い返す。

「乾杯のときに飲んでいたじゃないか」

「あれは付き合いだ」

「僕には付き合えないっていうのか?」

まるで酔っぱらいのようにしつこく絡んでくる。それも、いつもの彼らしくない稚拙な絡み方だ。顔を見る限りではまだ素面に見えるが、頭の方には少し酔いがまわっているのかもしれない。

「レイチェルに嫌な思いをさせるなと言ったのはおまえだろう」

「ああ、だから乾杯には付き合ってくれたってわけか」

レイチェルの名前を出すと効果覿面だった。彼にしては簡単すぎるほどにあっさりと頷いた。 やはり酔っているのかもしれないと思う。

そういえば……と、ラウルはあたりを見まわす。

「おまえ、レイチェルはどうした?一緒にいたのではなかったのか?」

「向こうのソファで寝ているよ」

ラウルはサイファが指さした方に目を向ける。先ほどは間にあるテーブルが邪魔をして気付かなかったが、確かにレイチェルはソファで横になっていた。体の上には毛布が二枚ほど掛けられている。

「まさか酔わせたのではないだろうな」

訝しげにそんな疑念を口にすると、サイファは眉根を寄せて睨み返した。

「僕がそんなことをする人間に見えるのか? 酒は飲ませてないし、他に何もしていない。ただ普通に話をしていただけだ。だけど、急に眠いって言って寝ちゃったんだよ」

多少の怒りを含んだ声で毅然と反論すると、隣のアルフォンスに同意を求める。

「アルフォンスは信じてくれますよね?」

「ああ、あの子はそういう子供みたいなところがあるからな」

アルフォンスは何か思い悩むような様子でそう答えると、硬い表情で目を伏せる。

「15.....か....」

「15ですね。ようやくあと1年です」

サイファは落とされた言葉を引き取ると、満面の笑みを浮かべながらそう続けた。

あと1年――。

それは、彼が待ち望んでいることが実現するまでの時間であり、自分と彼女の関係が終わる期限でもある。そのことについて、具体的な話はまだ聞いていない。だが、自分が彼女の家庭教師でいられるのは、長くてもあと1年なのだろうと思う。

「サイファ、そのことなんだが……」

アルフォンスは苦渋に満ちた顔で、言いにくそうに切り出した。

「どうだろう? あと4、5年ほど待ってはもらえないだろうか」

「手放すのが惜しくなってきたのですか?」

サイファは薄く笑みを浮かべ、反応を愉しむように尋ねる。

「そういうことではない」

アルフォンスは慌てて否定した。

「あれはおまえも知ってのとおり、まるきり子供でな。とても結婚など……」

「16歳のアリスと結婚した人が何を言ってるんですか」

サイファは動じることなく鋭い反撃をする。

アルフォンスはますます慌てた。顔に赤みが差し、うっすらと汗が滲む。

「いや、アリスはしっかりしていたのだ。しかしだな、レイチェルは無邪気というか、危なっか しいほどに幼い。とても嫁にやれる状態とは思えん。そう育ててしまったのは私たちなの

だが......

そこで言葉を詰まらせると、申し訳なさそうにうつむいた。

「だから、あと4、5年……、その間に色々と身に付けさせ、しっかり役目を果たせるように育てるつもりだ。おまえのためにも、レイチェルのためにも、それが最善の選択だと思う」

「今のままでいいですよ」

サイファはアルフォンスの提案をやんわりと突っぱねた。

「とりあえず結婚をして、それから少しずつ出来ることを増やしていけばいいでしょう。無理はさせませんよ。ルーファス前当主の言ったように、ラグランジェ家のことはすべて僕がやります。といっても、今はまだ父が当主なので、僕の仕事はそれほど多くないですけどね」

涼しい顔でそう言ってワイングラスを口に運ぶ。

対照的に、アルフォンスは難しい顔をしていた。

「しかし、そうはいってもな……おまえ、一度、過労で倒れたことがあっただろう。魔導省の仕事だけでもきついというのに、レイチェルの面倒までみることになったら体が持たんぞ」

「では鍛えておきます」

サイファはにっこりと微笑んで答える。その返答からは、絶対に引き下がらないという強い意 志が透けて見えた。何を言われようとも、どんな説得をされようとも、決して考えを変えるつも りはないのだろう。

アルフォンスは当惑したように彼を見つめた。

「おまえは、なぜそれほどまで……」

「レイチェルと少しでも長く一緒にいたい、ただそれだけです」

普通であればにわかに信じられない答えだが、サイファの場合は偽りない本心だろうとラウルは思う。彼の家庭教師をしていた頃から、幾度となく同様の話を聞いていたのだ。彼がどれほどその日を心待ちにしているか、どういう思いでそれを望んでいるか、どちらも嫌というほど知っている。

アルフォンスも彼の気持ちは疑っていなかった。だからこその苦悶を滲ませる。

「サイファ……残酷なことを言うようだがな、おまえとレイチェルとでは随分と温度差があるように思う。レイチェルにとっては、おまえが特別というわけではないぞ」

「わかっていますよ」

サイファは動揺も見せず、静かに受け止めた。

「お父さまが好き、お母さまが好き、サイファが好き、ラウルが好き——彼女にとってはどれも同じようなものですよね」

ラウルも薄々そんな気はしていた。そう思うようになったのはわりと最近のことである。初めから気付くべきだったのかもしれない。そうすれば、これほどまでに振り回されることはなかっただろう。

「でも、それでもいいと思っています。少なくとも、僕を好きだということは確かなわけですから。他に添い遂げたい人がいるのであれば、話は別ですけれども」

サイファの言葉が途切れると、アルフォンスは目を閉じて小さく息をついた。

「おまえの気持ちはよくわかった。レイチェルのことをそこまで想ってくれて、父親として本当に深く感謝をしている。レイチェルを託せるのはおまえしかいない。だからこそ、こちらも相応の準備を整えてから嫁がせたいのだ」

「駄目ですよ、約束は守ってください」

サイファは鋭い視線を向け、丁寧ながら強い口調で言う。

「しかし……」

アルフォンスは視線を落として言い淀んだ。反論の言葉ならいくらでもあるはずだ。それを飲み込んだのは、少なくともこの件に関しては、自分の方が弱い立場にあることを理解しているからに違いない。相手は本家であり、しかも既に約束を交わしているとなると、覆すのは難しいだろう。

「ラウル、おまえはどう思う? 意見を聞かせてくれ」

今まで黙って聞いていたラウルに、サイファは急に話を振ってきた。

「私には関係のない話だ」

「だから聞きたいんだよ。第三者の意見としてね」

サイファがなぜ今さら自分に意見を求めるのか、ラウルにはわからなかった。話はすでに彼自身の望んだ結論に達しかけている。何に頼ることもなく押し切れるはずだ。それとも他に何か意図でもあるのだろうか。

いずれにしても、自分には彼の意に沿うようなことは言えそうもない。

「レイチェルのためを思うなら、こんな結婚はやめた方がいい」

それは、これまでの話を根本から否定するものだった。

サイファは息をのんで大きく目を見張った。ゆっくりと顎を引き、青く燃えたぎる瞳でラウル を睨みつけると、低く抑制した声で尋ねる。

「どういうことだ」

「あいつはおまえたちが思っている以上に、自分の立場や自分に求められていることを考えている。そして、しなくてもいい苦労を背負い込んでいる。レイチェルを救うには、その呪縛から解放してやるしかないだろう」

ラウルは感情を見せないように、冷静な意見として述べていった。

サイファは不機嫌に、しかし真剣にそれを聞いた。じっと目を伏せて思考を巡らせると、僅かに視線を戻し、おもむろに形のいい唇を開く。

「確かにつらい目に遭わせたことはあるし、彼女が自分ひとりで抱え込んでいることも知っている。それでも僕は諦めはしない。彼女のそばで、彼女を守っていくつもりだ。そして、つらさや悲しみを補って余りあるくらいの愛情を注ぎ、彼女を幸せにする——それが僕の決意だ」

静かに迷いなくそう言い切ると、挑むような瞳をラウルに向けて畳み掛ける。

「僕との婚約を解消したとして、それで彼女はどうなる? 幸せになれるというのか? 誰が僕以上に彼女を守ってやれる? 幸せにしてやれる? ラウル、おまえならそれが可能だとでも言うのか?

Γ.....

矢継ぎ早に浴びせられる質問に、ラウルは何ひとつ答えられなかった。自分ならレイチェルを幸せに出来る——そう断言できるほどの自信があるのなら、とっくに彼女を連れ去っていただろう。

「サイファ、おまえ少し酔っているのではないか?」

「かもしれません」

心配そうに顔色を窺うアルフォンスに、サイファは弱く微笑んで溜息まじりに答えた。彼にしてはめずらしく感情的になり、少し息を切らせていた。興奮のためか、酒のためか、顔も少し紅潮している。ゆっくりとソファの背もたれに身を預けると、深く呼吸をし、額に手の甲をのせて目を閉じた。

「でも、いま言ったことは僕の本心だよ」

「意見を求められたから言っただけだ。議論するつもりはない」

ラウルは冷ややかな態度でティーカップを手に取った。

そんなラウルの様子を、サイファは目を細めて見つめる。

「ラウルには、認めてほしかったんだけどな」

どこか寂しげな声でそう呟くと、気を取り直したように、体を起こして笑顔を作る。

「まあ、確かに僕にもまだ至らない面はあるし、力不足は否めないからね。ラウルの忠告を真摯 に受け止めて、今後さらに努力を重ねていくよ」

彼は冷静に自分を見つめながら、前向きに決意を述べていく。忠告のつもりではなかったが、 彼はそう受け取ったらしい。いや、あえてそう解釈することにしたのだろう。

「そういうわけで、いいですよね?」

サイファは他人事のように聞いていたアルフォンスに振り向いた。

「レイチェルが16になったら結婚します」

「あ.....ああ.....」

静かだが強い決意を秘めたその宣言に、アルフォンスは押し切られるように肯定の言葉を返 した。

「サイファの粘り勝ちね」

アルフォンスの斜め後ろに立っていたアリスは、くすりと笑ってそう言うと、プレートに載せてきた人数分の小さなカップを、男たちの前のローテーブルに置いた。

「おまえ、聞いていたのか......」

「あら、秘密のお話だったの?」

アリスが立てた人差し指を唇にあて、悪戯っぽくそう尋ねると、アルフォンスはきまり悪そう に頭に手をやった。

「おまえはどう思っている? 16で結婚させてもいいのか?」

「そうね、サイファがそこまで言ってくれているんだから」

アリスは悩むこともなくさらりと答えた。彼女の中ではすでに結論は出ていたようだ。そのことが面白くなかったのか、アルフォンスは複雑な表情で眉をひそめた。気を悪くしていることは明らかである。しかし、アリスは平然としたまま小さなカップを差し出して言う。

「これでも食べて機嫌を直して。レイチェルが作ったのよ」

「レイチェルが、作った……?」

アルフォンスはその小さなカップを覗き込み、大きく瞬きをする。

「アルフォンスは知らなかったんですか? レイチェルがプリンを作っていたこと。僕とラウルは

これで二回目ですよ」

サイファは少し得意げな顔でカップのひとつを手にとった。

「なっ……、私を差し置いて、そろって抜け駆けとは……」

アルフォンスは本気で悔しそうだった。サイファに対抗するようにプリンを手に取ると、少し 慌てたようにスプーンですくって口に運ぶ。

「......美味い」

彼は一口食べて動きを止めると、ぽつりと一言呟いた。カップを持つ指先が僅かに震え、心なしか目も潤んでいるように見える。

「あの子もこんな美味いプリンを作るまでに成長していたのか……」

「どういうわけかプリンしか作らないんだけどね」

アリスは肩を竦めて言い添えた。それは、今は何も耳に入らないであろうアルフォンスにというより、その隣のサイファに言っているようだった。二人は互いに小さく笑い合うと、感慨に耽るアルフォンスを優しい眼差しで見つめた。

そんな三人を横目に、ラウルも自分の前に置かれたプリンに手を伸ばした。

それは自分の作るものと遜色のない出来だった。美味しいことは前回食べてわかっていたが、 見た目も申し分なく、そのまま市販されてもおかしくないくらいである。

当初は、作れるようになるとは思わなかった。

火傷をしたときはもう無理だろうと思った。

しかし、彼女は少しずつ努力を重ね、いつしかここまで出来るようになったのだ。それは、自 分の意思を持って着実に歩いてきた結果である。

ラウルは彼女の成長に思いを馳せながら、じっくりとそれを味わった。

「ラウル、来て!」

寝ていたはずのレイチェルが、庭からガラス戸を開けて声を弾ませた。いつのまにか起きて庭 に出ていたようだ。少し息がきれているが、溌剌としていて、とても眠そうには見えない。

なぜ自分だけが彼女に呼ばれたのだろうか――。

ラウルにはまったく見当がつかず、期待と不安の入り交じった気持ちが胸に渦巻いた。少し躊躇いながらも立ち上がり、彼女の方へと向かう。

「何の用だ?」

その極めて端的な質問に、レイチェルは何も答えなかった。ただにっこりと微笑むと、小走りで庭へと駆けていく。芝生を踏みしめる規則的な音が、次第に遠ざかっていった。

ラウルも庭に降りて後に続いた。

すると、彼女は庭の中央で足を止め、くるりと振り返った。ドレスが大きく風をはらみ、金の 髪がさらりと艶やかに舞い上がる。

「一緒に星空を見るって約束したでしょう?」

澄んだ声が一面の空に拡散する。

彼女は両腕を大きく広げて、愛らしい笑顔を浮かべた。彼女の背後には濃紺色の空が広がり、

そこにいくつもの星がキラキラと瞬いている。彼女の言ったように、それは宝石よりもずっときれいだった。

ラウルは目を細め、ゆっくりと腕を組んだ。

「あら? どうしたの?」

レイチェルはふと何かに気付いて尋ねる。その視線は、ラウルの人差し指に巻かれた白い包帯 に注がれていた。

「ああ、棘が刺さったのだ」

ラウルは問われたまま、何の気なしに答えた。

しかし、それを聞いたレイチェルは、口もとに手を当てて顔を曇らせる。

「私のあげたバラのせい?」

「いや、たいしたことはない、気にするな」

もとよりレイチェルを責めるつもりなど微塵もなかった。原因は自分の不注意であり、彼女に 非がないことは明らかである。そして、実際に怪我はごく些細なものなのだ。

「でも、包帯が……」

「サイファが大袈裟に巻いただけだ」

本当に余計なことをする奴だ、と心の中で舌打ちする。たいしたことはないと言っても、確かにこれでは説得力がない。そもそもこんなものを巻かなければ、彼女に気付かれることすらなかったはずだ。

「ごめんなさい.....」

「おまえは悪くない。そんな顔をするな」

自責の念に駆られる彼女に、ラウルは拙い言葉を掛けることしか出来なかった。本当は彼女の 類に触れたかった。その方が気持ちを伝えられる気がした。しかし、その衝動は理性が押しとど める。求める指先をこぶしの中にしまい込むと、うつむく彼女を見下ろして静かに口を開く。

「プレゼント、大切にする」

レイチェルは驚いたようにラウルを見上げた。彼女にとってはそれほど意外な言葉だったのだろう。大きくぱちくりと瞬きをして、ラウルと目を見合わせると、やがて小さくはにかんで頷いた。

「ねぇ、どうしてラウルなの?」

サイファも庭に降りてきて、二人に足を進めながら尋ねた。取り立てて不機嫌な様子はなく、 ニコニコと笑顔を浮かべている。もしかすると内心は面白く思っていないのかもしれないが、少 なくともレイチェルの前でそれを見せることはないだろう。

レイチェルは弾むように一歩飛び出すと、無邪気な笑顔を見せて答える。

「パーティのときの星空の話をしたら、ラウルも見たいって言ったから」

「そうは言っていない」

ラウルは焦って振り返り、釈明しようとする。自分から言い出したわけではなく、彼女が言ったことに頷いただけである。たいした違いではないかもしれないが、ラウルにとっては譲れない

部分だった。変に誤解をされては困る、ということが大きかったのかもしれない。

「むきになるなよ。だいたいわかるからさ」

サイファは軽く笑いながら受け流すと、ラウルの肩に腕をのせて声をひそめる。

「それより何の話をしていたんだ? 深刻そうに見えたけど」

ラウルはじとりとした視線を流すと、包帯が巻かれた人差し指を立てた。

「おまえがこんなものを巻くから心配させてしまうのだ」

「ああ.....」

サイファは気の抜けた返事をすると、いきなり何の躊躇いもなくその包帯をほどいた。そして 、不思議そうな顔をしているレイチェルの前に、包帯を取ったラウルの右手を晒して言う。

「レイチェル、これ、本当にたいしたことないんだよ」

サイファにとってはレイチェルが何よりも最優先である。わかってはいたことだが、ラウルはその身勝手さに閉口した。しかし、ほっとしたように胸を撫で下ろすレイチェルを見て、それですべてが報われたように感じている自分は、サイファとたいして違いはないのかもしれないと思う。

「そんなことより空を見ようよ」

サイファはレイチェルを引き寄せると、後ろから優しく抱きすくめた。

「この前のパーティのときの方がきれいだったかな」

「今日は特別だから一緒に見られただけで嬉しいの」

レイチェルは幸せそうに柔らかく微笑むと、小首を傾げて振り向く。

「ラウルも嬉しい?」

「.....ああ」

ラウルは腕を組んで空を見上げながら、小さく返事をする。緩やかな風が頬を撫でるように 掠め、長い焦茶色の髪を小さく揺らした。

「三人で星空を眺めるなんて、これが最初で最後かもしれないね」

サイファは誰にともなくそう言った。

それきり会話は途絶えた。

星がひとつ流れた。

一瞬だけ強い煌めきを放ち、すぐにすっと消えていく。

自分とレイチェルの出会いは、この流れゆく星のようなものかもしれない。

煌くような二人の時間は、やがて思い出だけを残して終わりを告げる。それはどうすることもできない。誰にも止めることはできないし、止めてはならないのだ。

変わらないものは何もない。だからこそ、今という時間はかけがえのないものになる。

そんな当たり前のことを、長い時間を無為に生きる中で、ラウルは忘れてしまっていた。思い 出させてくれたのは、紛れもなく——。

まっすぐ空を見上げるレイチェルの横顔を、ラウルはそっと見つめて目を閉じた。

「誕生日プレゼント?」

レイチェルはきょとんとして小首を傾げた。いつもの指定席に座ったまま、両手をダイニングテーブルの上に置き、向かいのラウルに不思議そうな視線を送る。

「そうだ。おまえからはもらったが、私は何もやっていなかっただろう」

「そんなこと気にしなくてもいいのに」

「そういうわけにはいかない。誕生日パーティに出席したのだからな」

ラウルは真剣な顔で言った。

彼女の誕生日から二日が過ぎてしまったこともあり、少し迷っていたが、結局やはりプレゼントくらいは贈るべきだという結論に達したのである。そうしないことには自分の気持ちも治まらない。そこにはサイファへの対抗心も少なからずあったと思う。

「何か欲しいものはあるか?」

「別にないけど」

レイチェルはあっさりと言う。しかし、それではラウルが困るのだ。

「何かひとつくらいはあるだろう」

「うーん……そうね……紅茶が飲みたいわ」

レイチェルは少し考えてから答えた。はぐらかしたわけではなく、思ったまま素直に言っただけなのだろう。確かに彼女の欲しいものには違いない。だが、ラウルの求めていた答えとは違う種類のものだ。

「わかった、今から淹れてやる。ただし、これはプレゼントとは別だからな」 ラウルはそう前置きしてから立ち上がった。

芳醇な香りの紅茶に、ふんわりと甘いケーキ――。

それらをレイチェルの前に差し出すと、彼女は待ちきれないとばかりに顔を綻ばせた。いただきますと行儀よく言ってから、紅茶をひとくち飲み、続けてケーキを口に運ぶ。その幸せそうな 笑顔を眺めながら、向かいのラウルもフォークを手に取った。

いつもと変わらない優しく穏やかな空気が二人の間に流れる。

だが、先ほど中断した話のせいか、今日のラウルは心から落ち着くことはできなかった。機を 窺いつつ、その話を切り出す。

「それで、誕生日プレゼントのことだが……」

「ラウルにはいつもお茶を飲ませてもらっているし、それで十分よ」

レイチェルはティーカップを両手で持って微笑む。

「いや、それでは私の気がすまんのだ。遠慮はするな。何でも欲しいものを言え」

「そう言われても……」

彼女は困ったように眉を寄せて口ごもった。

それを見て、ラウルはようやく気がついた。自分の行為はただの身勝手な気持ちの押しつけに

すぎない。彼女が望んだわけでもないのに、答えを強要する権利などないのだ。彼女を困らせるのは本末転倒である。諦めるしかないと思った、そのとき——。

「あ、だったらラウルが考えて」

レイチェルはパッと顔を輝かせ、胸元で両手を合わせた。

ラウルには彼女の言わんとすることがわからなかった。怪訝に眉をひそめると、無言で問いかけるような視線を送る。

「ラウルが私のために選んでくれたプレゼントが欲しいの」

レイチェルはにっこりと微笑んで言い直した。そして、ちょこんと首を傾げると、大きく瞬き をして続ける。

「考える時間は二日でいいかしら。あまり長く時間をとっても、ラウルが大変になると思うの。 二日で考えつかなかったら、そのときはプレゼントは無しにしましょう」

「.....ああ、わかった」

ラウルは一方的な提案に動揺しつつも、何も言い返すことなく了承した。

「じゃあ、楽しみにしているわね」

そう言って、レイチェルは屈託のない笑顔を見せた。少し残っていた紅茶を飲みきると、椅子から立ち上がり、じゃあねと小さく手を振りながら部屋を出て行った。

物音ひとつしない静寂の中、ラウルは両手で頭を抱え込んでダイニングテーブルに突っ伏した。長い焦茶色の髪が、丸くなった背中からさらりと滑り落ちていく。

自分で考えて選べだと――?

そんなことが出来るくらいなら、初めから尋ねたりはしない。出来ないから尋ねているのだ。 相手の喜びそうなものを察する能力など、あいにく持ち合わせていないのである。

それにもかかわらず、レイチェルはとんでもない難題をふっかけてきた。もちろん彼女に悪意がないことはわかっている。しかし、だからこそ、そんな無邪気な彼女を少し憎らしく思った。

ラウルは気持ちを落ち着かせようと、紅茶を淹れ直し、再びダイニングテーブルについた。しかし、紅茶には手をつけないまま、腕を組み、目を閉じ、身じろぎもせずじっと考える。

無難なところでは花束か――。

彼女に贈るとなればピンクローズ以外に考えられない。それが彼女に最も似合う花であり、 また、彼女自身も気に入っている花だ。しかし、それではサイファと全く同じになってしまう。 花の種類が違うのならまだしも、種類まで同じのというのは、さすがにありえないだろう。

花以外となると何が――。

彼女の好きなもの、興味のあるものを贈るのが筋だろうが、それが思いつかない。

紅茶とケーキは好きなようだが、毎日のように出しているものを改めてプレゼントなどという ことはおかしい。茶葉であればと思ったが、彼女は自分で茶を淹れたことがないと言っていた。 自分でどうにも出来ないものをもらっても、あまり嬉しくはないだろう。

ラウルは紅茶を口に運んで溜息をついた。

再び目を閉じて、彼女の部屋の様子を思い浮かべてみる。そこは、広くはあるが殺風景なくらいに簡素で、これといって彼女の趣味や好みが窺えるようなものはなかった気がする。

思えば、自分は彼女のことを何も知らなかったのかもしれない。好きなものも、嫌いなものも、興味のあるものも、あらためて考えてみるとほとんど思いつかない。サイファならば彼女のことを何でも知っているのだろうか。

ラウルは眉根を寄せて頬杖をつくと、深く盛大に溜息を落とした。

今からこんなことでは先が思いやられる。約束の期限は二日後。それまでに何としても用意しなければならないのだ。彼女へのプレゼントを——。

翌日——。

「何か考えついたの?」

授業を終えたレイチェルは、手を伸ばして教本を片付けながら、楽しそうに浮かれた声で尋ねた。一方、彼女の斜め後ろに座るラウルは、腕を組んで苦渋に満ちた表情を浮かべている。

「まだ考えているところだ」

昨晩は一睡もしなかった。とても眠れるような心境ではなかったのだ。一晩中ずっと考えていたものの、これといって進展はなく、いつまで経っても結論に辿り着けない。そのうちに、いつのまにか思考が別の方に向かってしまい、そんな自分の不甲斐なさに落ち込んだりもした。

レイチェルはくすりと小さな微笑みを浮かべた。

「行きましょうか」

「少し待て」

ラウルは細い肩に手を置いて、立ち上がろうとする彼女を制した。そして、代わりに自分が立ち上がると、振り返って部屋をぐるりと見渡す。

やはり殺風景だ。

それでも何か少しでも手がかりがないかと、その広い部屋をゆっくりと歩きまわる。

目立つものは天蓋付きのベッドだ。しかし、これは彼女の趣味というわけではないだろう。万が一そうだとしても、こんなベッドは二つもいらないはずだ。枕にしても布団にしても一つあれば十分である。

それ以外でめぼしいものといえば、大きめの本棚くらいである。ラウルの背丈と同じくらいの高さがあり、横幅もラウルの片腕ほどの長さはある。ラウルはその前で立ち止まると、上から下までじっくりと眺めていった。若い女性が好みそうな小説などはひとつもなく、固い内容の書籍ばかりが並んでいる。経済学や経営学、経済法などの、経済に関するものが多いようだ。

「おまえ、経済に興味があるのか?」

「それはほとんどお父さまが買ってきたものよ。あとは経済学の授業で使った本がいくつか。一 応すべて読んだけれど、別に興味があるってわけじゃないの」

一筋の光明が見えた気がしたが、すぐにそれは断たれてしまった。

それ以外には特にこれというものはなく、結局、何の手がかりも見つけられなかった。すべて

を見たわけではないが、さすがにクローゼットや引き出しの中まで覗くわけにはいかないだろう。

「ラウル?」

先ほどまで椅子に座っていたはずのレイチェルが、いつのまにか隣に立っていた。心配そうに 顔を曇らせて覗き込んでいる。

「ああ、行くか」

ラウルは我にかえってそう言うと、教本を脇に抱え、彼女とともに部屋を後にした。

二人の前には紅茶とケーキが置かれている。

レイチェルは嬉しそうにケーキを食べていたが、ラウルは紅茶に少し口をつけただけで、腕を組んで目の前の彼女を見つめながら、じっと考え込んでいた。

彼女の好きなもの、興味のあるもの――。

今度は彼女の姿から手がかりを探す。最初に目についたのは、後頭部に付けている薄水色の大きなリボンだった。ラウルが知る限りでは、彼女はいつも同じリボンをつけている。おそらく気に入っているのだろう。

リボンがいいかもしれない、と思う。

しかし、すぐにその間違いに気がついた。彼女がこのリボンを気に入っているのだとすれば、別のものを贈っても仕方がない。今のリボン以上に気に入るものを選べばいいのかもしれないが、それがわかるくらいならば苦労はしない。今のものとそっくりなものにすれば、とも考えたが、誕生日プレゼントがスペアなどどう考えてもおかしい。

ラウルは小さく溜息をつき、ティーカップを持つ彼女に目を向けた。

ドレスはたくさん持っているようだ。似たような雰囲気のものが多い。それゆえ彼女の好みそうなものは何となく想像がつく。ドレスについての細かいことはわからないが、そのあたりは店の人間に任せればいいだろう。今から作り始めてはいつになるかわからないが、そのくらいは待ってもらえばいい。もうすでに誕生日は過ぎているのだ。一週間や二週間遅れたところでたいした違いではない。

問題は、採寸をどうするかだ。

彼女に気付かれないように採寸するのは不可能だ。目測なら何とかなるだろうか。しかし、彼 女は平均からだいぶ離れた体型をしている。どうにも当たりがつけづらい。

「.....何?」

「いや……」

レイチェルにきょとんと尋ねられて、ラウルは慌てて視線を外した。

やはりどう考えても無理がある。ドレスとなると細かく正確に採寸しなければならないはずだ。目測でどうにかなるものではないだろう。だからといって採寸させてくれとは言いにくい。理由も告げずにそんなことを頼んではただの変態である。いや、何も自分が採寸することはない。店で採寸してもらえばいいのだ。そうなると、プレゼントをする前に一緒に店に行くことになる。事前にあまり手の内を明かしたくないが、他に方法もないので、ここは妥協するしかないだ

ろう。

そこまで考えてふと思った。

ドレスというのはどこに行けば買えるのだろうか——。

そういう店にはこれまでまったく縁もなく、ラウルには見当もつかない。今どき日常的にドレスを着ている人間などそう多くはない。当然ながら扱う店も多くはないだろう。また、あまり頻繁に売れるものでないとすれば、専業で店を構えている可能性は低いのではないだろうか。サイファに訊けばわかるかもしれないが、それだけはどうしてもしたくなかった。

「ラウル、食べないの?」

「ああ、食べる」

不思議そうに小首を傾げるレイチェルに、ラウルは抑揚のない声で答えた。組んだ腕をほどいてフォークに手を伸ばす。美味しいはずのケーキだが、このときばかりはほとんど味を感じなかった。

「ねー、ラウルいないの?!」

レイチェルが帰ったあと、ラウルが医務室の自席で頬杖をついていると、外から大きな呼び声が聞こえた。それと同時に、ドンドンドンと急かすような速いテンポで乱暴に扉が叩かれる。

普段は診療を受け付けている時間だが、今日はすでに鍵をかけてあった。

いつもほとんど患者が来ないこともあり、どうせ来るのはサイファくらいだろう高をくくっていたのである。今は彼の相手をするより、静かにひとりで考えたかったのだ。しかし、この声はサイファではなく女性のものである。随分となれなれしい言い方をしているが、ラウルは誰だかわからなかった。

鍵を外して扉を開ける。

そこに立っていたのは、白衣を着た小柄な女性、王宮医師のサーシャだった。同じ立場という こともあり、会議などで顔を合わせることはあるが、仕事以外の話はしたことがない。わざわざ ラウルの医務室を訪ねてきたのも初めてのことである。

「何だ?」

「報告書、出てないって」

サーシャはラウルを見上げて、ぶっきらぼうに言った。白衣のポケットに両手を突っ込んだまま、仏頂面で面倒くさそうに続ける。

「期限はきのうだったよ」

「わかっている」

王宮医師は月ごとに活動報告書を提出することになっている。その今回の期限は、彼女の言うように昨日だったのだ。午前中に報告内容はまとめてあったのだが、レイチェルのプレゼントのことで頭がいっぱいになってしまい、提出するのをすっかり忘れていたのである。

「じゃあね、伝えたから」

「待て」

素っ気なく立ち去ろうとするサーシャを、ラウルは肩を掴んで引き留めた。

「.....何?」

サーシャは思いきり眉をひそめ、あからさまに嫌そうにラウルを睨んだ。もともと愛想のいい方ではないが、今日は一段と機嫌が悪そうに見える。ラウルのせいで面倒なことを押しつけられたせいかもしれない。

しかし、今のラウルにはそんなことを気に掛ける余裕もなかった。

「おまえ、プレゼントに何が欲しい」

「え?くれるの?」

「やらん。参考にするだけだ」

目を丸くして聞き返したサーシャに、ラウルは無表情で冷たく答えた。彼女に対する配慮など まるでない身勝手な言い方である。サーシャは呆れたようにじとりとした視線を向けた。

「私の答えじゃ参考にならないと思うけど?」

「いいから言え」

「現金」

あまりにも想定外の答えに、ラウルは無表情のまま固まった。

「……現金以外だ」

「じゃあ、ダイヤかなぁ。高く売れるし」

サーシャは斜め上に視線を流しながら、少しとぼけたように言う。

ラウルは深く息を吐きながら肩を落とした。

「……おまえに聞いたのが間違いだった」

「だから参考にならないって言ったじゃない」

「そうだな」

面倒くさそうにそう答えると、前髪を掻き上げて額を押さえる。同じ女性であれば何か参考になることがあるのではないかと思ったが、サーシャとレイチェルはあまりにも違いすぎた。藁にも縋る思いだったとはいえ、完全に縋るものを間違えてしまったと思う。

ラウルは足を引いて医務室に下がろうとしたが、そのときサーシャが何か意味ありげに笑って いることに気がついた。口もとに手を当てて、上目遣いでラウルを見ながら二ヤニヤしている。

「何だ?」

「もしかして、恋、しちゃった?」

ラウルの息が止まった。大きく目を見張ったまま呆然とする。思考が停止してしまい、何の答えも返すことができなかった。しかし、サーシャはそれを肯定と受け取ったようだ。嬉しそうに 一人で頷きながら声を弾ませる。

「うんうん、そうか、ラウルも人間らしいところあるんだ」

「お、まえ......

ラウルは唸るような低い声でそう言うと、氷のような目で威嚇するように睨み下ろした。その 視線だけで、蛇に睨まれた蛙のように、サーシャはビクリと体を強張らせた。引きつった笑顔を 見せながら、それでも軽い口調を装って言う。

「やだ、もう、そんな怖い目で睨まないでよ」

「もういい、行け」

ラウルは吐き捨てるようにそう言うと、医務室に引っ込んで扉を閉めかけた。

そのとき---。

「プレゼント、何でもいいと思うよ」

落ち着いたサーシャの声が耳に届いた。思わず手を止めて顔を上げる。少し離れたところで、彼女は僅かに微笑んでいた。それはからかうような表情ではなく、優しく見守るような表情だった。

「相手がラウルのことを好きなら何をもらっても嬉しいし、嫌いなら何をもらっても不快だし」 彼女は真面目に身も蓋もないことを言った。

ラウルは視線を落とし、奥歯を噛みしめる。サーシャの言うことはわかっていた。レイチェルはきっと何でも喜んでくれる。笑顔でありがとうと言ってくれる。それでも、下手なものは贈れないと思ってしまうのだ。それは自分の臆病さによるものなのだろう。そして、やはりサイファへの対抗心も少なからずあるのだと思う。

「頑張ってね」

サーシャは軽い口調でそう言うと、左手を白衣のポケットに突っ込んだまま、右手を上げて背中を見せた。颯爽とした足どりで立ち止まることなく歩き去っていく。後ろでひとつに結んだ赤 茶色の髪が、小さく上下に弾んでいた。

ラウルは医務室の扉を閉めると、そこにもたれかかって大きくうなだれた。

さらに翌日――。

今日が期限の日である。

レイチェルの授業に向かう前に、ラウルは母親のアリスに面会を求めた。広い応接間に通され、彼女と向かい合って革張りのソファに座る。レースのカーテン越しに差し込む光が、ガラスのローテーブルに反射し、少し眩しく感じて目を細めた。

「レイチェルのことかしら?」

「いや……頼みがある」

「ええ、私に出来ることなら」

アリスはにっこりとして胸に手を当てる。その屈託のない微笑みは、どこかレイチェルと重なるものがあった。親子なのだから当然といえば当然である。

ラウルは少し視線を外して言う。

「おまえたちのドレスを作った店を教えてほしい」

「……ラウルもドレスを着るの?」

アリスは真顔で無謀なことを尋ね返した。

「そんなわけないだろう」

ラウルは半ば呆れたような視線を送りながら否定する。しかし、本当の理由について話すつも りはなかった。いずれレイチェルにプレゼントをすればわかってしまうだろうが、今はまだ伏せ ておきたかったのだ。

「おまえたちに迷惑を掛けるようなことはしない」

「わかっているわ」

アリスは安心させるようにあたたかく微笑んで言う。

「店主にラウルのことを紹介しておきましょうか?」

「いや、店の名前と場所を教えてくれるだけでいい」

紹介してもらえば何かと利点があるのだろうが、自分の行動が筒抜けになってしまうなど、かえって面倒なことになる可能性の方が高いような気がした。もちろんそれは成り行きでそうなるという話であり、彼女の親切心に疑念を持っているわけではない。

「少し待っていて」

アリスはそう言って他の部屋から上品な桜色の便箋を持ってくると、丁寧な文字で店の名前と 住所、そして、その下に簡単な地図を書いた。二つ折りにしてラウルに差し出す。

「すまない、感謝する」

ラウルは低い声でそう言うと、その紙を受け取って教本の間に挟んだ。その様子を眺めながら、アリスは背筋を伸ばして小さくくすりと笑う。

「レイチェルもそろそろ新しいドレスを作らなくちゃいけないわね」

「新しいドレス……?」

ラウルが怪訝に聞き返すと、アリスは膝の上に手をのせたまま肩を竦めて見せた。

「あの子、あと一年で結婚するでしょう? そうしたらあんな子供っぽいドレスを着るわけにいかなくてね。分家ならまだしも、レイチェルが嫁ぐのは本家だから、そのあたりはきちんとしないといけないのよ」

「そうか……」

ラウルの中で最後のプレゼント候補が消えた。せっかくもらった店の情報も、おそらく使うことはないだろう。膝の上にのせた教本を持つ指先には、無意識に力が入っていた。

レイチェルの授業は普段どおり滞りなく終わった。

その後ラウルの部屋にやってきた二人は、いつもの席で向かい合いながら、紅茶を飲み、ケーキを食べる。ただ、いつもと違って今日は二人とも言葉少なだった。

「ラウル、今日が期限だけど」

レイチェルが二杯目の紅茶を飲みながら切り出した。それは、ラウルが避けられないとわかっていながらも、出来れば避けたいと願っていた話題である。ドキリとして苦い顔でうつむく。

「……すまない、何も考えつかなかった」

自分から言い出したことにもかかわらず、こんな結果になってしまい、あまりにも情けなくて彼女の目を見ることが出来なかった。しかし——。

「ありがとう」

耳に届いたのは思いもしなかった言葉、そして屈託のない声。

ラウルは驚いて顔を上げた。聞き違えたのかと思ったが、そこにあったのは言葉に違わぬ優し

い微笑みだった。しかし、礼を言われる覚えは全くない。逆に非難されても仕方のない状況である。彼女の態度の理由が掴めず、尋ねかけるように眉をひそめた。

「たくさん考えてくれたのよね。その気持ちがプレゼント」

彼女の答えはとても単純で、とても優しいものだった。

何でもいいから用意すれば良かった――。

ラウルは強烈に後悔した。しかし、その「何でもいい」がわからなくて苦労していたのである。たとえ時間を巻き戻せたとしても、また同じ結果になるような気はする。不甲斐ない自分には

、結局のところ無理だったのかもしれない。

「ラウルの悩んでいる姿を見られて嬉しかったわ」

レイチェルは笑いながらそう言うと、空のティーカップをソーサに戻して椅子から降りた。じゃあね、と手を振って部屋を出て行こうとする。

「ま、待て」

ラウルは慌てて声を掛けると、ガタン、と大きな音を立てて椅子から立ち上がった。

レイチェルはきょとんとした顔で振り返る。そして、ラウルを見つめたまま、不思議そうに小さく首を傾げた。

「どうしたの?」

「何か、本当にないのか?欲しいものは」

「そう言われても.....」

似たやりとりは二日前にもあった。あのときと同じように、自分の身勝手な気持ちの押しつけで彼女を困らせている。これでは堂々巡りである。ラウルはすぐに後悔して撤回しようとした。だが——。

「じゃあ、キスして」

レイチェルは無垢な瞳を向けてそう言うと、ニコッと愛らしく微笑んだ。

その瞬間、ラウルは体中に電流が駆け巡ったように感じた。

息を止めて彼女と視線を合わせる。

冗談を言っているようには見えなかった。思いつめているようにも見えなかった。普段と変わらない様子で、彼女はただ自然にそこに立っている。

ラウルに断る理由はなかった。

気持ちを静めるように深く呼吸をすると、一歩、二歩と足を進めた。彼女と近い位置で向かい 合うと、白く柔らかい頬に、大きな手をそっと添えた。

「目はつむった方がいいの?」

「好きにしろ」

無表情を崩さぬまま、腰を屈めてゆっくりと顔を近づけていく。しかし、唇が触れる寸前、互いの体温さえ感じられるくらいの距離で、ピタリとその動きを止めた。

息を詰めて目を閉じる。

そのとき、レイチェルの小さな吐息が、ラウルの唇に掛かった。それはまるで媚薬のような甘い刺激——彼女は無自覚なのだろうが、誘いかけているようにしか思えない行為である。

自分の鼓動がやけに強く感じられた。体が熱くなっていく。

そんな自己の昂ぶりを懸命に抑えながら、そっと、触れるだけの口づけを彼女の唇に落とす。 おそらくこれが彼女の望んだこと。それ以上でも以下でもない。だから、自分は——。

ゆっくりと顔を離し、体を起こす。

視線の先のレイチェルは、焦点の合わない目でぼんやりとラウルを見ていた。しかし、ふとその目が合うと、急に我にかえってにっこりと微笑んだ。

「また、あしたね」

「ああ.....」

レイチェルは手を振って部屋を出て行く。

その間際、一瞬だけ彼女はふっと寂しそうな表情を浮かべた。ラウルははっとして再度確認しようと思ったが、そのときにはもう扉は閉ざされ、彼女の姿を視界に捉えることはできなかった

なぜ、そんな顔をする――。

ラウルにはその理由がわからなかった。大した理由などなかったのかもしれない。もしかする と気のせいだったのかもしれない。ただ、ほんの一瞬だけ見た彼女の横顔が、いつまでも脳裏に 焼き付いて消えなかった。

「三ヶ月……」

医務室の自席に座るラウルは、向かいのアルフォンスが口にした言葉を、呆然としながら確認 するように繰り返した。

レイチェルの誕生日から二ヶ月が過ぎた。

プレゼント騒動以降は特に何事もなく、レイチェルの家庭教師を淡々とこなし、そのあと一緒にお茶を飲むという、極めて平穏な日々を送っていた。いつか来るであろう終わりの日については、レイチェルは少しも触れることはなく、また、ラウルの方もできるだけ意識しないようにしていた。

しかし、今、アルフォンスが唐突にラウルの医務室を訪れて告げたのだ。

あと三ヶ月だと――。

「ああ、アリスと相談して決めたのだ。結婚の準備や諸々のことを考えると、そのくらいが妥当だろうと。何か問題でもあるのか?」

「いや、授業をどこまで進めるか考えていた」

ラウルは冷静な口調で先ほどの動揺を取り繕った。あまり上手い嘘とはいえなかったが、生真 面目なアルフォンスは疑うことなく言葉どおりに受け取ってくれた。

「そのことならば気を揉む必要はない。これまでどおり授業を行い、進められるところまで進めてくれればいい。中途半端に終わっても構わないと思っている」

「わかった」

ラウルは低い声で静かに返事をした。自分はただ雇われているだけの家庭教師である。雇い主 の決定が間違ったものでなければ、それに従う他はない。

「君には心から感謝している。レイチェルが真面目に勉学に取り組むようになったのも君のおかげだ。レイチェルを研究所の実験から守ってくれたこともあったな。君がいなければどうなっていたかわからん」

アルフォンスはもうすべてが終わったかのように、思い出話を交えながら感慨深げに礼を述べた。しかし、ラウルの方はそれを素直に受ける気持ちにはなれなかった。

「まだ三ヶ月残っている」

「そうだな、少し気が早かった。終了後にあらためて礼に来るとしよう」 アルフォンスは律儀に答える。

「その必要はない。今ので十分だ」

ラウルは感情を押し隠し、無愛想にそう言うと、椅子をくるりと回して背を向けた。机に肘を つきながら読みかけの本を開く。

その後ろで、パイプ椅子の軋む耳障りな音が重々しく響いた。

アルフォンスの靴音が遠ざかり、医務室は時が止まったかのような静寂に包まれた。早朝のため、外からの雑音もほとんど聞こえてこない。細く空いた窓からは新鮮な空気がするりと滑り込み、薄いクリーム色のカーテンを緩やかに波打たせた。

あと三ヶ月――。

近いうちに終わりの日が来るということは、言われるまでもなくわかっていたことである。覚悟もしていたつもりだった。しかし、現実として突きつけられると、そんな覚悟などどこかに吹き飛んでしまったかのように胸がざわついた。

どうしようもないことだ。

わかっているのにわかりたくない自分がいる。心がバラバラになりそうだった。机に肘をついたまま、大きな手で額を掴むように押さえる。長い焦茶色の髪がさらりと肩から滑り落ち、暗幕のようにラウルの視界から光を遮断した。

その日の午後、ラウルはいつも通りレイチェルの家に行き、家庭教師の授業を行った。いまだに動揺を引きずってはいたが、彼女に悟られるわけにはいかない。冷静な態度を装いながら粛々と進めていく。

授業中、特に変わったことはなかった。

レイチェルも普段とまったく同じように見えた。あと三ヶ月ということを知っているのかいないのか、その様子からは窺い知ることが出来ない。気にはなった。それでも今は授業に集中すべきだと、彼女に尋ねることは思いとどまった。

優しい色の空には薄い雲がかかり、微かに風が吹いていた。

授業が終わった二人は、連れ立ってラウルの医務室へと向かう。互いに確認するまでもないくらいに、それは二人にとって日常の行動になっていた。ときどきレイチェルが話しかけ、ラウルが無表情のまま答え、人通りの少ない道を一緒に歩いていく。

その途中、レイチェルは不意にラウルの手を取った。

「寄りたいところがあるの」

顔を上げてニコッと愛らしく微笑むと、その手を引き、医務室とは違う方向に延びる小径へと 足を踊らせた。ドレスがふわりと風をはらみ、後頭部の大きなリボンが軽く弾む。

彼女がこんな行動を起こすのはめずらしい。

ラウルは少し怪訝に思いながらも、彼女の小さな手をそっと握り返し、素直にその導きに従って歩き出す。その先に何があるのかは尋ねるまでもなくわかっていた。

人気のない静かな小径が続く。耳に届くのは、木々の葉が触れ合う音、自分たちが草を踏みしめる音、頬を掠める風の音くらいである。息を止めれば、陽光の降りそそぐ音さえ聞こえてきそうだった。そんな静寂に圧倒されたのか、二人とも口を開こうとはせず、ただ無言のまま歩き続けた。

しばらく道なりに進むと、予想通り、蔦の絡みついた煉瓦造りのアーチが現れた。少し足を速

めてそれをくぐる。すると一気に視界が開け、一面に広がる色鮮やかなバラ園が目に飛び込んできた。

「ここは久しぶり?」

「あのとき以来だ」

小首を傾げて覗き込むレイチェルに、ラウルは前を向いたまま答えた。

あのとき――それは家庭教師を引き受けて間もない頃のことである。今日と同じように、彼女に連れられてここに来たことがあったのだ。当時はまだ彼女と距離を取ろうと突き放した態度で接していた。しかし彼女はそれをものともせず懐に飛び込んでくる。おかげで随分と扱いに手こずった。そんなことが少し懐かしく思い出される。

「深呼吸して」

「なぜだ」

唐突な彼女の要求にラウルは戸惑った。

「してくれないの?」

レイチェルはラウルの疑問に答えることなく、無垢な瞳でじっと見つめながら小首を傾げた。 断られるとは少しも思っていないようだ。催促するかのように瞬きをする。

ラウルは溜息をついた。

半ば投げやりに大きく息を吸って吐くと、レイチェルに視線を落として仏頂面で言う。

「したぞ」

それでも彼女はただ無言で微笑むだけだった。

ラウルは怪訝に眉をひそめた。彼女の目的がさっぱりわからない。深呼吸にどういう意味があるのだろうか。それをさせるためにここへ連れてきたのだろうか。なぜ質問に答えないのだろうか。言えないわけでもあるのだろうか。

考えを巡らせるうちに、ある推論に行き当たった。

もしかしたら、彼女もあと三ヶ月ということを聞いたのかもしれない。それでなぜ深呼吸なのかはまだわからないが、自分と同じように感じているのだとすれば、いつもと違う行動をとる理由にはなりえるだろう。

バラ園の細道を軽やかに進む彼女に、ラウルは三歩ほど後ろから見守るようについていく。両脇にはピンクローズが咲いていた。むせかえるような緑の中に、ほのかな甘さが漂っている。

「おまえもアルフォンスに聞いたのか?」

「えっ? 何を?」

レイチェルはきょとんとして振り返り、大きく瞬きをした。不思議そうな顔でじっとラウルを 見つめる。とぼけているようには見えない。

「……なぜ、ここへ来た」

「それは……」

「言えないのか?」

思わずラウルはきつい口調で問いただす。

レイチェルは当惑したように目を伏せた。しばらくそのまま考え込んでいたが、やがて意を決

したように顔を上げ、まっすぐにラウルを見据えて答える。

「ラウルが落ち込んでいるみたいだったから、元気になってほしかったの」

濃色の瞳が大きく揺らいだ。

確かに彼女の言うように落ち込んでいた。しかし、彼女にはそのことは何も言っていないし、 むしろ悟られないように気をつけていたつもりだ。態度に出ていたとは思わない。それなのに、 どうして気づかれてしまうのだろうか。

今回だけではない。似たようなことはこれまでに何度もあった。

ときどき、そんな彼女のことを怖いと思う。

それは自分の中にどうしても知られたくない気持ちがあるからだろう。知られれば確実に軽蔑 され、拒絶されてしまう。そうならないように、是が非でも最後まで隠し通さなければならない

「元気になるおまじない、欲しい?」

ふとレイチェルがそんなことを尋ねてきた。後ろで手を組んでにっこりと微笑んでいる。その おまじないが何であるか、ラウルにはすぐにわかった。

「.....ああ」

「じゃあ、しゃがんで」

レイチェルは無邪気に声を弾ませ、せがむように右手を上に伸ばす。

しかし、ラウルは彼女の要望とは違う行動をとった。彼女の体を片腕ですくい上げるようにして肩に座らせる。安定感のないそこで、レイチェルはバランスを崩して上体をふらつかせた。慌ててラウルの頭に両手を掛けて自身を支え、小さく息を呑み、高い位置から辺りを見まわす。

ラウルが顔を上げると、彼女と視線が合った。

彼女はきょとんとしていたが、すぐにニコッと笑い、体を屈めてラウルの額にそっと唇を寄せた。軽く触れるだけの口づけ。それが彼女の言う"元気になるおまじない"である。

「少しは元気になった?」

「少しはな」

ラウルの答えは素っ気ないものだったが、それでもレイチェルは屈託のない幸せそうな笑顔を 見せた。肩に座ったまま、目を閉じて少しだけ体を寄せる。願うことは同じ。言葉はなくても通 じ合っている。それが二人の間に心地よいあたたかな空気を作り出していた。

ふいに背後から突風が吹いた。

瞬間的に二人の長髪を舞い上がらせ、服をバサバサとはためかせると、すぐに上空へと抜けていった。巻き込まれた木の葉が高く吹き上げられる。二人はそれにつられるように顔を上げた。その先には、穏やかな澄んだ青色が、どこまでも続くかのように広がっていた。

「あと三ヶ月?」

部屋に着いてからそのことを尋ねてみると、レイチェルは目を丸くして聞き返した。いつもの 指定席に行儀良く座ったまま、ダイニングテーブルの上で両手を重ねる。

「やはり聞いていなかったのか」

「ええ、今夜お父さまが帰ってきてから話すつもりだったのかしら」

彼女は首を傾げて独り言のように呟いた。そこには悲嘆や落胆のようなものは微塵も感じられなかった。表情も普段とまったく変わらないように見える。

ラウルはティーポットに湯を注ぎながら眉根を寄せた。

「わかっているのか」

「うん……もう少し一緒にいられると思ったんだけど、予想よりも早かったわ。でも、これからだって会えないわけじゃないもの」

レイチェルは小さく微笑んで言った。

やはりわかっていない——。

確かに会えないわけではない。だが、会うことはなくなるだろう。

ラウルは王宮医師として医務室に籠もり、ほとんど王宮の外に出なくなる。レイチェルはラグランジェ本家に嫁ぎ、今ほど自由に行動できなくなる。用がなければ外出することもないだろう

ふたりに接点はない。

どちらかが行動を起こさない限り、会うことは出来ないのだ。そして、それは許される行為ではない。彼女は名門ラグランジェ本家当主の妻になる。たとえ、ただ顔を会わせるだけだとしても、誤解を招くような行動は慎まなければならないのである。

ラウルはうつむいたまま紅茶をティーカップに注いだ。そのひとつをレイチェルに差し出す。 そのとき、彼女を目にして妙なことに気がついた。

「おまえ、後ろを向いてみろ」

「後ろ?」

レイチェルは椅子に座ったまま、椅子の背もたれを掴み、言われるまま素直に後ろを向いた。 何かを探すようにきょろきょろと上下左右に目を走らせたあと、不思議そうにラウルに視線を 戻し、尋ねかけるように小さく首を傾げた。

ラウルは腕を組み、軽く溜息をついた。

「リボンが縦になっているぞ」

「えっ?」

レイチェルは慌てて頭の後ろに手を伸ばし、手探りでリボンの状態を確認した。実際に縦になっていることがわかると、髪から外して手元に持ってくる。それを表にしたり裏にしたりするうちに、彼女の表情はみるみる曇っていった。

「破れているわ.....」

「新しいのを買ってやる」

ラウルはほとんど反射的にそう答えていた。誕生日プレゼントに何も贈れなかったことを後悔していたので、むしろちょうどいい機会だと思った。こういう状況ならば、自分で何を買うか悩まなくても、彼女に気に入ったものを選んでもらえばいい。

しかし、その目論見はあっさりと根本から崩れ去った。

「いいわ、もったいないから」

「遠慮はするな」

「そうじゃなくて、せっかく買ってもらっても、すぐに使わなくなってしまうから……。いま新 しいドレスを作っているの。結婚したらこんな子供みたいな格好はいけないって。だから、この リボンも今日で終わりにするわ」

レイチェルは微笑みながら淡々と述べていく。

ドレスのことは母親のアリスに聞いていた。わかっていたことだったが、あらためて彼女の口から聞かされると、その日が迫っているのだと否が応でも実感させられる。

「……貸してみろ」

ラウルはそう言って手を差し出すと、彼女からリボンを受け取って観察した。それは髪留めに リボンを括り付けてあるものだった。その括り付けてある部分が半分ほど破れて、リボンが縦 になっていたらしい。これならば、破れた部分を縫いつければ何とかなりそうだと思う。

「おまえはここで待っていろ」

ラウルはそう言い残すと、リボンを持って隣の寝室に向かった。

ラウルが戸棚から裁縫道具を取り出そうとすると、レイチェルがそっと扉を開けて顔を覗かせた。興味深そうにあちこち眺めながら、勝手に中に足を踏み入れる。

「待っていろと言ったはずだ」

「ひとりでいるのは寂しいの」

彼女はニコッと笑って言う。

ラウルはもう戻れとは言えなくなってしまった。結局、彼女には甘いのだ。部屋を見てまわる 彼女を放置したまま、ベッドに腰掛け、リボンの修復を開始すべく針に糸を通す。

「これ、私があげたの……じゃないわよね?」

レイチェルは窓際に置いてある一輪挿しのピンクローズを覗き込みながら首を傾げた。

「おまえにもらったものだ」

「でも、あれから二ヶ月も経っているのに……」

彼女の疑問はもっともだった。そのピンクローズはレイチェルの誕生日パーティでもらったものである。あれから二ヶ月が過ぎており、通常であればとうに枯れているはずだが、それは当時と変わらない可憐な姿を留めていた。

「長期間保存が利くように加工してある」

「そんなことが出来るの?」

レイチェルは目を大きくして驚いた。

「大切にすると約束したからな」

「花は枯れるものよ。気にしなくても良かったのに」

指先で花弁をなぞりながらそう言うと、そっと視線を流して微笑む。

「優しいのね、ラウルは」

ラウルは無言のまま、針を持つ手を動かした。

彼女の認識は間違っている。自分の行動は優しさからのものではない。ただの身勝手である。

レイチェルからのプレゼントを失いたくなかっただけなのだ。たとえ自然の摂理を曲げてでも——。だが、それを彼女に告げる勇気はなかった。

「一輪挿しはわざわざ買ったの?」

「いや……それはサイファからもらったものだ」

ラウルは少し躊躇いつつも事実をありのままに答える。

「お誕生日プレゼント?」

「そうではない。もっとずっと昔のことだ。あいつの家庭教師を終えたときに、礼だと言って持ってきたのだ」

ずっと昔、と言ってしまったが、よく考えてみれば、まだほんの三年ほど前のことである。端整な中にあどけなさの残る彼の笑顔、柔らかなピンクローズ、箱から取り出した一輪挿し――きのうのことのように鮮明に思い出せるが、ひどく昔のことのようにも感じる。それほどこの三年の間に様々な出来事があった、ということだろうか。

「じゃあ、私も何かお礼を考えておくわね。三ヶ月後までに」

無邪気なレイチェルの言葉が、ラウルの心を深くえぐった。うつむいたまま返事もせず、ひた すらその手を動かし続ける。

「すごい、お店の人みたい」

レイチェルは小走りで近づいてくると、ラウルの手元を興味深げに覗き込んだ。

感心されて悪い気はしないが、ただ縫いつけているだけで難しいことは何もしていない。彼女 にその知識がないので難しく見えているだけだろう。

「ラウルって何でも出来るのね」

「おまえが出来なさすぎるだけだ」

「そうかしら?」

「おまえはそれで構わないがな」

ラウルの場合は生きていくために必要だったので自然と身についただけである。彼女は家事などする必要はないはずだ。結婚して妻となっても、それは彼女の役割ではない。

「できたぞ」

糸をハサミで切って言う。水色の糸がなかったので、白い糸を使ったが、目立つ部分ではないので構わないだろう。これで三ヶ月くらいなら余裕でもつと思う。

「つけて」

レイチェルはすぐ隣に腰掛けると、ラウルを見上げてニコッと笑った。

ラウルは彼女の横髪をすくい、後ろでまとめて、リボンのついた髪留めをつけようとする。しかし、向かい合ったままで後ろが見えないせいか、髪がきれいにまとめられず、なかなか上手くいかない。

「あ、私、後ろを向くわ」

ラウルが苦戦しているのに気がつくと、レイチェルはそう言って体を離し、ベッドに座ったま ま向きを変えようとした。

しかし、ラウルは咄嗟にそれを阻んだ。

逃れられないように彼女の細い両肩をきつく掴む。その行動に明確な理由があったわけではない。ただ、彼女に背を向けられることに耐えがたいものを感じたのだ。自分の傍から去っていかれるような、そんな幻想さえ重なって見えた。

「ラウル……?」

レイチェルはきょとんとしてラウルを見つめた。

「行くな……」

ラウルは溢れるように小さな声を落とした。肩を掴む手に力が入る。大きく瞬きをする彼女をじっと見つめながら、ゆっくりと顔を近づけていき、小さな薄紅色の唇に自分のそれを重ねた。柔らかな感触が理性を融かしていく。思考が真っ白になった。何も考えられない。ほとんど無意識のまま、その口づけを深いものへと進めていった。

レイチェルの体がビクリと震えた。

しかし、今のラウルにはそれに気づく余裕などなかった。手にしていたリボンを床に落とし、 求めるままさらに深く口づけていく。

レイチェルは押し倒されるように、仰向けにベッドに倒れ込んだ。

ラウルは覆い被さるように彼女の両側に腕をつき、目を細めて彼女に顔を近づけていく。

ベッドのスプリングがギシリと音を立てて軋んだ。

その音でラウルは我にかえる。

自分の下にある彼女の顔には恐怖の色が浮かんでいた。表情は引きつったままこわばり、蒼の瞳は怯えるように小さく揺れている。それを見た瞬間、頭から氷水をぶちまけられたかのように感じた。全身から血の気が引いていく。

自分はとんでもないことをしようとしていた――。

体を起こすと、深くうつむいて掴むように額を押さえる。力を込めた指先が震える。彼女に目 を向けることは出来なかった。

「すまない」

彼女に嫌われることよりも、怯えられることの方が怖かった。自分のとった行動を振り返ると、体の芯から凍りつきそうになる。いくら後悔してもしきれない。今はとりあえず彼女から離れるべきだと思い、ベッドに手をついて腰を上げようとした。

しかし、そのとき――。

小さな手でしっかりと手首を掴まれた。力自体はたいしたことはないが、そこからは明確な意 志が感じられる。ラウルはおそるおそる彼女に振り向いた。

「やめないで」

レイチェルは強い引力を秘めた瞳を向けて言った。小さな声だったが、凛としており、そこに 迷いや怯えは微塵もなかった。

ラウルは息を呑んだ。

「……馬鹿を言うな」

声が掠れた。視線を逸らし、唾を飲み込んでから続ける。

「そもそもおまえはわかっていないだろう、私が何をしようとしていたのかなど」

「わかっているわ、多分……何となく……」

手首を掴む彼女の指先に少し力が入った。

ラウルはシーツを掴みながらこぶしを握りしめる。布が擦れる小さな音がして、そこから放射 状にいくつもの皺が走った。

「わかっていない」

「わかっているわ」

もしかしたら他の家庭教師からそういう教育を受けたのかもしれない。しかし彼女の言動からすると、あまりわかっていない可能性も高い。いや、わかっているかどうかなど今は関係のない話である。どちらにしても自分の取るべき行動はひとつだ。

「忘れてほしい、本当に悪かった……」

「いやっ!」

これまで聞いたこともないくらいに強い、彼女の声。

ラウルは目を見開いた。

「あと三ヶ月でしょう? 私たちの時間」

「会えなくなるわけではない」

彼女を説得するために咄嗟に嘘をついた。先ほどまではわかってほしいと願っていたのに、今はそれを否定する言葉を口にしている。本意ではないが、この状況を切り抜けるにはそうする以外になかった。

しかし、彼女は僅かに声を震わせて言う。

「会えなくなるも同然だわ。ラウルだってわかっているはず......」

そのときの何もかも諦めたような寂しげな表情は、二ヶ月前の誕生日プレゼントのあと、去り際にちらりと見せたものと同じだった。

そうか、おまえは――。

おそらく、あのときにはすでにわかっていたのだろう。家庭教師が終わってしまえば、もう会うこともなくなるということを。

「だから、やめないで。ラウルに後悔してほしくない」

「怖がっていたくせに何を言う」

ラウルの鼓動は痛いくらいに強く打っていた。喉もカラカラに渇いている。それを悟られないように顔をそむけ、突き放した態度で諦めさせようとする。

「少し驚いただけ。怖くなんかない。ラウルと一緒なら何も怖くないから」

彼女は自分に言い聞かせるように繰り返す。ラウルを掴む小さな手は、緊張からか、僅かに湿り気を帯びていた。

「おまえ......は.....」

サイファの婚約者なのだ――。

彼女はわかっているのだろうか。その行為はサイファに対する裏切りになるということを。そこまで考えが及んでいないのかもしれない。許されないことだという認識がないのかもしれない。だとすれば、自分がそのことを諭してやめさせなければならない。そう思うものの、どうして

も口が動かない。

「私はラウルが好きだから」

レイチェルは澄んだ大きな瞳でラウルを見つめた。そして、ラウルの手を自分の胸元にゆっくりと導く。柔らかく温かいそこから、微かに鼓動が伝わってきた。少し速いその鼓動に、ラウルの鼓動も同調していく。

「レイチェル.....」

その声には自分でも驚くほど熱がこもっていた。声だけでない。体も熱くなっていた。彼女の存在を確かめるように、その頬に手を置くと、ゆっくりと輪郭をなぞり、白い首筋へと滑らせていく。

レイチェルは小さく吐息を漏らし、首筋を伸ばすように顔を上に向けると、微かに震える瞼 をそっと閉じた。 いつの頃からだろう、彼女のすべてを求める感情が芽生えたのは。

しかしそれは心の奥底に留めておかなければならないものだった。

そんなことはわかっているつもりだった。

それなのに——。

ラウルは目を細めて眼下に広がるバラ園を見下ろした。

昨晩は一睡も出来ず、今朝になっても何も手につかず、気分転換のために外に出たのである。 どこへ行くかは決めていなかったが、足は自然とここへ向かっていた。今の自分の状況を考え れば、それも当然のことだったのかもしれない。

少し冷たい風が頬を掠めた。

色鮮やかなバラ園をぐるりと見渡す。普段から人の少ないところだが、早朝のためか、今は誰 ひとりとして見当たらない。静かだった。さわさわと葉の擦れる微かな音だけが耳に届いている

足を一歩踏み出した。

彼女がきのう通った道をなぞるように、バラ園へと降りていく。

相変わらず手入れは隅々まで行き届いていた。遠くで見ても、近くで見ても、非の打ち所のないくらいに整えられている。そしてそれを引き立てるように、花びらや葉にはいくつもの朝露が降り、清廉な朝の光を浴びて無垢に輝いていた。

幾多のピンクローズに彩られた細道を進んでいく。

すれ違い際に微かな風が起こり、淡く色づいた柔らかな花弁を揺らす。そこからキラリと光る ひとしずくが滑り落ち、地面に弾けて消えた。

何気なく顔を上げてあたりを見まわすと、隅にひっそりと佇む大きな木が目についた。引き寄せられるように、そのもとに足を進めて腰を下ろす。地面のひんやりとした感触が布越しに伝わってきた。立てた膝の上に腕をのせ、大きく顔を上げて目を細める。

空は優しい色をしていた。

ところどころにかかる薄い筋状の雲がゆっくりと形を変えていく。世界が止まったかのような 静けさの中で、そのことだけが辛うじて時の流れを感じさせた。

横からのそよ風が長めの前髪をさらさらと揺らす。

ラウルは大きく息を吸い込み、ざらついた木の幹に体重を預けて目を閉じた。何も考えずに、 ただそうしていたかった。強制的に思考を閉じる。しかし、それでも心のさざなみまでもを消す ことは出来なかった。

「ラウル」

頭上から降る澄んだ声とともに、日差しが遮られた。

ラウルは目を開く。

そこには、後ろで手を組んでにっこりと微笑むレイチェルが立っていた。逆光を浴びた細い金の髪が透けるように輝いている。後頭部にはいつもと同じ薄水色の大きなリボンがつけられていた。一瞬、幻覚かと思ったが、間違いなく現実である。

「なぜここへ来た」

「ラウルを探していたの」

彼女はそう言うと、ラウルの隣に腰を下ろした。何かを敷くこともなく、直接、土の上に座った。ドレスが汚れるのではないかと思ったが、彼女はまったく気にしていないようだった。小さな手で軽く膝を抱えると、遠い空を見上げて言う。

「今朝、お父さまから話があったわ。あと三ヶ月って」

ラウルはちらりと視線を流した。

「何と答えた」

「わかりました」

「.....そうか」

彼女はまっすぐに空を見ていた。その横顔はいつもと何ら変わりのないものだった。無理をしているようには見えない。

ラウルは探るようにじっと彼女を見つめた。

その視線に気づいたのか、レイチェルは不思議そうな顔で振り向いた。きょとんと瞬きをして 小首を傾げる。しかし、ラウルと視線を絡ませて見つめ合うと、無防備に愛らしくニコッと微笑 んだ。

何も、何ひとつ変わっていない――。

ラウルは僅かに目を細めた。彼女を取り巻く状況も、彼女自身も、すべて見事なくらいに以前のままだった。何かを変えるためにあんな行動を起こしたわけではない。だが、心のどこかで期待はしていたのだろう。いざこの現実を目の前に突きつけられると、どうしようもなく胸がざわめき、やるせない思いが湧き上がった。

いっそ、連れ去るか――。

あどけない笑顔を瞳に映しながら、ふとそんなことを思う。

彼女ほどの魔導力があれば、おそらく、自分と同じ時間を生きることが可能になるはずだ。そうなれば、これから先の永い時間を彼女とともに過ごしていける。誰の手も届かないところで、 自分の本来いるべき場所で。

しかし、それは自分の身勝手な願いにすぎない。

彼女は望んでいないだろう。両親やサイファと離れることも、時の流れを変えられることも。 彼女のためを思うなら、やってはならないことだ。彼女を悲しませることも苦しませることも本 意ではない。

諦めるしかない。

結局はいつもと同じ結論に辿り着く。違う筋道で考えても変わらない。これ以外の解決策は見つけられないのだ。見つけられないのではなく、そもそも存在しないのかもしれない。

「私ね.....」

レイチェルが空を見上げて静かに切り出した。

「ずっと続くような気がしていたの、こんな幸せな今の日々が。お父さまとお母さまのもとで暮らして、サイファと休日を過ごして、ラウルと一緒にお茶を飲んで……」

淡々とそう言うと、僅かに目を伏せる。

「もちろん終わりが来ることはわかっていたけれど、遠い話のようで実感が持てなくて……

でも、15歳の誕生日あたりから少しずつまわりが動き始めて、嫌でも実感させられるようになったわ。そのうちにラウルとも会えなくなるんだって寂しくて仕方なかった。それでもラウルを困らせたくなかったから、知らないふりをしようと思っていたの」

それは初めて聞いた彼女の本心だった。

ズクン、とラウルの胸が大きく疼く。自分のためを思っての行動だったとは思いもしなかった。そもそも知らないふりをしているとわかったのも昨日のことである。もっと早く気づくべきだった。寂しさを隠して無邪気に振る舞っていた彼女の心情を思うとやりきれない。

「私も男だったら良かったのに」

先ほどまでの雰囲気とは一変した明るい声。

ラウルは面食らって振り向き、怪訝に眉をひそめる。

「おまえ、何を言っている」

「そうしたら、サイファみたいに自由に会いにいけるでしょう?」

レイチェルは顔を斜めにしてにっこりと微笑みかけた。屈託のない無邪気な笑顔である。しかし、もしかするとそれも無理をしているのかもしれないと思う。

「.....ああ、そうだな」

ラウルは目を細めて空を見上げた。

隣のレイチェルもつられるように空を見上げた。

「これからも、サイファとは仲良くしてね」

「あいつは来るなと言ってもしつこく来る」

サイファはこのところ足繁く医務室を訪れていた。もちろん患者としてではない。長居することこそ少ないが、仕事の合間や終わったあとに顔を見せ、軽く無駄話をしていくのだ。冷たくあしらっても一向に懲りる様子はなく、それどころか反応を楽しんでいる様子さえ窺えた。

レイチェルは空を見たままくすりと笑った。

「サイファはラウルのことが大好きなの」

それが事実かどうかはわからないが、ラウルにとってはどうでもいいことだった。はっきり言えば興味がない。彼がどう思っていようと自分には何の影響もないのである。

「ラウルもサイファのことが好きでしょう?」

「さあな」

ラウルは頬杖をつき、素っ気なくはぐらかした。

それでもレイチェルは引かなかった。

「好きだと思うわ」

「……おまえがそう言うのなら、そうなのだろう」

考えてみれば、自分と彼女を繋ぐことができるのはサイファだけになる。彼女はそれを守ろうとしているのだろうか。それとも孤独なラウルを一人にさせまいとしているのだろうか。

彼女が意図するものが何であるか、本当のところはわからない。

だが、それを問いただす必要はないと思った。

それきり二人の会話は途絶えた。

草の匂いの混じった風が頬を撫でる。

二人はただ空の青をその瞳に映していた。

どれほどの時間、そうしていただろうか。

気がつけば太陽は高い位置に来ていた。二人が座る場所には陰が落ち、強烈な白い日差しが足 先を照らしている。

「私、そろそろ帰らないと」

レイチェルはぽつりとそう言うと、地面に手をついて立ち上がろうとした。

咄嗟にラウルはその手首を掴んだ。

引き留めてどうするつもりだったのか、自分でもわからない。考えるよりも先に手が動いていた。怖がらせる前に放すべきだと思いつつも、手の力を抜くことが出来なかった。

レイチェルは大きな瞳でじっとラウルを見た。

「さみしいの?」

ラウルは目を大きく見開いた。返答に困った。顔を少しだけ逸らすと、無言のまま彼女の肩を抱き寄せる。レイチェルはなすがままラウルの胸に寄りかかった。瞬きをして不思議そうにラウルを見上げたが、視線が合うと、くすりと笑って幸せそうに目を閉じた。

胸にかかる小さな重みが愛おしい。

彼女の白く柔らかい頬に指先で触れた。ゆっくりと顎へと滑らせ、軽く持ち上げる。それでも 目を閉じたままの彼女に、許されたような気になって、身を屈めてそっと唇を寄せた。

だが、触れる寸前でそれを止めた。

しばらくそのままじっとしていたが、やがて少しだけ顔を離して小さく溜息を漏らす。

どうかしている――。

こんなところを誰かに見られでもしたら言い訳のしようもない。ここは二人きりの部屋ではなく、王宮からは出入り自由の場所である。普段から人の少ないところではあるが、まったく誰もいないというわけではない。バラの手入れをしている人や、散歩をしている人たちが、遠くに数人ほど見えている。いつ目撃されてもおかしくない状況だ。

レイチェルが何かを感じたのか目を開いた。

その澄んだ大きな瞳に、ラウルは吸い込まれそうになる。くらりと目眩がして頭の中が真っ白になった。抗えぬ引力に落ちるようにそっと口づける。薄紅色の甘く柔らかい感触が頭の芯を痺れさせた。息を止めたままゆっくりと顔を離していく。

レイチェルはニコッと笑った。

曇りのないその笑顔を目にし、ラウルは胸が強く締めつけられた。彼女はわかっていない。ずるく身勝手な自分には、その笑顔を向けられる資格などないのだ。彼女の小さな体にまわした手に、無意識に力を込める。

私は、弱い人間だ――。

このままでは彼女の歩むべき人生を壊しかねない。もちろん壊すことなど望んではいない。 だが、いっそ壊してしまいたいという黒い感情が潜んでいるのは事実だ。自分には衝動を抑える 自信などない。取り返しのつかなくなる前に、決断しなければならないだろう。

彼女と寄り添いながら鮮やかな青い空を見上げた。彼女も同じ空を見ている。交わされる言葉 は何もない。ただ、穏やかな空気だけが二人を包んでいた。

正午を告げる鐘が遠くで鳴り響いた。

ラウルの心は決まった。

だが、ここで彼女に話すつもりはない。気持ちの整理がついていないという以上に、二人のさ さやかな今を壊したくないという思いが強かった。

おそらくこれが最後になるだろう。

だから、せめてもう少しだけ、この時間が続いてほしいと願った。

「今日はここまでだ」

ラウルがいつものように授業の終わりを宣言すると、レイチェルはすぐに机の上を片付け始めた。そそくさと教本を本棚に収め、筆記具を引き出しにしまい、机に手をついて軽やかに立ち上がる。

「行きましょう」

そう言うと、ふわりとドレスを揺らして振り向き、ニコッと無邪気な笑みを浮かべた。

しかし、ラウルは椅子に座ったまま動こうとしなかった。自分の教本を片付けようともせず、 ゆっくりと腕を組んでうつむく。

「どうしたの?」

「話がある。座れ」

レイチェルは不思議そうな顔をしていたが、命じられるまま素直に腰を下ろした。机ではなく ラウルの方を向き、行儀良く膝の上に両手をのせて、大きな瞳でじっとラウルを見つめながら次 の言葉を待っている。

ラウルは深く息をしてから口を開いた。

「今後、もうおまえを私の部屋には入れない」

「……どうして?」

レイチェルは大きく目を見張ったが、それでも冷静を保って理由を尋ねた。

「どうしてもだ」

ラウルは答えにならない答えで突き放す。

これは彼なりのけじめである。

残りの三ヶ月、出来ることなら彼女とともに過ごしたかった。だが、同じ過ちを繰り返さないためにはこうするしかない。一度外れた箍は、完全には元通りにならないのだ。もう自分を抑える自信はないのである。

「今までのように一緒にお茶を飲むだけでいいのに」

「駄目だ」

寂しそうに呟くレイチェルを、ラウルは冷淡に一蹴した。そうしなければ、せっかくの決意が 揺らいでしまいそうだった。しかし、それは自分の不甲斐なさを彼女に押しつけていることに他 ならない。申し訳なく思う気持ちが胸を締めつける。

しかし、当然ながら、レイチェルはそんなラウルの心情を知るはずもなかった。拒絶されている理由すらわからないのだろう。蒼の瞳が不安そうに揺らぐ。そこには微かな怯えも見て取れた。だが、すぐにそれを隠すように目を伏せると、遠慮がちに小さな口を開く。

「私、気にしていないから……」

ラウルはその意味がわからず、怪訝に眉をひそめて彼女を見た。

「誰かの代わりだったとしても、私は気にしていないから」

レイチェルはそう言い直して、どこか寂しそうに小さく微笑むと、さらに淡々と言葉を重ねて

いく。

「本当は私のことを好きになってほしかったけれど、ラウルが救われるのならそれでいい。役に立てるだけで嬉しいの。だから、ラウルが罪悪感なんて感じることはないわ」

——こいつ、まさか今までずっと……!

ラウルは砕けんばかりに強く奥歯を噛みしめた。彼にしてみればもう終わったことである。それにもかかわらず、今さらこんなことを言い出され、まるで不意打ちを食らったような気分だった。

確かに、三年前のあのときに指摘されたことは事実である。

レイチェルを通して別の少女を見ていた。守るべき役目を負っていながら、守ることができなかった少女を——。彼女は自分にとって、幼い頃から大切に育ててきた、いわば娘のような存在である。レイチェルに対する思いも、当初はそれと似たものだったかもしれない。だが、今ではもう別のものに変わっているのだ。

ラウルが我を忘れるほど渇望したのはレイチェルただ一人である。

心も体もすべてを手に入れたいと思ったのは彼女が初めてである。

誰かの代わりであるはずがないのだ。

知ってほしくないことは敏感に感じ取るくせに、察してほしいことは何も気づいてくれない。 それが故意でないことは理解している。それでもどうにも納得がいかず、抑えようのない怒りが 胸に湧き上がる。

「おまえは……」

眉をしかめて低い声で文句を言いかけたそのとき、ふとある考えが頭に浮かんだ。

このことを利用すれば、レイチェルを確実に諦めさせることができる。彼女ならそれで身を引くはずだ。少なからず嫌な思いをさせてしまうことは間違いないが……いや、いっそこれで愛想を尽かしてくれるのならば、その方が都合がいいのかもしれない。

ラウルはしばらく難しい顔で逡巡していたが、やがて意を決すると、真剣な眼差しでまっすぐに彼女を見つめ、躊躇うことなく決然と言う。

「おまえでは、あいつの代わりにはなれない」

それは彼女が縋った存在理由の否定。

レイチェルは雷に打たれたように硬直した。

「.....そう」

息が詰まりそうなほどの長い沈黙のあと、小さな声でようやくそう言うと、首が折れそうなほどに深くうなだれた。細い金の髪がさらさらと肩から滑り落ち、白いうなじが僅かに覗く。彼女がどんな表情をしているのか、ラウルからは見えなかった。

重苦しい静寂が続く。

レイチェルは膝の上においた手をギュッと握りしめて顔を上げた。その表情は硬いものだったが、気丈にもすぐにニコッと笑顔を作って明るく言う。

「わかったわ。でも、家庭教師は続けてくれるのよね?」

「ああ、あと三ヶ月は約束どおりに行う」

本当は家庭教師もきっぱり辞めてしまった方がいいのだろう。しかし、ラウルはアルフォンスに雇われている身である。ラウルの一存で決めることはできないし、辞めると申し出れば間違いなく理由を詮索されてしまう。その理由を答えられない以上、あと三ヶ月、当初の約束どおり続けるしかないと思う。

「じゃあ、門のところまで送るわね」

「.....ああ」

ラウルが静かにそう答えると、レイチェルは椅子から立ち上がり、くるりと身を翻して足早に 扉へと向かった。薄水色のリボンが後頭部でひらりと揺れている。その動きに誘われるように、 ラウルは無言で教本を脇に抱えてついていった。

「またあしたね」

「.....ああ」

レイチェルは門を出たところで立ち止まると、後ろで手を組み、少しぎこちない笑みを浮かべてラウルを見送る。それは彼女の精一杯の優しさだったのかもしれない。

理由も言わず一方的に拒絶したのはラウルの方だ。

それにもかかわらず、素直に従う彼女を見ていると、申し訳なく思うと同時に、胸にすきま風が吹き抜けるような寂しさを覚えた。そんなのは嘘だと責めてくることを、嫌だと泣きついてくることを、心のどこかで期待していたのだろう。もちろん、それが呆れるほど理不尽な気持ちであることは十分に自覚している。

彼女に背を向けて歩き出す。

すぐに振り返りたくなる衝動に駆られるが、思いとどまり、前を向いたまま足を止めずに歩き続ける。視線の先には優しい色の空が広がっていた。繊細なレースのような薄い雲がゆっくりと漂い流れていく。

そこにあったのはとても静かで穏やかな空気だった。

ただ、頬に当たる風だけは少し冷たかった。

翌日も家庭教師の授業は予定通りに行った。

レイチェルの様子は、たった一日ですっかり元に戻っていた。真面目に授業を受ける姿勢も、 屈託のない笑顔も、明るく澄んだ声も、拍子抜けするくらい普段どおりである。そこに悲しさや 寂しさといった感情は見つけられなかった。

彼女にとって、所詮、自分はその程度の存在なのかもしれない。ともに過ごせないことをつらく思ったとしても、それは最初だけで、すぐに他のもので埋め合わされてしまうのだ。いつまでも引きずっているのは自分だけなのだろう。

しかし、それでいいのだとラウルは自分に言い聞かせた。

レイチェルには婚約者のサイファがいる。ラウルとのことにこだわり続けるよりも、きっぱりと断ち切った方が幸せになれるはずだ。彼女が幸せであればいい——それがラウルのほんの少しの強がりを含んだ本音だった。

彼に残されたのは味気のない毎日である。

レイチェルとともに過ごす時間がどれほど大きな意味を持っていたか、ラウルはそれを失うことであらためて思い知らされた。それでも家庭教師が続いているだけまだましなのかもしれない。家庭教師が終わってしまえば、味気ないどころではなく、彼女と出会う以前のような空っぽの日々が続くことになるだろう。

ひとりで暗く静かな部屋に戻ると、ラウルはダイニングテーブルを見下ろす。

その瞬間、指定席に座って紅茶を飲む彼女の姿が思い出される。毎日のように目にしていたその光景は、もう現実になることはないのだ。目を瞑り、深く溜息をつく。叶わない夢を見るのはもう止めなければならない。

この状況を招いたのは自分の行動である。

それがなければ、残りの三ヶ月を穏やかに過ごすことが出来ただろう。

しかし、後悔しているのかは、ラウル自身にもわからない。

その行動が正しいものでないことは理解している。彼女のためを思うならば、やってはならないことだった。後悔すべきなのだろう。だが、自分の中にはそれを肯定する気持ちも少なからずあった。自分が強く望んだことなのだ。当然といえば当然なのかもしれない。平穏な三ヶ月と引き替えに、叶わないはずだった奇跡のような時間を手に入れた——そう考えれば悪くない。いや、十分すぎるほどだ。あの日のことは、彼女と会えなくなっても一生忘れることはないだろう。

しかし、それは身勝手で一方的な思いだ。

レイチェルがどのように考えているのかは、ラウルにはわからない。それを彼女に尋ねようとも思わない。今さら知ってもどうにもならないことである。ただ、せめて思い出として心に留めるつもりでいてくれればと、そんな未練がましいことを密かに願った。

けじめの日から静かに二ヶ月が過ぎ、ラウルがレイチェルの家庭教師でいられるのは残り一ヶ月となった。未だにもどかしく思う気持ちは燻っているが、それでも何も行動を起こすわけにはいかない。ラウルに出来ることは、引き続き、ただ黙々と役目を果たすだけである。

その日の空は果てしなく澄み渡っていた。

ラウルはレイチェルの家へやって来ると、いつものように二階にある彼女の部屋へ向かおうと した。しかし、階段に足をかけたところで、居間から顔を覗かせたアリスに呼び止められる。

「ちょっとだけ、いいかしら」

「何だ」

アリスの小さな手招きに従い、ラウルは彼女の立つ居間の前へと足を進めた。しかし、彼女はなおも手招きをして、ドレスの裾が触れるほど近くまでラウルを呼び寄せると、顔の横に手を添えながら少し声をひそめて尋ねる。

「もしかして、レイチェルと喧嘩しているの?」

「......そういうわけではない」

彼女の唐突な質問に、一瞬、ラウルは息が止まりそうになった。

「それじゃあ、あの子が一方的に怒らせたのかしら?」

「いや……」

今度は歯切れ悪く答える。下手なことは言えないと思った。どう答えるのが最善なのか、今の 段階では情報が少なすぎて判断がつかない。彼女の出方を窺う方が賢明だろう。無表情を装った まま、促すようにじっとその双眸を見つめる。

アリスはふっと息をつくと、少し困ったような顔で小さく笑った。

「このところ、あの子、すっかり元気がなくてね。何か思いつめている様子で、かなり参っているみたいなの」

ラウルは少し目を大きくした。教本を持つ手に無意識に力がこもる。

「ラウルと喧嘩でもしたの?って訊いたら、『私がいけなかったの』って……。何があったのかは、いくら訊いても言おうとしなかったわ。多分、あの子が我が侭を言ったか、配慮のないことを言ったかだと思うんだけど……」

アリスはそこで言葉を切り、上目遣いでラウルを窺った。それでも何も言おうとしないラウルを見て、自分の推測は間違っていないと勝手に確信したようだ。軽く溜息をつくと、申し訳なさそうに切り出す。

「母親の私がこんなことを言うのも何だけど、あの子も反省しているだろうし、そろそろ許してやってもらえないかしら。きちんと謝るように言っておくから」

ラウルは眉根を寄せてうつむいた。

考えてみれば、レイチェルはつらいことがあっても、悩みごとがあっても、滅多にそれを他人に見せることはなかった。常にまわりの人間に心配を掛けないように振る舞おうとしていた。ラウルに突き放された今なら、なおのこと本音を見せようとはしないだろう。そんなことにも気づかないなど、自分はいったいこれまで彼女の何を見ていたのだ——。

「いや……謝るのは私の方だ。すまなかった」

カラカラの喉の奥から絞り出すようにそう言うと、アリスは心からほっとしたように、胸に手を当てて柔らかく微笑んだ。それはいつもレイチェルが見せる甘い笑顔と重なるものがあった。

ラウルは正視できずに顔をそむけた。

それをごまかすように素早く身を翻し、足早に階段の方へと歩き出す。そして、深く呼吸をして気持ちを静めると、教本を抱え直し、レイチェルの部屋へと続く階段を一段ずつ踏みしめながら上っていった。

「今日も来てくれてありがとう」

家庭教師の授業が終わると、レイチェルは門の前まで足を運び、屈託のない愛くるしい笑顔を 見せながら、感謝の言葉とともにラウルを見送る。

それはこの二ヶ月の間、ずっと続いてきたことだった。

その度にラウルは取り残されたような寂しさを感じていたが、笑顔の裏に秘められた思いを知った今は、胸が潰れそうなほどに苦しく、そして焦がれるほどに愛しく思う。

「レイチェル、明日は休日だな」

[..... à à ?]

レイチェルは大きく瞬きをしながら少し訝しげに返事をした。当たり前のことを確認するラウルの意図がわからなかったのだろう。それに答えるように、ラウルはまっすぐに彼女を見据えて言う。

「二人でどこか、誰もいないところへ出かけたい」

「……どうして?」

レイチェルは感情の抜け落ちた声でぽつりと尋ねた。

それでもラウルは動じることなく、なおも真剣な眼差しを向けて説得を続ける。

「おまえに話したいことがある」

「今、ここでは話せないの?」

「長くなりそうだ。落ち着いて話をしたい」

「そう……わかったわ」

レイチェルは少し考えてから静かにそう答えると、ニッコリと明るい笑顔を見せた。そして、 後ろで手を組み、小さく首を傾げながら尋ね掛ける。

「どこへ行くの?」

「そうだな……」

ラウルは眉根を寄せて考え込む。彼女を誘うことに精一杯で、そこまで具体的には考えていなかった。誰にも邪魔をされず、二人だけで落ち着ける場所は——。

「前にサイファと行った森の湖畔は?」

「そこにしよう」

レイチェルの提案を即座に採用する。ラウルの条件にこれほど合致する場所は他にないだろう。少なくとも、あまり外を出歩かないラウルには思いつかなかった。

「馬の手配と昼食の用意はしておく」

「私は、朝、ラウルのところへ行けばいいのね」

「ああ……そうだな、それでいいだろう」

ラウルが迎えに行ってもよかったが、それではアリスやアルフォンスにいろいろと詮索されかねない。レイチェルが来てくれるのであれば、その方がありがたいと思う。

「楽しみにしているわ」

そう声を弾ませるレイチェルに、ラウルはそっと左手を伸ばして柔らかな頬を包み込んだ。そのまま瞬きもせず彼女の瞳をじっと見つめる。そしてゆっくりと身を屈めると、反対側の頬に軽い口づけを落とした。

それは約束のしるしである。

その意図を理解できなかったせいか、触れることすら久しぶりだったせいか、レイチェルは驚いたように大きく瞬きをした。呆然とラウルを見つめる。しかし、やがて小さくこくりと頷くと、華やかな愛くるしい笑みを顔いっぱいに広げた。

それが心からのものかはわからない。

だが、そうであってほしいと願わずにいられなかった。

二人を急かすように、強い突風が通り過ぎた。

ラウルは目を閉じて踵を返すと、長い髪をなびかせながら歩いていく。

心は決まった。

明日、レイチェルにすべてを話す。かつて守るべきだった少女のことも、その面影を重ねていた頃の想いも、それとは違う今の想いも、唐突に遠ざけた本当の理由も、そしてラウルがいま願うことも——その上で彼女に判断を委ねるつもりだ。

夢を見ているわけではない。

おそらく結果的には何も変わらないだろう。彼女はこの国でサイファとともに生きることを選ぶに違いない。それが最も有り得べき妥当な予想である。

しかし、それでもやらねばならない。

今までのラウルは狡かった。自分のことは何も話さず、彼女のためだと理由を付け、勝手に先回りして決めつけていた。それで彼女を守っているつもりだったのだろう。だが、その身勝手な気持ちの押しつけが、逆に彼女を追い詰めてしまったのだ。

彼女もいつまでも守られるだけの子供ではない。

嘘やごまかしではなく、彼女を信じ、本心で向かい合うべきだった。しかし今からでも遅くはない。期限が来る前に気づけたことは幸運だったといえる。きちんと誤解を解いたうえで彼女を送り出そう。それこそが本当のけじめだと思う。

ラウルは立ち止まって顔を上げた。

明日も晴れるだろうか――。

彼女との約束に思いを馳せながら、どこまでも続くような青い空を仰ぎ、その眩しさに少しだけ目を細めた。

「レイチェル、ミルクティが入ったよ」

「ありがとう」

サイファが白いテーブルにティーポットを戻しながら声を掛けると、窓越しの空をぼんやりと 眺めていたレイチェルは、我にかえったようにニコッと微笑んで振り向いた。ティーカップを手 に取り、少しだけ口をつけ、丁寧な所作で音を立てないようソーサに戻す。

サイファはここ二ヶ月ほど仕事が忙しく、休日出勤続きで、レイチェルとはほとんど会うことが出来ずにいた。会えたとしても文字通り顔を会わす程度で、のんびりとお茶を飲むような余裕はなかったのである。

その仕事もつい先日ようやく一段落した。

そのため、今日は上からの命令で代休ということになり、サイファは久々に自宅で一日を過ごすことになった。一人でのんびりと疲れた体を癒すのも悪くはないが、それより何より、まずレイチェルにゆっくり会いたいという願いを叶えるのが先だと思った。ずっと楽しみにしていたことである。浮き足立つ気持ちのまま、今朝の早い時間に連絡を取り、家庭教師の授業が終わったら一緒にティータイムを過ごそうと誘ったのだった。

レイチェルも喜んでその誘いを受けてくれた。だから、今、こうやってサイファの部屋でミルクティーを飲み、サイファの話を聞き、甘く愛らしい微笑みを見せているのである。

しかし、彼女の様子には少し気がかりなこともあった。

サイファと会話をしているときは普段どおりなのだが、それ以外のときになるとぼんやりしていることが多く、虚ろに空を眺めていたり、遠くを見つめていたり、心ここにあらずといった感じなのだ。

もしかすると、会えなかった二ヶ月の間に、何かがあったのかもしれない。

サイファは僅かに眉根を寄せる。しかしすぐに表情を取り繕って頬杖をつくと、もう一方の手を伸ばし、慈しむように彼女の柔らかい頬を包み込んだ。そのまま、小さな子供を安心させるような優しい声音で言う。

「レイチェル、僕で良ければ、遠慮しないで何でも話してね。話したくないことは無理には聞かないけれど、話して解決することもあるかもしれないし、そうでなくても心の負担は軽くすることが出来ると思うから」

レイチェルは目をぱちくりさせてきょとんとしていた。前置きもなく唐突にこんな話を切り出されれば、面食らうのも無理からぬことだ。だが、彼女はすぐにニコッと小さな笑みを浮かべて言う。

「ありがとう」

紡がれた言葉はそれだけだった。

何もないのならはっきりとそう言うだろう。おそらく彼女は話さないということを選択した のだ。つまり、話せないほど深刻な悩みを抱えているということになる。聞き出したい気持ちは あるが、そんなことをすれば、口は開いても心は閉ざしてしまう。それでは本末転倒なのだ。

一緒に暮らしていれば、いくら忙しくとも顔を合わせる機会はあるわけで、少なくとももう少 し早く異変に気づくことは出来ただろう。深刻な悩みになる前に手が打てたかもしれない。

あと8ヶ月か――。

それは二人がともに暮らせるようになるまでの時間である。

レイチェルが16歳になったらすぐに結婚できるよう、サイファは水面下で少しずつ準備を進めていた。まだ早いという反対意見もあったが、一番の問題だったアルフォンスはどうにか説得し、ラグランジェ家で最も大きな力を持つ前当主のルーファスにも承諾を受けた。これで障壁となるものは何もない。あとは双方の両親を巻き込んで本格的に行動を起こすだけである。

幼い頃から待ち望んでいたその日は、足音が聞こえるほどすぐそこまで来ていた。

「サイファ、どうしたの? 大丈夫?」

サイファが考えを巡らせていると、レイチェルが不安そうに覗き込みながら尋ねてきた。これでは立場が逆である。心配している相手に心配されてしまっては世話がない。自分の不注意に思わず苦笑を漏らして答える。

「僕は大丈夫だよ。少し考え事をしていただけだから」

「ずっとお仕事が忙しかったんでしょう? 疲れているんじゃない?」

「まあね、でも、だからこそレイチェルに会いたかったんだよ」

それは、彼女を気遣っての言葉ではなく、サイファの偽りない本心だった。彼女の愛くるしい 笑顔を見ると元気になれる。この笑顔を見るために、そして守っていくために、つらくとも頑張 ろうと思えるのだ。

「これからも僕と一緒にティータイムを過ごしてくれる?」

「ええ、私も楽しみにしているもの」

レイチェルはティーカップに両手を添えて、ふわりと花が咲いたように、可憐に愛らしく微笑んだ。それは、まさにサイファが切望していたものだった。

二人の間に穏やかな時間が流れる。

向かい合ってミルクティーを飲んで、温かいスコーンを口に運んで、取り留めのない会話を して、二人で笑い合って、ときどき見つめ合って——。

たったそれだけのことで、サイファは心から満たされていくのを感じた。

しかし、レイチェルが同じ気持ちでいるかはわからなかった。彼女の笑顔は幸せそうに見えた。だが、会話が途切れて静寂が訪れると、また目を細めてふっと遠くを見つめるのだ。

やはり悩みがあるのだろう。

もどかしく思いはするものの、それでも無理に聞き出すようなことはしないと決めていた。彼女が相談しやすい雰囲気を作り、ときおり優しく促しながら、彼女自身の決断で口を開くのを待つしかない。それが最善であると判断してのことである。焦ってはいけないと思った、そのとき——。

「サイファ、あのね.....」

レイチェルはぼんやりと遠くを見たまま、淡い声で切り出した。

「ん、何かな?」

サイファは彼女を怯えさせないよう、しかしこの機会を逃がさないよう、柔らかいながらもしっかりとした口調で聞き返した。そして、ティーカップを口に運びながら、にこやかな笑みを浮かべて次の言葉を待つ。

「私、子供ができたの」

[!]

サイファは口に含んだ紅茶を吹きそうになった。それをこらえて飲み込むと、今度は気管に入ってしまい、ゲホゲホと咽せながら涙目で顔を上げる。

「えっと……それって、ペットを飼い始めたってこと?」

「そうじゃなくて、私のおなかの中に赤ちゃんがいるの」

「あ.....あのね、レイチェル.....」

彼女の突拍子もない発言に慣れているサイファも、これにはさすがに狼狽せずにはいられなかった。困惑した笑みを張り付かせながら途方に暮れる。彼女がなぜそんなことを言い出したのか 見当もつかない。もちろんサイファには身に覚えなどなかった。

もしかして、何も教わっていないのか――?

彼女はもう15歳であり、数ヶ月後にはサイファと結婚することになっている。なのに、そういったことに関して何の知識もないのだとすれば大問題である。アルフォンスもアリスも今まで何をしていたのだと心の中で嘆息した。

とりあえず、間違った思い込みだけでも正さなければならない。どのように説明しようか頭を 悩ませながら、慎重に言葉を選んで口を開く。

「知っているかな? 赤ちゃんってコウノトリが運んでくるわけじゃないんだよ?」

「知っているわ」

レイチェルは当然のようにさらりと答えた。

そのまっすぐに前を見据えた表情は、夢や幻想を語る少女のものではない。

ゾクリ、とサイファの背中に冷たいものが走った。

まさか、本当に――?

額に汗が滲んでいく。頭はぐちゃぐちゃに混乱していた。何が何だかわからなかった。考えも まとまらないままに上ずった声を漏らす。

「じゃあ……でも、そんなこと……だって僕たちはそんな……」

「サイファじゃないの」

対照的に静かに落とされた彼女の言葉。

ドクン、と飛び出しそうなほどに大きく心臓が跳ねる。同時に、頭の中に鋭い閃光が走った。 そこに見えたものは荒唐無稽とも思える推測——。なぜそんなことを思いついたのか自分でもわからない。信じたくはない。だが、それは残酷なまでに抗いがたい説得力を持っていた。おそる おそる、それでもまっすぐに彼女の目を見て尋ねる。

「もしかして、ラウル……?」

レイチェルはじっと見つめ返し、無言でこくりと頷いた。

— ガタン!

サイファは両手をついて勢いよく立ち上がった。優雅な意匠の白い椅子が後方に弾き倒され、 カップの中のミルクティーが波を打って縁から零れた。

頭の中が真っ白になる。

言いたいことも聞きたいことも山のようにあるはずなのに、口を半開きにしたまま、ただその場に立ちつくすことしかできない。白いテーブルの上に置かれた手は、固く握りしめられ小刻みに震えている。その上に、額から伝った汗がポタリと落ちた。

僕は、馬鹿だ――。

きつく奥歯を噛みしめてうなだれる。金の髪がはらりと頬に掛かった。窓越しに降りそそぐ明るい光が、それをより鮮やかに華やかに煌めかせ、その下の顔に深い影を落とした。

これまで疑惑を持ったことは一度たりともなかった。二人のことを信用していたというよりも、そんなことは考えすら及ばなかったのだ。だが、その考えが頭に浮かんだとき、まるでバラバラだったパズルが一瞬で完成したかのように感じた。ピースは手元にあったのだ。一つ一つは何でもないことでも、すべてを正しく合わせれば見えてくるものがある。難しいことではない。なのに、なぜ今の今まで気づかなかったのだろうか。もっと早く気づいていれば止められたはずなのに——。

後悔するだけでは何も始まらない。

サイファはゆっくりと深く息をしてから顔を上げると、きょとんとしているレイチェルに、出来うる限りの落ち着いた口調で尋ねる。

「お医者さんには診てもらったの?」

「ううん、でも間違いないと思うの」

レイチェルはサイファを見上げて真面目に答えた。

「……行こう」

サイファは静かにそう言うと、向かいに座るレイチェルの手を取り、早足で彼女とともに部屋を後にした。ティーテーブルの上には、飲みかけのミルクティーが二つ、そのままの状態で放置されていた。

「ねぇ、サイファ、どこへ行くの?」

「医者にきちんと検査してもらうんだ」

レイチェルの手を引いて王宮への道を歩くサイファは、足を止めることも振り返ることもなく答えた。どうしようもなく気が焦り、走り出したい衝動に駆られるが、それを実行に移すことはできない。もし彼女の言ったことが事実ならば、気遣わねばならない身体である。走らせて転倒するようなことがあれば、大変な事態になるかもしれないのだ。

「医者ってラウルのところ?」

「……違うよ」

その声の冷たさに、サイファは自分のことながら驚いた。眉根をきつく寄せ、口をかたく結ぶ

。こんなことではいけない――瞳を閉じて心の中で頷くと、右手の中の小さな温もりを逃さないように、強く、優しく力を込めた。

「僕に任せて」

それは、彼女に向けた言葉であると同時に、自分自身を奮い立たせ、揺らぎそうな決心を支えるための言葉でもあった。

王宮の一角にある一室——その扉の前に二人は立った。

可能ならば人目を忍んで裏口から入りたかったが、残念ながら、サイファの知る限り出入口は ここひとつきりである。レイチェルの手をしっかり握り直すと、小さく息を吸ってその扉を引 いた。

ラウルのところとは随分と様子が違うが、ここも王宮医師が常駐する医務室である。

入ったところは小さな待合室になっており、すでに5人が長椅子に座っていた。正面には受付窓口がある。その横にある扉の奥が診察室で、最初に来たときには、意外と立派な設備が整っていて驚いたことを覚えている。

「こちらに名前を書いてお待ちくださいね」

受付の女性が二人に愛想良く声を掛け、窓口から受付票とペンを差し出した。

しかし、サイファはそれを受け取らず、窓口に手を掛けて覗き込むと、背後を気にしながら声 をひそめて言う。

「内密で先生に相談したいことがあります。取り次いでもらえますか」

「……しばらくお待ちください」

サイファがラグランジェ本家の次期当主であることを知っていたためか、彼女は無理な要望に もほとんど困惑を見せることなく、事務的にそう言い残して奥に消えていった。

「それで、何? 診察だっけ?」

30分ほど奥の部屋で待たされたあと、この医務室の主であるサーシャが不機嫌に姿を現した。彼女は王宮医師の一人であり、まだ若いが腕は確かだと聞いている。愛想がないのが玉に瑕だが、言動がぶっきらぼうなだけで、心まで冷たいというわけではない。実際、サイファの突然の要望にも、こうやって渋々ながら応じてくれたのだ。扉に休診の札を掛け、待合室にいた5人の診察を終えてから、サイファたちを待たせていたこの部屋へ来たのである。

「個人的な、それも極秘のお願い、ということにしたいんですが」

「報告書には書くなってことね」

サーシャは向かいのソファに腰を下ろすと、溜息まじりにサイファの意図を確認した。

「さすが話が早いですね」

「今度、昼メシくらい奢りなさいよ」

「それくらいなら喜んで」

サイファは人なつこい笑顔で応じた。しかし、何が気に障ったのか、サーシャはなおさらムッとして気色ばんだ。面倒くさそうに視線を送りながら言葉を繋ぐ。

「それで何の診察をすればいいわけ?」

「妊娠しているか検査をお願いします」

サイファは躊躇いもせずさらりと言う。その瞬間、サーシャは僅かに眉を寄せた。

「あんた男でしょう?」

「僕じゃなくて、この子、僕の婚約者のレイチェルを」

サイファは隣の彼女を抱き寄せて示した。

サーシャはじとりとレイチェルを見つめた。彼女はきょとんとしていたが、サーシャと目が合うと、途端にニコッと無邪気なまでの笑顔を見せた。まるで状況を把握できていない子供のようなその笑顔に、サーシャはどっと疲れたように深く溜息をつき、顔をしかめながら頭を押さえてうなだれた。

「してるわよ、妊娠。ニヶ月ちょっとってところね。医学的には問題なし」

一通りの検査を済ませると、サーシャはレイチェルとともに奥の部屋に戻り、待たせていたサイファに前置きもせずテキパキと報告した。

「そうですか」

すでに心の準備が出来ていたサイファは、動揺を見せることなく静かに返事をした。そんなサイファを見ながら、サーシャはソファの背もたれに腕をかけて、呆れたように溜息をついた。

「ったく、どうかしてるわ。こんな子供をよくもまあ……15歳って聞いたけど、顔だけ見てるとまるきり子供じゃない。何にもわかってないのかぽけーっとしてるし。まあ、身体だけは随分成長しちゃってるみたいだけど。何を食べたらあんなに大きくなるんだか……」

ぶつくさと文句を言う彼女の視線は、レイチェルの胸元に注がれていた。

「聞いているの? サイファ」

「聞いていますよ」

サイファは苦笑しながら答えた。

「あんたまさか無理やりやったわけじゃないわよね」

「そんなわけないじゃないですか」

疑わしげに尋ねるサーシャを、サイファは軽く笑ってあしらう。しかし、内心はドキリとしていた。考えもしなかったが、ありえないとは思うが、そういう可能性もゼロとは言いきれない。 頭では否定しつつも、心は不安に絡め取られる。鼓動が次第に速くなっていくのを感じた。

レイチェルにそっと横目を流す。

彼女はすぐにそれに気づいたようだった。不思議そうに小首を傾げると、じっとサイファを見つめながら、無言の問いに対する答えを口に上らせる。

「無理やりじゃなくて、私も好きだったから……」

「ほらね、だから言ったでしょう?」

彼女の答えはおそらく本当のことなのだろう。少なくとも彼女の意思に反する行為ではない。 もしかすると彼女自身が望んだことなのかもしれない。サイファは切り裂かれるような痛みを胸 に感じたが、同時に大きく安堵もしていた。 サーシャは呆れたように溜息をついた。

「だからって、何もわかってないようなポヤポヤのお嬢ちゃんに手を出すんじゃないわよ。あんたはもう立派な大人なんだから、考えなしに行動しちゃいけないってことくらいわかるでしょう?」

「そうですね、反省しています」

サイファは笑顔のまま肩を竦めて見せた。

その隣で、レイチェルは混乱したような顔でちらりとサイファに視線を送る。誤解されているにもかかわらず、それを否定しないことが理解できないのだろう。それでもこの場で尋ねたり反論したりしないのは、ここに来る前にそう言いつけておいたからである。

「で、どうするのよ」

「産みますよ」

サイファは間髪入れずに答えた。

「どうせあと数ヶ月で結婚するつもりでしたし、少し予定が早まっただけです」

「そ、ならいいけど。後味の悪い結末は見たくないしね」

サーシャは無愛想にそう言って脚を組んだ。

「でもそんなに簡単にいくの? サイファってラグランジェ家の次期当主なんでしょう? いろいろ面倒なことがあるんじゃない?」

「それ以前に最大の難関がありますよ」

サイファは少しおどけたように遠回しな表現をした。

しかし、サーシャにはすぐに何のことかわかったようだ。

「ああ、この子の両親はまだ知らないわけね。そういえばこの子の父親って、娘を溺愛している ことで有名な、あのやたら体格のいいおっさんだっけ?あんた、殴り殺されるわよ」

「そうならないよう努力します」

サイファは苦笑しながら、それでもしっかりとした声で答えた。

「私に出来ることがあったら言って。可能な限り協力するから」

「ありがとうございます」

ぶっきらぼうに気遣うサーシャの言葉が、今のサイファにはとても心強く感じられた。深々と 頭を下げて、精一杯の感謝の意を示す。

「しっかし、あんたはいつもやっかいごとばかり持ち込んでくるわねぇ」

サーシャは両腕をソファの背もたれに掛けると、顔をそむけて脚を組み替えながら、照れ隠しのように急に大きな声で話題を変えた。

「ただでさえ忙しいんだから、もうこれ以上は勘弁してほしいわ。最近じゃ、色ボケラウルの世話まで焼かなきゃならないし」

「色ボケ.....?」

ラウルにはおよそ似つかわしくないその形容に、サイファはほとんど反射的に聞き返していた。その途端、サーシャは目を輝かせて、ぐいっと前のめりに身を乗り出す。

「そうなのよ! それがどうやら恋してるらしくてね。ビックリでしょ?」

驚いて何も言えないサイファを見ると、彼女は満足げに大きな笑みを浮かべた。

「これまで真面目なだけが取り柄だったのに、このところ報告書の提出を忘れてばかりでね。かなり重度の恋煩いみたい。本人にも恋してるのか訊いてみたけど、否定しなかったから間違いないわ」

なぜかこぶしを握りしめながら、勝ち誇ったように力説する。

「でも、残念ながら相手がわからないのよねぇ。サイファ、あんたは知らないの? ラウルとけっこう親しいんでしょう? 聞いてはなくても予想くらいはつくんじゃない?」

「わかりませんよ」

サイファは素っ気なく答えた。

察しはついている。いや、確信していると言ってもいい。だが、断じてそれを悟られるわけに はいかないのだ。下手なことを言わないようにと気を引き締める。

「じゃあさ、ちょっと探ってきてくれない?」

「冗談じゃありません。僕を殺す気ですか?」

「やっぱりサイファでも無理なんだぁ」

サーシャは派手な抑揚をつけて残念がると、頭の後ろで手を組みながらソファにもたれかかった。そして、サイファに物言いたげな視線を流して尋ねる。

「あんたは気にならないの? あのラウルなのよ?」

「先生も命が惜しかったら詮索なんて止めた方がいいですよ。ラウルの機嫌を損ねないうちにね 。どうせ成就しない恋なんですから」

サイファは冷ややかに言い切った。

「それどういうこと?」

「二人は生きる時間の流れが違う。そんな二人が寄り添って生きるなんて無理な話ですよ。た とえ、どれだけ想い合っていたとしてもね」

静かに、しかし重々しく言葉を落とす。

隣のレイチェルがどんな顔でそれを聞いているのか、正面を向いたままのサイファにはわからなかった。いや、わかろうとしなかった。目を向けるだけの勇気がなかったのかもしれない。

「若いのに夢も希望もないことを言うわね」

「現実的なだけですよ」

感心したような呆れたようなどちらともつかないサーシャの言葉に、サイファはふっと小さな 笑みを漏らして答えた。

話が一段落したところで、サイファは帰ることにした。

無理を聞いてくれたサーシャに丁寧に礼を述べると、レイチェルの手を引いて医務室を後にする。廊下にはほとんど人通りはなかった。転ばないように配慮しながら、彼女の歩調に合わせて足を進める。

外に出ると、もう日が落ちかけていた。

長い長い影が二人の後方に伸びている。

地平近くから注がれる色づいた光は、まわりの空と地上を朱に染め上げていた。それは強烈なまでに鮮やかながら、何とも言いようのない物寂しさを感じさせる光景だった。

「どこへ行くの?」

「いいから来て」

家路とは違う方向へ足を進めるサイファを見つめ、レイチェルは不安そうにしていたが、それ 以上はもう何も尋ねることなく、手を引かれるまま素直についていった。

ふたりは王宮の外れにある小さな森へとやってきた。

ひっそりとした薄暗い散歩道には、まったく人の気配は感じられない。昼間でも寂しい場所である。夜が訪れようとしているこの時間に、あえてここに来る人間はほとんどいないだろう。

サイファは森の中ほどで足を止め、しつこいくらいに注意深く周囲を窺った。そして、誰もいないことを確信すると、真正面からレイチェルと向かい合う。彼女は困惑したように瞳を揺らしながらサイファを見上げた。

「レイチェル、おなかの子のことは誰かに話した?」

レイチェルは無言のまま首を横に振った。細い金の髪がさらさらと小さく揺れる。

「ラウルにも?」

「話していないわ」

「よし……」

サイファは小さく頷いてそう呟くと、レイチェルの両肩に手を置き、強い光を湛えた瞳で覗き 込む。

「レイチェル、一度しか言わないからよく聞いて」

レイチェルは緊張した面持ちでこくりと頷き、胸元でそっと両手を重ねた。不安そうにサイファに視線を送る。それを正面から受け止めつつ、サイファは芯の通った力強い声で言う。

「君のおなかの子は僕の子だ。今後そのつもりで振る舞ってほしい」

「今後……これからずっと……?」

レイチェルは理解できないというように首を傾げて聞き返した。

サイファはますます真剣な表情になって答える。

「そう、僕たちは予定どおり結婚して、その子を僕たちの子として二人で育てる」

「でも……」

「だから本当のことはもう二度と口にしないで。僕たち二人きりのときでもね。どこで誰が聞いているかわからないだろう?誰にも知られるわけにはいかないんだ。ラウルにも当分は会わない方がいい。連絡もいっさい取らないで」

サイファは自分の意見を押しつけるように早口で捲し立てた。その一方的な物言いに、レイチェルは戸惑ったように顔を曇らせる。

「でも、まだ家庭教師が……」

「アリスから断ってもらうよ。それは僕が頼むから心配しないで」

サイファがそう宥めても、彼女はまだ何か言いたげにしていた。上目遣いでサイファを見ながら、おずおずと遠慮がちに切り出す。

「あのね、私、あしたラウルと一緒にお出かけする約束をしたの」

「……駄目だよ、僕が断っておく」

サイファは低い声で諭した。そして、再び、彼女を強く覗き込みながら訴えかける。

「レイチェル、君は事の重大さを理解していないだろうけど、これはとても大変なことなんだ。 このことが他に知られれば、おなかの子は確実に生きられないし、下手をすると君も……」

結婚できなくなるのは当然のことだが、婚約解消だけですむ問題とも思えない。

下世話な話題を好む人間は多い。ラグランジェ本家の次期当主が婚約解消したとなれば、世間から理由を詮索されることは避けられない。中絶の話もどこからか漏れる可能性が高いだろう。

そんな醜聞をラグランジェ家は許さない。

それよりは、事故に見せかけて殺した方が手っ取り早いし、危険因子も遥かに少なくなる。ラグランジェ家を何よりも重んじ、非情なまでに合理的な考えを持つ前当主ルーファスならば、その手段を選択しても不思議ではない。実際、ラグランジェ家の過去には、不可解な死と噂されるものがいくつもあるのだ。

「私、殺されてしまうの?」

レイチェルはぽつりと呟くように尋ねた。

「そうならないように努力する。いや、必ず僕が守る。君も君のおなかの子も。だからお願い、 僕の言うことを聞いて……」

サイファは必死に哀願しながら、彼女の肩を掴む手に力を込める。

レイチェルは小さくこくりと頷いた。だが、じっとサイファを見つめるその顔は、まだ事情を飲み込めていないような、どこか曖昧な表情をしていた。

「ふざけるな!!」

応接間が震えるほどの怒号とともに、サイファは焼けるような強烈な痛みを頬に感じた。床に叩きつけられるように横向きに倒れ込む。口には生ぬるい鉄の味が広がっていった。

「誰がおまえなんぞに娘をやるか! 婚約など破棄だ!! 帰れ!!!」

「本当に申し訳ありませんでした……」

よろりと身を起こしながら謝罪する。それだけで殴られたところがズキズキと痛み、思わず顔をしかめる。しかし、すぐに表情を引き締めると、床に両手をついて頭を下げ、真摯に言葉を繋いでいく。

「どのような謝罪でもしますし、罰を受ける覚悟もあります。ですが、レイチェルを諦めることだけは出来ません。結婚を許してくださるまで帰るつもりはありません」

「よくもぬけぬけと……おまえは殺す……殺してやる……」

アルフォンスは低く唸るようにそう言うと、ギリギリと音が聞こえるくらいに歯がみした。サイファとの距離をじりりと詰め、大きなこぶしを強く握りしめて震わせる。そこには何本もの青筋が浮き出ていた。

「やめて!!」

甲高い悲痛な叫び声が、張り詰めた空気を切り裂く。

レイチェルは弾かれるように無抵抗のサイファの前に飛び出すと、彼を背に庇うように両手を 広げて膝をついた。血の気が引いた真っ白な顔で、小さな口をきゅっと結び、完全に沸点に達し ている父親を仰ぎ見た。

「どけ!レイチェル!!」

体の芯を震わせる怒鳴り声にも、彼女は一歩も引かなかった。何度も首を横に振って懸命に訴 えかける。

「サイファは悪くない、何も悪くないの!!」

「レイチェル、いいんだ」

サイファは後ろから静かに制止した。

しかし、その言動がアルフォンスの怒りにさらなる油を注ぐことになった。蒸気を吹き上げんばかりの勢いで頭に血を上らせると、眉間にいくつもの深い皺を刻み、腹の底から重低音を響かせて怒りを爆発させる。

「サイファが悪くなければ誰が悪いというのだ!」

「殺すなら私を殺して!!」

レイチェルは瞳を潤ませながら、全力で声の限りに叫んだ。

アルフォンスはその迫力に圧されて息を呑んだ。当然ながら、彼が愛娘に手を上げることなどできない。だからといって許すこともできない。ただ全ての元凶であるサイファを刺すように睨みつけるだけだった。

「アルフォンス、とりあえずここは引いて。レイチェルの体に障るわ」

それまで黙って成り行きを見守っていたアリスが、ソファから腰を上げて静かに言った。握り しめられた大きなこぶしに、細い手を添えて制止する。

「話はあらためてにしましょう」

「くっ……」

アルフォンスは悔しげに声を詰まらせると、修羅のような形相でサイファを一瞥し、床をドカドカと踏み鳴らしながら応接間を後にした。叩きつけるように閉められた扉の向こうから、何かを盛大にひっくり返したような音がいくつも重なり合って聞こえてきた。

「レイチェル、大丈夫?」

「サイファ、ごめんなさい、本当にごめんなさい」

床に座り込んだままのサイファが背後から声を掛けると、レイチェルは涙を溢れさせながら倒れ込むように抱きついてきた。彼女も少しは事の重大さを実感したのだろう。体を震わせながら、何度も何度も謝罪の言葉を繰り返す。

サイファはその背中にそっと手をまわし、あやすように軽くポンポンとたたく。

「僕は平気だから。でも、約束だけは忘れないで」

声をひそめて耳元で囁くようにそう言うと、レイチェルはサイファの肩に顔をのせたまま、小さくしゃくり上げながらこくこくと頷いた。彼女の涙がサイファの頬に触れる。その温かさは、少しの痛みを伴って、胸にじわりと沁み込んできた。

「サイファ、今日はとりあえず帰ってくれる?」

アリスは抱き合う二人を見下ろしながら淡々と言った。

「アルフォンスは私が説得するわ。今は感情的になっているけれど、冷静に考えればわかるはずよ。二人の結婚を認めるしかないということ、それが誰にとっても最善だということがね」 「本当に申し訳ありません」

サイファは立ち上がって深々と頭を下げた。ズキズキと疼く頬を、金の髪が掠めていく。それだけでさらに痛みが増したような気がした。

アリスは少し顔を曇らせて続ける。

「あと数ヶ月後には結婚する予定の二人なんだから、私個人としては認めてあげればいいと思っているけれど、ラグランジェ家としては大変なことなのよ。アルフォンスだけではなく、前当 主ルーファスの許しも得なければならないわ」

「はい、説得するつもりです」

もちろんそのことも忘れてはいなかった。しかし、アルフォンスほど説得は困難ではないだろう。彼はレイチェルとサイファの子供を待ち望んでいるのだ。ラグランジェ家にさらなる飛躍をもたらすであろう、二人の能力を受け継ぐ優秀な子供を——。そのためには、これくらいのことは不問に付すのではないかというのがサイファの目算だった。

「そこまで考えているのなら、もう私が言うことは何もないわね」

アリスは両手を腰に当てて小さく息をついた。

サイファは重々しく頭を下げた。これで何度目だろうかと思う。しかし、このくらい大したことではない。土下座をすることも、罵られることも、軽蔑されることも、殴られることでさえも、すでに覚悟を決めていたのだ。

「それにしても意外だったわ」

一息ついて緊張が弛んだのか、アリスはそれまでとはまったく違うのんびりした声でそう言うと、立てた人差し指を唇に当てて斜め上に視線を流した。

「サイファって理性的だし、次期当主の自覚もあるし、そういう間違いを起こすなんて考えもしなかったわ。今でもまだ信じられないくらい」

「僕もただの男ですよ」

サイファは苦笑しながら言った。そんな彼を、アリスは探るような眼差しで覗き込む。

「ねぇ、もしかしてレイチェルが誘ってきたのかしら? あの子さっき自分が悪いって言っていたでしょう? サイファに何度も謝っていたのも、そういうことなんじゃない?」

それは大胆な推測だったが、筋は通っていた。レイチェルの少し行きすぎた行動の理由として も納得がいく。彼女には悪いと思ったが、サイファはあえてそれに乗ることにした。

「それでも悪いのは僕の方です」

「どっちもどっちね。まったく、子供だと思っていたのにこの子は……」

アリスはそう言って溜息をつくと、サイファの腕に縋りつくレイチェルを見下ろし、窘めるようにその額を人差し指で弾いた。そして、再びサイファに視線を戻し、真面目な顔になって言う

「サイファ、何があっても諦めないでね。レイチェルのためにも」

「たとえ諦めろと言われても、諦めるつもりはありませんから」

レイチェルの華奢な肩を抱き寄せ、その手に力を込めながら、サイファはにっこりと力強く微 笑んで答えた。

「父上、母上、お話があります」

サイファは自宅に戻ると、居間の扉を開くなりそう切り出した。

両親はソファで向かい合って何か話をしていたようだが、その声につられてほとんど同時に振り向いた。

「サイファ! おまえどうしたんだ、その顔......」

途端にリカルドはぎょっとしてサイファを指さした。

その理由はわかっていた。鏡を見たわけではないが、殴られたところが腫れている自覚はある。もしかすると、変色もしているのかもしれない。相当ひどい状態になっているのだろう。

「これからあなたがする話と関係があるのね?」

一方のシンシアは落ち着きはらっていた。実際のところはわからないが、少なくとも表面上は そう見えた。聡明な光を宿した双眸で、射抜くようにサイファを見据えている。

それでもサイファが怯むことはなかった。

「はい、説明させてください」

「聞きましょう」

シンシアはリカルドの隣に移動して座り直すと、先ほどまで自分がいた向かい側を示し、サイファにそこに座るように促した。

サイファは今日の出来事を端的に話した。

ほとんどはありのままだったが、最も肝心な部分だけは事実を伏せてごまかした。つまり、サイファがおなかの子の父親であるという前提で話を組み立てた。もっとも、ことさらにそれを強調する必要はない。疑われることはまずありえないのだ。サイファがそうだったように、おそらく誰も考えもしないことである。

両親の顔はみるみるうちに険しくなっていった。

サイファが話し終わると、シンシアは怖いくらいの真剣な眼差しを向けて言う。

「サイファ、あなたにはいつも言っていたはずよ。ラグランジェ本家次期当主としての自覚を持ち、場の感情に流されることなく、自らの冷静な判断をもって、常にその名に恥じない行動を とるよう心掛けなさいと」

「申し訳ありません」

サイファは神妙な顔で頭を下げた。事実はどうであれ、母親を落胆させたことには違いない。 ラグランジェ家の当主に相応しい人間であるようにと、彼女はこれまで厳しくも愛情を持って育 ててくれた。その恩を仇で返す結果になってしまい、本当に心苦しく思う。 「終わったことをしつこく責めても始まらないわ。あなたももう十分に反省しているのでしょう。お説教はこれで終わり。ここからは今後の対処について考えましょう」

「そうだな.....」

リカルドも溜息をつきながら同意した。しかし、あまりの難題に苦悶の表情を浮かべる。ゆっくりと腕を組むと、首を斜めにして考え込んだ。

シンシアはサイファから目を逸らさずに尋ねる。

「あなたの気持ちは固まっているのね?」

「はい、僕はレイチェルと結婚します」

サイファは前を向いて毅然とした口調で断言した。

「そうは言っても問題は山積しているぞ」

リカルドは腕を組んだまま眉根を寄せた。

だが、シンシアはその非建設的な意見を無視して話を進めていく。

「アリスはどう言っているの?」

「アルフォンスを説得すると言ってくれています」

「そう、アリスが味方なら心強いわ」

少し安堵したように息をつくと、再び厳しい顔つきになって続ける。

「まずはアルフォンスの説得ね。アリスと相談してからこちらの出方を決めるけれど、早いうちに私たちも謝罪に行った方がいいでしょうね」

「そうだな、それは避けられないだろうな......」

「あなたもサイファのように殴られることを覚悟しておいて」

「えっ?!」

リカルドは隣のシンシアに振り向き、目を見張って素っ頓狂な声を上げた。しかし、シンシアは、今さら何をという半ば呆れたような面持ちで付言する。

「それだけのことをしたのよ、サイファは」

「そ、そうだね……」

すでにリカルドの顔からは血の気が失せていた。引きつったごまかし笑いを張り付かせている。サイファの顔の状態を見て、同じ目に遭わされるのだと思えば、怖くなるのも当然だろう。

「申し訳ありません」

サイファはソファに座ったまま深々と頭を下げた。

「サイファ、あなたは部屋に戻って休んでなさい。用があればこちらから呼ぶわ。それと、その顔、冷やしておいた方がいいわね。かなり腫れているわよ」

シンシアは歯切れよく指示を送る。

「はい」

サイファは素直に返事をすると、丁寧に一礼して居間を後にした。

カタン――。

サイファは二階の自室へ戻ると、静かに扉を閉めた。

灯りもつけず暗い部屋で立ちつくす。

窓際のティーテーブルには、レイチェルと紅茶を飲んでいたときの状態がそのまま残っていた。ただそのときの温度はもうそこにはない。月明かりを受けて、白い陶器が冷たい光を放っている。

――自分は、何も、何一つ間違っていない。

サイファは薄い唇をきゅっと結び、僅かに顎を引いた。

レイチェルを見捨てていいはずがない。そもそも二人を仲良くさせようとしたのはサイファである。自分の好きな二人が仲良くしてくれると嬉しかった。ただそんな単純なことしか考えず、 してはいけないことも教えず、こうなるまで何も気づかなかった自分にも責任がある。そして何より、サイファ自身が彼女を失いたくなかったのだ。

彼女を助けるための選択肢は二つあった。

ひとつはサイファがおなかの子の父親になること。

もうひとつはすべてをラウルに託すこと——。

サイファは迷うことなく前者を選択した。もしかすると、それは彼女のためというよりも、彼女と離れたくないという自分自身の身勝手な思いによるものかもしれない。彼女のことは全力で守るつもりだが、ラグランジェ家にいる限り、つらい思いをさせてしまうことは避けようがない。まして、ラグランジェ家を捨てて逃げ切る力などあるはずもないのだ。

それでも、自分の選択は間違っていなかったと思う。

確かにラウルの圧倒的な魔導力を持ってすれば、ラグランジェ家から逃げることも、ラグランジェ家を黙らせることも可能である。何の不安もない環境で、彼女は大きな力に守られながら安穏と過ごしていくことができるだろう。

だが、二人は生きる時間の流れが違うのだ。

そのことがサイファの唯一の拠り所だった。長い目で見れば自分の方が彼女を幸せにできるという自信を持てた。今後の人生を懸けてそれを証明していくつもりである。

しかし、それも一方的な押しつけでしかない。

もしも彼女に二つの選択肢を提示したら、どちらを取っただろうか――。

頭を掠めた不安から逃れるように、サイファは顔をそむけてうつむいた。

ふと、壁掛けの鏡が視界の端に入った。そこに映し出されている哀れな姿は、とても自分とは 思えないほどだった。あらためて正面から向かい合う。殴られた部分は想像以上に痛々しかった 。輪郭が変わるほどに腫れ上がり、内出血のためか黒ずんだように変色している。

「はは……ひどい顔だな……」

小さな声で自嘲ぎみに呟くと、両手を伸ばして鏡に手をついた。小さく顎を引き、上目遣いで向こう側の自分をじっと見つめる。差し込んだ月明かりが、鮮やかな青の瞳を冷たく輝かせていた。

ラウル、おまえには渡さない。絶対に――。

- 鏡に手をついたまま、奥歯を食いしばって下を向く。全身が強張った。肩は小刻みにわななき 、爪先は強く押しつけられて白くなっている。 雫がひとつ、震える頬を伝った。

それは拭われることなく滑り落ちると、月明かりを受けて刹那に煌めき、音も立てず密やかに 床の上で砕け散った。 その日は絶好のピクニック日和だった。

ラウルは起きてすぐに窓を開け、身を乗り出して早朝の空を見上げた。そこにはどこまでも澄 み渡った優しい空色が広がっていた。緩やかに頬を撫でる風は、まるで洗い立てのように爽やか で瑞々しく、ほんの少し朝露の匂いがした。

このような中をレイチェルと二人きりで遠出することができるのは、これが最後だとしても、 それでもやはり幸せだとしか云いようがなかった。全てを話すと決意したことで多少は緊張もし ていたし、つらく思う気持ちもないわけではなかったが、それよりも高揚する気持ちの方が勝っ ていたのだろう。ラウルはいつになく浮かれた自分を感じていた。

さっそく持参する昼食の準備にかかる。

以前の遠乗りに彼女が持ってきたものと同じになるが、やはり手軽に食べられるものがいいだろうと思い、サンドイッチを中心とした軽食を作ることにした。それに加えてデザートとしてプリンも用意する。これはある意味において二人の絆ともいえるものであり、今日というけじめの日にはどうしても欠かすことはできないと考えたのだ。

それらを慣れた手際で作り終えると、部屋の隅に立ててあった真新しい藤製のピクニックバスケットを手に取った。出かける直前まで冷やしておくプリン以外のものを、一つずつ丁寧にバランスよくその中に詰めていく。このピクニックバスケットも、中のビニルシートや水筒なども、すべて彼女と約束を交わした後に急いで買いそろえたものである。こうやって律儀にピクニックの準備をするなど、彼女と出会った頃の自分からは想像もつかず、何か懐かしいようなくすぐったいような不思議な感じがした。

馬の手配は昨日のうちにすませてあった。

湖畔までの交通手段となるものが何もなかったため、サイファが遠乗りのときに使っていた王宮所有の馬を借りられるよう話をつけてきたのだ。本来、貸し出しはしていないらしく、ラウルも最初はにべもなく突っぱねられた。サイファはラグランジェ本家の人間ということで特別だったらしい。だからといって素直に引き下がるわけにはいかなかった。褒められた方法ではないが、圧倒的な魔導力をちらつかせ、軽く脅し文句を口にすることで、今日一日の貸し出しを強引に承諾させたのである。サイファが良くて自分が駄目な道理はないだろう、というのが自身の行動に対する言い訳だった。何より他に当てがなく、時間も迫っていたので、手段を選んでいる余裕などなかったのだ。

遅いな――。

ラウルは遠乗りの準備を万端に整え、医務室で本を読みながらレイチェルを待っていたが、来るはずの時間が過ぎても彼女は一向に姿を現さなかった。そろそろ出発しなければ昼に着くには難しい時間になっている。

多少、遅れることくらい構わないが、理由がわからないので不安になる。

いくらなんでも忘れているなどということはないと思う。昨日の今日である。それほど物忘れ のひどい女ではない。むしろ記憶力に関していえば、並みの人間よりも遥かに優れているのだ。

おそらく少し寝過ごしてしまっただけなのだろう。きっと今に小走りで駆け込んできて「ごめんなさい」と愛らしくも申し訳なさそうに詫びてくれるに違いない——そんなふうに楽観的に考えることで、ラウルは焦燥感に駆られる自分自身を無理やり落ち着かせようとしていた。

しかし、昼になってもレイチェルは来なかった。

昼休みの喧噪が遠くに聞こえる。時折、医務室の前を通る足音にドキリとしたが、それはどれ も素っ気なく通り過ぎるだけで、医務室に入ってくるものは皆無だった。

何かあったのだろうか、それとも――。

ラウルは本を閉じて頬杖をつく。活字を目で追っても少しも頭に入ってこない。頭は無意識に この状況についてのあらゆる可能性をシミュレーションしていた。次第に心のさざなみが広がっ ていき、いてもたってもいられなくなる。

こちらから連絡を取るべきなのかもしれない。

衝動に突き動かされるように、机に両手をついて立ち上がろうとする。しかし、その勢いは途中で止まった。中途半端に腰を浮かせたまま思案すると、やがて溜息をつき、深くうつむいて静かに座り直した。

あともう少しだけ待とうと思った。

それがどのくらい意味のあることなのかわからない。ただ逃げているだけなのかもしれない。 そんなことを考えながらも、やはり行動を起こすことはできなかった。眉根を寄せて頬杖をつき 、どこでもない一点を見つめながら、医務室に届く音にじっと耳を澄ませた。

遠くのチャイムが昼休みの終わりを告げ、医務室の周辺には再び静寂が訪れた。聞こえるのは 風に揺れる木々のざわめきくらいである。

レイチェルはいまだに来ていない。

ラウルは頬杖をついたまま微動だにせず考え込んでいる。まだその場から離れることは出来ずにいるが、いいかげん現実を受け入れようとする気持ちが起こり始めていた。今日はもう諦めた方がいいのかもしれない。急用があって来られなくなったのなら仕方のないことである。

だが、連絡すら寄越さないのはなぜなのだろうか――。

そのことが、ラウルの心に仄暗い不安を募らせていった。

ドンドンドン——。

唐突に建て付けの悪い扉が派手な音を立てる。

ラウルはハッとして弾かれたように立ち上がった。焦茶色の髪をなびかせ一目散に駆けていくと、飛び出さんばかりに威勢よくガラリと扉を開け放つ。

「レ.....」

しかし、そこにいたのは待ち人ではなかった。ラウルと同じく王宮医師として勤務しているサ

ーシャである。扉の開かれた勢いに面食らったのか、少し身を引き、目を丸くしながら呆然としていた。だが、すぐに眉を寄せて口をとがらせると、長身のラウルをじとりと睨み上げる。

「ねぇ、なんか今、ものすごくガッカリしなかった?私の顔を見て」

「おまえの顔を見て喜べとでも言うのか」

思いきり図星を指されたが、まさか他の女と間違ったなどと言えるはずもない。無表情を装ったまま捻くれた言葉を返すことで誤魔化そうとした。だがそれも徒労に終わる。

「もしかして恋人と勘違いした? 待ちぼうけくらってんの?」

サーシャはニヤリと口の端を上げ、見透かしたかのようにそう尋ねてきた。

プレゼントの一件以来、彼女は何かにつけてラウルの恋愛話を聞き出そうとつついてくるようになった。物珍しさから面白がっているだけなのだろう。もちろんラウルが取り合うことはない。そのためいろいろと勝手な解釈をしているようだが、彼女にどう思われようと知ったことではない。誤解でも何でも好きにすればいいと思っていた。

だが、今は気が立っているせいか、些細な一言が聞き流せなかった。

待っているのは「恋人」などではない。自分の気持ちはともかく、関係としてはただの教え子でしかないし、今後そういう関係になる可能性もゼロである。たとえ、自分がどれほど強く切望したとしても――ラウルはやり場のない怒りを内に秘めたまま、冷たく燃えたぎる瞳でサーシャを射抜き、一段と低い凄みのある声を突きつける。

「何をしに来た」

彼女の好奇の笑みは一瞬で消え去った。蛇に睨まれた蛙のごとく身を竦ませると、目を見開いたままごくりと唾を飲み込んだ。それでも仕事に関する話のためか、もともとの性格ゆえか、強気な態度だけは崩さずに答える。

「ほ……報告書、締め切りきのうだったよ。いいかげん手間かけさせないでよ」

「……悪かった、明日には提出する」

昨日の午前中までは確かに覚えていたが、レイチェルと約束を交わしてからは、それ以外のことを考える余裕がなくなってしまったようだ。このところいつも同じような理由で失念している。サーシャに催促されるのもこれで三度目だろうか。彼女が不機嫌になるのも当然のことである

「頼んだわよ」

サーシャはぶっきらぼうに白衣のポケットに両手を突っ込んだ。小さく息をついて踵を返そうとするが、ふとその足を止めると、遠慮がちにそろりと振り向いてラウルを窺う。

「.....ねぇ」

「何だ」

ラウルは訝しげに眉をひそめて尋ねた。それを見て、なぜか彼女はふっと寂しげな笑みを浮かべ、目を伏せながら小さく頭を横に振った。

「何でもない。じゃあ、報告書のこと忘れないでね」

さらりと念を押すようにそう言うと、今度は振り返ることなく軽く右手を上げながら立ち去っていく。その足どりに合わせて、後ろでひとつに束ねた赤茶色の髪が小さく上下に弾んでいた。

それから数時間が過ぎた。

その間も、ラウルは何も手につかないまま医務室の自席に座り、ただひたすらじっと静かに待ち続けていた。もう来ないだろうとほとんど諦めかけていたが、一縷の望みまでもはどうしても捨てきれなかった。そして、そのことが余計に彼を苦しめていた。

薄い唇から溜息がこぼれる。

ラウルは机に手をついて立ち上がった。淡々とした足どりで窓際へ向かうと、クリーム色のカーテンを体の幅ほど開き、ガラス越しに外の景色を眺める。

日はすでに半分ほど沈みかけていた。地平近くの空は朱く鮮やかに染まり、対照的に、医務室の真下の裏道には大きな影が落ちている。日中でも人通りの少ないそこには、当然のように誰の姿も見つけることは出来なかった。

コン、コン---。

再び、医務室の扉をノックする音が聞こえた。

頬杖をついていたラウルの心臓はドクンと大きく跳ねる。落ち着きを取り戻した今ならば、誰であるかはノックの仕方である程度の判別がつく。これは少なくともサーシャではない。彼女はいつも怒ったように乱暴に扉を叩くが、今回はそれとはまるで違う、優しく上品なノックなのだ

今度こそレイチェルではないか。

望みなど持ってはいけないと思いつつ、自ずと高まりゆく期待は止められない。今からではもう出かけることは無理だが、それはまた次の機会にすればいいだけのことだ。急用で行けなかったのだと、連絡する余裕もなかったのだと、そのことがわかりさえすれば十分である。

ラウルは立ち上がって扉へ向かうと、息を止めてガラリとそれを引いた。

「こんにちは、ラウル。突然お伺いしてごめんなさい」

そう言って微笑んだのは、レイチェルではなく、その母親のアリスだった。彼女一人だけで他には誰もいない。用件はおそらくレイチェルに関することだろう。それ以外にアリスがわざわざラウルを訪ねる理由はない。

「中でお話させていただきたいのですけど、よろしいかしら?」

「ああ、構わん」

ラウルは平静を装ってそう言うと、扉を大きく開いて彼女を中に招き入れた。

アリスがこの医務室を訪れたのは初めてのことである。

中ほどまで歩を進めてから立ち止まると、一通り観察するように、広くはない部屋をぐるりと 見まわした。それからラウルに振り向き、くすっと笑って言う。

「飾り気がないのがいかにもラウルらしいわね」

「話があったのだろう」

ラウルは焦る気持ちを声に乗せないよう用心しながらそう言うと、自分の席に腰を下ろし、ア

リスに患者用の丸椅子を差し出した。促されるまま、彼女は流れるような所作でそこに座った。 両手を重ねて膝の上に置き、背筋をすっと伸ばすと、まっすぐにラウルの瞳を見つめて言う。

「レイチェルの家庭教師の件です」

ラウルは表情を動かすことなく、じっと次の言葉を待った。

アリスはそれに応えるように、落ち着いた明瞭な声で本題に入る。

「予定ではあと一月でしたけれど、こちらの事情により、昨日の授業で終わりにさせていただく ことになったの。誤解はしないでね。ラウルには何の問題もなくて、本当にこちらの都合なの。 勝手を言ってごめんなさい」

「……いや」

彼女の話す内容については理解できたが、それを飲み込むには少し時間がかかった。ラウルは 暫しの間の後に曖昧な返事をした。それが精一杯だった。思考からして混乱しているのに、口に する言葉など思い浮かぶはずもない。

アリスは申し訳なさそうに肩を竦めて付け加える。

「約束どおり来月までの授業料はお支払いするわ」

「不要だ。働いてもいないのに受け取るつもりはない」

ラウルは金目当てで家庭教師を引き受けたわけではなかった。そもそも王宮医師としてそれなりの報酬を得ている。一人で慎ましやかに暮らしていくには十分すぎるほどの金額だ。それ以上は望んでいないのである。

「では、これまでの謝礼ということでどうかしら」

アリスは目をくりっとさせて悪戯っぽく問いかける。それを見て、ラウルは小さく溜息をついた。娘のレイチェルと同じく、アリスにも自分の意思を曲げない強情なところがあるようだ。

「好きにしろ」

いかにも面倒くさそうに、仏頂面でそう言い捨てる。

アリスはくすっと小さく笑った。

「近いうちにアルフォンスが挨拶に伺うわ。都合がいいのはいつかしら?」

「いつでも構わん。たいていはここにいる」

もはやラウルには何の予定もなかった。出かけることさえほとんどないだろう。せいぜいが王 宮医師としての会議くらいのものだ。あとは患者すら滅多に寄りつかないこの医務室で、ひたす ら空疎な時間を送るだけである。

「では、アルフォンスにそう伝えておきます」

そう言って立ち上がろうとしたアリスに、ラウルは咄嗟に声を掛ける。

「レイチェルは……その、大丈夫なのか」

「えっ? ああ.....」

アリスは一瞬きょとんとして聞き返したが、すぐにラウルの言いたいことを理解したらしく、 低めの声を落として僅かに目を伏せた。そして、少し困ったような笑みを浮かべて言葉を繋ぐ。 「病気や怪我ってわけじゃないの。心配するようなことは何もないわ。ただちょっとした事情 があって理由が話せないだけで……ごめんなさい、あなたにはこれまでさんざんお世話になって おきながら、こんな筋の通らない終わらせ方をしてしまって。許してもらえるかしら?」 「私はおまえたちの決定に従うだけだ」

ラウルは投げやりにそう言って腕を組んだ。無表情のまま口を固く結ぶ。自分はただ雇われただけの存在であり、解雇の理由を問いただす権利も、それを非難する権利もありはしない。

アリスは神妙な面持ちでラウルの瞳を見据えた。

「ありがとう、あなたの優しさに感謝します」

包容力を感じさせる温かな声で言葉を落とすと、椅子に座ったまま深々と頭を下げる。レイチェルのものより少し濃い金色の髪が、細い肩からサラサラと滑り落ちた。

ラウルは医務室を後にするアリスを見送ると、重い腰を上げて、朝から待ち続けたその場所を離れることにした。もう待つことに意味はなくなったのだ。そうなるまで動くことができなかった自分を情けなく思う気持ちもあるが、今さらそんなことを嘆いたところで何もなりはしない。

奥の薄暗い自室に戻ると、灯りもつけずにじっと佇む。

ダイニングテーブルの上には藤製のピクニックバスケットが鎮座していた。それを照らすかのように、カーテンの隙間から一筋の光が差し込んでいる。しかし、その光も急速に弱まり、みるみるうちに掻き消えていった。

ラウルはテーブルの端に手を掛けると、椅子に腰を下ろし、背中を丸めて大きくうなだれた。 焦茶色の髪が肩から落ちて横顔を覆う。

アリスの口ぶりからすると、レイチェルの身に何かが起こったわけではなさそうだ。それについては素直に安堵した。連絡すら来なかったので、事故に遭った可能性もあるのではないかと心配していたのだ。

しかし、そうなると本当に理由がわからない。

今日の約束を反故にするだけでなく、家庭教師までも終わりにするなど、これではまるでラウルのことを避けているとしか思えない。

これが、おまえの答えなのか――?

最後に見た彼女の笑顔が脳裏に浮かぶ。つい昨日のことだ。楽しみにしていると声を弾ませて 愛くるしく笑っていた。なのに、彼女にいったいどんな心境の変化があったのだろうか。

いや、そうではない。

ラウルには素振りすら見せていなかったが、レイチェルはこのところ元気をなくしていたらしい。深く悩んでいる様子だとアリスから聞いた。ずっと考えた上で出した結論なのかもしれない。もしかすると、一方的に持ちかけたこの約束が、そのきっかけになったのだろうか。

ラウルは机に肘をつき、額を掴むように押さえた。

自分にその決断を責める権利はない。だが、せめてレイチェル本人の口からそのことを聞きたかった。それすらも身勝手で傲慢な言い分あることは理解している。言えなかったから、もしくは言いたくなかったから、このような手段を選んだことくらい推測がつく。それでも、このままさよならすら告げることができず、これきりになってしまうことを、容易に受け入れることは出来なかった。

崩れるようにダイニングテーブルに突っ伏す。

藤製のピクニックバスケットに腕が当たり、床に落ちて中のものが散乱した。水筒が転がり戸棚にぶつかって止まる。しかし、そんなことはもうどうでもよかった。どうせ必要のなくなったものである。この先ずっと、もう二度と――ラウルはテーブルの上に投げ出したこぶしを震えるほど強く握りしめる。爪が食い込んだ手のひらに、生ぬるい血がじわりと滲んだ。

サイファはペンを机に置き、小さく息をついた。

魔導省での忙しかった二ヶ月が終わり、今は報告書を作るくらいで急ぎの仕事はない。腕時計で定時を過ぎていることを確認すると、書類をまとめて机の上を片付け始める。

レイチェルが身ごもっていることが発覚したあの日から二日が過ぎ、殴られた頬の腫れはだい ぶ引いていたが、内出血による変色はまだ治っておらず、何らかの問題があったことは誰の目か ら見ても明らかだった。

休日明けの今朝、出勤早々に上司に尋ねられ、サイファは正直に理由を答えた。

サイファが口にしたのはそれ一度きりであるが、まわりで聞いていた人が多かったせいか、話は瞬く間に内局中に広がってしまったようだ。

隠すつもりはなかったので構わないが、その予想を超える速さにはただ驚くしかなかった。もう誰も自分には訊いてこない。ただ、触れてはならないという空気と、それでも止められない好奇の眼差しがあるだけである。陰ではさぞかしこの話題で盛り上がっていることだろう。サイファがラグランジェ本家の次期当主であるということが、必要以上に皆の関心を引いていることは想像に難くない。

あらかじめこうなることは覚悟していた。

それでもこの居心地の悪さは尋常ではなく、いずれ時間が解決してくれるのを待つしかないが 、今日ばかりは一刻も早くここから離れたいと思わずにはいられなかった。

サイファが書類を机の引き出しにしまって立ち上がろうとした、そのとき――。

「よお、サイファ!」

野太いにもかかわらずよく通る声が、広いフロア中に響き渡った。

サイファを含めた皆が、一斉に振り向く。

そこにいたのは山のように大きな体躯のマックスだった。サイファがかつて配属されていた公安局一番隊第二班の班長である。彼は場違いともいえるタンクトップ姿のまま、軽く右手を上げ、何の躊躇いもなく豪快な足どりで内局に入ってきた。

その後ろには、部下であるエリックとティムが、ビクビクと身を縮こまらせて歩いていた。ティムはマックス以上に良い体格をしているが、マックスの陰に隠れるように背中を丸めて「 班長~」と今にも泣き出しそうな情けない声で縋りついている。

現場の人間が内局に来ることはほとんどない。

入室を禁止する規則があるわけではないが、暗黙の了解のようなものがあり、普通は気軽に足 を踏み入れることなどまずありえないのだ。それは一年目の新人でさえも知っていることである 。魔導省で長く勤務するマックスが知らないはずはないだろう。知っていてあえて無視したに違 いない。

サイファは椅子に座ったまま、自分の方へやってくるマックスに無表情で横目を向けた。マッ

クスはそのすぐ前まで来て立ち止まると、両手を腰に当て、まるで少年のように邪気なくニカッと白い歯をこぼして笑う。

「おまえ、婚約者を孕ませちまったんだってな!」

その瞬間、フロアの空気が凍り付いた。内局の皆が固唾をのんで状況を見守っている。マックスの後ろのティムは頭を抱えてしゃがみ込み、エリックは申し訳なさそうに顔をしかめてサイファに両手を合わせて見せた。

「何か御用ですか」

サイファはピクリとも表情を動かさず、横目を向けたまま冷ややかに言った。しかし、マックスは臆することなく、明るく笑いながら非常識に大きな声を弾ませる。

「めでたいことだから祝いにきたんだよ。破談にならずに結婚も決まったんだろ? 久しぶりに俺たちで飲みに行こうじゃねぇか!」

「お気持ちだけいただいておきます」

サイファは丁寧な口調で突き放した。

「つれないこと言うなよ。おまえいつからそんなに可愛げがなくなったんだ?」

マックスは逞しい腕を机について、ぬっと身を乗り出し、正面からサイファの顔を覗き込む。その途端、彼の目は大きく見開かれた。

「うわっ、おまえこんなにひどく殴られたのか! くっ……綺麗な顔を台無しにするような奴は許せん! あの研究所の所長だったな? 待ってろ! 腕っぷしでは負けんぞ!!!

「班長!落ち着いてください!!」

腕の筋肉を見せつけながら鼻息荒く捲し立てるマックスを、エリックとティムは後ろからタンクトップの裾を掴んで懸命に引き留める。食い込むくらいに引っ張られて、ようやくマックスは我にかえった。

「そうだ、まずサイファを祝ってやらねぇとな」

「そうそう、そうですよ、班長!」

サイファは騒々しい三人組を見て小さく溜息をつくと、一度は片付けた書類を引き出しから取り出し、机の上にパサリと置きながら言う。

「申し訳ありませんが、仕事が忙しいんです」

「それは嘘だろう」

間髪入れず横やりを入れたのは、隣に座る先輩のデニスだった。彼はサイファと同じチームで 仕事をしており、今は互いにさほど忙しくないことを知っているのだ。それでもサイファは負け じと言い返す。

「探せばやるべきことはいくらでもあります」

「仕事は逃げ込むためにあるんじゃない。そんな理由で残業など迷惑だ」

デニスは淡々とした口調で、しかしきっぱりと言い放つ。

その正論に、サイファは何も言い返すことが出来なくなった。自分の方が間違っていることは 初めからわかっていた。これ以上の反論は見苦しいだけである。

「いいこと言うな、兄ちゃん!」

マックスは白い歯をこぼしながら、奥のデニスに力強く親指を立てて見せると、いきなりサイファの体をひょいと荷物のように肩に担ぎ上げた。脚は太い腕でがっちりと抱え込まれ、頭は背中側に落とされて逆さになっている。今までずっと冷静を装っていたサイファも、これにはさすがにギョッとした表情を見せた。

「んじゃ、行くぞ、サイファ!」

「自分で歩きます! 逃げませんから下ろしてください!」

マックスの広くがっちりとした背中を叩きながら、サイファはめずらしく慌てふためいて訴えかけた。顔が火照っていたのは、逆さにされたせいなのか、恥ずかしさによるものなのか、自分でもわからなかった。

「飲みに行く口実が欲しかっただけですよね」

夕日に染まる寂れた道を歩きながら、サイファは隣のマックスにぽつりと問いかけた。離れてからもう2年になるというのに、なぜ自分を祝おうなどと言い出したのか理解できず、単純に訊いてみたくなっただけである。今さらつまらない理由をつけて逃げ出すようなみっともない真似をするつもりはない。

「いや、俺は口実なんかなくても飲みたければ飲みに行く」

マックスは胸を張って堂々と言った。

言われてみれば、確かに彼はそういう性格である。本能の赴くままに生きているような男なのだ。こんなことで下手な小細工などしないだろう。

「祝ってやるって言ってんだから素直に喜べばいいんだよ」

「強引に連れ出しておいて、よくそんなことが言えますね」

「細かいことは気にするな!」

サイファが落とした呆れ口調の怨言を、マックスは軽く一蹴して豪快に笑った。一方、やはり 強引に連れ出されたらしいエリックとティムは、後ろで力なく乾いた笑いを浮かべていた。

カランカランカラン——。

マックスが勢いよく扉を開くと、チャイムは急かすように乾いた音を立てる。客は誰もいないようだ。ひとりカウンターにいた白エプロン姿のアルティナは、パッと振り返ると、屈託のない弾けんばかりの笑顔を見せた。

「いらっしゃい、マックス!」

「よっ、アルティナちゃん!」

マックスは敬礼のようなポーズを取りながら、彼にとっては狭い戸口をくぐって中に入る。そ して、続いて入ったサイファの頭をがっちりと抱えて、アルティナに見せた。

「今日はサイファも一緒だぞ」

「お久しぶりです」

サイファは頭を抱えられたまま、少し苦しそうに、それでも笑顔を見せて挨拶をした。 アルティナはぽかんと呆気にとられた。 しかし、その顔はすぐに険しいものに取って代わる。顎を引いてキッとサイファを睨みつけ、 両のこぶしを握りしめながら、全身をわなわなと小刻みに震わせた。

「こんの……はくじょーものっっ!!!」

そう叫ぶやいなや、彼女はカウンターに置いてあったレモンを全力で投げつけた。まっすぐに サイファの顔面を目掛けて飛んでいく。直撃する寸前で、サイファはそれを受け止めた。右手に レモンを収めたまま不思議そうに尋ねる。

「薄情者って僕のことですか?」

「今さら何しに来たのよ!!!」

傍から見ているとまるで痴話喧嘩のようなやりとりである。マックスもそう思ったのだろう。 腕の中のサイファにじとりと訝るような視線を落として尋ねる。

「おまえ、まさかアルティナちゃんに手ぇ出したんじゃねえだろうな」

「そんなことするわけないじゃないですか」

サイファは苦笑しながら否定した。そうするより他になかった。彼女の怒りにはまったく心当 たりがないのである。それでもマックスは信じていないようだった。

「いや、何かはあっただろう。じゃなきゃ......」

「何もないから怒ってるのっっ!!」

天井に向かって力いっぱい声を張り上げたアルティナに、マックスとサイファは大きく瞬きを して振り向いた。

「また来るって言ってからもう1年よ? ひどいじゃない! せっかくサイファにボトル入れてもらおうと思って、すっごく高いウィスキーを仕入れて待ってたのに!!」

「それは、申し訳ありませんでした」

サイファは小さく笑いながら肩を竦めて詫びた。いかにも彼女らしい理由にほっと胸を撫で下ろす。マックスもやはりほっとした様子で、「そうだよな」などと言いながら、短い前髪を掻き上げて苦笑していた。

しかし、アルティナはなおもきつく睨みつける。

「ねえ、サイファ。あなた自分が金づるだって自覚あるわけ? ちゃんとこまめに通ってきて、たくさん飲み食いして、しっかりお金を落としていってよね。当てにしてるんだから!」

それはあまりにも身勝手で無茶苦茶な言い分だが、彼女が言うとなぜか憎めない。直球で嫌味がないからだろうか。サイファは微笑みながら「はいはい」と軽い調子で返事をした。

その扱いに、アルティナはムッとして頬を膨らませた。しかし、すぐにパッと表情を晴らすと、カウンターに両肘をついて身を乗り出し、流れるような銀の髪を肩から滑らせながら声を弾ませる。

「じゃあさ、とりあえず今日はじゃんじゃん飲んでくれる? 酔いつぶれるまで!」

「……そうですね、たまにはいいかもしれませんね」

サイファは口もとに淡い笑みをのせると、小さく独り言のようにそう呟いた。

「ええーっ?!婚約者が妊娠?!!」

アルティナはカウンターの中で素っ頓狂な声を上げた。持っていたグラスを落としそうになりながら、混乱したように眉をひそめて尋ねる。

「ちょっと待ってよ、サイファの婚約者って私と同じ年じゃなかった?」

「ああ、だからこれ、相手の父親に殴られたんだとよ」

マックスは隣に座るサイファの肩に手をまわして抱き寄せると、細い顎を持ち上げて、痛々しく変色した頬をアルティナの方に向けた。

「うわっ、痛そう……でも、殴りたくもなるわよねぇ……」

「まあ仕方ねぇかもな。15じゃまだ結婚もできないしな」

アルティナが複雑な表情で相手の父親に同情を示すと、マックスもめずらしく真面目に同調 した。サイファも同じ気持ちではあったが、張本人が言うべきことではないと判断し、口をつぐ んだまま静かにビールを口に運んだ。

「でもちゃんと結婚は認めてもらえたんでしょう?」

「ええ、渋々ですけどね。そもそも僕は婚約者ですし、彼女が16になったらすぐに結婚する予定になってましたので、まだ説得の余地があったのかもしれません」

それでもまだアルフォンスの怒りはおさまっていない。心情的には認めたくなかったが、様々な状況を鑑みると、認めざるをえなかったというのが実際のところなのだ。

決め手となったのはサーシャの言葉だったらしい。

レイチェルの体のことを考えるならば、中絶するよりも産んだ方がいいだろう——彼女はアルフォンスを医務室に呼びつけて、そのような医師としての見解を述べたのである。それは、感情的になっていたアルフォンスに現実を直視させるには十分な内容だった。

「ふーん、こんな状況でもサイファは冷静なのねぇ」

アルティナはカウンターに頬杖をつき、理解を超えると言わんばかりの口調で相槌を打った。

「ま、自分がやっちゃったことなんだから、オロオロしてる場合じゃないわよね」

「そうですね。きちんと説得しなければ、彼女までも不幸にしてしまいますから」

そう答えながらも、本当は逆ではないかとサイファは思う。自分のしでかしたことでないから、これほどまでに冷静でいられるのではないだろうか。そして、アルフォンスをまっすぐに見据 えることができるのではないだろうか——。

「アルティナ!しゃべってばかりいないで、こっちを手伝いなさい!」

奥からフェイが大きな声で呼んだ。マックスたちが大量に注文をした料理を作っているのだろう。何かを炒める音、水を流す音、歩きまわる足音などが、慌ただしく重なって聞こえてくる

「えー、せっかく面白い話をしてるのにい」

「遊ぶためにいるわけじゃないでしょう!」

「わかったわよ」

アルティナは不服そうに口をとがらせてそう答えたが、すぐに気を取り直すと、笑顔でサイファたちに手を振りながら小走りでカウンターの奥へと消えていった。

「しかしなぁ、話を聞いたときは本当に驚いたぜ。何もかもすべて計算づくで行動しているようなおまえが、まさかそんなヘマをするとはな」

マックスはカウンターに両腕を置いて、遠くを見ながらしみじみと言った。それが何の話であるかは今さら聞き返すまでもない。サイファは緩慢に頬杖をつくと、僅かに顔をしかめて息をついた。

「本当に、どうしようもない馬鹿ですよ」

「まあそんなに自嘲するなって」

マックスは大きな手でサイファの背中をバシンと叩き、白い歯を見せてニッと笑う。

「俺はちょっと嬉しかったぞ。おまえの人間らしい一面が見られて」

サイファは頬杖をついたまま、隣のマックスにちらりと視線を流して言う。

「人ごとだと思って気楽ですね」

「まあな。でも、俺にできることなら何でも協力するつもりだぞ。たいして役に立てんかもしれんが、愚痴くらいならいつでも聞いてやれる。こう見えても俺は口が堅いからな」

マックスは親指で自信たっぷりに自らを指し示す。

「本当ですかね」

サイファは小さく笑みを漏らしてそう言うと、グラスに両手を添え、泡の少なくなったビール をじっと見下ろした。

「うぉぉおぉん!」

突如、唸るような太い泣き声が、小さな酒場を揺るがすように響いた。

カウンター席に座っていたサイファとマックスは、その声のするテーブル席の方に振り返る。 泣いていたのはティムだった。小さな机を覆い隠すように突っ伏し、大きな背中を震わせている 。その前に座るエリックは、皿やジョッキを隣のテーブルに移しながら、困ったように眉尻を下 げていた。

「班長、助けてくださいよ」

「どうしたんだ、そいつ?」

「どうも悪酔いしたみたいで……」

エリックが説明しようとした途端、ティムはガバッと体を起こした。目元の涙を拭おうとも せず、赤ら顔でこぶしを振り回して力説する。

「そりゃ、自分だってわかっていました! いずれはサイファと結婚するんだって......わかってはいたけどよ......だけど、いきなり子供ができたなんて、そんなのあんまりじゃねぇか!」

それがレイチェルの話であることに間違いはないだろうが、なぜ彼が泣き叫んでいるのかはさっぱりわからない。そもそもティムとレイチェルに面識はなかったはずである。サイファが不思議に思っていると、隣のマックスはニヤリと口の端を吊り上げた。

「おまえ、横恋慕してたのか?」

「そんなんじゃないですっ!!」

いつもは弱気なティムが、驚くほど強い調子でマックスに言い返した。

「俺にとって、彼女は一点の曇りも穢れもない神聖な存在だった。なのに、こんな……。百歩譲ってサイファになら彼女を託してもいいと思ってたんだぞ! 人の信頼を裏切りやがって!!」 「そう言われても……」

矛先を向けられたサイファは、言葉を濁して口をつぐんだ。確かに責められるべきことではあるが、ティムに言われるのはどうも筋違いのように思えて、素直に謝る気にはなれなかった。

「まあ落ち着けや」

マックスが二人の間に割って入り、ティムの肩に大きな手を置いて覗き込んだ。

「確かにあの子は可愛いと思うが、もうちっと現実を見た方がいいぞ。なんだったら何人か女の子を紹介してやろうか。どんな子が好みだ?」

「だからそんなんじゃないんですって!!」

ティムは再び憤慨して反論すると、胸ポケットから端がボロボロになっている年季の入った写真を取り出した。寂しげな顔でそれを見つめながら、目に涙を溜めて言う。

「彼女への思いは恋愛感情とは別物です。付き合いたいとか、お近づきになりたいとか、そんな 畏れ多いことは思っていません。こうやって無垢な笑顔を眺めて彼女のことを思う、ただそれだ けで自分は幸せな気持ちになれたんだ」

マックスとサイファは背後からその写真を覗き込む。そこには10歳くらいのレイチェルが写っていた。アルフォンスと思しき男性に手を引かれているところだ。

「これ、隠し撮りですよね.....」

「王宮に来たときに撮ったんだな」

さすがのマックスもこれには渋い顔になった。まさかこれほど重症だとは思っていなかったのだろう。体を起こして腕を組むと、深く重く溜息をついた。

「ここまでくると、さすがにどうしたもんかと思うな」

「班長! この純粋な気持ちのどこが悪いんですか!!」

ティムの必死な訴えに、まわりの皆は苦笑するしかなかった。確かに純粋といえば純粋なのかもしれないが、むしろ恋愛感情の方が良かったような気がするのは、サイファだけではないだろう。

「まあティムがどうこうするとは思わんが、中には頭のおかしいヤツもいるかもしれん。逆恨みで襲われる可能性もあるだろう。おまえも婚約者も気をつけろよ」

「ええ、そうですね」

マックスの忠告にサイファは真面目な顔で頷いた。レイチェルは王宮内の人間に可愛がられている、という話は聞いたことがあったが、まさか神聖視されているなどとは考えもしなかった。 それがごく一部の人間であっても用心するに越したことはない。自衛の手段を持っているサイファはともかく、そうでないレイチェルはなるべく外出させない方がいいだろう。何かがあってからでは遅いのだ。

「ねえ、それサイファの婚約者の写真? 見せてっ!」

どこから聞いていたのかわからないが、アルティナはそう声を弾ませながら、ビールのジョッ

キと料理を山盛りにした皿を運んできた。それを急いでテーブルに置くと、ティムの肩に寄りかかって後ろから写真を覗き込む。

「あ! 可愛い!! でも、これまるきり子供にしか見えないんだけど……」

「10歳くらいのときの写真ですからね。今はもっと成長していますよ」

サイファはカウンターのスツールに腰を掛けながら説明した。

「いや、そんなに変わっちゃいないぞ。顔だけなら今でも10歳で通用するな」

「そんな子を襲っちゃうなんて、サイファってやっぱりロリコンだったんだ」

マックスとアルティナは写真を眺めつつ口々に言った。サイファは思わず苦笑を浮かべる。この状況ではどうにも分が悪い。言い訳をすればするほど不利になるだろう。

「襲ってはいませんけどね」

独り言のようにぽつりとそれだけ反論するのが精一杯だった。

サイファはひとりカウンターでグラスを傾けた。

マックスはテーブル席の方で、エリックとともにティムを元気づけながら飲んでいる。彼の豪快な明るさは十分ティムの救いになるだろう。そのことはサイファ自身が身をもって実感していた。

「サイファ、ちゃんと飲んでる?」

アルティナはテーブル席にジョッキを運んでカウンターに戻ると、そう尋ねながらサイファのグラスを横から覗き込んだ。あまり減っていないのを確認すると、口をとがらせて恨めしそうにサイファを睨む。

「すみません、本当に強くないんですよ」

「じゃあせめて、コレ、入れてくれる?」

下の方からボトルを取り出してそう言うと、ニコニコしながら顔の横で掲げて見せる。

「ああ、先ほど言っていたすごく高いウィスキーですか?」

「未開封だから大丈夫だと思うわ。ね? いいでしょう?」

媚びを売るでもなく、策を巡らすでもなく、ただ単刀直入に身勝手ともいえるお願いをする彼女に、サイファは思わずくすりと笑みをこぼした。

「いいですよ」

「やった! ありがと!! 水割り、作ってあげるわね」

アルティナはボトルを抱えて無邪気に小躍りすると、長い銀の髪をなびかせながら、グラスを取り出してテキパキと水割りの準備を始めた。その背中に、サイファは声を送る。

「みなさんの分も作ってあげてください」

「ダメよ! これはサイファがひとりで飲んで」

アルティナはそう言いながら、ボトルを片手に持ったまま顔だけ振り返った。少し口をとがらせて怒ったような表情を作っている。

「どうしてですか?」

「マックスに飲ませたら今日で空になっちゃうわ。それじゃ意味がないの。私はサイファにボト

ルを入れてもらって、こまめに通ってもらおうと思ってるわけ。金づるを逃さないための作戦よ I

軽妙にそう言って人差し指を立てるアルティナに、サイファは笑顔を浮かべながら肩を竦めて見せた。たいして飲まない自分を通わせても金にならないのではないかと思ったが、あえてそのことは指摘しないことにした。

アルティナは水割りを作ると、サイファに差し出しながら言う。

「ね? 私もサイファと乾杯したいな」

「お酒はダメですよ」

サイファはさらりと窘める。彼女はまだ15歳であり、酒の飲める年齢ではない。これまで飲んだことがあるのかは知らないが、少なくとも自分の前で飲ませるつもりはなかった。

「わかってるって。ジュースにするわよ」

そんなことは承知していると言わんばかりに、アルティナは歯切れよくそう答えると、冷蔵庫からオレンジジュースの紙パックを取り出してウィスキーグラスに注いだ。

「じゃあ、あらためて……おめでとー!」

「ありがとうございます」

二人はグラスを掲げて軽く合わせた。少し濁った音が鳴る。

アルティナはオレンジジュースを一気に呷り、まるでビールでも飲んだかのようにプハァと息を吐くと、空になったグラスを無造作にカウンターに置いた。その様子を目を細めて眺めながら、サイファは静かにグラスに口をつける。

「何かあんまり嬉しそうに見えない。私じゃ不満?」

「そんなことありませんよ」

酔っぱらいのように絡んでくる彼女に、サイファは落ち着いた口調で返事をした。他意があったわけではないが、その軽くあしらうかのような態度が気に入らなかったのだろう。彼女の機嫌はますます悪くなった。

「じゃあ何? マリッジブルー? 男のマリッジブルーなんて見たくないんだけど! 念願叶って大好きな彼女と結婚できるんだから、もっと素直にパーっと喜べばいいじゃない!

「いろいろと大変なことがあるんですよ」

「でも、それって自業自得でしょう?」

「ええ、そうですね。わかっています」

彼女の厳しい追及にも、サイファはまるで達観したかのように淡々とした答えを返した。無表情のままグラスを手に取る。しばらくそのまま身じろぎもせずじっとしていたが、突然、勢いよく流し込むようにウィスキーを呷った。

アルティナは顔を曇らせ、カウンターの上で重ねた手に顎をのせた。

「後悔……してるんだ……」

「彼女とはみんなに祝福されて結婚したいと思っていました。彼女には笑顔で花嫁になってほしかった。僕がもう少し気をつけていれば、こんな事態を招かずにすんだのかもしれません」 サイファはグラスを静かに戻し、中のウィスキーを見つめながら言う。その視線に耐えかねた かのように、氷が溶けてカランと小さな音を立て、琥珀色の水面に細波が起こった。

アルティナは少し顔を斜めにして上目遣いで尋ねる。

「もしかして子供が嫌いなの?」

「好きとか嫌いとか考えたことはありませんね。でも、彼女の子供ならきっと可愛いでしょうし 、生まれてくる日を楽しみにしていますよ」

「サイファに似ちゃうかもしれないわよ?」

サイファはふっと小さな笑みを浮かべた。グラスに掛けた指先に力を込め、ゆっくり顔を上げると、優しく目を細めてここではないどこかを見やる。

「どちらに似ても可愛いですよ、きっと」

「そういうこと自分で言っちゃうんだー」

アルティナはからかうように茶化して言った。彼女には何の意図もなかったのだろうが、そんなふうに笑い飛ばしてくれたことで、サイファの気持ちは少しだけ軽くなった。

「お父さん、かぁ……」

不意に、アルティナは遠くに思いを馳せるようにぼんやりと呟くと、カウンターの上で腕を 組み、そこに埋めるように顔をのせた。彼女には生まれたときから父親がいなかったらしい。そ れを気にしている様子はこれまで見られなかったが、それなりにいろいろと思うことはあるのだ ろう。

「サイファはどんなお父さんになるのかしら」

「さあ、想像もつきませんね」

サイファはまるで人ごとのように答えた。現実を受け止めたつもりではいるが、父親になる実 感まではまだ持てずにいた。雲を掴むように捉えどころがなく、考えようとしても何も思い浮か ばない。それでも諦めているわけではなかった。

「でも、きちんと精一杯の愛情を注いで育てるつもりではいます。彼女も子供も幸せにしますよ 。それが自分の選択に対する責任ですから」

「サイファはきっといい父親になるわ。何かちょっと羨ましいかも」

アルティナは眩いばかりの笑顔を浮かべてそんなことを言った。その言葉のせいか、アルコールのせいか、サイファの胸は焼けるように熱くなった。

「まさか本当に酔いつぶしちまうとはな......」

「そんなつもりなかったわよ!」

カウンターに伏せて眠るサイファを見下ろしながら、マックスは深く息をついて腕を組んだ。 アルティナはなおも必死になって弁明する。

「だって酔った様子もなくて、顔も赤くなってなくて、全然普通に話してたのよ? なのに急にくて一んって寝ちゃって……。私だってビックリしたんだから!」

マックスはカウンターに置かれた飲みかけのウィスキーを指さして尋ねる。

「それ、何杯目だ?」

「最初がビールで、次がウィスキーで、そのあとボトルを入れてもらって水割りを作ったのがこ

れだから……多分3杯目だと思う」

アルティナは指折り数えながら答える。

マックスは溜息をつきながら頭に手をやった。

「酒が弱いってのは本当だったんだな。名家の坊っちゃんだから、酔ってみっともないところを 見せないように控えてるだけかと思ってたんだが……」

サイファはいつも弱いと言っているものの、飲んでも見た目上の変化はあまりなく、言い訳だと思われるのも仕方のないことだった。それでもマックスはサイファの意思を尊重し、無理に飲ませるようなことはしなかったのである。

「どうしよう?」

「まあしゃーねーな。俺が送っていってやるさ」

アルティナが心配そうに尋ねると、マックスは両手を腰に当てて筋肉のついた厚い胸を張った。 。仕方がないとは言いながらも、どことなく嬉しそうに見える。

「もしかするとガッポリ謝礼をもらえるかもな」

「それはないと思います」

まるで子供のように短絡的な発想を、エリックは後ろから冷ややかに否定した。しかし、マックスは聞いているのかいないのか、それに反応することはなかった。

「んじゃ、そろそろ帰るか!」

前を向いたまま威勢よくそう声を張ると、寝ているサイファの頭を軽くポンポンとたたく。それでもピクリとも瞼を動かさず、目を覚ます気配はまったくない。

「おぶっていくんですか?」

「美人は前、巨乳は後ろというのが俺のポリシーだ。美人で巨乳だと悩むところだが、サイファ の場合は迷うことなく前だな。いわゆるお姫様だっこというやつだ」

マックスはニッと白い歯を見せて、太い腕で抱きかかえるようなポーズを取った。エリックと アルティナは呆れた視線を送ったが、それでも彼は一向に気にすることなく、親指と人差し指を 顎に添えながら、眠っているサイファに顔を近づけてじっと覗き込む。

「こいつは寝顔も本当に綺麗だな。酔っぱらいとはとても思えん」

「……班長、お願いですから変な気は起こさないでくださいよ」

「おまえは一々くだらん心配をするな! これでも妻子ある身だぞ! 変な気を起こしても実行には 移さん!!」

大きなこぶしを握りしめながら真顔で力説するマックスに、エリックは深く息を吐いて体中から疲れを滲ませた。アルティナも同情するように頷きながら、エリックの肩にポンと手をのせた

「置いていきなさい」

不意に聞こえた鋭く冷徹な声。

マックスたちが振り向くと、奥から仕切りのカーテンをくぐってフェイが姿を現した。声と同様にその表情も厳しい。黒髪をさらりと後ろに払いながら、煩わしそうに気だるく溜息をついて

続ける。

「甘やかすことないわ。酒の飲み方も知らない坊やは一度痛い目を見た方がいいのよ」

「相変わらずフェイは厳しいなぁ。こいつ、ちょっといろいろあったらしくてな、参ってるみたいなんだ。今日くらい大目に見てやってくれよ」

マックスは軽く笑いながらサイファを庇ったが、フェイは同情することなく、さらに表情を厳 しくして刺すように睨んだ。

「落ち込んで酒に逃げる人間が一番危険なのよ」

「わかった、わかったよ」

マックスは顔の横で両手を広げ、ご機嫌ななめの彼女を懸命に宥めようとした。めずらしく腰の引けている彼を、エリックは不思議そうに見上げて尋ねる。

「置いて帰るんですか?」

「フェイは言い出したら聞かねぇんだ。俺も昔、酔いつぶれてきついお灸を据えられたことがある。あのときのことは、今でも思い出すだけで身の毛がよだつぜ」

マックスは目をつむって強く眉根を寄せながら腕を組んだ。

「それ以来、俺は酒の量には細心の注意を払うようになったってわけさ」

「......いや、とてもそうは見えませんけど」

エリックの脳裏にはひたすら豪快に飲みまくっているマックスの姿しか思い浮かばなかった。 一体どのあたりが気をつけているのかさっぱりわからない。

「でもいいんですかね。ラグランジェ本家の次期当主なのに……」

まさかこの酒場で彼の身に何かが起こるとは思わないが、名家の一人息子を酔い潰したまま残していくことに、エリックは多少の抵抗を感じた。しかし、マックスの反応はあっけらかんとしたものだった。

「ま、いいんじゃねぇか? こいつも大人なんだし」

たいしたことではないかのように軽く流すと、残っていたサイファの水割りに手を伸ばし、顔を上に向けて一気に飲み干した。空になったグラスを戻してエリックに振り向く。

「じゃ、俺らは帰るぞ。ティムはどうした?」

「まだ泣いてますね.....」

エリックはテーブル席を振り返って答えた。そこにはテーブルに突っ伏して嗚咽している大きな体があった。マックスは面倒くさそうに顔をしかめて呟く。

「あいつも置いて帰るか......」

「班長ーっ!!」

その小さな呟きが聞こえたのか、ティムはガバリと体を起こし、ますます大泣きしながら、あからさまに嫌がるマックスに駆け寄って縋りついた。

マックスたち三人が帰り、酒場は嵐が去ったように静かになった。

カウンターで眠っているサイファはそのままにして、アルティナは手際よく後片付けを始めた 。食器やグラスを洗い、テープルを拭いて床を掃く。もう他に客がいないため、明日に備えて開 店時の状態に戻すのだ。

一通りの作業を終えると、アルティナはカウンターに伏せているサイファの様子を窺った。結構うるさくしていたにもかかわらず、まだ安らかな寝息を立てて眠りこけたままである。呆れたように溜息をつくと、隣に腰掛け、頬杖をついてじっと観察するように見つめた。殴られた部分は下になっていて見えないこともあり、マックスの言うように、確かに酔い潰れているとは思えないくらい綺麗な顔をしていた。同時に、まるで子供のようにあどけなくも感じられた。

「ねぇ、母さん。サイファどうするの?居間のソファくらいしかないけど……」

アルティナは奥で仕込みをしているフェイに尋ねた。彼女は手を拭きながら出てくると、サイファに冷たい一瞥を送って言う。

「そこにそのまま置いておきなさい」

「ここに? だって夜中は冷えるわよ?」

「死にはしないわ」

フェイは情け容赦なく突き放した。どうなろうと知ったことではないという口調である。アルティナは眉をひそめて母親を見上げた。

「母さん、冷たい.....」

「そうじゃないとお灸にならないでしょ。ちやほやされてきたおぼっちゃんには、こうやって放置するのがいちばん効くのよ」

「でも、だからって……」

そう言いながら、なおも顔を曇らせるアルティナに、フェイはわざとらしく肩を上下させて面倒くさそうに言う。

「女二人だけのところに男を泊めるなんてできるわけないでしょう。それが危険だってことくらい、あなたもそろそろわからなければならない年頃よ」

「サイファはそんな人じゃないわ」

アルティナはキッと睨んで反論する。それでもフェイは冷淡な態度を崩さなかった。

「店でしか会ったことのないあなたに何がわかるの」

「わかるわよ!」

強気な光を湛えていた深い紺色の瞳がじわりと潤む。そこには目一杯の怒りと悔しさが滲んでいた。それを横目で見ながら、フェイは壁に寄りかかって腕を組んだ。

「男なんて簡単に信用するものじゃないわ。特に酒に酔った男はね」

Γ.....

アルティナは隣のサイファをちらりと見やる。確かに、酒に酔った男を信用するなという母親の言葉は理解できる。そして、ここにいるのは酒に酔った男だ。だが、それでもサイファは違うのだと、母親の言うような男ではないのだと、そう信じていた。

「ねぇ、アルティナ」

フェイは低い声で切り出した。呼ばれたアルティナが不安げに顔を上げると、彼女はおもむろ に目を閉じて、静かに言葉を繋いだ。

「サイファはやめておきなさい。あなたがつらいだけよ」

―_バン!

カウンターに両手を叩きつけて、アルティナは立ち上がった。上目遣いにフェイを睨むその 顔は、みるみるうちに、耳たぶまで真っ赤になっていく。

「何よそれ! そんなんじゃない!!」

腹の底から猛然と抗議をすると、下唇を噛み、くるりと背を向けて全速力で走り出した。居住側の階段を一段とばしで駆け上がり、自分の部屋に飛び込んでバタンと勢いよく扉を閉める。

「そんなのじゃ……ない……」

月明かりだけが差し込む暗い部屋で、アルティナは自分の言葉を確かめるように口先でそう繰り返すと、閉めた扉に背をつけて崩れるように座り込んだ。体を拾い集めるようにぎゅっと膝を抱え、そこに額をつけて顔を埋める。長い銀色の髪がさらさらと腕を掠めて流れた。

――そんなのじゃない、私は、ただ……。

アルティナはそれに続く言葉を、頭の中で懸命に探した。

サイファは薄暗い中で目を覚ました。小さな暖色の灯りがひとつだけ自分の上にともっている。それだけの光量でも、ここがフェイの酒場であることはすぐにわかった。しかし辺りには誰もいない。背中には柔らかい毛布が掛けられていた。

酔って寝てしまったのか――。

ゆっくりと頭を持ち上げると、それだけでズキズキと痛みが走る。少し気分も悪い。前髪を掻き上げながら、頭を掴むように押さえて顔をしかめる。

アルティナと話をしていたことは覚えているが、その途中からの記憶がない。醜態をさらしたくらいならいいが、言ってはならないことを口走っていないだろうか――そのことを考えるとぞっとするものの、今はどうすることもできない。杞憂であることをただ祈るしかなかった。

視線を落とすと、すぐそばに水の入ったコップと錠剤が置いてあることに気がついた。誰かの飲みさしというわけではないようだ。コップの下にはメモが挟まっている。

『二日酔いに効くから飲むように!』

そこに名前は入っていなかったが、アルティナの書いたものに間違いないだろう。いつも伝票を見ているので彼女の文字は知っているのだ。そのぶっきらぼうな優しさに、思わずふっと笑みがこぼれる。

サイファは素直にそれを飲んだ。

一息ついて腕時計に目を落とす。もう朝といってもいい時間だった。そろそろ日も昇ってくるだろう。帰らなければならない。このような状況下において、酒を飲み過ぎたなどという理由で仕事を休めば、どういう噂を立てられるかは目に見えている。これ以上、ラグランジェ家の品位を落とすことは本意ではない。

サイファはメモの下に『ありがとうございました』と返事を書くと、毛布を畳んでスツールの上に置き、なるべく音を立てないようにそっと外に出た。ゆっくりと閉めた扉の向こうから、カランカランとチャイムが小さく音を立てた。

ちょうど朝日が顔を出し、空は白みかけている。

早朝の空気には凜とした冷たさがあった。二日酔いの体には効き過ぎるくらいである。額を押さえて顔を上げると、細い階段を上がり、家路に向かって足を進めた。

「サイファ!!」

呼ばれたサイファが振り返ると、そこには、酒場からの階段を駆け上がって息を荒くしている アルティナがいた。エプロンこそつけていなかったが、着ている服は昨晩と同じもののようだ。 肩幅ほどに脚を開いてしっかりと立ち、膝丈のスカートをギュッと握り、上目遣いでサイファを 凝視している。会話をするには少し遠い距離だが、それ以上、彼女は間を詰めようとはしなか った。

サイファはにっこりと人なつこい笑顔を浮かべた。

「薬、ありがとうございました」

「うん……」

アルティナは目を伏せて消え入るような声で返事をした。そして、しばらく何か物言いたげに 視線を泳がせていたが、やがてキュッと下唇を噛みしめると、手にしていたレモンを大きく腕を まわして投げた。緩やかな弧を描いて手元に来たそれを、サイファは右手で受け止める。

「それも二日酔いに効くからあげるわ」

アルティナは少し睨むような目つきで無愛想に言った。息を切らせたせいなのか、それとも他の理由なのか、その頬にはほんのりと赤みが差しているように見えた。

サイファは顔の横にレモンを掲げたまま、柔らかく微笑んだ。

「また行きます、薄情者にならないうちに」

「ヤケ酒は禁止だからね!」

アルティナは怒ったように苦言を呈すると、不意に目を伏せ、彼女にしてはめずらしく躊躇いがちな弱々しい声で続ける。

「元気、出してね……」

思いがけない彼女の言葉に、サイファは少し目を大きくした。そして、ふっと表情を緩めて、 精一杯の気持ちを伝えるように、にっこりと満面の笑みを浮かべた。

その瞬間、アルティナは僅かに目を逸らした。だが、もう一度サイファと視線を合わせると、 大きく息を吸って、いつもと変わることのない清々しいくらいに晴れやかな笑顔を見せた。

「じゃあ、またね!」

「ええ、それではまた」

サイファもいつもと同じように簡潔な言葉を返した。手にしたままのレモンを軽く掲げると、 踵を返し、薄い朝靄のかかる帰路に足を進めていく。そのまま、立ち止まることも振り返ること もなく、規則正しいリズムを刻む靴音を、早朝の寂れた街に響かせた。 サイファはレイチェルの部屋の前に立ち、軽快に扉を叩いた。

しかし返事はない。

耳を澄ましてみるが、静まりかえったまま、物音一つしなければ、気配すらも感じられない。 窓の外から届く小鳥のさえずりだけが、やけに大きく聞こえる。

「レイチェル?」

僅かに語尾を上げて呼びかけると、静かに扉を開いて中を覗き込む。

ガランとした広い部屋。

その奥の机で、レースのカーテン越しに降りそそぐ柔らかな光を受けながら、彼女はうつぶせになっていた。背中が小さく上下している。顔は見えないが、おそらく眠っているのだろう。

サイファは音を立てないように足を進めた。

教本やノートを広げたその上で、彼女は子供のようなあどけない顔で眠っていた。細い金の髪は透きとおるようなきらめきを放っている。それを目にするだけで、サイファの口もとは自然と緩んだ。彼女の柔らかい頬にそっと指先を滑らせると、耳元に口を寄せて、慈しむような音色で名前を呼ぶ。

「レイチェル」

آل.....

レイチェルは眠たそうな声を漏らすと、睫毛を震わせてうっすらと目を開いた。気だるそうに体を起こしながら辺りを窺おうとする。その後ろから、サイファは椅子の背もたれ越しに彼女を抱きすくめた。ふわりと広がった甘い匂いが鼻をくすぐる。

「サイファ.....」

レイチェルは子猫のように目をこすりながら呟いた。そんな仕草も、サイファにはたまらなく 愛おしく感じられ、思わずくすっと笑みをこぼした。

「身体には気をつけてね。眠かったらベッドで寝た方がいいよ」

「ありがとう」

彼女は小さな花がほころんだように愛らしく笑った。だいぶ意識が明瞭になってきたようで、 今日が平日であることに気づいたのか、サイファに不思議そうな目を向けて質問する。

「お仕事は?」

「今日はお休み」

サイファはにっこりと答えた。今は仕事もさして忙しくはなく、また、事情を理解してくれていることもあり、希望をすれば簡単に休暇がとれるのだ。

「レイチェルは勉強していたの?」

「他に、することがないから」

彼女は少しためらいがちに、しかし笑顔を浮かべてそう言った。

万が一のことを考えて、彼女にはなるべく家の外に出ないようにと言いつけてあった。敷地外だけではなく、文字通りの家の外、つまり庭にも出ないようにという意味だ。いささか過剰な対

応ではあるが、アルフォンスもそれには積極的に同意した。ことレイチェルに関しては、サイファ以上に過保護なのである。

きっかけは、先日、隠れ家で聞いたティムの話だった。

彼からはその翌日に平謝りされた。話した内容は事実だが、ずっと誰にも言わず自分の心だけ に留めておくつもりだったらしい。まして何らかの行動を起こすつもりなど微塵もない、という ことだ。それは嘘ではないだろう。彼のことを疑っているわけではない。1年という期間、一緒に 仕事をしてきて、彼がどういう人間であるかはだいたいわかっているつもりである。

だが、彼以外の誰かがやるかもしれない。

ラグランジェ家に正面きって喧嘩を売ればどうなるか――王宮に勤めるものであれば、誰しもわかっているはずである。しかし、可能性はほぼゼロに近いだろうが、破滅覚悟ということもありうるのだ。用心するに越したことはない。

だが、彼女を閉じこめておきたい理由がそれだけではないことも、むしろそれ以上に怖れる理由があることも、サイファは自覚していた。

「ごめんね、しばらくは我慢して」

少し申し訳なさそうに言いながら、サイファは彼女の側頭部に頬を寄せ、机の上に開いたまま になっていた教本とノートに目を落とす。

そこにはラウルの文字が走っていた。

家庭教師が教え子の教本やノートに文字を書き入れることは、決して不自然な行為ではない。 現にサイファのものにもラウルの書いた文字がたくさん残っている。

ただ、彼女がそれを開いていたのは――。

サイファは小さな体を抱きしめる腕に、少し力を込めた。

「ラウルに、会いたい?」

レイチェルはビクリと体を硬直させた。何も答えないまま、口をきゅっと結ぶ。息さえも止めているようだ。細い指先だけが、膝の上で微かに動いた。

「正直に答えていいんだよ」

出来るだけ柔らかく、サイファはそう促した。

レイチェルは僅かにうつむくと、長い沈黙のあと、小さくも明確にこくりと頷いた。間髪入れず、いささか慌てたように言葉を繋ぐ。

「でも、会わない……から……」

「.....ごめん」

サイファは低い声を落とした。彼女の華奢な肩に顔を埋めると、抱きしめる腕にさらに力を込める。縋りつくように、逃さないように、縛り付けるように――。

その枷に、レイチェルは小さな手を重ねた。

「私、お母さまにお茶を淹れてもらってくるわ」

「……いや、今日は長くいられないんだ」

ほのかな温もりに心が融けていく。本当はずっといつまでもここにいたいが、そういうわけに はいかない。サイファは体を起こしてやんわりと断ると、不思議そうに小首を傾げるレイチェル に微笑み、その頭にぽんと手をのせた。

「祖父にお願いしないといけないことがあってね」

「ルーファス前当主に.....? 何を.....?」

「僕たちが幸せになるために必要なこと」

サイファは努めて明るく言った。しかし効果はなかったようだ。彼女は何か言いたげに小さな口を開くものの、一言も発することなく目を伏せて深くうなだれる。その表情は明らかに自分自身を責めているものだった。

「心配しなくても大丈夫だから」

サイファは優しく元気づけながら、隣に膝をついて覗き込む。

蒼の瞳は不安定に揺れていた。

それでも、彼女は幼い表情をきゅっと引き締め、真摯な眼差しを返して尋ねる。

「私は、何をすればいいの?」

「……嘘を、つき続けて」

少し考えた後、サイファは答えた。

それを15歳の少女に強要するのは酷かもしれない。しかし、他のことはサイファが可能な限り手を打つとしても、それだけは彼女自身がやるしかないのだ。失敗は決して許されない。彼女もそのことはすでに理解しているのだろう。決意を秘めた面持ちで、その重みを受け止めるようにゆっくりと頷いた。

飾り気のない地味な黒ワンピースに、控えめなフリルの白エプロンという、典型的な身なりのメイドに案内され、サイファはやや古めかしい応接間の扉の前に立った。いつもより力を込めて、その扉をゆっくりと二度叩く。

「入れ」

扉越しにも威圧感のある声が、端的に命令を下す。

サイファは扉を開き、一歩、足を踏み入れた。そこで深々と一礼して背筋を伸ばす。

「ルーファス前当主」

「堅苦しい挨拶はなしにしよう」

言葉を継ごうとしたサイファを遮り、ルーファスは自分の座るソファの向かいを勧めた。サイファは再び一礼して、示された革張りのソファに腰を下ろすと、眼前の男をじっと注視する。彼は鷹揚に背もたれに身を預けていたが、その姿には貫禄と風格があり、また、体勢にもまったく隙は感じられなかった。

油断ならない――。

とうの昔からわかっていたことだが、彼と対峙するといつも、そのことをあらためて実感させられるのだ。

「おまえが私のところへやってくるのは、何か頼みごとがあるときくらいだな」

ルーファスはどこか楽しげな声音を響かせると、口角を上げ、すべてを見極めるような抜かりのない視線をサイファに向けた。

体中が竦むような感覚。

サイファは唇を引き結んだ。それでも退くわけにはいかない。毅然とした表情の下に戦慄を押 し隠し、単刀直入に切り出す。

「私を近くラグランジェ本家の当主にしてください」

ルーファスの目が少し大きくなった。それは、単なる驚きというより、感嘆といった方が近い かもしれない。鼻から小さく息を漏らすと、抑揚のない低い声で尋ねる。

「なぜそれほどまでに急ぐのだ」

「父は……リカルド=キースは、当主の器ではありません」

サイファは臆面もなく答えた。

「私を見くびっているのか」

鋭い眼光がサイファを貫く。それが本当の理由ではないことを、ルーファスはすぐに見透かしたのだろう。だが、それも想定済みである。サイファは狼狽することなく落ち着きはらって続ける。

「事実には違いないでしょう」

ルーファスは険しい表情を崩さなかった。眉を寄せたまま睨み続けている。そして暫しの沈黙 の後、ゆっくりと口を開いて言う。

「おまえの思考はいつも理路整然としている。それゆえに読みやすい。だが、このところはどういうわけか必然性のない暴走が続いている。とち狂ったのかとも思ったが、実際に会ってみると以前とまるで変わっておらん。むしろ以前より聡明さを増しているようにも見える。そんなおまえが、くだらん失敗をしたり、考え無しの行動をとることはないだろう。そうなると考えられることは一つだ」

そこで言葉を切ると、サイファの瞳を奥底まで探るように見つめる。

「私の理解を超えるところで、おまえは何らかの計略を巡らせている……違うか?」

静かだが威圧感のある声で尋ねられ、それでもサイファは少しも怯むことなく、ふっと薄く笑みを浮かべた。

「たとえそうだとしても、訊かれて素直に答えると思いますか」

「答えなければ当主の座を認めない、と言ったらどうする」

ルーファスは悠然と肘掛けに頬杖をつきながら問いかける。

「あなたはそれほど小さな人間ではないでしょう」

「長く権力を手にするものは、皆、慎重なものだ。私とて例外ではない」

「だとしたら、答えたとしても認められることはなさそうですね」

サイファは爽やかに笑って言った。

しかし、ルーファスの表情はピクリとも動かなかった。ただ、全てを見透かすような青い瞳でじっとサイファを見据えている。そこには攻撃的な強い光が宿っていた。

「下手なハッタリだな」

「さあ、どうでしょう」

互いに正面から視線をぶつけ合い、絡め合い、探り合う。

息の詰まるような、長い、長い沈黙。

その重苦しい空気に押しつぶされないよう、サイファは気を張って耐える。先に目を逸らせたら、口を開いたら負けだと思った。だが、それは浅はかな考えであることを知る。

「いいだろう」

ルーファスが静寂を破った。

「今すぐというわけにはいかんが、結婚式と同時に就任ということで手を打とう」

「ありがとうございます」

サイファはその場で頭を下げる。しかし、これが礼を述べる類のものでないことは理解していた。ルーファスは負けたわけでも譲歩したわけでもない。挑戦状を叩きつけたのだ。ここからが戦いの始まりなのだろう。彼の獰猛さを増した瞳がそれを物語っていた。

「ただし、リカルドはおまえが説得しろ」

「たやすいことです」

サイファは無感情に答えると、立ち上がって一礼し、静かに応接間を後にした。

入れ替わりに、別の扉から大きな体が応接間に入る。無言で足を進めると、先ほどまでサイファが座っていた場所に腰を下ろし、深く溜息をついた。

「これを聞かせるために私を呼んだのですか?」

「面白かっただろう?」

ルーファスは口の端を吊り上げた。

「悪趣味ですね」

アルフォンスは腕を組んで窓の外に目を向けた。

すぐに、ルーファスの妻が二人分のチーズケーキと紅茶を運んできた。そのケーキはアルフォンスが手土産として持参したものである。

「このチーズケーキはなかなか美味しいですよ」

アルフォンスの機嫌はもう直っていた。嬉々として子供のように頬張る彼の姿を見て、ルーファスは呆れたように眉をひそめながらも、勧められるまま一欠片を口に運ぶ。

「……甘いな」

ぼそりとそう呟くと、フォークを置き、ストレートの紅茶を口に運んだ。

アルフォンスはゆっくりと手を止めた。

「あなたも、サイファには随分と甘いですね」

「不服のようだな」

淡泊な口調でそう聞き返すと、ルーファスはティーカップをソーサに戻し、皮の擦れる鈍い音を立てながら、背もたれに深く身を預けた。

アルフォンスはうつむいたまま答える。

「不思議に思っているだけです。ラグランジェ家の品位を貶めたサイファに何の罰も与えず、婚姻を認め、さらにあの若さで当主にするなど……」

「それだけの価値があるということだ」

ルーファスは答えた。それは全ての疑問に対する簡潔明瞭な答えである。それでもアルフォンスは感情的に受け入れがたく、眉間に皺を寄せ、迷いを含んだ複雑な顔を見せていた。

「おまえは自分の娘のことがあるせいで冷静に考えられないのだろう。あの二人の子供は、ラグランジェ家の飛躍のためには必要な存在だ。この調子で10人くらい作ってほしいものだな」

愉快そうにそんなことを言うルーファスを、アルフォンスは抑えきれない反感を滾らせながら 凝視した。彼に自覚はなかったものの、それは睨んでいるとしかいいようのない眼差しだった。

「気に入らんか」

「いえ……」

感情を抑えた声を落とすと、奥歯を噛みしめて目線を外す。彼は、勝算のないものに真っ向から対立するほど無謀ではなかった。

ルーファスは冷たく目を細めた。

「おまえはレイチェルにいつまでも無垢な子供のままでいてほしかったのだろう。だが、そんなものはとうになくなっていたのだ。あの子はおまえの願いを酌み取って、そういう振る舞いを続けていたにすぎん」

「子供を演じていたと?」

「おそらく無意識だろうがな。レイチェルは他人が自分に望むことを敏感に感じ取り、それに応 えようとするところがある。サイファは彼女におまえとは違うものを求めたのだろう。それが 女か、共犯か、それとも他の何かかはわからんがな」

そう言うと、彼は窓越しに遠くの空を仰ぎ見た。端整な横顔に柔らかな陽光が降りそそぎ、そ の立体感をよりいっそう際立たせている。

アルフォンスは僅かに顎を引いた。

「だからといってサイファの行為が正当化されるわけではない」

「感情に流されて目を曇らせるなということを忠告しただけだ」

ルーファスは空を眺めたまま素っ気なく答える。アルフォンスのことはあまり眼中にはないような素振りだった。おそらくはサイファのことを考えているのだろう。彼に入れ込む理由はわからなくはない。だが——。

「リカルドは良い傀儡だ、と言っていませんでしたか?」

その問いかけで、ルーファスはようやく視線を戻した。ゆっくりとアルフォンスに向き直ると 、深く息をついて答える。

「ああ、だが表に立つ者として、あまりにも威厳がなさ過ぎる。サイファの言うように当主の器ではない。ただ従順なだけが取り柄の出来損ないだ。人の好さで皆に好かれてはいるようだが、ラグランジェ家は畏怖される存在でなければならない。そろそろ打開策を考えねばと思っていたところだ」

重く厳しい口調で述べると、その身を深くソファに沈め、小さく眉をひそめて続ける。

「とはいえ、他の子供たちもリカルドと変わらんからな」

「性格はみんな母親似ですね」

リカルドには弟と妹が一人ずついるが、三人とも優しく穏やかな性質で、そのためかきょうだ

いの仲も良かった。しかし、そんなことは、ルーファスにとっては何の評価にもならないのである。

「性格だけではなく、頭脳も、魔導の能力もだ」

返す言葉の端々に、抑えきれない苛立ちが覗いていた。

「あいつは妻としては従順で申し分ない女だが、子供の母親としては物足りなかった。その点、 シンシアは優秀だ。あれを選んだ私の目に間違いはなかっただろう。彼女の聡明さを、サイファ は受け継いだのだからな」

ラグランジェ本家の次期当主は10歳になるまでに婚約者を定められる。当然ながら本人が選ぶ ことはできない。そんな事情もあり、ルーファスは、親に押しつけられた妻よりも、自らが選ん だシンシアの方を誇りに思っていた。それは、これまでも幾度となく本人が口にしてきたことで ある。彼はさらに調子に乗って続ける。

「おまえの娘の潜在能力も素晴らしいぞ。私の子供を産ませたいくらいだ」

耳を疑う言葉が聞こえた。アルフォンスは頭の中が真っ白になり、即座に反応できなかった。 膝に置いたこぶしを、青筋が立つほど強く握りしめ、低く震える声を絞り出す。

「冗談にしては、度が過ぎます」

「安心しろ、手を出したりせん」

ルーファスはさらりと流した。

彼の倫理観は、アルフォンスのそれとは大きく乖離している。必要があれば、そのくらいのことは何の躊躇もなく実行するだろう。だが、今回のことに関しては単なる例え話であり、願望はあるのだろうが、少なくとも現時点では本気ではなかったようだ。いまだに許しがたい気持ちは燻るものの、しつこく食い下がることに意味はないと思い、昂ぶった感情を抑えて話を本筋に戻す。

「サイファが何を考えているかわからないのに、当主に据えて良いのですか」

「退屈していたところだ」

ルーファスは含みを持った薄笑いを浮かべる。

「リカルドと違って、あいつは素直に言いなりにはならんだろう。対立は必至だな。おまえはど ちらにつく? 私か、サイファか」

挑発的に問いかけられ、アルフォンスはごくりと喉を鳴らした。少し考えてから、額にうっすら汗を滲ませつつも、今の気持ちを正直に答える。

「中立でいさせてください」

ルーファスはフッと鼻先で笑った。

「今はそれでもいいだろう。だが、どちらかを選択しなければならないときが、いずれ来るかも しれん。覚悟だけはしておけ」

「……楽しそうですね」

その声には無意識に角が立った。しかし、気づいているのかそうでないのか、ルーファスはまるで気に掛ける様子もなく、不敵に笑みを浮かべて答える。

「ラグランジェ家の幸福ために必要なことを為そうとしているだけだ」

その言葉をどこまで信じていいのか、アルフォンスには判断がつきかねていた。

「父上、ラグランジェ本家当主を退いてください」

「.....え?」

向かいに座るサイファの露骨な要求に、リカルドの目は点になった。思考が停止したのか、短い一言を発したきり、蝋人形のように固まって動かない。

同席していたシンシアは、鋭く険しい視線を向けて追及する。

「理由を言いなさい」

「ラグランジェ家のためには、その方が良いと判断しました」

「私を見くびらないでちょうだい。本当の理由を言いなさい」

眉を吊り上げて語気を強める彼女を見て、サイファはフッと小さく笑った。その小馬鹿にしたような態度に、彼女はますます怒りを露わにする。

「何がおかしいの?!」

「ルーファス前当主と同じことをおっしゃるので、つい」

厳しい一喝にも動じず、サイファは人当たりの良い笑みを浮かべながら、小さく肩を竦めて答えた。

それを聞いた瞬間、シンシアはハッと息を呑んだ。

「まさか、サイファあなた.....」

「はい、すでにルーファス前当主の承諾はいただいてきました」

サイファはさらりと答える。

シンシアの双眸に非難の色が浮かんだ。言いたいことはたくさんあったのだろう。だが、それらは胸に押しとどめたまま、ただひとつ重要なことだけを尋ねる。

「ルーファス前当主は……何と、おっしゃったの?」

「レイチェルとの結婚式と同時に就任だそうです」

「父が承諾しているのなら、私に反対する理由はないよ」

それまで二人のやりとりを見守っていたリカルドが、冷静に意見を述べた。

「あなた……」

「確かに私よりサイファの方が当主に向いているからね」

悲しげなシンシアを宥めるように、彼は人の好い笑顔で、ごく自然にそんなことを付言する。 そこからは悲嘆も自嘲も感じられなかった。あらためて真面目な顔になると、サイファを見つめ て続ける。

「だけど、おまえはそれでいいのか? 当主といってもラグランジェ家を思いどおりに動かせるわけではないんだよ。何かと煩雑なことも多い。私にはシンシアがいるので助かっているが、今のレイチェルではまだおまえの助けにはならないだろう」

「わかっています」

そんなことは以前から理解していたし、覚悟もしていた。今のような状況にならなかったとしても、いずれ当主になることは決まっていたのだ。多少、その時期が早まっただけのことである

「サイファ、あなたはレイチェルを守るために、出来る限りの力を手に入れようとしているのね?」

シンシアは静かに言う。

思いもよらなかった鋭い洞察に、サイファは目を大きくした。薄く微笑んで溜息をつくと、「母上には敵いませんね」と言いながら、両の手のひらを上に向けて見せる。考えのすべてを見透かされたわけではないが、それでも事情も知らずにここまで言い当てた母親には、素直に感服するより他になかった。

「あなたが責任を感じて、彼女を雑音から守ろうとする気持ちはわかるわ。けれど、そんな個人 的事情で当主になろうとするのは間違っている。別の方法を考えなさい」

彼女の言い分はもっともだった。反論の余地はない。だが、自分が間違っているとわかっていても、ここで引き下がるわけにはいかないのだ。

「申し訳ありません。しかし、この決定を覆すつもりはありません。私は当主になります。ラグランジェ本家当主として、年齢や経験不足を言い訳にせず、父上や母上以上に良い仕事をすると誓います」

「わかった」

「リカルド……」

シンシアの声には同情が滲んでいた。

「父が承諾しているんだ。決定事項だよ。それに、レイチェルを守りたいというサイファの気持ちを尊重してやりたいとも思う」

リカルドは優しく包み込むように微笑んだ。観念したのか、シンシアはもう何も言わなかった

「ありがとうございます」

サイファは淡々と礼を述べると、精一杯の感謝を込めて深々と頭を下げた。長くはない金色の 髪がさらりと頬を撫でる。ふと目元が熱を帯びていくのを感じた。

また、両親を裏切ってしまったのかもしれない。

それでも後には引けないのだ。

レイチェルと生まれてくる子供を守るため、出来る限りの手を打っておかなければならない。 単に誹謗中傷を軽減するためならば、ここまではしなかっただろう。それよりももっと懸念すべ き重大なことがあるのだ。

子供の髪と瞳が、ラグランジェ家としてはありえない色になるかもしれない――。

ラグランジェ家の人間は誰しも、これまで例外なく青い瞳と金色の髪を持っていた。それは一族のみで子孫を繋いできた結果であり、ラグランジェ家の誇りでもあった。

だが、違う血が混じれば、その伝統も崩れる。

さらに悪いことに、ラウルの瞳も髪も濃色であり、遺伝的にはレイチェルのものより強い。つまり、子供の髪や瞳の色は、ラウルのものに近くなる可能性が高いのだ。

もし、そうなったら――。

彼女と子供を守りきれるだろうか。いや、守らねばならない。そのためにここまでのことをしているのである。弱気になりそうな自分を心の中で叱咤すると、サイファは小さく息をつき、表情を凜と引き締めて顔を上げた。

「母上、レイチェルの方の準備は進んでいるのですか?」

「いいかげん馬鹿みたいに何度も同じことを訊かないの」

毎日のように繰り返されるサイファの質問に、母親のシンシアはうんざりしたように答えた。 ティーカップをソーサに戻して小さく溜息をつく。

テーブルの上にはシンプルな朝食が並んでいる。

サイファは小さく肩を竦めると、アプリコットジャムのトーストを口に運んだ。その甘酸っぱ さを味わいながら、三日ばかり会えないでいるレイチェルへと思いを馳せる。

二人の結婚に許可が下りてまもなく、結婚式の準備が始まった。

レイチェルはまだ15歳であるが、子供が生まれる前に式を挙げたいというのが、双方の両親の一致した意見だった。幸い母子ともに健康で、安定期に入れば問題ないだろうという医師の見解もあり、その方向で話が進められることになったのである。サイファとしては身重の彼女に負担をかけたくなく、無理に式を挙げなくてもいいのではないかと思ったが、同時に、ラグランジェ家としてはそうもいかないのだということも理解していた。

式の日取りは、レイチェルの身体の都合を優先して決められた。つまり、安定期に入ってまもなく、おなかが大きくなりすぎない時期にということである。

「きれいにドレスを着せてあげてくださいね」

「はいはい、それももう耳にタコができそうよ」

この国のしきたりで、新郎は新婦の花嫁姿を当日まで見てはならないことになっている。そのため、ウェディングドレスについてはアリスとシンシアに任せるしかなかった。おなかが目立ってきたこともあり、ドレスが着られなくなったりしないのか、窮屈で苦しくなったりしないのかなど、サイファの心配は尽きない。

「私たちに任せて、あなたは落ち着いてどっしりと構えてなさい。まもなく当主になろうという 人が、おろおろと狼狽えていてはみっともないわ」

「レイチェルのことだけは特別です」

悪びれもせずに答えるサイファに、シンシアは溜息まじりに呆れた視線を送る。

「そんなことで胸を張ってどうするの。自慢できることじゃないでしょう。今になって心配する くらいなら、初めから妊娠させるようなことをしなければ良かったのよ」

「申し訳ありません。反省しています」

責められることにはもう慣れていた。誰に何を言われようとも、素直に非を認めて謝罪するだけである。迷いはなかった。そのことで不道徳な人間という烙印を押されたとしても、レイチェルさえ本当のことをわかってくれていれば十分だった。

サイファは残りの紅茶を飲み干し、ティーカップを戻すと、薄暗い窓の外に目を向けた。鈍色 の空からは冷たい雨が落ちている。

「あさって、晴れるといいんですが――」

結婚式は教会の中で行うため、雨でも特に支障があるわけではないが、せっかくの門出の日で

あり、やはり晴れてほしいと願う気持ちは大きかった。

サイファの祈りが通じたのか、結婚式当日は雲ひとつない突き抜けるような晴天だった。二人 を祝福するかのように、青い空から眩いばかりの光が降りそそいでいる。時折、小鳥のさえずり も聞こえてきた。

二人が式を挙げる教会は、王宮の隅にひっそりと佇んでいた。小さくて古めかしい建物で、普段はあまり人の寄りつかない寂れた場所だが、その日はいつになく華やいだ空気が流れていた。

結婚式は、双方の家族のみが列席するささやかなものである。披露宴も行わない。ラグランジェ本家としては異例のことだった。本来であれば、本家で盛大なパーティを開き、サイファの当主就任の告知とともに、二人を皆に披露するところだろう。だが、今回は事情が事情であり、あまり騒がれたくないというラグランジェ家の意向に加え、レイチェルの体調の心配もあり、パーティは行わず告知だけに留めることになったのである。

「レイチェルの身支度が終わったわよ」

シンシアとアリスが連れ立ってレイチェルの控え室から出てきた。二人とも落ち着いた濃色のドレスを身に纏っている。教会での挙式ということで、華美なものは控えなければならないのだ。扉の前で今か今かと待ち構えていたサイファに、シンシアは少しだけ口もとを斜めにして言う

「私たちはあなたの控え室にいるから、何かあったら呼んでちょうだい」 「ありがとうございます」

ひらひらと手を振りながら去りゆく二人に、サイファは深く丁寧にお辞儀をした。

ようやくレイチェルの花嫁姿を目にすることができる――。

サイファの胸は高鳴った。

ごくりと唾を飲み込んでから、ドアノブに手を掛けてまわし、ゆっくりと扉を押し開ける。ギ 、ギギ……と控えめな軋み音が響いた。

白い光が溢れる小さな部屋。

そこに、レイチェルは後ろ向きで立っていた。まるでスローモーションのように、そっと、サイファの方へと体を向けていく。

ロングトレーンの純白のドレスは、肌の露出がほとんどなく、胸元には上品なレースがあしらわれ、また、幾重にも重ねられたオーガンジーには丁寧に刺繍がほどこされており、クラシカルな品格を感じさせるものだった。腰の高い位置からふんわりと広がる形のためか、心配していたおなかはまったくといっていいほど目立たない。

光に包まれながら、レイチェルは甘く愛らしく微笑んだ。

サイファは小さく息を呑む。

まるで夢の一場面でも見ているかのような非現実感に包まれた。目の前にいるのは、花嫁というよりも、光とともに地上に降り立った天使か妖精のようだと思う。

「サイファ……?」

レイチェルは小首を傾げてきょとんと尋ねた。澄んだ瞳をまっすぐに向け、不思議そうな顔のまま、じっと微動だにせず反応を待っている。

「……すごく、きれいだよ」

「ありがとう」

やっとのことで言葉を発したサイファに、レイチェルはいつもと変わらない可憐な声で応じた。それを聞いて、サイファはなぜだか少し安堵した。夢でも幻でもなく、現実なのだと認識できたからかもしれない。ふっと小さく笑みを浮かべ、彼女へと足を進めながら問いかける。

「おなかは大丈夫? 苦しくない?」

「ええ、大丈夫」

レイチェルはニコッと答えた。その愛くるしい無垢な笑顔を眺めながら、サイファは優しく目 を細めると、そっと慈しむように彼女の柔らかな頬に手を置いた。

――ガチャリ。

ドアノブのまわる音がして、扉が開いた。

シンシアたちが迎えに来たのかと思ったが、振り返った先にいたのは子供だった。レイチェルの隣家に住む少年、レオナルドである。彼は浮かない表情でピンクローズの花束を抱えていたが、サイファの姿を目にすると、ハッと息を呑んで顔をこわばらせた。嫌悪感をあらわに奥歯を噛みしめて睨みつける。

「何でおまえがここにいるんだよ」

「おまえこそ呼んだ覚えはないぞ」

サイファは冷ややかに見下ろして言い返す。

レオナルドはムッとして頬を膨らませた。しかし、すぐさま真剣な眼差しをレイチェルに向けると、すっと小さな手を差し伸べて言う。

「レイチェル、行こう!!」

「行こうって……どこへ?」

レイチェルがきょとんとして聞き返すと、レオナルドは強引に彼女の手を掴んだ。

「どこか遠いところへ行って二人で暮らそう! 親が勝手に決めただけの結婚なんてすることない!! こんな腹黒で最低なやつとじゃ、幸せになんかなれないよ!!!」

彼は真剣だった。

それゆえにレイチェルは戸惑っていた。あまりにも突拍子もないことを言われ、そしてその思いの強さを目の当たりにして、どうしたらいいのかわからないという心情がありありと感じられた。彼女は心苦しそうにレオナルドを見つめると、蒼の瞳を揺らしながら、薄紅を引いた小さな唇を開いて言う。

「ごめんなさい、私、サイファと結婚するから……」

「聞いただろう?もう帰れ」

サイファは少年の手首を掴んで彼女から引き離そうとする。

だが、レオナルドは従わなかった。触れることさえ許さないといわんばかりに、思いきりサイファの手をはねのけると、一歩下がって上目遣いでキッと睨みつける。

「こんなの無理やり言わされてるだけだ。本心じゃない。レイチェルはおまえなんかと結婚したくないんだ。レイチェルのことが好きだったら自由にしてやれよ!!」

レオナルドの言葉はすべて思い込みの産物にすぎない。レイチェルがこんな相談をするはずはないのだ。そのことはわかっている。しかし、サイファの心には、確実に深く突き刺さるものがあった。

「わかったようなことを言うな」

感情を押し殺した声でそう言うと、レオナルドの小さな肩に手を掛け、ゆっくりと背後の扉に押しつけた。怯えた色が覗く双眸を、まじろぎもせずに凝視する。

「レイチェルに身勝手な考えを押しつけているのはおまえだろう。二人だけで遠いところへ行くだと?何の力も持たない子供のおまえが、レイチェルを守っていけるなどと本気で考えているのか」

レオナルドの顔は凍りついていた。足も震えているようだった。それでも、ごくりと唾を飲み込むと、額に汗を滲ませながら、精一杯の虚勢を張って言い返す。

「おまえみたいに何でも力ずくで奪うのが偉いのか?! レイチェルの気持ちを無視して自分のものにして、父親を蹴落として当主の座を奪って......そんなの最低だ!!」

「理想だけでやっていけるほど世間は甘くないんだよ」

サイファの瞳に冷たく鋭利な光が宿った。

ビクリ、とレオナルドの体が竦んだ。

それでも彼は引き下がらなかった。両肩を押さえつけられたまま首を伸ばし、奥のレイチェル を見上げて必死に訴えかける。

「レイチェル、これがこいつの本性なんだ! 逃げよう! いま逃げないと絶対に後悔するから!!」

レイチェルは曖昧に視線を落としたが、胸元に手を置くと、意を決したように唇をきゅっと引き結んだ。まっすぐに彼を見据えながら、今度は毅然とした口調で言う。

「私、サイファと一緒にいるって決めたの。私自身が決めたの」

「おまえには勝ち目なんて最初からなかったんだ」

サイファの言葉が追い打ちをかける。

レオナルドはカッと顔を真っ赤にすると、持っていたピンクローズの花束で、サイファの頬を 思いきり横殴りにした。反射的に顔をしかめたその目の前を、千切れた薄紅色の花びらがはらは らと静かに舞い落ちていく。

「後悔しても知らないからな!」

レオナルドは大粒の涙をこぼして捨て台詞を吐いた。すでにボロボロになっている花束を床に叩きつけ、控え室から勢いよく飛び出していく。足音はあっというまに遠ざかり、やがて聞こえなくなった。

開け放たれた扉がゆっくりと戻り、ガシャンと乱暴な音を立てて閉まる。

息を呑んで立ちつくしていたレイチェルは、その音で我にかえり、慌ててドレスの裾を持ち上げてサイファに駆け寄った。心配そうに顔を曇らせて横から覗き込む。

「サイファ、大丈夫?」

「たいしたことないよ」

サイファは軽く答えながら、痛みのある顎の下あたりを指先で触れてみる。うっすらと血がついた。どうやら少し切れているようだ。しかし、先ほど自分の言ったとおり大したことはないだろう。レイチェルに振り向くと、きまり悪そうに苦笑して肩を竦める。

「ごめんね、大人げないところを見せてしまって」

「ううん、謝らなければいけないのは私の方なの」

レイチェルは小さく首を振って言った。思いつめた表情で目を伏せる。瞼は微かに震えていた。その原因は先ほどのことだけではないだろう。自分のせいで酷い目にばかり遭わせてしまって、大変なことを背負わせてしまって――そんな彼女の苦悩は、あの日以来ずっと続いていたのだ

「やっぱり、私は.....」

「駄目だよ」

サイファは彼女の話をピシャリと遮ると、眉根を寄せ、その潤んだ蒼の瞳をじっと射抜くよう に見つめた。

「レイチェル、君のことは誰にも渡さない。君自身にもね」

随分なことを言ったという自覚はあった。しかし、それは偽りのない本心でもある。ラウルにも、レオナルドにも、ルーファスにも、他の誰にも渡すつもりはない。そして、彼女自身にも、間違った償いをさせるつもりはない。

「この結婚は僕たちの幸せのために望んだことだ。君を救うために仕方なく選択したわけじゃない。だから君がいなくなっては駄目なんだよ」

サイファは真剣にそう言い聞かせると、少しふくらみのあるおなかにそっと手を置く。

「きっと幸せにするから。この子も、君も、そして僕自身もね」

それは真摯な誓いであり、確固たる決意であり、心からの祈りでもあった。

一転して悪戯っぽい笑みを浮かべると、柔らかい声音で、しかしはっきりとした自信を覗かせて尋ねる。

「僕の判断が一度でも間違ったことがあった?」

レイチェルはふるふると首を横に振った。それでもまだ表情は硬く、その瞳には仄暗い陰が落ちている。サイファの言ったことを理解していないわけではないだろう。ただ、そう簡単に自責の念を拭うことができないのだ。

「ねえ、レイチェル」

サイファはゆっくりと呼びかけた。

「もし僕のことを思ってくれるのなら、いつも、どんなときでも、僕の隣で笑っていてくれないかな。君の笑顔があれば、僕は、頑張ることができるから」

「.....うん」

レイチェルは微かな声を落とした。そして、気持ちを切り替えるように小さく呼吸をすると、 顔を上げ、まわりの人間までも幸せにしてくれるような、あたりの空気までもが優しくなるよ うな、ふわりとあたたかな笑みをその満面に溢れさせた。

それは、まさにサイファが望んだものだった。

胸が詰まるのを感じて目を細めると、身を屈め、彼女とおでこをコツンと合わせた。

サイファはわかっていた。

自分の要求したことは、簡単なようでいて、とても酷なものだということを。それでも彼女は 従い続けるだろう。他の選択肢はないのだ。サイファに従順な彼女にとって、それは呪縛にも等 しいものなのかもしれない。

けれど——。

自分にはそれくらいのことを求める権利はあるだろう、それくらいのことを望んでも許される だろう、そんな傲慢なことを心の奥底で密やかに思った。

開放された入口から白い陽光が溢れ込み、赤い絨毯を鮮やかに照らしている。

その奥にある、年老いた神父が立つ祭壇の前に、サイファとレイチェルは並んで立っていた。 足下にはステンドグラスの幻想的な光が落ち、純白のドレスの裾を色とりどりに染め上げている

両脇に並んだ古びた木製の長いすには、双方の両親がそれぞれ座っていた。神聖な場所に相応 しい表情で、しかし、時折いとおしむような笑みを覗かせ、主役の二人を見つめている。

神父は誓いの言葉を読み上げ始める。

「サイファ=ヴァルデ=ラグランジェ、あなたはいまこの女性と結婚し、神の定めに従って夫婦となろうとしています。あなたはその健やかなときも、病めるときも、豊かなるときも、貧しきときも、この女性を愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、そのいのちの限りともに生きることを誓いますか」

「誓います」

サイファは厳かに答えた。

神父は続けてレイチェルに読み上げる。

「レイチェル=エアリ=ラグランジェ、あなたはいま――」

その誓いの言葉を聞きながら、サイファはそっとレイチェルを流し見た。ここに来るまでの道のりを思い返し、胸に熱いものがこみ上げる。今日という日を幼い頃からずっと待ち続けてきたのだ。少し形は変わってしまったが、その輝きが失われたわけではない。

「誓います」

レイチェルは前を向いたまま、躊躇うことなく凜とした声で答えた。

「結婚の誓約の印に、指輪の交換をいたします」

神父が二人の結婚指輪を取り出す。それは上品な輝きを放つプラチナ製で、内側に文字が刻ま されただけの、シンプルで飾り気のないものだった。 サイファは小さい方の指輪を取った。見た目よりも重く感じるのは、込められた想いと責任によるものなのかもしれない。こんなもので彼女を縛りつけようなどと考えているわけではないが、こんなものに縋りたくなる気持ちも心のどこかにあった。彼女の左手を取ると、その薬指にゆっくりと指輪を嵌めた。

今度はレイチェルが指輪を取り、たどたどしい手つきでサイファの薬指に嵌めていく。やや不格好におさまったそれを見て、レイチェルはくすっと笑った。つられてサイファも笑った。

神父は場を引き締めるためか、こほんと小さく咳払いをしてから次の段取りに移る。

「それでは、誓いの口づけを――」

その言葉を合図に、二人は同時に見つめ合った。

サイファは彼女の両肩に手を掛ける。

冷静を装ってはいたが、心臓は壊れそうなほどに強く打っていた。これまで生きてきた中で、 いまこの瞬間ほど緊張したことはなかったと彼は思う。

「目を閉じて」

囁くような声でそう言うと、彼女は素直に従い、瞼を下ろしてそっと瞳を閉じた。

サイファはゆっくりと身を屈め、彼女に顔を近づけていく。

二人の唇が初めて触れ合った。

ゴーン、ゴーン——。

荘厳な鐘の音が二人を祝福するように響き渡る。

サイファとレイチェルは手を取り合って赤い絨毯の上を歩き、光の溢れる扉の向こう側へと足を踏み出した。頭上には雲ひとつない透き通った青空がどこまでも広がっている。そこから降りてきた優しい風に、教会のまわりに咲いている草花が小さくそよいだ。

ここからが新たな始まり――。

自分たちは新しい家族を作っていく。楽しく幸せなことが数多くあるように、そう努力するつもりだが、現実としてそればかりではすまないだろう。困難は確かに存在する。それでも誓ったのだ。どんなときも助け合い、愛し合い、ともに生きていくのだと。

サイファは繋いだ手をしっかりと握りしめた。

それに応えるように、彼女の手にも強く力が込められた。

昼下がりの白い日射しが、タイル張りの床を強く照らしている。その上に引かれている薄い クリーム色のカーテンは、小さな風を受けて緩やかにそよぎ、そこから広がる柔らかな光もほの かに揺らめいた。

世間から切り離されたような場所。

ラウルは一人でそこにいた。広くはないスチール机に向かい、頬杖をついて本を読んでいる。 限りなく無に近い静寂の中で、規則的にページを繰る音だけが、その存在を主張していた。

レイチェルとの約束の日から4年が過ぎた。

家庭教師終了とともに常勤に戻ったラウルは、これといった用件もなく、医務室を離れることはほとんどなくなっていた。せいぜいが報告書の提出と会議のときくらいである。あとは滅多に来ない患者を待ち、日がな一日、読書にふけったりカルテの整理をしたりするだけだった。

会わないというのが彼女の答えなのだと、あのときはそう考えた。

しかし、今になって思えば、それは事情を知ったサイファの判断だったのだろう。それまで何かにつけ医務室を訪れていた彼が、その日以来、急にぱったりと来なくなったのである。レイチェルとの関係を知られてしまったとしか考えられない。

しかし、二人は予定どおり結婚し、子供も生まれたと聞いた。

おそらくサイファは全てを承知の上で、彼女を受け入れることを選んだのだ。意地や体面もあったのかもしれないが、それだけではなく、彼女への想いを失わなかったのだと信じたい。

レイチェルは、今、幸せなのだろうか――。

何度も繰り返し心の中で問いかけてきたことだが、答えが返ってくるはずもなく、また、それを知るすべも持ち合わせていない。机の上に佇む一輪挿しのピンクローズを見つめながら、ラウルはただ祈ることしかできなかった。

ガラガラガラ――。

ノックもなく、唐突に扉の開く音が聞こえた。

患者が来るのは何週間かぶりである。このところ流行りだした風邪の影響で、他の王宮医師たちはみな手一杯になっているのかもしれない。そんなことを思いながら、ラウルは本を閉じて扉の方へと振り向いた。その瞬間、ハッと息を呑んで凍り付く。

「やあ、久しぶりだな」

そこにいたのはサイファだった。人なつこい笑顔を見せながら、軽く右手を上げている。平日の昼下がりという時間からも、魔導省の制服を身に付けていることからも、おそらくは勤務中なのだろう。返答を待たず勝手に医務室へ入ると、パイプベッドに腰を下ろして両手をついた。

「ここはいつ来ても変わらないな」

「……何をしに来た」

「ラウルの顔を見たくなってさ」

サイファはニコッと邪気のない笑みを浮かべて答える。

しかし、そんなことを素直に信じられるはずもなかった。彼と顔を合わせたのは4年ぶりである。これまでずっと避けておきながら、突然この医務室にやってきたのは、何らかの目的があるとしか考えられない。思いきり訝しむ視線を送るが、サイファは気にする様子もなく受け流した。「今も相変わらず?」

軽い口調でそう尋ねると、机上のピンクローズに目を向ける。

それだけで、ラウルには何が言いたいのか察しがついた。しかし、その意図するところまでは わからない。今になって過ちを咎めるつもりなのだろうか、それとも未練がましい自分を嘲笑う つもりなのだろうか。表情は無意識のうちに険しくなっていく。

そんなラウルを見て、サイファはふっと小さく微笑んだ。

「僕は幸せだよ」

「おまえのことなどどうでもいい」

「レイチェルも幸せだよ……多分ね」

ラウルは眉をひそめた。口を閉ざして背を向けると、先ほどまで読んでいた本を開く。しかし 、意識は彼の方に奪われたままで、文字を追っても全くといっていいほど頭には入ってこない。

「いらん」

「そう言うな。見たいだろう? レイチェルの娘を」

淡々とした口調だったが、「レイチェルの」という部分にだけ、僅かながら力がこめられているように感じた。それで気持ちが動かせると計算していたのだろう。その小賢しさを腹立たしく思うものの、ラウルはまんまと術中にはまったことを自覚していた。

「アンジェリカっていうんだ」

「今度、娘を連れてくるよ」

「……大層な名前をつけたな」

「これほど相応しい名前はないよ」

やや呆れ口調のラウルに、サイファは軽く笑って応じた。

アンジェリカとは「天使のような」という意味の言葉である。それを臆面もなく名付けたうえ、相応しいとまで口にするなど、相当な親馬鹿といっても過言ではない。もっとも、レイチェルに対する保護者のような溺愛ぶりを見てきたせいか、彼の子煩悩もすんなりと納得できた。

「ラウルもあの子を可愛がってくれよ」

「おまえの娘など可愛がる義理はない」

「アンジェリカを見たら、そうは言えないと思うけどね」

その言葉に何か引っかかるものを感じ、ラウルは怪訝に眉を寄せて振り返る。

「どういう意味だ」

「それくらい可愛いってことさ」

サイファは軽くあしらうように答えると、パイプベッドから立ち上がり、涼やかな視線を流して口もとに微笑を浮かべた。また来るよ、とその口で言い残し、扉から出ていく。タイルを打ちつける乾いた靴音は、一定のリズムで遠ざかり、消えていった。

医務室に静寂が戻った。

窓からふわりと滑り込んだ風が、クリーム色のカーテンを揺らしながら、微かな木々のざわめきを運んでくる。ラウルはもう誰もいない扉を見つめて溜息を落とすと、頬杖をつき、読みかけていた本を開いてページを繰った。

自らの宣言を違えることなく、サイファは翌日からたびたび医務室を訪れるようになった。ラウルがいくら拒絶しても懲りる様子はない。仕事の合間などにふらりとやってきて、とりとめもない雑談をして帰っていくのだ。

まるで昔に戻ったようだった。

ただ、話の内容は昔と少し違っていた。レイチェルや仕事の話は相変わらずだが、それに加え、娘の話を嫌というほど聞かされるようになった。あんなことを言っただの、こんなことをしただの、たわいもない出来事を嬉しそうに楽しそうに話すのだ。

彼の考えがわからなかった。

自慢のつもりなのか、報復のつもりなのか、それとも単純に幸せに浸っているだけなのか―― いずれにしても、ラウルがそれを問いただすことなど出来るはずもなく、ただ彼の作った状況に 流されるしかなかった。

しかし、一ヶ月ほどして、サイファはまたぱったりと来なくなった。

来てほしいわけではない。

ただ、何の前触れもなく急に途絶えてしまうと、心配になるのも当然のことだろう。今回は4年前と違って心当たりがないので、なおさらそう思うのかもしれない。

いきなり来たり、来なくなったり、本当に勝手な奴だ――。

何もない空っぽな日常の中で、気がつけばラウルはそのことばかり考えていた。しかし、それでも答えに辿り着くことはなく、ひたすら悶々とするだけだった。

「やあ、しばらく来られなくて悪かったな。寂しくて泣いてたんじゃないのか?」

来なくなってから三ヶ月が経ち、いいかげん諦めようとしていたところへ、サイファが何事もなかったかのようにひょっこりと姿を現した。清々しいばかりの笑顔でそんな憎まれ口をたたくと、勝手に中へ入り、迷いなくパイプベッドに腰を下ろす。

「静かになってせいせいしていた」

ラウルは冷たい視線を流して言い返した。しかし、サイファは懲りもせずにっこりと微笑むと 、芝居がかった大きな抑揚をつけて話し始める。

「別にラウルのことを避けていたわけじゃないぞ。この三ヶ月は本当に忙しくて大変だったんだよ。王子の見初めた女性を口説き落としたり、頭の固い老人連中に彼女を認めさせたり、それから――」

「そんなことまでやっているのか」

ラウルは呆れ半分に口を挟んだ。どう考えても魔導省の仕事を逸脱しているようにしか思え

ない。そういうことは王家に仕える者たちの役割であり、少なくとも、ラグランジェ本家当主という立場の人間がすべきことではない。

「仕事ではなく個人的に引き受けたんだよ。彼女を説得できるのは僕だけだろうしね。それに、 未来の王に恩を売っておいて損はないだろう?」

そう言うと、サイファはニッと口角を上げた。

ラウルは無表情のまま小さく溜息をつく。

「騙されたその女が不憫だな」

「人聞きの悪いことを言うなよ。微妙な言葉の綾はあったかもしれないが、少なくとも嘘をついたつもりはないからな。まあ、どちらにしても自分のために利用したのは事実だし、責任を持って彼女の面倒は見るつもりだけどね」

悪びれもせずに平然とそんなことを言うと、急にパッと顔を輝かせて振り向く。

「そうそう、近いうちにアンジェリカを連れてくるよ」

「いらんと言ったはずだ」

「本当はもっと早く連れてきたかったんだけど、けっこう人見知りが激しくて、王宮へ行くの をずっと嫌がっていてね。最近になってようやく承知してくれたんだ」

嬉しそうに声を弾ませるサイファに、ラウルはうんざりして再び溜息をついた。

「性格はおまえに似なかったようだな」

「.....そうだな」

サイファは視線を落として薄く笑った。そして、目を閉じて小さく息をつくと、安っぽい軋み音を響かせながら、パイプベッドにゆっくりと上半身を横たえた。白いシーツに浅い皺が走る。後ろ向きなので表情は見えないし、何のつもりなのかわからないが、体調が悪いわけではないだろうと思う。

「用がないのなら帰れ」

ベッドの上に投げ出された背中に、ラウルは冷ややかな声を送った。

しかし、サイファは背を向けたまま起き上がろうとしない。

「久しぶりの逢瀬なのにつれないことを言うなよ」

「ふざけたことを言ってないでとっとと出ていけ」

ラウルはムッと気色ばんで立ち上がると、ベッドに横たわるサイファの腕を乱暴に掴もうと する。しかし、サイファの動きの方が一瞬早かった。

パシッ----。

伸ばされたラウルの腕を、逆にサイファが素早く掴んだ。そのまま、見た目からは想像もつかないほどの強い力でギリギリと締めつける。痛いとさえ思うくらいだった。眉をひそめて見下ろすラウルを、仰向けになった鮮やかな青の双眸が捉えている。じっとまっすぐに、奥まで探るように、そして、どこか物憂げに——。

「もうすぐ会議に行かねばならない」

ラウルは淡々と理由を述べて解放を訴えた。サイファの手を振り払うことなどたやすいはず だが、彼の瞳を見ていると、なぜだかそうすることはできなかった。 「逃げるのか?」

「本当のことだ」

「それなら仕方ないな」

意外にも、サイファは拍子抜けするくらいあっさりと引き下がった。ラウルの手を放して自らの上体を起こすと、少し長めの前髪を掻き上げながら、引き寄せた腕時計に目を落とす。

「もしかすると、その辺でばったり会うかもな」

「何の話だ」

ラウルは少し語調を強めて尋ねた。これ見よがしに時間を確認し、あえて口に出したということは、おそらく独り言ではないのだろう。ラウルを簡単に解放した理由もここにあるのかもしれない。

だが、サイファは何も答えず笑顔だけを返した。

いったい何を企んでいるのかと、ラウルは問い詰めるような険しい眼差しを送るが、サイファは動じることなく悠然と襟を直してパイプベッドから立ち上がった。故意なのか、偶然なのか、腕を掠めてラウルとすれ違っていく。そして、扉に手を掛けたところで動きを止めると、僅かに振り返り、妖艶なまでの笑みをその唇にのせた。

「それじゃあ、またな」

そこには明らかに何かの含みがあった。怪訝に眉をひそめるラウルを残し、サイファはガラリ と扉を開けると、長くはない金の髪をなびかせながら医務室をあとにした。

無機質な廊下に柔らかい光が射し込んでいる。

その光を遮りながら、ラウルは書類を脇に抱えて会議室へと足を進めた。医務室から離れるにつれて人通りが少しずつ多くなる。それでも、勤務時間中のためか、昼休みの喧噪にはほど遠い。急ぎ足で通り過ぎる人や、立ち止まって中庭を眺めている人、会話をしながら歩く人たちがちらほらと目につく程度である。そんな人々とすれ違い、通り越し、角を曲がったそのとき――。ラウルはハッと息を呑んだ。

冷静に考えればそれほど不思議なことでもないが、不意を突かれ、にわかには現実として受け 止めることができなかった。しかし、それは夢でもなく、幻でもなく、まして見間違いなどでは 決してない。

長い廊下の先に立っているのはレイチェルである。

緩くウェーブを描いた金の髪、薄く紅を引いた唇、胸元の開いた濃色のドレス——4年前とはだいぶ雰囲気は変わっていた。当然だが少し大人っぽくなっている。しかし、愛らしい笑顔はあのときのまま変わっていない。

レイチェル、今、おまえは幸せなのか――。

その言葉を胸に秘めたまま、ラウルは何も言わずに通り過ぎようとした。視線を落として足を 速める。しかし、すれ違う間際に、レイチェルの方から声を掛けてきた。

「久しぶりね、ラウル」

「.....ああ」

ラウルは足を止めて応じた。

互いに何気ないふうを装ってはいたが、その声にはともに硬さがあった。多少の気まずさと、 緊張からくるぎこちなさが、言葉の途切れた二人の間に淀んでいる。

「何? 知り合い? 紹介してよ」

そんな二人の様子に気づいているのかいないのか、彼女の隣にいた同じ年頃の女が、煌びやかな銀髪をなびかせながら、無邪気に声を弾ませてそんなことをせがむ。レイチェルは優しく微笑んで、小さな手でラウルを示した。

「こちらはラウル。王宮付きのお医者さんよ。そして、こちらはアルティナさん。今度、王子様 と結婚することになっているの」

「どうも、よろしく!」

アルティナは威勢よく右手を差し出した。一瞬、ラウルはそのざっくばらんな態度に面食らったが、それでも無表情を保ったまま、ぶっきらぼうに右手を出して握手に応じる。

「おまえか、サイファに騙されて来た女というのは」

「失礼ね、騙されてなんかないわよ!」

そんな二人のやりとりを聞いて、レイチェルは口もとに手を当てながらくすくすと笑い出した。 。それだけでまわりの空気が柔らかくなる。張り詰めた心さえも和らいでいくようだった。

ふと、下方で何か黒いものが動いたことに、ラウルは気づいた。

そこにはレイチェルのドレスにぎゅっと縋りつく小さな女の子がいた。後ろに隠れるようにしながら、大きな漆黒の瞳で、こわごわとラウルを見上げている。肩より少し短く切りそろえられた黒髪が、微かな風にさらりとそよいだ。

ラウルの視線に気づいたレイチェルは、にっこりと微笑むと、くるりとその女の子の背後に まわってしゃがみ、小さな体を優しく抱きしめながら言う。

「この子は娘のアンジェリカよ」

娘? これがレイチェルの娘だと——?

ラウルは口を閉ざしたまま目を見張った。言われてみれば、確かにレイチェルと顔立ちはよく似ている。だが、その髪と瞳の色は、彼女のものでもサイファのものでもない。

この国で暮らすようになって以来、ラグランジェ家とは多少の関わりを持ち続けてきた。それ ゆえ彼らの事情はそれなりにわかっているつもりである。一族の中だけで血を繋いでいることも 、そのせいか例外なく金髪碧眼であることも。

つまり、この娘は――。

これまでの出来事が走馬燈のように脳裏を駆け巡る。レイチェルと過ごした時間のこと、彼女が約束の日に来なかったこと、唐突に家庭教師を解雇されたこと、サイファが医務室に来なくなったこと、今になってまたやってきたこと、娘を連れて来たがっていたこと、意味ありげな言葉の数々、娘と似ていないと言ったときの反応、ラウルを見つめる物憂げな瞳、そして、娘の髪と瞳の色——それらがすべてひとつに繋がった。

「抱いてみる?」

「いや……」

小さく首を傾げて尋ねるレイチェルに、ラウルは目を伏せて曖昧な言葉を返す。

これまで考えもしなかった事実を突きつけられ、まだ気持ちの整理がつけられずにいた。だが、受け入れなければならない。自分の行動の結果を、レイチェルの意思を、そしてサイファの覚悟を——。

会議が終わったあと、ラウルは何年かぶりに外に出た。王宮の外れにある小径を淡々と辿っていく。背後からの喧噪が次第に小さくなり、代わりに、さわさわと葉の擦れる音が降りそそいだ。しばらく歩を進め、蔦の絡みついた煉瓦造りのアーチをくぐると、眼前の視界が一気に開ける

そこには、果てしなく優しい青空と、色鮮やかなバラ園が広がっていた。

ラウルは引き込まれるように細い坂道を降りていった。隅に佇む大きな木のもとに腰を下ろすと、ざらついた木の幹に体重を預けて目を閉じる。少し湿った土の匂い、ひんやりした木陰の地面、頬に当たる暖かい風、ほのかに甘いバラの匂い——そんなものを感じながら小さく息を吸い込んだ。

「やあ、また会ったな」

頭上から降りかかった声に驚いて目を開くと、そこには笑顔で覗き込むサイファがいた。そよ 風にさらさらと揺れる金の髪が、木漏れ日を受けて透き通るように煌めいている。

「おまえ、なぜ……」

「あのあとずっとここで待っていたんだよ。もしかしたらラウルが来るかもしれない、なんてちょっとそんな予感がしてさ。まさか本当に来るとは思わなかったけどね」

サイファは小さく肩を竦めて見せる。

ラウルはうつむいて溜息をついた。

「おまえ、少しは真面目に仕事をしろ」

それを聞いて、サイファは懐かしそうにくすりと笑った。そして、立ったまま背後の木にもたれかかると、腕を組み、遠くの空を見上げて真面目な顔で目を細めた。

「会ったんだろう? レイチェルと娘に」

「.....ああ」

「今度、また連れていくよ」

ラウルは何も答えられなかった。風に揺れる薄紅色のバラを眺めて眉を寄せる。

「ねえ、ラウル」

サイファはあらためて切り出した。

「僕は欲しいもののためには手段を選ばない」

「知っている」

ラウルは正面を向いたまま答えた。彼のことは子供の頃から見ているのだ。今さら言われるまでもなく、彼がそういう人間であることは理解していた。そして、これから何を言おうとしているのかも——。

「僕から逃れられると思うなよ」

今になって彼がラウルに近づいてきたのは、おそらく娘を守るためだろう。異端の外見を持つ彼女が、ラグランジェ家でどういう扱いを受けているかは察しがつく。もしかすると命すら危ういかもしれない。それがわかってしまった以上、そしてその責任が自分にある以上、逃れることなど出来るはずもない。

風が強く吹いた。長い焦茶色の髪が横に大きく流される。

ラウルは鉛のように重たい口を開いた。

「サイファ、今、おまえは幸せなのか」

「これからもっと幸せになるよ」

サイファはその瞳に空を映したまま答えると、さらりと金の髪をなびかせて振り向く。

「あの頃、思い描いた未来を手に入れるんだから」

そのとき彼の見せた眩い笑顔は、澄み渡る青空のように曇りなく、しなやかな風のように力強く、そして、大地に咲き誇るバラのように気高さを感じさせるものだった。まっすぐに未来を見据え、行動し、誰よりもレイチェルを幸せにしようと努力する——そんな彼の行動と信念がそこに表れているのだろう。

多分、ずっと前からわかっていた。

とても、彼には――。

ラウルは立てた膝に腕をのせたまま、果てしなく広がる空を仰いで目を細めると、すぐ隣に立つ凜とした気配を感じながら、そっと瞼を下ろして瞳を閉じた。